

やはり俺が強くなること
とは間違っているだろ
うか

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

強くなりたい少年と英雄になりたい少年の物語

T w i t t e r I D @ p i x i v l 4 9

目次

# 0	決意	1
# 1	出会い	8
# 2	さらなる出会い	13
# 3	宣言	28
# 4	飛躍	54
# 5	何か	70
# 6	疑問	109
# 7	鍛冶師	119
# 8	サポーター	144
# 9	壁	167
# 10	何かの正体	182
# 11	新たな力	199

# 12	面影	233
# 13	リルルカ・アージェ	269
# 14	特訓？	287
# 15	嵐の前	309
# 16	冒険者	338
# 17	二つ名	364
# 18	クロツゾ	387
# 19	スキル	408
# 20	ソロ	419
# 21	中層	429
# 22	決意	446
# 23	ゴライアス	457
# 24	一撃	488

2
6

目は腐る

525

2
5

対面

498

#0 決意

モンスターの大群に襲われたある村の一角で叫び声上がる。

「お父さん！お母さん！コマチ！」

そこにいたのはモンスターの襲撃により崩れた家の前で泣き叫ぶ少年と崩れた家の瓦礫で下敷きになっている家族であろう血だらけの男女。

「うう…ハ…チマンか」

「お父さん！」

下敷きになっている男がうめき声をあげると自らの息子の名を呼び少年が男に近寄る。

「にげろハチマン…」

「なんで…やだ、やだよ！」

「はやく…！早く逃げるんだ！」

「ひっ…」

「俺たちはもう手遅れだ…。父さんの最後のお願いだ…頼む。急げ！」

「う、うわあああああああああああああああー！」

父に真剣に頼まれ少年は泣きながら駆け出した。

少年は、ハチマンは走った。体力が続く限り走り続けた。走って走って走って次第に体力がなくなっていくついに倒れる。

(なんで…なんでお父さんたちがこんな目に…)

走っているときも頭にチラついた疑問。がむしやらに走り続けた疲れがどつと襲い掛かってくる。それでも考えるのをとめない、止まらない。

(僕だけが生き残った…)

血まみれで倒れている両親に妹が頭にチラつく。

(ほんとに逃げるべきだったのかな…)

父親の最後の気迫と真剣さに気圧され気付けば走り出していた。

(僕がもつと強ければ…)

(みんなを守るくらい強ければこんなことにならなかった…)

(村の人もお父さんもお母さんもコマチも死ななかつた…)

心も体も疲弊し徐々に意識が遠のき始める。それでも考え続ける。

(僕は)

(強くなりたい)

(全部を守るくらい強くなりたい)

そう決意すると同時に足音がすることに気づく。何とかそちらの方に首を動かすと人影が見え、人影と目が合う。

「ふむ…」

どうやらモンスターではなく人らしい。人だったことに安心したのか僕は意識を手放した。

「ん…?」

意識がだんだんと覚醒していくのを感じ目を開ける。

「…」

すると白髪で紅い目をした少年が俺のことを無言で覗き込んでいた。

「お、おはよう」

困った俺はとりあえず勇気を出して挨拶をする。

「おじいちゃんーん！めをさましたよー！」

しかしガン無視をされた。

(勇氣出したのに……)

ガン無視されたことにショックを受けていると足音が近づいてくる。

「おお、おきたか」

おじいちゃんが部屋の入り口から顔を覗かせる。そして紅い目をした少年は小走りでおじいちゃんのもとへと行くと服を掴みこちらをじつと見る。それと同時になぜこうなったのかを思い出していた。

(つ……)

思い出したハチマンは顔を青ざめさせ悲しそうな表情を浮かべる。

(……)

悲しそうな表情、森で疲れ倒れていたこと、そしてさっきはいった隣町が魔物に襲われ壊滅したと言う情報を元になんとなくハチマンに何があったのか気づいていた。それを踏まえたうえである質問をする。

「強くなりたいか」

「!」

ハチマンと会って目があつた時瞳の奥に決意をみたおじいちゃん——ゼウスは問う。

「……」

ハチマンは心を見透かされた気がして黙り込みうつむくがすぐに顔を上げゼウスを

見る。

「僕は強くなりたい…全部守れるくらい強く」

ゼウスは暫くハチマンを見つめあうとふつと笑う。

「お主名は何というんじや」

「ハチマン…ハチマン・ヒキガヤです」

「そうか。ハチマン強くなりたいならオラリオという場所に行くの良い」

「オラリオ？」

「そうじやあそこにはすべてがそろって居る。なによりダンジョンというものもある」

「…分かりました。助けていただきありがとうございます」

そう言うとはチマンはベッドから起き上がると外に出ようとする。

「ここら待て待て」

そんなハチマンをゼウスは引き止める。

「オラリオに行くにはおぬしは若すぎる。だから当分この家で暮らしていけ。それにまだ傷も癒えてないじやろ」

「？傷なんて…」

「バカたれ心のじやよ。ずっと今にも泣きそうな顔をしておるぞ」

「…」

そんな時ずっと黙っていた赤い瞳の少年が口を開く。

「行っちゃおうの…?」

周りに自分の歳と近い子がいなかった少年は初めて会えたのにどこかへ行ってしまうことに悲しそうな表情を浮かべる。そんなベルにコマチの姿が重なり、断ろうと開こうと思っていた口が閉じられる。

「遠慮しているならすることはない」

そう言いハチマンの頭をなでる。その手のひらは暖かくハチマンは抑えていたものが目からあふれ出る。

「いい…んですか」

「ああ大歓迎じゃ」

「ありがとうございます」

そう言うハチマンはゼウスの胸で収まるまで泣き続けた。その日からハチマンはゼウスの家でお世話になることになった。

「ついたねハチマン」

「ああ……ここがオラリオか……」

「ここで何が起こるんだらうね」

「さあな……面倒ごととはごめんだけどな」

そんな他愛もない談笑をしながら二人の少年はオラリオの中へと入っていった。これは強くなることを望んだ少年と英雄にあこがれた少年が紡ぐ物語。

#1 出合い

「すまん今【ファミリア】の募集はしてないんだ帰ってくれ」

もう何度目かわからないくらいの前払いを受ける。その事実隣を歩く白髪で紅い瞳の少年、ベル・クラネルが肩を落とす座り込む。

「まあそう落ち込むなベル」

「うくだって…」

とうとうベルは膝を抱えて蹲ってしまう。俺はそんなベルから視線を外すと先ほどから視線を感じる方を睨み呼びかける。

「そこに隠れている奴だれだ？」

俺がそう言うとうベルは顔を上げ、俺が見ている方向を見る。すると物陰から幼い顔立ちの胸のおおきい…ツインテールの女の子が出てくる。

「ごめんよ別についていく気はなかったんだけど気になつてつい…」

ついでストーカーすんなよ。しかもこの人のこの雰囲気って…。

「…えっと、君は？こんなところに一人で、迷子なのかな？」

「バカたれ神様だぞこの人」

俺はベルの頭にチョップをかます。

「何するのハチマン…え!?!神様!?!」

神様だと気づいたベルは何度も頭を下げる。

「だ、大丈夫だよ気にしないでくれ。しかし君はよく僕のことには気付いたね」

「まあずつと視線感じてたんで…」

(この白髪の子は子供って感じだけどこの子は何というか…何処か危うい雰囲気がある)

「ど、どうしました?」

何故か神様にじつと見られ不審がる。

「あー、えっと…そ、そうだ!実は今「ファミリア」の勧誘をやっている。それでその…冒険者の構成員が欲しいなーなんて…」

誤魔化すように言い始めたがだんだんと声小さくなっていく。そして女神さまの話にすぐに食いつくやつが一名。

「入ります!入らせてください!」

「…いい、いいのかい?本当に、ボクの「ファミリア」なんかで?」

「いいです、全然大丈夫です!むしろ僕達みたいなやつが入っても大丈夫ですか!」

どうやら俺も強制らしい。

(強くなるために大きいところに入りたかったが…)

ちらつとベルを見ると嬉しそうな表情を浮かべている。その表情を見てどうでもよくなる。そしてそこからは早かった。有頂天になったベルと神様は自己紹介を済ませる。

「よし、ベル君、ハチマン君ついてくるんだ!」【ファミリア】入団の儀式をやるぞ!」

「はいっ!」

「うっす」

俺たちが向かったのはみすばらしい書店。店内には老齡のヒューマンがいて、ヘステイアが入ってくるのを見ると短い白髭を動かした。

「やあ、ヘステイアちゃん。【ファミリア】の勧誘だったらお断りだよ」

「違うって!おじいさん、二階の書庫を貸してくれよ!」

「おうおう、構わんよ。本を読んだら元の棚に戻しておいてね」

どうやらほんとに手あたり次第誘っていたらしい。そんなヘステイア様にジト目を送る。

「さ、さあいこうか!」

その視線に気づいたのか焦ったように俺たちの手を引き急いで階段を駆け上がりその先にあった一室には古い木の香りが漂っていた。隙間なく埋まった本棚が四方を占

領しており、柵の前にも書物の山が築かれている。その光景に俺は感嘆の声を漏らす。
「すげえ……」

ゼウスの家でいろんな本を読み本が好きだったハチマンはその光景を見て思わず感嘆の声を漏らす。暫く見入っているとヘステイアがいきなり爆弾発言をする。

「さ。服を脱いで、ここに座ってくれ」

「ふ、服をですか？」

「ヘステイア様やっぱり……」

「ち、ちがう！上着だけだよ！これから、ボクの『恩恵』を刻むために必要なんだ。だからそんな目で見ないでくれハチマン君」

ヘステイアはベルと俺に『恩恵』を刻み始める。

「ベル君、ハチマン君、君たちはどうして冒険者になりたいと思っただんだい？」

「じ、実は僕、『迷宮神聖譚』ダンジョン・オラトリアで出てくる運命の出会いってやつに、小さい頃から憧れて

……！」

「出会い？お相手は女の子ってことかい？そんなことのために君は冒険者に？」

「そ、そんなこと、じゃないですよ！出会いには偉大なんです、男の浪漫なんですよ！僕を育ててくれた祖父だって『ハーレムは至高！』って言ってました！」

「君、絶対育ての親を間違ったよ」

それには共感を禁じ得ない。だってあのエロおやＺ…ゼウス様は事あるごとにハーレムの良さを語ってくるし…女の子のどこがいいとか…女の子の落とし方とか…あれ？女の子のことしか言われてなくね？そしてややあって、『神フエの恩恵ルナ』の刻印が終わっていた。俺は起き上がりベルの背中を見るとその背中にはいくつもの漆黒の文字、通称【神聖文字ヒエログリフ】が刻まれている。

(これで俺も強くなれる…)

決意をさらに胸で高ぶらせる。そしてそんなハチマンを横にヘステイアは二人のステータスを記した紙を見ていた。

(ベル君はスキルも魔法もなしと…ハチマン君は…!?)

ヘステイアは、ぼつと音が鳴りそうな勢いでハチマンの方に振り向く。

(普通じゃない…もうスキルが三つもあるなんて…)

ヘステイアは頭を振るとこれからのことに思いをはせた。

#2 さらなる出会い

「さあ！今日からここが君たちのホームだ！」

そう満面の笑みで俺たちに告げるヘステイア様とは反対に顔が引きつる俺とベル。俺たちは顔を見合わせもう一度ホームと呼ばれた場所を見る。そこには廃墟と言っても過言ではないほどぼろぼろの教会があった。

「さあ行くこう！」

そう言いヘステイア様は扉のない玄関口をくぐって教会(?)に入ってしまった。俺達は仕方ないと割り切りヘステイア様についていく。

屋内は外見に負けず劣らずの半壊模様。割れた床のタイルからは雑草が繁茂し、頭上の天井は大部分が崩れ落ちてごっそり無くなっている。ちよつと触れば壊れてしまいそうなその教会の中を進んでいくと、半壊した天井から降り注ぐ暖かな日差しがかかるようにして原形のある祭壇を照らしていた。ヘステイア様はその祭壇の先の部屋へと足を進める。部屋には書物の収まってない本棚が連なっており、一番奥の棚の裏には階段があった。そのあまり深くない階段を下るとドアが見えその中に入っていく。

「さあさあ歓迎するよ。ベル君！ハチマン君！」

中に入ったヘスティア様は、部屋の真ん中でくると振り返ると微笑んだ。

「それで？ 君たちはこれからどうするんだい？」

俺たちは部屋に入っただけで、すぐにある紫のソファにこしかける。

「俺はすぐ冒険者登録に行く気ですけど…」

俺はベルに視線を送るとベルは頷く。それを確認するとヘスティア様の方に向き直る。

「それなら二人とも行つてくるといいよ。僕もバイトに行かないからね」

「神様もバイトやんのかよ…」

「そりや神と言つても下界では人と変わらないからね。だから敬語も様もなしでいいよ」

「ええ!? 神様にそんなこと…」

ベルは恐れ多いのか胸の前で両手をすごいぶん回す。てか手の速さすごいなおいどうなつてんだよ。そして俺は白髭のじじい：神様に普段からいじられていたため、からかってみることにした。半分くらい八つ当たりである。因みに白髭のじじいにいじられすぎて捻くれてしまったのは別の話。俺はヘスティアの方を向く。

「まあ分かりました。善処します女神様」

「君それ絶対分かってないだろ！それにさつきより仰々しいじゃないか！」

「何言ってるんですか女神様そんなことないですよ」

「ぬああああああああああああああああああ!!」

へスティアは叫び始めツイントールをぶんぶん回し始める。流石にやりすぎたかと焦る。

「じよ、冗談ですよそんな暴れないでください」

「ぐぬぬ：神をからかった罰だ！絶対敬語と様付けをなくすこと良いね!」

そう言うのと扉をバンツとして出て行ってしまった。

「ハチマン神様をいじめちゃ駄目だよ」

「心に刻みます」

ちよつと罪悪感を感じた俺は反省をしギルドに向かった。

「あのすいません」

「はい、今日はどんなご用件でしょうか」

ギルドについた俺たちは中に入りカウンターに向かうと眼鏡をかけた所謂エルフの方に声を掛ける。ベルが。

「冒険者登録をしたいんですけど…」

「はいではこちらの用紙に記入をお願いします」

「分かりました」

用紙に書き込み提出をする。

「ベル・クラネルさん、ハチマン・ヒキガヤさん〔ハスティア・ファミリア〕として冒険者登録完了しました。二人の担当は私、エイナ・チュールがします。何か困ったことがあれば私に申し付けください」

「どうやら登録が終わったらしく支給品のナイフなどが渡される。それらを受け取ると俺らは受付を離れ椅子に座る。」

「ベルどうする?」

ギルドに来てからうずうずしていた俺は思わず主語を抜きにして問いかける。

「え?」

「帰ってもハスティアはいないし、冒険者登録は澄んだし手元には武器がある」

「!」

それを聞いたベルは俺の言わんとしていることに気づき少し不安そうな顔をするが目輝かせる。

「ちよつと行ってみないか?」

俺たちは冒険者としてダンジョンに足を踏み入れた。

ほんのりと明るい地下空間をゆっくり歩く。すると壁に亀裂がはしり小さい人型のモンスター…『コボルト』が生まれ落ちる。

「ベル」

「うん」

俺はベルに呼びかけると短剣を構える。初めての戦闘に緊張するがそれでももうずかずして仕方ない。別に戦闘狂なわけではない。

(これから強くなるこつから俺は…)

そして俺はベルを見る。ベルは緊張からか顔が強張っている。

(強くなって全部守る)

そして視線に気づいたのかベルは俺の方を向き、目が合うと頷く。それと同時に俺たちは『コボルト』に向かって走り出す。生まれ落ちたのは六匹。

(まずは…！)

一番近くにいた『コボルト』に向かって駆け出す。すると向かってくる俺に気付いた『コボルト』は爪を縦に振り下ろす。俺はその攻撃を避けると短剣を横に振り『コボルト』の首を飛ばす。『コボルト』の眼の光が失われたのを確認すると周りを把握する。

(ベルは…一匹倒してるな。他の『コボルト』…!?)

俺はすぐその場から離れる。するとさつきまで俺がいた場所に爪が振り下ろされる。(連携を……?外のモンスターはそんなことしなかつたけど……流星はダンジョン産のモンスターか……)

実はゼウスの家の周りに居た『コボルト』をベルと一緒に討伐したり本を読んで知識を蓄えたりしていた。モンスターを見てもそんなに取り乱さず直ぐに戦闘に移れたのも目を合わせるだけで連携が取れたのもこれが理由だったりする。ダンジョンにすぐに入つても一階層くらいなら大丈夫だと考えたのもこれが理由である。三割くらいは。

(残りは四匹。微妙に包囲網も敷かれてるし。でも……関係ない)

そんなのお構いなしに『コボルト』に突つ込む。俺が突つ込むことに気づいていたベルも俺の後に続き突つ込む。そして『コボルト』が二匹、先頭にいた俺に飛び掛かつてくる。そんな『コボルト』に対し一匹を後ろに蹴飛ばす。普通なら背後を取られるためそんなことはしないのだが後ろにはベルがいる。だからその一匹は任せ、飛び掛かつてきたもう一匹を処理する。

(あいつらに向けて……ふつとべ)

俺は蹴りを放ち今度は前にいる『コボルト』に向かって蹴り飛ばす。普通ステータスを授かったとはいえもらつて直ぐの為蹴り飛ばすなんてできないはずだがスキルの効果でそれを可能とする。

(なんでだ…力があふれる。これもステータスの恩恵か…?)

しかし本人は自分のステータスを見忘れていたため気づいていない。蹴り飛ばした『コボルト』はハチマンの思惑通り飛んでいき残っていた二匹の『コボルト』を吹き飛ばす。その隙を逃さずハチマンとハチマンに文字通り丸投げされた『コボルト』を斬り捨てたベルがそれぞれ斬り刺し三匹を殺す。

「ハチマン…」

「ベル…」

モンスターを倒したのは初めてではないがダンジョンのモンスターを倒し俺たちはダンジョンに通用したという事実にお互い目を合わせる。それはあくまで普通の場所での話でだがここはダンジョン、どんなイレギュラーが起こるかわからない場所しかし当の本人達は完全に調子に乗りどんどん階層下って行った。

「ハチマン通用してる…僕たち通用してるよ!」

今現在いる場所は五階層。本来ステータスをもたらったばかりでここまで下りるのは難しいのだがハチマンのスキルとこれまでゼウスの家で少なからず戦闘の経験もありそれを可能としていた。そしてそのことに大興奮のベルとは反対にハチマンはどんどん冷静になっていた。自分よりテンション高いやつを見ると冷静になるあれだ。

(流石に五階層は調子に乗りすぎた。なんでかは分からないがとんとん拍子にこれたのは奇跡に近い。ここいらで引き返さない…)。

「おいベルここいらで…」

イレギュラーを危惧した俺はベルに話しかけようとする…。

『ヴヴォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!』

明らかにイレギュラーの声。この声に聞き覚えはないし姿もまだ見てない。それでも異質をはらんだその声の方向を錆びたロボットみたいな動きで見る。すると人型で牛頭のモンスターが雄叫びを上げながら目をぎらつかせこちらに走ってきていた。

『ヴヴォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!』

「ほ(ぬ) あああああああああああああああつ!!」

間拔けな声を上げながら五階層内を全力疾走する。

「調子に乗ったとは言えなんであんな化け物がいんだよ…!」

俺は悪態をつきながら、俺達を追いかけてきている牛頭人型のモンスター『ミノタウロス』を睨む。『ミノタウロス』にはLv.1の俺達じゃ逆立ちしたって勝てないどころか傷一つ付けられない。その理由は本来『ミノタウロス』は十二階層までの【上層】ではなく、十三階層から二十四階層までの【中層】に出現するLv.2のモンスターだ

からである。蓄えた知識を脳内から引つ張り出しながら頭をフル回転させる。

(このままじゃ二人ともやられる…なら)

「おいベル逃げろ」

「え!? それじゃハチマンは…」

俺はそれだけ告げるとベルの言葉を無視して『ミノタウロス』の方を向く。するとちょうど『ミノタウロス』は蹄を上げ踏み抜こうとしているところだった。

『ヴウムウンツ!!』

「っ!？」

その蹄をギリギリでかわすが、その蹄は土の地面を砕き、俺の足場も巻き込む。足を取られた俺は地面をゴロゴロ転がりまわる。

『フウー、フウーツ……!』

地面を転がりまわった俺はすぐに体勢をなおす。そして改めて『ミノタウロス』を見る。筋骨隆々の体に殺意と敵意に満ちたぎった瞳。本能が全力で警鐘を鳴らしている。

「ハチマン!」

ベルが俺を心配そうな声で呼ぶ。どうやら助けに入ろうとしているらしくそれを目で制する。

(来るなベル。任せろ)

「あの……大丈夫、ですか？」

喋らない俺たちを不審に思っただけか更に問いかける。正気に戻った俺は答えようとすると……

「う……」

「う？」

「うわああああああああああっ！」

ベルが叫び信じられないくらいのスピードで走り出した。

「……」

そして信じられないくらい気まずくなる。

(あいつ……覚えとけ……)

ハーレムに憧れているベルは突然の美少女の登場に混乱して逃げ出してしまふ。しかしそういつてる俺も女性に耐性がなく困っていた。ヘステイア様？ヘステイア様は人じゃないしな。神だしな大丈夫だ。

「あの……」

「あ……いえ大丈夫です。助けていただきありがとうございます。あとうちの連れがいません。では俺はこれで」

「あ……」

俺は告げることだけ告げその場を後にする。だってあいつ血まみれで走ってっだし、あんな殺人犯みたいなやつ放置できん。

(あの時凄いい気迫だった…)

Lvが上であるはずの自分が気圧された事に疑問を抱きながら少女はいつまでもその背中を見つめていた。

「エイナさああああああああああああああああああああんっ!」

「ん?」

ダンジョンを運営管理する『ギルド』の窓口受付嬢、エイナ・チュールは片手に持った小冊子から顔を上げた。

(確かこの声は…)

エイナは直ぐに今日冒険者登録しに来た白髪に紅い瞳の子の少年を思い浮かべる。流石はギルド職員と言わざるをえない。そしてエイナは声を上げたであろう人物を見ると…。

「いや、誰ッ!?!」

全身どす黒い血色でに染め切った少年の姿が視界に入り、クールがうりのエイナも思わず叫びをあげる。更にその後ろから。

「おいベル待てて…おい、人の話を聞けよ。」

声は白髪の子の隣にいた子だと助けを求めるように見ると…。

「だから、誰なのよおおおおおおおおおおおおおお!!」

その日一番の絶叫が鳴り響いた。

「君達ねえ返り血浴びたならシャワーくらい浴びてきなさいよ…」

「すいません…」

俺たちはエイナさんの言葉に返す言葉がなく項垂れる。体を洗ってさっぱりした俺達は、ギルド本部のロビーに設けられた一室にテーブルをはさみエイナさんと向かい合っていた。

「き、君たち冒険者登録したばっかだよね?なんでもう血塗れに…」

「それは…」

ベルがあの後すぐにダンジョンに潜ったこと、五階層まで行ったこと、そこで『ミノタウロス』に追いかけられたことを語った。なんか話していくうちにどんだん顔が引き攣るエイナさん。

「冒険者登録して初日で五階層?しかも『ミノタウロス』に追いかけられた?」

引き攣っていた顔は怒っているような顔にかわりって言うか確実に怒ってる。だっ

てこええもんなんなら『ミノタウロス』よりこええもん。そしてエイナさんは椅子から立ち上がり、俺たちに詰め寄る。

「ハチマン君にベル君!! ダンジョンの下層にしかもなり立てで行つちやダメ! いい!? 冒険者は冒険しちやいけないの!! わかった!？」

「き、肝に銘じておきます」

俺たちのその言葉を聞くとエイナさんは溜息を吐き椅子に座りなおす。俺たちのために本気で心配してくれていることからこの人がいい人なの分かる。怖いけど。

「それで? ヴアレンシユタイン氏の事を教えてほしいんだっけ?」

「はい! えっと、ハチマンあつてるよね?」

「ああ、金髪金眼であの強さって言ったら一人しか思いつかない」

「本名アイズ・ヴァレンシユタイン【ロキ・ファミア】所属、二つ名は【剣姫】巷では『戦姫』なんて呼ぶ人もいるみたい。そしてLv. は…5」

大体オラリオのことは学習済みのハチマンは知っていたが、ベルは目を輝かせ話を聞いていた。

(あれがオラリオでもトップクラスの冒険者か…)

(凄かった。まるで英雄のようで憧れた…それに…)

ベルは自らを逃がすために体を張った自分のもう一人『憧憬』に目を向ける。そんな

視線に気づかない憧憬はまた背中が熱くなるのを感じながら拳を握るとベルやエイナさんと一緒に一室を後にする。

「換金はしたの？」

「まだしてないですね。それどころじゃなかったんで」

「じゃあ換金所に行こう。私も付いていくから」

それからエイナさんにギルド本部内にある換金所に案内され換金を済ますとエイナさんにお礼を告げるとそのまま帰路についた。

#3 宣言

「神様、帰ってきましたー！ただいまー！」「お帰りー！ベル君！ハチマン君！」ぐふっ!?!」
ベルがドアを開けて声を張り上げて足を踏み入れると、ヘステイアがベルの腹に目掛けて特攻する。その特攻によりベルが悶絶しているので注意して差し上げる。

「ヘステイア…ベルが悶絶してるから離してやれ」

「え？…べ、ベル君！大丈夫かい!?!」

（いや、あんたのせいだよ…）

「だ、大丈夫ですよ神様。そ、それより神様バイトはどうしたんですか?」

「ああそれなら今日にはやく上がれてね。君たちの方は冒険者登録済んだのかい？それにしては時間かかってたみたいだけど…」

「まあ少しダンジョンに潜ってまして」

「ちよつと死にかけちゃいましたけど…」

「おいおい、大丈夫かい？君たちに死なれたらボクはかなりショックだよ。柄にもなく悲しんでしまうかもしれない」

小さい両手を忙しなくパタパタと俺たちの体に触れ回って、怪我はないか確かめてく

る。その様子にどうも気恥ずかしくなる。

「大丈夫です。神様を路頭に迷わせることはしませんから」

「まあ俺も死ぬ気はないんで大丈夫だ」

「あつ、言つたな!?!なら大船に乗つたつもりでいるから、覚悟しておいてくれよ?」

「なんか変な言い方ですね…」

「どの立場の発言なんだよ…」

俺たちはそんなことを言い合いながら、奥の部屋へと進んだ。部屋の中は正方形と長方形をくつつけた、ちようど「P」の字のような形。正方形の部分にあたる出入口前で、置いてある二つのソファアに俺とベルとヘステイアはそれぞれ座る。

「じゃあ【ステイタス】を更新しようか!」

「はい!」

「うっす」

「それじゃあ服を脱いで転がって。あとハチマン君二回目だけどその目止めようかわかつててやってるだろ君」

「バレたか」

「そらはやく転がった転がった」

「はい(へい)」

部屋の奥にあるベッドへ向かい、服を脱ぎベッドに体を沈める。うつ伏せでいると様はぴよんつとベルのお尻あたりに飛び乗った。

「そういえば死にかけてたつて言つてたけど、いったい何があつたんだい？」

「ちよつと長くなるんですけど……」

ベルが今日あつたことを話している間にヘステイアは針を取り出しそれを自らの指にさすと滲み出る血を、そつとベルの背中に落とす。

「調子に乗つて下層に降りるつて……君は冷静なキャラだと思つてたんだけどなハチマン君」

「まあ若気の至りつてやつですよ」

「それを自分で言うのかい……」

「はは……」

談笑を交わしているだけでも作業を刻々を進める。そして作業が終わつたのか紙に【ステイタス】を書き写していく。

「ほら、君の新しい【ステイタス】だよ」

そう言いベルに紙を渡す。ベルはどうも、と受け取ると用紙に視線を落とす。

「さて次は君の番だ」

そして先程と同じように血を落とし作業を進め、紙に書き写す。

「ほいハチマン君の分」

俺も用紙を受け取り、視線を落とす。

ハチマン・ヒキガヤ

L v.

力：I 0 〽 3 2

耐久：I 0 〽 1 7

器用：I 0 〽 3 0

敏捷：I 0 〽 2 7

魔力：I 0

《魔法》

□

《スキル》

□

(少ししか潜ってなかったけど結構伸びてるな…ん?)

「神様、このスキルのスロットはどうしたんですか？何か消した跡があるような…」

「ああ、俺もあるな」

「……ん、ああ、ちよつと手元が狂つてね。安心して」

「ですよねー……」

「まあそうだよな……」

分かつていても少しがっかりしてしまう。

「神様、夕飯の支度しましょうか？」

「うんそれじゃあベル君に任せるよ」

「じゃあ俺も手伝うわ」

「強くなること以外は動きたくないあのハチマンが!？」

「ひどい言われようだなおい……否定できないけど」

へステイアは談笑を交わしながらキツチンへ向かう二人を見送り、静かに溜息をつく。

(もしかしたらとんでもない子達と出会ったのかもしれないね……)

へステイアはもう一度二人の背中を……正確には「ステイタス」を見る。

ベル・クラネル

L v. 1

力：I 0 ～ 5

耐久：I 0

器用：I 0 〽 3

敏捷：I 0 〽 2 4

魔力：I 0

《魔法》

二

《スキル》

【憧憬一途】

- ・早熟する
- ・懸想が続く限り効果持続。
- ・懸想の丈により効果向上。

ハチマン・ヒキガヤ

L v. 1

力：I 0 〽 3 2

耐久：I 0 〽 1 7

器用：I 0 〽 3 0

敏捷：1 0 ～ 2 7

魔力：1 0

守護：2

《魔法》

〇

《スキル》

【強者願望】

- ・ 早熟する
- ・ 強者になりたいが続く限り効果持続。
- ・ 強者になりたいの丈により効果上昇。
- ・ 全ステータス上限突破しなければランクアップ不可。

【守護者】

- ・ 守りたいものの為に行動するときステータスの高補正。
- ・ 守りたいものの人数により効果上昇。

【孤軍奮闘】

- ・ 少数対多数の時の高補正。
- ・ パーティーの人数により効果上昇。

・相対人数又は強さにより効果上昇。

【強者願望】と【憧憬一途】…か。このスキルも見たことないけど問題は殊更異質なハチマン君の二つのスキル…理不尽に抗う力そして守るための力)

ヘスティアはさらに溜息をつく。そしてハチマンの横顔をちらつと見る。

(一体何があったのか…)

眷属になつてくれた二人にヘスティアは思いを馳せていた。

「……………ん(あ)」

朝早くから畑仕事に駆り出される習慣が染みついた俺たちは朝五時ぴつたり起きれるあまり自慢できない能力が開発されてしまっているのだ。

「…おはよう、ハチマン」

「おう、おはよう。ところでベル何でヘスティアは俺達の腕にしがみついているんだ？」

「ヤ、ヤあ？」

俺は腕に暴力的な感触を感じ理性をゴリゴリ削られながらヘスティアを起こさないようにすつと手を抜く。そしていそいそと準備を進め、俺たちはささーつと部屋を後にした。

(あの人思春期男子を殺す気かよ…)

少し肌寒い朝の空気に思わずため息を溶かす。

「あゝ、朝ごはん食べてないや…」

「そいや忘れてたな…どっかで腹ごしらえでも…!?」

俺とベルはぼつ、と振り返った。

「…ベルもか？」

「う、うん。なんか凄い見られてる感じがして…」

「あの…」

「—」

後ろからの声に、すぐさま反転し距離を取り身構える。そして相手を見ると声をかけたきたのはヒューマンの少女だった。

「ご、ごめんなさいっ！ちよつとびっくりしちゃって……!!」

「い、いえ、こちらこそ驚かせてしまって…」

「な、何か僕に？」

「あ…はい。これ、落としましたよ」

「? 『魔石』? 確か昨日全部換金したはずだが…」

「す、すいません。ありがとうございます」

「いえ、お気になさらないでください」

不審に思いながらもベルがそれを受け取る。

「こんな朝早くから、ダンジョンへ行かれるんですか？」

「はい、ちよつと軽く行ってみ『グウ』よう…かな…なんて…」

「ふつベルお腹なつ『グウ』……。」

「…」

「…」

「…」

きよとんと眼を丸くする店員に赤面する男二人。

「うふふつ。お腹空いてらっしゃるんですか？」

「…はっ」

「もしかして、朝食をとられていないとか？」

「…」

「ふふつ。凶星ですかちよつと待っててください」

そう言い残すと店内へと消え、ほどなくして戻ってくる。

「これをよかつたら…。まだお店がやってなくて、賄いじゃあないんですけど…」

「ええっ!? そんな、悪いですよ! それにこれって、貴女の朝ごはんじゃあつ…う…」

「このまま見過ごしてしまうと、私の良心が傷んでしまいそうです。まあその代わりと言つては何ですが今日の夜、私の働くあの酒場で夜ご飯を召し上がっていただければな…なんて」

「ず、ずつるう…」

「うふふ、ささつ、もらつてください。私の今日のお給金は、高くなること間違いなしですから」

すっごい商売根性だなこの子。

「でもよく二つも用意…」

「あれ!? ミヤールの朝ご飯がないにや!?!」

「[…」

「……てへっ」

「無許可なのかよ…」

「まあそれも今日の夜来てくれれば解決しますから」

「……じゃあ今日の夜に伺わせてもらえますっ」

「はい。お待ちしております」

「ではこれで…」

俺たちは背を向けダンジョンに向かおうとする

「あ、私シル・フローヴァと言います。貴方方のお名前を聞いてもいいですか？」

「僕はベル・クラネルって言います」

「俺はハチマン・ヒキガヤです」

「ハチマンさんにベルさんですね。ではまた夜にお会いしましょう」

俺たちは名前を交わしあい、その場を後にした。

「ハチマン、今日は何階層まで行くの？」

「今日は一階層までのつもりだけど様子を見てって感じだな。まあ出来るだけ下に行く気だけど行くとしても三階層までだな」

「三階層まで？」

「ああ。昨日五階層まで行けたのはほぼマグレだからな」

俺たちはそんな会話を交わしモンスターを倒しつつ、一階層を徘徊していた。

「ーいんぞう」

前方で『ゴブリン』が二匹生まれ落ちる。まだこちらに気付いていないのか見向きもせず、通路の真ん中に突っ立っていた。

「ふっ（はっ）！」

そのゴブリンに俺たちは飛び蹴りをかまし、クリーンヒットする。小太りした体はく
の字に曲がって飛んでいき壁にぶつかり灰と化す。その灰に近寄り『魔石』を回収する。

「?お、これは…」

積もった灰の中に牙のようなものを見つけ手に取る。

「ベルドロップアイテムが出たぞほら」

「ほんとだ。確か『魔石』よりも高く売れるんだよね」

「ああ、まあその分出る確率は低いけどな」

魔石と一緒にドロップアイテムをバックバックにしまう。

バキ

「ー!」

ビキビキツビキビキ

「…数多そうだね」

「ビビってるのか?」

「まさか!ハチマンこそビビってるんじゃない?」

「まさか」

ベルは支給品の短剣を構え、俺は剣を構える。

「剣に変えたからな、いい練習台だ」

『『『グギャアアアアっ！』』』』

「行くぞ」

「うん！」

ベル・クラネル

力：I 5～8 2

耐久：I 0～5 8

器用：I 3～4 6

敏捷：I 2 4～9 6

魔力：I 0

《魔法》

□

《スキル》

□

ハチマン・ヒキガヤ

L v. 1

力	: H	3	2	1	0	7
耐久	: I	1	7	5	7	
器用	: I	3	0	6	4	
敏捷	: I	2	7	7	0	
魔力	: I	0				

《魔法》

□

《スキル》

□

「…」

夕刻。ダンジョン探索を終え、家に帰ってきて「ステイタス」更新をして用紙を眺めていたヘステイアは絶句していた。

(これがスキルの効果…?)

明らかにおかしい「ステイタス」の伸びに眩暈を覚えつつ先程から出かける準備をしている二人に声をかける。

「君たちはおかしいと思わないのかい？」

「ん？何がだ？」

「…いや何でもないよ」

「？」

ヘステイアは溜息をつきソファアに身を沈める。

「それより神様ほんとにいいかないんですか？」

「うん、ボクは疲れたから二人で楽しんできてくれよ」

「そうですか…残念ですけど行ってきますね神様」

「行ってらっしゃい」

「行ってきます」

「「いらつしやいませ！」」

「…」

俺たちはシルさんが働いている酒場にやってきた。やってきたのだが…

「…ベルおれもう帰りたいんだけど」

「だ、駄目だよ朝シルさんと約束したし…」

俺とベルはずっとそわそわしてた。その理由は従業員が全員女性で店の中もこじやれた感じで場違い感が凄いのだ。

「ベルさん、ハチマンさんっ」

「……やってきました」

「はい、いらつしやいませ。ではこちらにどうぞ」

「は、はい……」

案内されたカウンター席に恐る恐る腰かけると女将さんに話しかけられる。

「あんたらがシルのお客さんかい？ははっ、冒険者のくせにかわいい顔してるね！そつちの坊主はおかしな目だね！」

ほっとけデフォルトだとは口に出せずぐつと抑える。

「何でもあたし達に悲鳴を上げさせるほど大食漢なんだそうじゃないか！じゃんじゃん料理を出すから、じゃんじゃん金を使ってくれよお！」

「!?!」

ばつと背後に控えてるシルさんの方を振り返ると、そつと目をそらした。はかつたなこの野郎。

「ちよつと、僕達いつから大食漢になったんですか!?!僕自身初耳ですよ!?!」

「……えへへ」

「へへ、じゃねー!?!」

「……まあベルはよく食うもんな。ベルは」

「ハチマン!？」

「その、ミアお母さんに知り合った方をお呼びしたいから、たつくさんふるまってあげて、と伝えたら…尾鰭がついてあんな話になってしまった」

「絶対に故意じゃないですか!？」

「私、応援してますからっ」

「ベル俺も応援してるぞ」

「まずは誤解を解いてよ!?!?ていうか何でハチマンはそっち側なの!?!」

「ばれたか…」

「そりゃバレるよ!?!」

「…お腹が空いて力が出ない…朝ご飯を食べられなかったせいで…ねえアーニャ」

「そうだにや…お腹が空いて力がでないにや…」

「やめてくださいよ棒読み!?!?ていうか、汚いですよ!?!?それにあなた誰ですか!?!」

いつの間にかそばにきていたキャットピープルが棒読みで喋りだす。

(多分朝叫んでた人だな…)

「ふふ、冗談です。ちよつと奮発してくれるだけでいいんで、ごゆつくりしていただく

か」

「…ちよつと、ね」

「…これちよつとで済むのかな?」

「済まないな絶対確実に」

溜息をつきながらカウンターに向き直りメニューを手に取る。

(多めに稼いどいてよかった…)

取り敢えず俺とベルはパスタを頼む。「酒は?」と女将さんに尋ねられ、遠慮しますと答えると酒をカウンターにたたきつけられる。人の話聞いてますん?

「楽しんでますか?」

「…庄倒されてます」

「てかいじめられてます」

パスタを半分くらい食べたところで、シルさんがやってきた。彼女はエプロンを外すと、丸椅子を持って俺たちの隣に陣取る。

「お仕事、いいんですか?」

「キツチンは忙しいですけど、給仕の方は十分間に合ってますので。今は余裕もありますし」

いいですよね?と視線で女将さんに尋ねる。女将さんも口を吊り上げながらいつと顎を上げて許しを出した。

「ええと、とりあえず、今朝はありがとうございます。パン美味しかったです」

「いえいえ。頑張って渡した甲斐がありました」

「…頑張って売り込んだの間違いじゃ…ナンデモナイデス」

なんかすつごくいい笑顔で見られたから言うのをやめた。別にビビったわけではない。取り敢えず食べることに専念すると急に店内が騒がしくなる。疑問に思い振り返るとどつと十数人規模の団体が酒場に入店してきていた。

(あれは…)

その中でひと際目立つ金髪の少女を見つける。

(アイズ・ヴァレンシユティンさん…てことはあの団体は現在最強の一角【ロキ・ファミリア】か…)

強さを求めているためどうしても目が吸い寄せられる。

「そうだ、アイズ！お前のあの話を聞かせてやれよ！」

「あの話…？」

「あれだって、帰る途中で何匹か逃がしたミノタウロス！」

「…」

「最後の一匹、お前が五階層で始末しただろ!?そんで、ほれ、あん時いた二人のトマト野郎の！」

「ミノタウロスって、十七階層で襲い掛かってきて返り討ちにしたら、すぐ集団で逃げだ

していった?」

「それそれ! 奇跡見てえにどんどん上層に上がって行きやがってよつ、俺たちが泡食って追いかけて行つたやつ! こつちは帰りの途中で疲れていたつてのによく。それでよ、いたんだよ、いかにも駆け出しつて言うようなひよろくせえ冒険者が!」

「俺たちのことだな」

「ハチマンさん…」

「抱腹もんだつたぜ、兎みたいに壁際へ追い込まれちまつてよお! もう片方はミノタウロスに向かつていこうとするしよ! 身の程知らずにもほどがあるつてんだ!」

弱いことなんて分かつてる。昔から、あの時から。だから強くなりたいと願つた。全部守りたいと身の丈に余る傲慢な思いも抱いた。

「アイズが間一髪つてところでミノを細切れにしてやつたんだよ、なつ?」
「…」

「それでそいつ、くつせー牛の血を浴びて…真つ赤なトマトになつちまつたんだよ! くくくつ、ひーつ、腹いてえ…!」

「べ、ベルさんつ…?」

「それに、それにだぜ? そのトマト野郎、叫びながらどつか行つちまつてつ…ぶくくつ! うちのお姫様、助けた相手に逃げられて止んのおつ!」

「……くっ」

「アハハハハッ！そりや傑作やあー！冒険者怖がらせてまうアイスたんマジ萌えー!!」

「ふ、ふふっ……ご、ごめんさい、アイスっ、流石に我慢できない……!」

「いい加減その口を閉じろ、ペート。ミノタウロスを逃がしたのはこちらの不手際だ。酒の肴にする権利などない。恥を知れ」

「おーおー、流石エルフ様、誇り高いこつて。でもそんなのただの自己満足だろ？ごみをごみと言つて何が悪い」

「これやめえ。酒がまずくなる」

弱者は理不尽に奪われ虐げられ笑われる。なにも抵抗できないから。抵抗されないと分かり切つてるから。

「アイズはどう思うよ？自分の前で震え上がるだけの情けないやつを。あれが同じ冒険者を名乗つてるんだぜ？」

「……あの状況じゃあ、しようがなかったと思います」

「何だよ、いい子ちゃんぶつちまつて。……自分より弱くて、軟弱で、救えない雑魚野郎をなんで庇うんだ？」

「……」

「それはお前があいつらを弱者と認めてるからだろうがよ。結局はお前も雑魚だと見下

してんだよ!」

そうベートが言った瞬間、ベルが椅子を蹴飛ばし店を出ていく。

「ベルさん!」

呼び止めるがそれも虚しくベルは遠くへと消え去ってしまう。

「ミアさん」

「ん?」

「これベルと俺の分です。受け取ってください」

「…あいよ」

俺はミアさんにお金を渡すと立ち上がりあるテーブルに向かう。

「おい」

「ああん? 誰だお前」

「お前がさっき言ってたトマト野郎だよ」

ハチマンのその言葉にアイズ以外の「ロキ・ファミリア」のメンバーが目を見開く。し

かしそんな中でもベートは態度をかえず、俺を鼻で笑う。

「は、わざわざそんなことを言うただけにきたのか?」

「まさかただ自分のミスにすら気づけずに自らの醜態を広める哀れな犬がいたから気にな

なって話しかけに來ただけだ」

「…てめえ喧嘩売ってんのか？」

「別に誰とは言っていない。まあ自覚があるなら改めた方がいいかもな？」

ベートの額に青筋が浮かび上がる。

「!?ベートっ、何を!？」

リヴェリアがそう言った時にはもうベートは拳を放っていた。ベート自身も軽い脅しのつもりでやっていた。しかしその拳はハチマンによって手首をつかまれ止められる。

「!？」

今度は酒場にいた全員が目を見開く。先程の話から考えるにLv. 1のはずのハチマンがLv. 5の拳を止めたと言う事実には。そしてハチマンは俯きながらしゃべり始める。

(背中が熱いまるで燃えてるみたいに)

「別に怒ってきたんじゃない。むしろ強くなりたい思いを改めて思い出させてくれて感謝してるぐらいだ」

そう言いながらもベートの手を持つ方にどんどん力が入る。

「俺は一つ言いに来ただけだ」

(…いっつ!?)

だんだんとベートの腕が悲鳴を上げ始める。

「お前らが馬鹿にした、お前らが笑った俺とベルは」

俯かせていた顔をあげ、ベートを、「ロキ・ファミリア」を意思を込めて睨む。

「お前らより強くなってお前ら全員を必ず倒す覚えておけ」

「「「「!?」」」」

俺はベートの手を振りはらい、直ぐにベルの後を追った。

「くそっ！何なんだよっ、なんなんだよあいつは!?!ほんとにL.V. 1なのか!?!っ…」

「…確かに彼が本当にL.V. 1かは信じがたいね。ベートの拳を止めたこともそうだが

最後の彼の威圧感…」

「ああ、わしも飲まれそうになったぞい。あやつなものじゃ」

「ベートはこれに懲りたら反省をしろ。…おい、ベート少し手を見せてみる」

「っ。別にどうってことねえよ」

「いいから見せろ」

リヴェリアは強引にベートを引き寄せ手を診る。

「!これは…ヒビが入っているな…」

「ははっ。これは本当にすぐ抜かされてしまうかもしれないね」

そう軽く言いつつも戦慄を隠せない「ロキ・ファミリア」の面々であった。

4 飛躍

(確かこつちに…)

俺は『豊饒の女主人』を飛び出し、ある場所へ向かってずつと走っていた。

(ベルのことはとっくに見失ってる。けどどこに行ったかはわかる)

あいつはあの犬男の言葉を肯定してしまったのだろう。ほかならぬ自分自身が。それが悔しいのだろうたまらなく、だったら行く場所は一つだ。

そこまで考えた俺は、摩天楼施設の正確にはその地下を目指した。

「邪魔だ」

『イヤアツ!?!』

すれ違いざまにモンスターを一閃する。現在の階層は六。それでも未だにベルの姿が見当たらない。見つかるのは回収されることなく不自然に落ちている『魔石』だけ。すると戦闘音が耳に入る。

(…こつちか!)

目の前の角を曲がると肩で息をするベルの姿が見える。ここまでがむしやらに来た

のか体中ボロボロになり短剣は赤に染まっている。

「…ベル」

「ハチマン…」

ビキリ

「！」

ダンジョンの壁に亀裂が入り始める。

「…ハチマン僕強くなりたい。アイズさんにも負けなくらい強くなりたい」

「…」

俺は剣を構えつつもベルの言葉に耳を傾ける。その間にも亀裂は広がり破片を散らす。

「高みを目指したい。ハチマンとアイズさんに並びたいそして」

紅の瞳に確固たる意思がこもる。

「そして僕は英雄になりたい」

遂に破砕音をならし、モンスターが生れ落ちる。それは影の形をしたモンスター『ウォーシヤドウ』。そのモンスターは六階層の中でも随一の戦闘力を持っている。

「俺もだ俺も強くなりたい」

生れ落ちた二匹は俺達を見据える。その二匹を見ながらも口を止めない。

「誰よりも強くなりたい」

俺とベルは姿勢を低くし二匹を睨む。

「いこう」

互いにそして自らに言うように呟くと無謀な戦いに身を投じた。

時間を刻む音が部屋の中に響く。ヘスティアはホームの中をぐるぐると歩き回っていた。

「いくら何でも遅すぎる……！」

腕を組み肩間にしわを寄せ焦りを顔に浮かべる。

（酒場に行くとは言っていたけど……朝帰り……まさか店員と朝まで……そんなふしだらな！）

ふしだらな事を考えるが、直ぐに頭を振る。

（あの奥手の塊のような二人に限ってそんなことはないか……でもそうなると……）

何か事件に巻き込まれたか。頭に最悪がよぎり、ぶわつと嫌な汗が噴き出す。居てもたつてもいられなくなったヘスティアは、ハチマン達を探しに行こうと扉に駆け寄りドアノブに手をかけようとー

「いざいざいざ！」

したところで扉が開きヘスティアは顔面を強打し、声にならない呻き声をあげ蹲る。

「お、おうヘスティアすまん」

声の主に気づいたヘスティアは、すぐに立ち上がる。

「ハチマンく…っ!?!」

涙ぐんだ瞳でハチマンを見るがすぐに言葉を失う。一目でわかるほどに満身創痍な体。そして背中にはベルがおぶわれているが、ベルも似たような状態だったからだ。目をつぶっているが所々息遣いが聞こえるから生きていることは分かる。

「どうしたんだい、その怪我は!?!まさか誰かに襲われたんじゃあ!?!」

「いや、まあ違うけど…」

「じゃあ、一体どうして!?!」

「…えっと、そのダンジョンに…」

ぼつりと呟かれたその言葉に、怒りを忘れ啞然とする。

「ば、馬鹿っ!馬鹿なのか君たちは!?!何を考えてるんだよ!?!冒険者になり立てしかもそんな恰好で一晩中!?!」

「す、すいません」

「…どうしてそんな無茶をしたんだい?」

「いや少しやんちゃをしたくなって…」

「君は本当に馬鹿なのかい？」

怒りを通り越して呆れた視線を送る。

「まあいい、言いたくないならこれ以上聞かないよ」

「いやだからやんちゃを…なんでもないですすいませんでした」

「そんなこと言つてないではやくシャワーあびておいで。血はもう止まつてるみたいだけど、傷の汚れを落とさないと。その後すぐに治療をしよう」

「……ありがとうございます」

案外大丈夫そうに喋っていたが、やはり傷が痛むのか歩き方がぎこちない。自分の非力を恨みながらもベルを担ごうとする。

「いや大丈夫だ。てかそろそろこいつ起こすつもりだったし…おいベル起きろ」

「…ん、こ…こは…?」

「ホームださつさとシャワー浴びて治療するぞ」

「…ありがとうハチマン運んでくれたんだね」

「気にすんな。まあ流石にダンジョンで気絶してたら放置してたけど」

「ははっ…」

「君たち案外余裕だね？」

多少ベルの体を支えながら呆れる。そこでふと思いついたように口を開いた。

「ベル君、ハチマン君、君達はベッドに寝ること。いいね?」

「いや別に大丈夫…」

「何を言ってるんだい。ここで君達をソファアに放り出すほど、ボクは性根を腐らせてなんかないぜ?」

この怪我人に必要なのは休息だ。少しでもいい環境を提供する為にヘスティアは自分の寝床を提供する。

「いや女性をソファアで寝かせるわけには…」

ヘスティアはその言葉にある悪戯を思い付きニヤリと笑みを浮かべる。

「じゃあ、ボクも同じベッドで寝させてもらおうかな?」

「ああ…それなら解決だな。じゃあ、一緒に寝るか」

「そうだね。神様一緒に寝ましょう」

「なぬっ!?!」

冗談のつもりで言った言葉をスルーされ、挙句強烈なカウンターを叩き込まれクリーンヒットしたヘスティアは絶句した。

(そんなキャラじゃないだろう君達は!?)

天界の三大処女神と言われるヘスティアは顔を紅潮させる。あまりの疲労に二人とも思考能力が落ちている事は分かっているが、それでも赤くしてしまう。

「神様（ヘステイア）」

「……いや、にやんだいっ?」

ぼつりと眩かれた言葉に声を裏返させてしまう。

「…僕、強くなりたいです（俺は強くなる）」

「!」

はつと、二人を顔を見る。

「…うん」

ヘステイアは二人の言葉を真摯に受け止めるのだった。

ベル・クラネル

Lv. 1

力 : G 8 2 2 2 6

耐久 : H 5 8 1 0 2

器用 : H 4 6 1 5 2

敏捷 : G 9 6 2 9 4

魔力 : I 0

《魔法》

□

《スキル》

【憧憬一途】

- ・ 早熟する
- ・ 懸想が続く限り効果持続。
- ・ 懸想の丈により効果向上。

ハチマン・ヒキガヤ

Lv. 1

力：G 107↘270

耐久：H 57↘172

器用：I 64↘182

敏捷：I 70↘247

魔力：I 0

《魔法》

□

《スキル》

【強者願望】

- ・早熟する

- ・強者思になり思たい思が思続思く思限思り思効果思持思続思。

- ・強者思になり思たい思の思丈思により思効果思上思昇思。

- ・全ステイタス上限突破しなければランクアップ不可。

【守護者ガードイアン】

- ・守りたいものの為に行動するときステータスの高補正。

- ・守りたいものの人数により効果上昇。

【孤軍奮闘】

- ・少数対多数の時の高補正。

- ・パーティーの人数により効果上昇。

- ・相対人数又は強さにより効果上昇。

「……」

二人の「ステイタス」を記した紙を見て顔を引き攣らせた。

二人が帰ってきて一夜が明けた。極度の疲労から昨日丸一日を睡眠に費やしーベル

とハチマンはヘスティアと一緒に寝ている事に気付いた瞬間絶叫した。早い時間帯に起きた三人は現在、取り敢えずということで「スティタス」の更新を行っている。

(早すぎる…)

ヘスティアが『神の恩恵』を授けるのは二人が初めてだがある程度の知識はもっていた。だから子供達に刻まれる「スティタス」が、こんなものではないと知っていた。

(でもこの二人は気づいてないんだろうな……)

『神の恩恵』を授かったのが初めての二人は初めから成長速度がいかれていたためその異常に気付いていなかった。

(しかし……こうまでいっぺんに成長した原因は……やっぱ一昨日何かがあったんだとして二人の中で思いが膨れ上がった)

ヘスティアは「スティタス」更新を終え、各々くつろいでる二人を見る。

(強く……か。……よしっ)

ヘスティアはテテテ、と規則性のない歪なフローリングの上を駆け、引き出しの前に行き中を漁り、目当てのものを見つける。

『ガネーシャ主催 神の宴』と書かれた招待状。開催日は……本日の夜。

(ヘファイストスも来るよね……?)

この隠し部屋を恵んでくれた友人の顔を思い浮かべる。

「ベル君、ハチマン君、ボクは今日の夜…いや何日か部屋を留守にするよつ。構わな
いかなつ?」

「えっ? あ、わかりました」

「バイトか?」

「いや、行く気はなかったんだけど、友人の開くパーティーに顔を出そうかと思つてね。
久しぶりに皆の顔を見たくなつたんだ」

「なるほど。だつたら俺達に遠慮せず行つてきてくれ」

嫌な顔をせず送り出してくれる二人に勝手に悪いと思いつつも頷いて、クローゼツ
トを物色する。その中から必要なものをバッグに詰めドアに手をかけ、もう一度ベルと
ハチマンの方を向く。

「君達、もしかして、今日もダンジョンに行くのかい?」

「そのつもりなんですけど…やっぱりダメですか?」

「ううん、いいよ、行つてきな。ただし引き際は考えるんだよ? 君達はまだ怪我をしてる
んだからね」

「…善処する」

「君の善処するほど信用ならないものはないんだけど…まあ行つてくるよ」

二人に見送られながら、ヘスティアは部屋を後にした。

「…気まずいなあ…」

ベルが『Closed』と札のかかっているドアの前で頭をかく。そしてちよつと悩むそぶりを見せると『豊饒の女主人』へ足を踏み入れる。

「申し訳ありません、お客様。当店はまだ準備中です。時間を改めてお越しになっていただけないでしょうか？」

「まだミャー達のお店はやってニヤい…ん?…ああー!おミャーらあん時の白髪頭に【ロキ・ファミリア】に喧嘩売ってた腐り目小僧!」

「え!?!」

「シルとミアお母さんと呼んできましようか?」

「…お願いします」

恐らく喧嘩を売ったことに驚いているであろうベルを無視してエルフの方にお問い合わせする。

「ベルさんにハチマンさん!?!」

エルフの方が奥に消えてしばらくすると店の奥からシルさんが現れる。

「一昨日は、すいませんでした。お金も払わずに、勝手に…」

「…?その事ならハチマンさんがちゃんと二人分払っていきましたけど…」

「え?は、ハチマン?」

俺はすつと目をそらす。

「言うの忘れてた」

「ハチマン?なんで笑ってるの?」

「気のせいだろ」

「なら僕と目を合わせてほしいんだけど」

「いやちよつとお前と目を合わせると死ぬ病が…」

「そんな病気ないでしょ!?!?ていうか絶対ここに来るまでの僕の反応楽しんでたよね!?!」

「ソナナコトナイヨ?」

「じゃあなんで片言なの!?!」

「ごめんって忘れてたのはほんとだよ。途中で気付いたけど」

「そ、そうなの?…待って最後なんて言った?」

「坊主達が来てるって?」

ぬうつとカウンターバーの内側にあるドアから女将さんが出てくる。俺は変な顔で見ってくるベルを無視してミアさんのもとへ行く。

「ミアさん」

「ん?」

「あの日酒場の空気を悪くしてすいません」

「わざわざそれを言いに来たのかい？それなら気にしないでいい。いいもん見せてもらったしね。まあアンタ等二人が無言で去ってつて塞ぎ込んだシルを見て、あのエルフのリュー真剣もつて出ていきそうになったから止めるのに苦労したけどね」

「…」

がっはつはとミアさんは豪快に笑うがこの酒場で働く人はただものではないと気づいていたので全く笑えない。

「…坊主」

「？」

「冒険者なんてかっこつけてるだけ無駄な職業さ。最初の内は生きることだけに必死になつてればいい。背伸びしてみたつてろくなことは起きないんだからね」

それを聞きベルが目を見開く。

「最後まで二本足で立ってたやつが一番なのさ。みじめだろうが何だろうがね。すりゃあ、帰ってきたソイツにアタシが盛大に酒を振る舞つてやるさ。ほら、勝ち組だろ？それにそこの腐り目」

「！」

「あんたのその度胸氣にいったよ。あの宣言を嘘にしてアタシを失望させないでくれ

「よ」

ミアお母さん…。

「気持ち悪い顔してるんじゃないよ。そら、アンタらはもう店の準備の邪魔だ、行った行った」

くると回転させられドンつと背中を押された。その威力に呼吸が半分止まる。

(なんちゆう威力…)

「坊主達、アタシにここまで言わせたんだ、くたばったら許さないからねえ」

「はい！」

「うっす」

勢いよく駆け出して店を出る際、思わず二人して「行つてきます」と言つてしまい顔を赤くさせるのだった。

「んく？あの腐り目ほんとに同一人物かニヤ？」

「…まあ確かに信じがたいですね」

「どうしたの？」

「いえ、あの方が【ロキ・ファミリア】に宣言した時Lvが格上であるはずの私達も圧倒されたのですが…」

「今日の腐り目全くその面影がなかったのにや。昨日のが嘘みたいニヤ」
「ふふつ、もしかしたらとんでもない人と知り合ったのかもね？」

そう言いながら、先程二人が出て行った扉を見つめるのだった。

#5 何か

「ガネーシャ・ファミリア」の本拠地、『アイアム・ガネーシャ』で『神の宴』が開かれていた。『神の宴』とは、下界に降りた神たちが顔を合わせるために設けた会合であり今日も神たちにより喧騒に包まれていた。そんなざわめきが絶えない会場の一角

「むっ！給仕君、踏み台を持ってきてくれ、早く！」

「は、はい！」

ヘステイアは「ガネーシャ・ファミリア」の構成員が務めるウェイターを使い、多種多様の料理と格闘していた。

「さっ！さっ！さっ！」

「…」

持参したタッパーに日持ちしそうな料理を次々と詰め込んでいくヘステイア。それを見せられている給仕の青年は何とも言えない顔をする。しかしヘステイアはそんな視線も気にせずに作業を続けていく。

「何やってんのよ、あんた……」

「むぐ？むっ！」

脱力したような声がヘスティアの側から投げかけられる。声に反応したヘスティアが振り向くと紅い髪に深紅のドレスで右目に大きな眼帯をした麗人が、呆れを含んだ表情でヘスティアを見下ろしていた。

「ハフアイストス！」

「ええ、久しぶりヘスティア。元氣そうで何よりよ。……もつとましな姿を見せてくれたら、私はもつと嬉しかったんだね。」

「いやあよかった、やっぱり来たんだね。ここにきて正解だったよ」

「何よ、言つとくけどお金はもう一ヴァリスも貸さないからね」

「し、失敬な！ボクがそんな事をする神に見えるかい！そりゃあハフアイストスには何度も手を貸してもらったけど、今はおかげで何とかやっていける！今はボクが親友の懐を食い漁る真似なんかするもんかっ！」

「たつた今、普通にただ飯を食い漁ってたじゃない」

「うっ……いや、これは、どうせ残るんだし……粗末に捨てるくらいならボクが有効活用してあげようかなー、なんて……」

「ほーほー、立派じゃない、そのけち臭い精神。わたしやあ、あんたのそんな姿に感動して涙が止まらないわよ」

「ぐぬう……！」

はんと鼻を鳴らすヘファイストスにヘステイアは悔しそうに唸る。そんな中コツコツと靴を鳴らす音がヘファイストスの後ろから近づいてくる。

「ふふ…相変わらず仲がいいのね」

「え…フ、フレイヤっ?」

ヘステイアの視界に現れたのは容姿の優れている神の中でも群を抜いて美しい美に魅入られた神——フレイヤが立っていた。

「な、なんで君がここに…」

「ああ、すぐそこで会ったのよ。久しぶりーって話していたら、じゃあ一緒に会場回りましようかって流れに」

「か、軽いよ、ヘファイストス…」

「お邪魔だったかしら、ヘステイア?」

「そんなことないけど…ボクは君のこと、苦手なんだ」

「うふふ、貴方のそういうところ、私は好きよ?」

「やめてくれよ」

ヘステイアは手を振る。

「おい!ファイターん、フレイヤー、ドチビ!!」

「…もつとも、君なんかよりずっと大っ嫌いな奴が、ボクにはいるんだけどねっ」

「あら、それは穏やかじゃないわね」

「あつ、ロキ」

「何しに来たんだよ君は……!」

「なんや、理由がなきや来ちやあかんのか? 『今宵は宴じゃー!』っていうノリやろ? むしろ理由を探す方が無粋つちゆうもんや。はあ、マジで空気読めてへんよ、このドチビ」

「……!!」

「凄い顔になってるわよ、ヘステイア」

ロキに馬鹿にされたヘステイアは顔を引き攣らせる。そこからヘステイアを除く三名が談笑の談笑が進んだ。途中ロキとヘステイアがつかみ合いの喧嘩をし、ロキがヘステイアの揺れる何かを見て動揺し帰りその後フレイヤも帰り、ヘファイストスと二人つきりになっていた。

「ヘステイア、もし残るんだったら、どう? 久しぶりに飲みにも行かない?」

「う、うん、えーとつ……」

「?」

「そのお……ヘファイストスに頼みたいことがあるんだけど……」

「……」

すつ、と紅い左眼が細まる。

「この期に及んで、また頼み事ですって？あんだ、さっき自分が口にしていたことをよく思い出してみなさい？」

「え、えと、何だっけっ…？」

「私の懐は食い荒らさないって、そう言っただけじゃなかったかしら？」

「いやあ…あはは…」

「…一応聞いておいてあげるわ。な・に・を、私に頼みたいですって？」

ヘスティアは大きな声で自分の望みを放った。

「ベル君とハチマン君にっ…僕の「ファミリア」の子に、武器を作ってほしいんだ！」

『ブオー！』

「ふっ！」

向かってくる爪を大きく避けゴブリンの首を飛ばす。そこにすかさず別のゴブリンが背中から襲い掛かるが横に飛び体を一闪する。

『…グウ』

斬ったゴブリンが絶命し灰になったのを確認するとベルの方を向く。するとちやうどヤモリ型のモンスター『ダンジョン・リザード』を倒し、こちらに歩み寄っているところだった。

「ハチマンそっちはどう?」

「あちようど終わったぞ」

そう言う『魔石』の回収作業に入る。

「…そういえばハチマン、『ロキ・ファミリア』に喧嘩売ったって…」

「あー…売ったと言うかなんというか…」

「?」

「まあ…きにすんな」

実はあの時のことを後々冷静に考えてベッドの上で悶絶したりしてるハチマン的にはあまりほり返したくはない出来事だった。

(それに謝らないとなあ…怖いな…)

そんなことを考え、頭を振り話題を変える。

「それよりもまた弁当もらったんだな」

「うん遠慮したんだけどそのさし上げたいってことじゃダメですか? って言われて…」

「くそがこれだからベルは…滅べよ…」

「そういえばハチマンの分ももらったよ」

「失礼なことを言っすいませんでした」

速攻で謝りベルから弁当を受け取る。

「それじゃ荷物も増えてきたし一回上にかかるか」

「うん！」

それから現在いる四階層から一階層まで移動する。

(…ん?)

「ハチマンあれ…」

地上までの階段を上っている最中車輪が取り付けられている物資運搬用の収納ボックスが目に入る。そのカーゴを見ると箱が揺れる。

「いつ!？」

一人でに動いたカーゴにベルが素っ頓狂な声を上げる。

「は、ハチマンあれもしかして…」

「ああ、多分モンスターが閉じ込められてんだろう」

「でもなんでモンスターを…」

「さあ?なんでだろうな」

大して興味もなく直ぐにその場を後にし、その日は潜っては出てを繰り返して帰路についた。

「…あんた、いつまでそうやってるつもりよ」

「…」

とある店の屋内で、紅眼紅髪の女神ヘファイストスが、呆れたような疲れたような声音をこぼしていた。そしてその目の前には床に跪いてこれでもかと頭を下げている親友、もとい幼女神ことヘステイアである。

「私これでも忙しいんだけど？」

「……」

「騒いでなくても、そこで虫みたいに丸まってもらっていると、気が削がれて仕事の効率落ちるの。わかる？」

「……」

「ちよつと、ヘステイア？」

「……」

「……はあ」

押し黙りずつと同じ態勢のままにいる小さな親友に、ヘファイストスは溜息をつく。

【ガネーシャ・ファミリア】のホーム『アイアム・ガネーシャ』で下界に降り立つた神達が顔を合わせるために設けられた会合、『神の宴』が行われていた日、ヘステイアに【ファミリア】の構成員に武器を作ってほしいと懇願され、ヘファイストスはバツサリと切つて捨てた。「ヘファイストス・ファミリア」の上級鍛冶師が作った作品はオラリオの中で

もトップクラスの品質を誇っている。その相場は誰であれ、おいそれと手を出せない域にある。だから容赦なくヘスティアを突っぱねた。しかし申し出を断られたヘスティアは諦めることなく今の状況に陥り、丸一日その状態が続いていた。

「…ヘスティア、教えて頂戴。どうしてあんたがそうまでするのか」

あまりの根気の強さにまっすぐに問う。

「…あの子達の、力になりたいんだ！」

ヘスティアは全てをぶつけるように吐き出す。

「まだ出会って間もないけどあの子達が大切なんだ！そしてその大事な子達が高く険しい道のりを走り出そうとしている！危険な道だ、だからほしい！あの子達を手助けしてやる力が！あの子達の道を切り開ける、武器が！」

本音をさらけ出し自らをぶつける。

「ボクはあの子達に何もしてあげられないっ！あの子達は高みへと行こうとしているのに、その主神であるボクが神らしいことは何一つだつてしてやれてない！」

最後は絞り出すようにして、ぐつと体を強張らせる。

「…見てるだけじゃ、嫌なんだよ…」

消え入りそうな弱々しい言葉が紡がれる。しかし神を動かすには事足りた。

「…わかったわ。作ってあげる、あんたの子達にね」

ばつと瞠目した顔を振り上げたヘステイアに、ヘファイストスは肩をすくめて見せる。

「私が領かなきや、あんた梃子でも動かないでしょうが」

「……うんつ、ありがとう、ヘファイストス！」

ヘファイストスは長時間の正座でふらふらな親友を見て溜息をこぼしつつもくすりと微笑む。

「ーで、言っておくけど、ちゃんと代価は払うのよ。何十年何百年かかっても、絶対にこのツケは返済しなさい」

「わ、わかっているさつ、ボクだつてやるときはやるんだつ」

「はいはい楽しみに待つてるわ。それであんたの子らが使う得物は？」

「え……ナ、ナイフにロングナイフだけど？」

そう、と一言だけ呟くとヘファイストスは紅緋色の鎚をとる。

「へ、ヘファイストス。もしかして、君が武器を打つのかい？」

「そうよ、当たり前でしょう。これは完璧にあんたとのプライベートなんだから。私の事情に「ファミリア」の団員を巻き込むわけにはいかないわ」

何か文句ある？と言わんばかりに眼帯をしていない左眼でジロリと一睨みする。

「文句なんてあるわけないじゃないか！天界でも神匠と謳われた君に作ってもらうん

だ、むしろ大歓迎だよ！」

「あんた、忘れてない？ここは天界じゃないのよ、私は一切『力』を使えないんですからね」

「構うもんか！ボクは君に武器を打ってもらうのが一番嬉しいんだから！」
「…」

ヘファイストスの腕を疑っていないのか無条件で己を受け入れてるヘステイアに、ヘファイストスは思わず眉を顰めるが悔しいことに悪い気はしなかった。

「…これからやる作業、あんたも手伝いなさい。今からしっかり働いてもらうから」
「ああ、任せておくれよ！」

（さて…）

記憶から武器の使い手となる人物情報を引き出す。

（使い手は駆け出しも駆け出し、そんな冒険者に持たせる一級品…）

はつきりいつて、無理難題である。

（どうするか…）

我が神友ながら厄介な依頼をしてくると心の中で呟くヘファイストスだった。

ヘステイアが出かけてから三日目の朝。まだヘステイアは帰ってきていなかった。

がらんとした教会の中で俺とベルはダンジョンに潜る準備を進める。

「だけどこれほんとにもらつてよかつたのかなあ……」

「まあ断つても押し付けてきたからな……よかつたんじゃないか？」

そう言いながら手元のポーションに視線を落とす。これはヘスティアの神友と名乗る青髪の男神——ミアハ様にもらつたものだ。昨日帰路についている所ミアハ様に声を掛けられお近づきのしるしと言われ渡されたのだ。

「ハチマン怪我の調子はどう？」

「俺は大丈夫だなそっちは？」

「僕も大丈夫だよ。……どうする？ 今日こそ……」

俺はベルの言わんとすることを理解し頷く。するとベルはうきうきしたような顔に変わる。実は昨日四階層までに留まっていたのは俺とベルの傷が完治していないため安全を優先していたからだ。

（今日こそ、五階層から下に……）

本日の予定を組み立てつつ俺達は地下室を出発する。こなれた動きでダンジョンまでの道を進む。

「おーいつ、待つにゃアホ毛頭！ 白髪頭！」

アホ毛頭と言う単語に反応し、思わず足をとめる。声のした方を振り向くと『豊饒の

『女主人』の店先で、猫耳と細いしつぽを生やしたキャットピープルの少女が、ぶんぶんと大きく手を振っていた。

(あの人は確か…: 弁当盗まれた人か…)

シルさんに弁当を容赦なくとられていたのでよく覚えていた。一度辺りを見やると白髪頭に反応したのであろうベルが「僕ですか?」という風に自らに指をさし確認するとこくこくと頷かれ、俺とベルは駆け寄る。

「おはようございます、ニヤ。いきなり呼び止めて、悪かったニヤ」

「あ、いえ、おはようございます」

「おはようございます。…それで俺達に何か?」

「ちよつと面倒ニヤことを頼みたいニヤ。はい、これ」

「へっ(え)?」

「白髪頭とアホ毛頭はシルのマブダチニヤ。だからコレをあのおつちよこちよいに渡して欲しいニヤ」

そう言い財布らしきものを渡される。てかアホ毛って。

「あの…全く話が見えてこないんですけど…あとそのアホ毛頭ってやめてほしいんですけど…」

「じゃあ腐り目ニヤ」

「アホ毛頭でお願いします」

「アーニヤ。それでヒキガヤさんに失礼ですそれに説明不足だ。クラネルさんたちも困っています」

色々困っていると今度はエルフの店員さんが現れた。

「リユーはアホニヤー。店番さぼって祭り見に行つたシルに、忘れていつた財布を届け
てほしいニヤンて、そんなにや世話さずともわかることニヤ。ニヤア、アホ毛頭と白髪頭」
分かるか。

「というわけです。言葉足らずで申し訳ありませんでした」

「あ、いえ、よくわかりました。そう言うことだつたんですね」

「ええ。それでどうか頼まれてもらえないでしょうか？私やアーニヤ、ほかのスタツフ
達も店の準備で手が離せないのです。これからダンジョンに向かう貴方達には悪いと
は思うのですが…」

「別に構いませんけど…」

「僕も大丈夫ですけど、シルさんが店をサボっちゃつたつてほんとなんですか？」

確かに。あの商売根性の塊みたいな人がさぼるなんて意外だ。まあ気持ちはわかる
けど。

「さぼる、という言い方には語弊があります。ここに住まわせてもらっている私達とシ

ルとでは、環境が違うので」

「どうやらちゃんと休みを取って休んでいるらしい。それで何でも『お祭り』にいったらしく…。」

「…怪物祭?」

「はい。シルは今日開かれるあの催しを見に行きました」

「…あー、あのカーゴはそういう…」

「ここに来る前に蓄えた知識を思い出しながら昨日のカーゴの件について納得する。」

「ハチマン知ってるの?」

「ああ、ここに来る前に知識として覚えてるくらいだけど」

「よかつたら教えてくれない?」

「ああいいぞ。怪物祭は、年に一回ある催しでダンジョンからモンスターを引つ張ってきて民衆の前で調教する祭り…であってますよね?」

「ええあつています」

「なるほど…」

「ミャー達だつて本当は見に行きたいニヤ、でも母ちゃんが許してくれねーニヤ。シルはお土産を買つてくるとか言つて、笑顔で敬礼なんてしていったけど…財布を店に忘れていくというこの体たらくニヤ。シルはうっかり娘ニヤ」

「アーニヤ、貴方が言えた事ではないと思いますが」

「はは……」

まあ、大体の事情は分かった。普段の恩もありベルと話して引き受けることにした。

「シルはさつき出かけたばつかだから、今から行けば追いつけるはずニヤ」

「わかりました」

俺達はシルさんの財布を受け取り、怪物祭が行われている場所へ向かった。

わいわいと、今にも踊り出しそうな声々が大通りには溢れていた。そんな大通りに面する喫茶店、その二階。内装は木目調で温かい雰囲気がある店内で、彼女は通りを一望できる窓際の席に美の神―フレイヤはいた。

「……」

通りを埋め尽くすのは沢山の下界のもの……多くの子供達。フレイヤがその顔を一つ一つ確認するかのように彼等を眺めていると、ギシリと。木張りの床がきしむ音と共にこちらに近づいてくる気配が複数あった。フレイヤは俯瞰するのをやめ、待ち人を瞳に映す。

「よおー、待たせたか？」

「いえ、少し前に来たばかり」

片手をあげ気軽に声をかけてきた神物に、フレイヤはフードの下で浅く笑う。

「なあ、うちまだ朝飯食ってないんや、ここで頼んでもええ？」

「お好きなように」

椅子を引きながらずけずけとそんなことを言うロキに、フレイヤは微笑を浮かべたまま気にしたそぶりも見せない。

「宴の後、ずいぶんと寝込んでいたそうじゃない。一人で自棄酒して、酔いつぶれて、ふふ、ヘスティアもやるわね？」

「おい、腐れおっぱい。お前はそういうことどつから聞きつけてくるんや」

「貴方の可愛い団員たちが騒いでいたそうよ？誰かさんを話の種にして、盛り上がった」

「かーつ、あのヤンチャどもめ、やってくれるわあ」

「ところで、いつになったらその子を紹介してくれるのかしら？」

「なんや紹介がいるんか」

「一応、彼女と私は初対面よ」

この場にいるのはフレイヤとロキを除けば一人。

「んじや、うちのアイズや。これで十分やろ？アイズ、こんなやつでも神やから、挨拶だけはしときか」

「…初めまして」

「可愛いわね。それに……ええ、ロキがこの子に惚れ込む理由、よくわかった」

アイズはフレイヤと目が合うとペこりと丁寧にお辞儀をした。

「どうしてここに【劍姫】を連れてきたのかきいても?」

「ぬふふつ……! そらお前、せつかくのフィリア祭や、この後しつかりきつちりアイズさんとラブラブデートを堪能するんじやあ!」

下卑た笑みを浮かべ吠えるロキ。

「……ま、それに、『遠征』も終わってやつと帰ってきたと思つて放つておくと、まあたすぐダンジョンに潜ろうとするからなあ、このお姫様は」

「……」

「誰かが気を抜いてやらんと一生休みもせん」とロキは隣に手を伸ばし、少女の頭をぼんぼん叩く。

「それじゃあ、こんなところに呼び出した理由をそろそろ教えてくれない?」

「ん、ちよい久々に駄弁ろうと思つてなあ」

「嘘ばっかり」

フードの作る暗がりの中から薄く笑うフレイヤに、ロキも態度をかえニツと不敵に笑う。それまでであった両者の空気ががらつと一変する。

「率直に聞く。何をやらかす気や」

「何を言っているのかしら、ロキ？」

「とぼけんな、あほお」

ロキはその細い眼を猛禽類のように鋭く構える。

「最近動きすぎやろう、自分。興味ないとかほざいておった『宴』に急に顔を出すわ、さっきの口振りからして情報収集に余念がないわ……今度は何を企んだら？」

「企むだなんて、そんな人聞きの悪いこと言わないで？」

「じゃかあしい」

『お前が妙な真似すると碌なことが起きない』ロキは言外にそう告げる。こちらに面倒が及ぶようなら叩き潰すぞと。視線の応酬が続く。アイズが見守る中、永劫に続くやり取りかと思われたがおもむろにロキが脱力する。

「男か」

「…」

フレイヤは答えない。しかしロキはそれを肯定とみなし呆れたようなため息をつく。

「はあ……つまりどこぞの『ファミリア』の子供を気に入ったちゆう、そういうわけか」

フレイヤの多情……いわゆる男癖の悪さは、神々の中でも周知の事実だった。気に入った異性を見つけたければすぐにでもアプローチを行い、その類ない『美』を用いて自分のものにする。

「つたく、この色ボケ女神が。年がら年中盛りおつて、誰だろうとお構いなしか」
「あら、心外ね。分別くらいあるわ」

「抜かせ、男神どもも誑かしとるくせに」

「彼等と繋がっておけば色々便利だもの。何かと融通が利くわ」

かつ、とロキは喉を鳴らす。

「で？」

「…？」

「どんな奴や、今度自分の目にとまったっていう子供つてのは？いつ見つけた？」

「教えろ、とロキは口端を吊り上げる。」

「…」

「そつちのせいでは余計な気を使わされたんや、聞く権利くらいあるやろ」

「…強くは、ないわ。貴方や私の【ファミリア】の子と比べても、今はまだとても頼りない。少しのことで傷付いてしまい、簡単に泣いてしまう…そして諸刃の剣のような心…
そんな子達」

でも、と細い唇が震える。

「綺麗だった。透き通っていた。濁っていてもその中は透き通っていた。あの子達は私が今まで見たことのない色をしていたわ」

ほんの僅かな熱を乗せ声のトーンが上がる。

「見つけたのは本当に偶然。たまたま視界に入っただけ」

その相手との出会いを再現するかのようになり、窓の外の光景を見下ろした。

「あの時も、こんな風に……」

西のメインストリートに視線を移した瞬間フレイヤの動きが止まる。その銀の視線が、冒険者の防具を纏った『白い髪の少年』と『黒い髪の少年』に釘付けとなった。徐々に遠のいていくその背中を見つめるフレイヤは、ゆつくりと、蠱惑な笑みを浮かべた。

「ごめんなさい、急用ができたわ」

「はあっ？」

「又今度会いましょう」

ぼかんとするロキを置いてフレイヤは席を立った。

「何やあいつ。いきなり立ち上がって」

怪訝そうな顔を浮かべ、ロキはフレイヤが消えた階段を見つめる。と、そこで「ん？」

とロキは小首をかしげる。

「アイズ、どうした？何かあったん？」

「……いえ」

そうは言いながらも視線は外を向いていた。見覚えのある二人の姿を追いながら。

「はい、これ」

「おおお…!?!」

作業着を着たヘファイストスから手渡された小型のケースに、ヘステイアは感嘆の声を漏らす。

「ご要望には応えられたかしら?」

「うんうんっ、十分十分っ!文句なんてあるわけがない!」

ぱかっとなたを開けてヘステイアは箱の中身を見る。漆黒の鞘に納められた、漆黒の柄を持つ短刀と純白の鞘に純白の柄をもつ剣。

「あつ、そうだ、この武器の名前なんてつけるんだいヘファイストス!」

「そうね…これらは神の武器としか形容しようがないし…『神のナイフ』…それに

『^{ヘステイア}神のソード』つてところかしら」

それを聞き終始ご満悦なヘステイアは頭に手をやってにやける。頭の両サイドで結われた長いツインテールが、彼女のご機嫌を示すように波打っていた。

「言っておくけど、借金、踏み倒すんじゃないわよ」

「わかってるわかってる!」

浮かれてるヘステイアは笑顔で頷き早速この場から出ていく準備を始める。

「もう行くの?」

「ああ、悪いけど!」

居てもたつてもいられないという風にヘステイアは素早く動き、部屋の扉へと直行した。

「ヘステイア、あんた少しは休みなさいよ!」

声を背中ででききながら、ヘファイストスの店を後にする。

(ああ、早くコレをあの子達に渡してあげたいなあ!)

二人の反応を考え幸せな気分になる。プレゼントを一刻も早く渡してやりたいヘステイアはベルたちのことを思案する。

(この時間…あの二人ならダンジョンに潜ってるかな…ん?)

店頭に張り出されていた紙チラシがヘステイアの目にはいる。チラシには今日開催される『怪物祭』の日程とプログラムが記載されている。

(もしかしたら足を運んでるかも…)

すなわち自らも出向けば、ばったり出くわすかもしれない。そう考えたヘステイアは祭りへと赴くことに決めた。

「へーい、タクシー!」

小柄な体と小さな手を一杯に伸ばして、通りを進んでいた流しの馬車を呼び止める。

「東のメインストリートまでお願いするよ！」

「へへっ、承りました。やっぱりお目当ては怪物祭ですか？女神様？」

「ああ、まあね！」

パチン、と軽い鞭の音が鳴り馬車は動き出す。

「なるべく早く向かいたいんだ。今日はどこも賑わってるけど、急げるかい？」

「なあに、女神様をお願いを断れるわけじゃないですよ、っと！」

ヘスティアの注文に青年は快く応え、素早く、器用に馬車を操った。ベル達と五つも離れていないであろうヒューマンの青年と陽気に会話を続けながら、ヘスティアは祭りの雰囲気によって活気づく街並みに目を楽しませる。

「あちやあく。すいません女神様、ここからはもう進めないみたいです」

「あらら」

順調に進んでいた馬車が人の密度が増したことで動きを止める。頭を押さえる青年の背後で、ここまですれば大丈夫かとヘスティアは考え、馬車を降りる準備をする。

「いいよ運転手君、十分さ。ここからは歩いていくよ」

「本当にすいません。ちよつと暗いけど、その裏道を使えばメインストリートには楽にたどり着けると思うんで」

「ありがとう。で、お代はいくらだい？」

「九〇ヴァリスになります」

「ふふん、お釣りはいらぬ。残りは君へのチップだ！」

「いえ、あの、お代ピツタリなんですけど……」

青年の言葉を聞く前に機嫌よく駆け出したヘステイアは裏道へと入る。もの悲しそうな視線が己の後頭部を見つめているとは露にも思わず、その場を後にした。そして裏道に自分以外の人影が現れる。

「あれ、もしかして、フレイヤかい？」

「……ヘステイア？」

「君も怪物祭を見に来たのかい？こんな道を通るなんて、随分と急いでいるようじゃないか」

「……ええ。人通りが激しいところは堂々と歩けないから、こうして人目を忍びながら先を急いでるの」

「あー、『美の神』も大変だねえ」

美の化身が表通りを闊歩すればそれだけで周囲は大混乱だ。自分のように馬車も使えなくては、こうしてこそこそ隠れるような真似をして目的地を目指すしか方法はないのだろう。

「あつ、そうだ。フレイヤ、ボクの『ファミリア』の子を見なかったかい？今探してると

ころなんだ」

「…」

「二人は白い髪に赤色の目をしててもう一人は腐った目にアホ毛で…そうそう、こう、兎とゾンビっぽい！」

手を振りながら嬉々として二人のことを説明するヘステイアに対して、フレイヤは一時の間笑みを消し黙る。だがすぐに再び微笑みを浮かべ、自分の辿ってきた道を示した。

「そういえば見かけたような気がするわ。この先の東の大通りで」

「本当かい!？」

「ええ。真つすぐ闘技場を目指していたようだから、この道を左に曲がれば、上手く先回りできるんじゃないかしら」

満面気色になるヘステイアは笑顔で「ありがとう!」と伝え、彼女の言葉を鵜呑みにする。そこからヘステイアは裏道の出口を一気に駆け抜け、東のメインストリートに飛び出した。そんな彼女を待っていたのは、枚挙に暇がない人の群れと人波のなか、何とか前に進もうと四苦八苦する、ベルと辟易とした表情を浮かべるハチマンの姿だった。

「おーいつ、べールくーんっ!ハチマンくーんっ!」

「え（ん）？」

耳を叩いた自分達の名前に振り向くと、俺達は目を丸くした。所在のわからなかったヘステイアが、人込みをかき分けてこちらに駆け寄っていたからだ。

「神様?! どうしてここに!？」

「おいおい、馬鹿言うなよ、君達に会いたかったからに決まっているじゃないか!」

目の前で立ち止まったヘステイアは何か誇らしげに凶器を張ってそんなことをのたまう。目のやり場に困るから非常にありがたいとございます。

「てか今日までどこに…」

「いやあー、それにしても素晴らしいね! 会おうと思ったら本当に出くわしちゃうなんて! やっぱり僕達はただらない絆で結ばれているんじゃないかなー、ふふふっ」

（駄目だこの女神まるで話を聞いてねえ）

「か、神様? 凄いいご機嫌みたいですけど、本当に何があつたんですか?」

「へへっ…知りたいかい? ボクが舞い上がってる理由を」

「は、はい」

さつきから顔をだらしなく崩しているヘステイアは、手を後ろに回し、何かを（ごそ）そと弄りだす。

「実はね…」

と、そう言いかけたところで動きを止める。祭りで賑わっている周りを軽く見渡した後、何かを考える素振りを見せる。

「…うん、せつかくだ。やっぱり今は、教えな—い」

「ええっ!?!」

「楽しみは後でとっておくことにしよう」

まさかのお預けに不満げな顔を浮かべるとヘステイアは俺たちの手を取って歩き出した。

「デートしようぜ、ベル君、ハチマン君」

そしてこちらを振り向いて、神様は微笑みながらそう言った。そんなヘステイアに俺は即答する。

「パスで」

「あれっ!?!」

「だってこの人ごみですし…」

(それに神様とは言え女性とデートは俺が死ぬ)

「もしかしてボクとのデートは…嫌かい?」

不安そうな顔でハチマンに問いかける。

「いや別にそういうわけでは…」

「なら行こう!」

そう言うとうすぐに表情を変え顔を赤らめているベルと俺の手を取り、雑踏の中へと引つ張る。すると正気の戻ったベルが声を上げる。

「ま、まってつ、待っててくださいい神様!?!僕達、実はお使いを頼まれているんです!」

「ん、そうなのかい?」

「はいっ、だから今ある人を探している最中で…!」

「よし、じゃあデートしながら人探しをしようじゃないか。楽しみながら仕事もこなせて一石二鳥だ。あ、おじさーん、そのクレープ三つくださいい」

「神様あー!?!」

俺らの言い分をガン無視してデート(?)に乗り出すヘスティアに俺とベルは困り果てる。

(見つけたらすぐにダンジョンに行く気だったけど…たまにはいいか…それに昨日の夜の疲れも抜けてないし…)

「ベル君、ハチマン君」

「ん?」

「何ですか?」

「あーん」

「…え（へあっ!）」

ヘステイアはさつき買ったクレープを受け取ると俺らの前に差し出す。

「神様一体何を!？」

「何をつて、あーん、だよ。あーん。一度でいいからやつてみたかったんだ」

「一度でいいならベルが受けてくれますよ。それじゃ俺は普通に…」

差し出されたクレープを取ろうとするとひよいと避けられる。

「何を言ってるんだいハチマン君。もしかして僕のあーんは嫌かい？」

「ぐっ…」

「この神ずるいものすごくずるい。」

「それじゃあ、あーん」

「…」

俺は無言で差し出されたクレープを食べるとヘステイアは満足そうな顔を浮かべ微笑む。

「ほら、ベル君もあーん」

「…あ、あーん」

さつきまで狼狽えていたベルだったが俺がするのを見て大人しく受ける。それをみてヘステイアは更に表情を崩す。

「よし、二人共、次だ。今度はじゃが丸君を食べようぜ」

「まだ行くのかよ…」

「当たり前さ。三人で羽目を外す機会なんて中々ないじゃないか！」

再び俺たちの手を引き寄せる。

(たまにはこんなのもいいな)

俺達は望んで上機嫌なヘスティアに振り回され続けた。

「始まった…」

会場の盛況っぷりにエイナはぼつりとつぶやいた。闘技場の外に待機していた彼女は、内部からびりびりと伝わってくる音と振動を感じながら後ろの建物へ視線を向ける。

「ここにもいない…」

「やっぱりもう闘技場に入ってるんじゃないか？」

「もう始まつてるみたいだしね…」

(ん?)

エイナの視界に見知った人物が入り込む。ベルとハチマンだ。エイナは背後の職員に軽く一瞥した後、自分の担当冒険者である少年たちのもとへと駆け寄った。

「ベル君、ハチマン君」

「あれ、エイナさん？」

「…どもつす」

「だれだいベル君、このハーフエルフ君は？」

「わたくし、ベル・クラネル氏とハチマン・ヒキガヤ氏の迷宮探索アドバイザーを務めさせてもらっているギルド事務部所属、エイナ・チュールです。初めまして、神へステイア」

「ああ、そういうことか。いつもベル君達が世話になつてるね」

エイナが恐縮ですと頭を下げると、頃合いを見てベルが質問する。

「あのエイナさん、こう…お金に困つてそうなヒューマンの女の子、見ませんでしたか？」

「うーん、ちよつとわからないなあ」

あげられた変な具体例にエイナさんが苦笑いを浮かべる。

「あほそれでわかるわけないだろ…」

若干あきれながら突つ込みを入れ、エイナさんに事情を説明する。

「なるほど…それならこの中にいる可能性は低いと思うよ。ここに入るなら多少の入場料がいるから」

「それなら『豊饒の女主人』に帰ったかもな…」

「そうだね…でも行き違いにならないようにもうちよつとあたりを回ってみよう」

「そうだな…それじゃあエイナさんありがとうごさいました」

「どういたしまして。もし見かけたらここで待つるように呼び止めておくから、見つからなかったらまたおいで」

「はい」

そういうと三人はその場から離れる。そしてエイナも同僚のもとへと帰る。

「つたく、何やってんだ、あいつら」

「愚痴は後でいい、早く人を回すぞ」

「…?」

職員たちのざわめき先ほどまではなかった空気にエイナは訝しげな顔をする。

「すいません、何かあったんですか?」

「ああ、西ゲートに待機している職員が、何人かぶつ倒れたらしい」

「えっ…」

「あーいやつ、意識はあるんだ。ただそいつら、腰を抜かしたみたいにあたり込んでるらしくて…まあ、昨日酒でも飲んで羽目を外しすぎたんだろう。使い物にならないみたいだから、こつちから代わりを出す」

エイナはその話を聞いて、妙な胸騒ぎに襲われた。嫌な緊張感が背筋を這いあがってくる。

(私が神経質になりすぎてる…だけ?)

光源が心もとない暗く湿ったとある一室。一人の女神と二匹のモンスターが向かい合っていた。

(…ああ、駄目ね。しばらくはあの子の成長を見守るつもりだったのに…)

女神の目にはある少年たちが『飛躍』していることを知っていた。

(…ちよつかいを出したくなっちゃった)

『フツ、フツ…!?!』

激しい息遣いが響く中、慈しむようにシルバーバックとオークの頬を撫でると少し近寄り

「小さな私を追いかけてそれとあなたは黒髪で腐り目の子を襲って?」

そう呟くと二つの咆哮が轟いた。

「——?」

「…どうしたんだい?」

前触れもなく足を止めた俺達にヘスティアは不思議そうに振りかえる。俺達はそんなヘスティアへの返答を忘れて、周りを見渡した。

(何かが、聞こえた)

祭りの雰囲気には似合わない鋭い声が。

「…悲鳴(か)?」

その眩きが俺達からこぼれた瞬間、大音声が響き渡る。

「モ、モンスターだああああああああああつ!」

「!?!」

その声に反応し振り返ると二つの巨大な何かが視界に移る。

(シルバーバックにオーク…!?)

共に10階層以降に出てくるモンスター。頭のため込んだ知識を引つ張りながら二匹のモンスターを見る。するとそいつらは理性のかけらもない瞳をぎよろりと俺たちの方へと向けた。

(俺達を見てるっ…?)

その視線が交錯した直後。

『ギア……!』

シルバーバックとオークが動く。膝を浅く折り曲げ、俺たちの方に一步近寄り一挙に飛び掛かってくる。

「つつ!?」

固まっていた俺とベルはヘスティアを抱え横つ飛びし敵の体当たりを回避する。二転三転と回って俺達はがぼつと顔を上げ地面に片膝を立てる。ヘスティアは背中に隠し体勢を立て直す。

『『ウウツ……!』』

突撃を交わされたシルバーバックとオークは、俺達の方へと向き直る。

「ベル!ヘスティアを連れて逃げろ!!」

「で、でも」

「この騒ぎだ直ぐに応援も来る。だから大丈夫だほら行った行った」

「……めん」

「その前にハチマン君これを!」

ヘスティアはつつみに入っているものを俺に投げ俺はそれを受け取る。

(これは……?)

俺は受け取ったものを見るとすぐに何か理解しモンスターの方へと向き直る。しか

しその瞬間俺の真横をシルバーバックが横切る。

「なっ!?!」

迷いなく俺を無視し横を通り過ぎたシルバーバックに目を剥く。

(なんで俺を無視して…!?!しかもそっちはベル達の方…!?!)

シルバーバックの奇行に目を向いていると背中に寒気が走る。

(ま…ず…っ…!?!)

『ブゴオオオオオオオオオオオッ!!』

シルバーバックに気を取られている隙に距離を詰めてきていたオークがその太い腕を俺に向けて薙ぐ。それにギリギリ反応した俺は腕を前でクロスし防御態勢を取りながら後ろに飛ぶ。

「がっ…!?!」

しかし自分より格上の化け物の力を正面から喰らい威力を殺しきれずに吹き飛ばされ壁に激突する。

(くそっ…一瞬でもよそ見しちまった…それにベル達は…いやあいつを信じよう)

手を握ったり開いたりを繰り返した体の調子を確認しながら自らに悪態をつく。

(頭から血が流れてるけどそこまで深くない…手も痛みがあるけど大丈夫そうだ…これのおかげだろうけど…)

俺は手元にあるロングナイフに目を落とす。どこまでも透き通るような白い刀身に柄。刀身には複雑な刻印が施され光沢を放っている。武器に疎い俺でも一発で業物と分かるほどの存在感。俺はオークの攻撃を受ける際にこのロングナイフでもガードしていた。

(さてと…)

自分の体の調子を確認した俺はオークを視界に納める。

(時間を稼げばこの騒ぎだ誰か駆けつけて——)

『本当に?』

(——)

何かの音が俺の頭に響く。主語も何もない単純な一言。しかし言わんとしていることを理解する。

(まあ…いいわけねえよな)

『ならどうするの?』

(強くなるためにオラリオじに来たんだ。ならやることは決まってる。あいつは俺が倒す)

『そっか、じゃあ行ってらっしゃい』

(おう)

俺は突然聞こえてきたその声を怪しむことなく返事をする。オークのいる方へと駆け出した。

#6 疑問

「??」

「行つてらっしゃい」

『おう』

少年の声と決意を感じながら何かは微笑む。

「そろそろかな…」

少年との出会いを思い出しながら誰に言うでもなくそつと呟いた。

正体のわからない何かとの対話(?)を終えた俺は決意しオークへと駆け出した。

(俺より格上の敵を打ち破るには…弱点を突けばいい)

この世界での常識どんなモンスターでもそこをつかれればたった一撃で倒せてしまう絶対的な弱点。狙うはその一点のみ。

(攻撃は避けられないほどの速さじゃない…だから…)

ハチマンはそのまま足に力を籠め真正面からオークにつっこむ。突っ込んでくるハ

チマンに気付いたオークは腕を再度横に薙ぐ。ぐんぐんと迫るその腕をハチマンは姿勢を低くし避けハチマンの頭上を腕が通り過ぎる。

『ッ!?!』

太い腕に隠れ視界からハチマンが消えたことに驚き硬直するオーク。ハチマンは其の隙を見逃さず素早く背後に回り込みその背の中心——魔石がある場所へと突貫する。

「あああああああああああああつっ!!」

『ブゴオツツ!!』

白銀の刃が背の中心に刺さる。分厚い肉を裂く感触と共に何かを砕く感触が伝わる。その感触を確認するとともにハチマンは《ヘステイア・ソード》を手にオークの背を蹴りその場から飛びのき着地するとオークの方を確認する。目を見開き正面から倒れこむオーク。微動だにしないオークを警戒しながら眺めていると体の一部が崩れだし、灰に代わり風にさらわれその巨体は跡形もなく消え失せる。

『オオオオオオオオオオオオオツツ!!!!』

歓喜の声がハチマンを包み込む。

『!?!』

ハチマンとオークの戦いを見守っていた怪物祭に来ていた人達が興奮を爆発させる。自身を称えるその喝采にハチマンはと言うと

(……帰りたいたい)

少しげんなりしていた。そんなことを考えながら周囲を見渡していると——瞼を閉じたヘステイアを抱え顔面蒼白になりながら走っているベルが目に入る。

(まさか……!?)

それに気づいた俺は歓声を背にベルを追いかけた。

「ヘステイアには悪いことをしたけれど……もう、妬けちやうわね」

とある人家の屋上でフレイヤは呟いた。銀瞳の視線の先には、ヘステイアを大事に抱えているベルとその後ろを走るハチマンの姿があった。青空に囲まれながらどこかすねたように言葉を落とすがすぐに笑みを浮かべる。

「おめでとう。まだ少し情けなかったけれど……ふふっ、かつこよかったわ」

脇目も振らずに走り抜けていく二人を熱く見ながら、フレイヤは目を細める。日の光を反射する銀の髪を翻し、彼女はその後を後にした。

「また遊びましょう——ベル、ハチマン」

パタン、と扉を閉める音が鳴る。部屋から出てきたシルに、ベルとハチマンは慌てて走り寄った。

「シ、シルさん、神様は…!?!」

「大丈夫です。ただの過労みたいですから」

「か、過労ですか…えつと、それじゃあ?」

「はい、命に別状はありません」

シルさんの言葉を聞き俺はほつと胸をなでおろす。現在ハスティアを部屋に寝かせ、ハチマン達は西日に照らされる木張りの廊下でシルと向き合っていた。

「良かった…急に倒れちゃったから、心配で心配で」

「ふふ、お疲れ様です、ベルさんハチマンさん」

脱力する俺達に微笑んだシルさんは、やがておぼろげと声をかける。

「今日はすいませんでした。私がお財布を忘れたせいで、災難に巻き込まれてしまつて…」

「い、いえつ、そんなつ。シルさんのせいじゃないですよ!」

「そうですよ。悪いのはモンスターを逃がした【ガネーシャ・ファミリア】が悪い。つまりシルさんは悪くない」

俺がそう言うのとシルさんは少し驚いた顔を浮かべすぐに微笑む。

「ふふつ、そんなことを言つてはダメですよ? なんでも警備をしていた人は魔女にあつたんだとか…」

「そうなんですか？なら魔女が悪いですね」

「あはは…」

シルさんは暫く申し訳なさそうにしていたが、俺の言葉を聞き口元を緩ませる。ベルやハチマンもそんな彼女の顔を見て安堵する。やっぱりかわいいんだよなこの人…。

「でも、今回の騒ぎで街の皆さんは口々に言われていました。あの冒険者は、ベルさんとハチマンさんは勇敢だったって」

「え…」

「うえ…」

「私もそう思います。実は私、御二方の戦うところを一度だけ目にしたんですけど…」

「そ、そんな勇敢だなんてっ。僕、逃げ回ってただけですしっ、それにモンスターにも全然歯が立たなくて……」

狼狽しながら言葉を連ねたかと思えば、ベルは恐縮そうに肩を縮めだす。ベルはこう言ってるがどうやらシルバーバックを単体で倒したらしい。

「それでもかっこよかったですよ？」

「えっ？」

「…不謹慎ですけど、あの時モンスターに立ち向かっていたベルさんとハチマンさんに…私、見惚れちゃってました」

そつと近付き、手で壁を作りながら、そつと耳元で呟かれる言葉。ベルは目を見張る。そして俺はすつと避ける。

「何で避けるんですか？」

なんだか目が怖い気がするのはいのせいだろうか。

「い、いえ何となくでしゅ」

囁んだ。

「そうですか。それではお店の方を手伝えと言われてしまったんで、失礼させてもらいますね」

「え、あ、はい…」

「ベッドは使っていて大丈夫ですから。それじゃあベルさんハチマンさん、また今度。今度は避けないでくださいよ？」

ぱたぱたと廊下から姿を消すシルを見送った後、ベルは何とも言えない顔で頭をかいた。

「からかわれたのかな…」

どこか悪戯っぽい表情と、そして夕日のせいかやけに熱っぽかった顔。完全に翻弄されて顔が真っ赤になっているベルはヘステイアの部屋の前に移動する。すると部屋の中でドゴンツ、と何かが倒れる鈍い音が鳴り響く。

「!?」

その音に驚き部屋に突入すると、視界に入ってきたのは、ベッドから転がり落ちたと
思われるヘステイアの姿だった。

「か、神様っ、神様!?! どうしたんですか、一体何があったんですか!?!」

「ああ、ベル君、ハチマン君…いや、起き上がろうとしたら、力が入らなくてね…」

「一体いない間に何してたんだよ…」

ふっ、と小さな女神は遠い眼をする。

「土下座だよ」

「ど、どげざっ?」

「首を縦に振ろうとしない頑固女神の前で、土下座を三十時間続けるという耐久レース
を…」

「さっ、三十時間…!?!ご、拷問なんですか、どげざって!?!」

「いや、奥義さ。土下座は最終奥義なんだよ…」

「三十時間も続く奥義があつてたまるか…」

うわごとのように最終奥義と呟くヘステイアにべるはなんのこっちやと汗を流し俺
は突っ込みを入れる。

「でもなんでそんなことをしたんだ? 確かパーティーに行ったはずじゃ…」

「…いれ」

「えっ?」

ただたどしい動きでヘステイアの手が俺とベルの腰に回され、そこに差さっていた漆黒のナイフと白銀のソードを取り出す。その行動にベルはあつ、と声を上げ俺はげつ、と声を出す。それはあることに気付いたからだ。そこには武器に疎い俺でもわかる神聖文字に酷似した刻印——オラリオ最大の武器ファミリア「ヘファイストス・ファミリア」のロゴがほつてあつた。

「へ、ヘステイア…これって…」

前に少し見たとき値段がとてつもなく高かつたことは覚えていた。そして使つて分かる通りかなりの業物だ。つまり貧乏ファミリアの俺達には買えるはずのないもの…それが今俺たちの手元にしかも二振りあることに震えながらヘステイアに尋ねる。

「ごめんね、心配かけて。…でも、ボク、見ているだけは嫌だつたんだ。君たちの力になりたかつたんだ…」

俺たちの手を取りヘステイアはゆっくりと鞘を抜き取つた。初めて見る漆黒の刀身と白銀の刀身。

「そんな、でも、だつて…ヘファイストスの武器はすごく高価で…お、お金は…!?!」
「大丈夫、ちゃんと話をつけてきたから」

ベルの声も瞳も震えだす。そんなベルにヘスティアは疲労の濃い顔で、けれど穏やかな笑みを向けた。

「強くなりたいんだろ？」

「！」

「言つたじゃないか、手を貸すつて。これくらいのお節介はさせてくれよ」

「ひっ…ひぐうっ…」

「誰よりも何よりも、ボクは君たちの力になりたいんだよ。…だってボクは、君たちの主神なんだから」

「…」

ぼろろつ、とベルの瞳からとうとう涙滴が溢れ出す。ヘスティアは頬を桜色に染め、満面の笑みを湛える。

「いつだって頼つてくれよ。大丈夫、なんていつたつて、ボクはこう見えても神様なんだぜ？」

ベルは限界を迎え、流れ出る涙そのままに、くしゃあつと顔をゆがめてヘスティアを抱きしめる。

「神様あーっ!!」

ベルは子供ののように、その小さな体に縋りついた。俺はそんな二人を見つめヘスティ

アに感謝を伝え部屋を後にする。

(ヘスティアには感謝してもしきれないな…)

腰にある『ヘスティア・ソード』に手を当てながら心の中で呟く。

(しかし…あの声は一体…?)

あの声とはオークに吹き飛ばされたときに聞こえてきた声のことだ。その声が聞こえてきたときは不思議と受け入れていたが今になって考えてみればおかしいことだ。

(でもなんだか懐かしかった…?)

いくら考えても答えは出ず疑惑が深まるばかりだった。

#7 鍛冶師

どうも149です。今回は少し聞きたいんですけど毎度の如くヒロインが決まっています。そこで聞きたいことが二つあるんですがヒロインは誰がいいと思いますか？それとハーレムがいいと思いますか？このことをぜひコメント欄に書いていただけるとありがたいです。また些細な事でもコメントしてくださいと嬉しいです。どうぞ。

じり、じり、と土の音が鳴り響く。天井からの光が四方八方薄緑色の壁に囲まれた一帯を照らし出す。『ルーム』と呼ばれるダンジョン内で正方向に開けた空間。そこで俺とベルは武器をそいつに向ける。

四本の足に二本の細い腕、大きな双眸。その見た目は蟻を彷彿とさせる。しかしその体は俺達と大差ないほどに大きい。

『キラアアント』

七階層になって初めて現れるモンスター。そいつは別名『新米殺し』とも呼ばれている。その所以は身に纏った頑丈な硬殻、低級のモンスターとは比べ物にならないほどの

攻撃力。体の表面は鎧のように硬く、半端な攻撃は弾かれるため五階層の敵に慣れた冒険者たちは大抵こいつの餌食となる。

『ギギッ』

キチキチキチッ、とキラアアントが口をもごもごと動かし歯を鳴らしている。実はこいつらが『新米殺し』と呼ばれているもう一つ理由があり、こいつらはピンチになると特有のフェロモンを出し仲間を呼ぶのだ。倒すなら速攻で。これが常識なのだが硬殻が邪魔し直ぐに倒せないのである。ほんとに厄介極まりない。蓄えた知識を引つ張り出しながらキラアアントと睨みあう。

「—ふっ—」

先手必勝。俺と同じく睨みあっていたベルが先に仕掛ける。俺と睨みあっていたキラアアントは少しベルの方に視線を向ける。俺はその隙を逃さずにベルとは反対方向から詰め寄る。隙をついた俺は一撃必殺を狙い首を一閃する。本来キラアアントの首はそう簡単に斬ることはできないのだが大した抵抗もなく刃が滑り込み、キラアアントの首が宙を舞う。

「…うん、いいー!」

同じく腕と首を飛ばしキラアアントを倒したベルがそのてにもつナイフを見ながら呟く。

「ああ、硬いと言われるキラアアントの殻をこうもあつさり…」

実際に戦ったことはないが、こうもあつさり斬れるものではないことは分かる。それもこれもこの《神様のソード》のおかげだ。ヘスティアが俺達のために贈ってくれたもの。

「♪」

ベルは新しい玩具を買ってもらった子供のように浮かれ上機嫌になっている。かくいう俺もテンションが上がっているのを自覚している。俺は腰に差した鞘に武器をしまい、七階層の探索を続けた。

「ななあかあいそお〜？」

「は、はひっ!？」

「…」

ベルは悲鳴を上げ、俺は悲鳴は上げなかったが少しビビっていた。胡散気な声とは裏腹に、眉毛はびくびくと動きエイナさんが怒っていることが伝わるからだ。本日七階層の探索を終えた俺達は、ギルド本部へと凱旋した。戦利品の換金後にエイナさんにつきまわり、最近の調子を聞かれ七階層まで行ったことを話すと個室につれてかれたのだ。

「キイミイタアチイはっ！私の言ったこと全然わかってないじゃない!!初日に五階層ま

で下りた上にもう七階層!? 迂闊にもほどがあるよ!」

「ご、ごめんなさい…!」

ダンっ!とエイナは机に両手をたたきつける。正直その迫力はモンスターより怖い。口に出したら火に油だから絶対に言わないけど。

「一週間とちよつと前に、ミノタウロスに殺されかけたのは一体誰だったかな!」

「ぼ、僕達ですつ!」

「じゃあ何で君達は下層に降りる真似してるの! 痛い目にあつてもわからないのかな、君達は!」

「す、すいませえん…!」

とベルは涙目になる。俺はと言うと完璧に気配を消していた。べつにエイナさんにビビってるとかじゃなくて非は俺達にあるのだから静かに聞いておくことが大事だからな。別にビビってるとかじゃないけどね。

まあすまんベル、俺はこのまま気配を消して「聞ってるのハチマン君っ!」あれ。

「き、きいてますよ」

「ともかくキミたちには危機感が足りない! 絶対に足りない! 今日はその心構えの矯正に加えて、徹底的にダンジョンの恐ろしさを叩き込んであげる!!」

ひいつ、とベルは情けない声を出す。

「ま、待つてくださいっ!? そのつ、僕っ、あれから結構成長したんですよエイナさあん!」
「アビリテイ評価Hがやつとのくせに、成長だなんて言うのはどこの口かな…!」

「ほ、本当です! 僕もハチマンも、アビリテイがいくつかEまで上がったんです!」

「…E?」

ぴたりとエイナは動きを止め、きよとんと眼を丸くさせる。ベルの発言をすぐには理解できず、理解したところで訝しげな表情を浮かべる。

「そ、そんな出まかせ言ったって、騙されるわけ…」

「ほんとですほんとなんです!」

「……ほんとに?」

エイナさんは視線を俺に向け聞いてくる。

「まあほんとですな」

俺がそう答えるとエイナさんは戸惑った顔をした。本来冒険者登録して一週間で七階層到達と言う事自体異常なのだ。それなのにアビリテイ評価もEになっているというのには信じろという方が無理な話なのである。

「…本当に、E?」

「は、はい」

エイナは何回もベルとハチマンのかおをみるが到底うそをついているとは思えない。

しかしどう考えてもあり得ない。元来冒険者が半月で到達できるのは良くてG普通でもH程度なのだ。一週間と言うならHに行くかすら怪しいのに目の前の二人は何とEに達していると言っている。

「むむむっ」

と難しい顔を継続するエイナは人差し指をその細い顎に当て考え込む。

「…ねえ、二人共」

「君の背中に刻まれている『ステイタス』、私にも見せてくれないかな？」

「えっ…!？」

「!？」

至つて真面目に問いかけるエイナさんに驚く俺達。

「あつ、君たちの言っていることを信じてないわけじゃないんだよ？ただ…」

エイナさんは慌てながら両手を振って誤解を解く。

ただヘステイアが偽の情報を与えているのではないかとエイナは考えていた。

「でも確かそれってタブーなんじゃ…」

「今から見る物を私は誰にも話さない」と約束する。もしベル君たちの「ステイタス」が明るみになることがあれば、私は相応の責任を負うから。キミたちに絶対服従を誓うよ」

「別にそこまでしなくても」

確かに「ステイタス」がバレれば能力が筒抜けになり弱点がバレたり対策を立てられたりするだろう。戦いにおいてそれは圧倒的不利を意味する。でも俺は知っている。この世界は不平等で理不尽なのだ。今更そんな理不尽どうでもいい。理不尽に抗うためそんな理不尽から誰かを守るために強くなると決めたのだ。だから対して気にしない。それにこの人はそんなことはしない人だと普段の態度からわかる。

俺はベルと顔を見合わせると頷き、服に手をかける。

「えっと、じゃあ…脱ぎますよ？」

「顔を赤くするくらいなら一々確認しないっ！私の方も恥ずかしくなっちゃうよ！」

やめろよ二人して顔を赤くしないでくれよ…俺まで恥ずかしくなってくるだろ…。そんな悪態をつきながら上に来ている服を脱ぐ。エイナは意外に鍛えられている上半身に少しの間見とれてしまったが、直ぐにはツとして顔を左右に振る。ほっそりと尖った耳を赤くしながら、じつと【神聖文字】の解説に入った。

ベル・クラネル

L v. 1

力 : E 406

耐久 : G 201

器用 : E 416

敏捷 : D 5 2 6
 魔力 : I 0

ハチマン・ヒキガヤ

L v. 1

力 : D 5 2 5

耐久 : G 2 6 7

器用 : D 5 0 2

敏捷 : E 4 5 7

魔力 : I 0

(うっそ…)

半ばその可能性を受け入れてはいたが、いざこうして突きつけられると茫然としてしまう。『魔力』を除いたとしても七階層のモンスターにひけをとらない能力内容。防御を重視するエイナからすると二人の『耐久』の低さには小言をはさみたくなくなるが、それでもベルの戦闘スタイルは攪乱回避の一撃離脱、ハチマンはバランスがよく一撃必殺型、許容範囲だろう。またどちらもDへと突入している能力があるのを見て思わず吹き

出しそうになる。

(信じられない…)

エイナは静かにのどを鳴らした。自らの、いやオラリオでの常識が二人によつて壊されていくような音が耳の奥で響く。二人の成長は、あまりにも度を越えている。

——スキル？

一瞬脳裏をよぎったその可能性。

(ちよつとだけなら)

背中の中頃から続いている【神聖文字】に目が奪われる。その先にあるのは、『魔法』と『スキル』の欄だ。ここまで来てしまうとこの衝動に抗うのは不可能に近かった。好奇心が疼き、エイナはちらりとその下の欄を確認する。

(…あ、駄目だ)

高度な【神聖文字】の羅列によりエイナには読むことができなかつた。

「あのー、エイナさん…まだですか？」

「そろそろ寒いんですけど…」

「あ…もういいよー」

ベルの恥ずかしそうな声とハチマンの嫌そうな声に、エイナは耳をビクツと揺らして我に返る。少し顔を赤くしている二人に心の中でごめんねと呟く。しかし本当だった

のかと唸る。この能力値なら、七階層進出を許可しないわけにはいかない。絶対とはいかなくてもソロでも通用するレベルだ。——だがそうなると別の懸念が巻き起こる。

「…」

「ど、どうしました?」

着替えを終えたベル達を全身くまなく観察するエイナに声を上擦らせながら問うがその返答はない。別に彼女は舐めるように見ていたわけではない。エイナが見ていたのは身に着けている装備…貧相な、防具だ。

「君達」

「は、はい?」

「明日予定あいてるかな?」

「…へっ?」

「…えっ?」

あれから一日たった。俺とベルはオラリオの北部で大通りと面するよう設けられた半円形の広場に二人で立っていた。エイナさんと待ち合わせをしているからだ。さつきから緊張しているのかベルの様子がおかしい。ずっと同じもじもじしている。

「おーい、ベルくん、ハチマンくん!」

とそんなベルを見ているとエイナさんが小走りで駆け寄ってくる。

「おはよう、来るの早いね。なあに、そんなに新しい防具を買うのが楽しみだったの？」
「あつ、いや、僕は……！」

ベルは普段と違うエイナさんを意識しているのか落ち着きのない表情で視線を左右に揺らしている。

「まあ、実は私も楽しみにしてたんだよね。ベル君たちの買い物なだけどき、ちよつとワクワクしちゃってっ」

実際エイナさんの服装はおしゃれでいつもつけている眼鏡も外している。いつものギルドの制服姿の大人びた雰囲気とはガラツと変わってまぶしく見える。これがジジイの言ったギャップ萌えか……。

「装備品なんて物騒なものを買いに行くのにワクワクするなんて、私おかしかな。

「そ、そんなことないですっ！」

ギルド職員の中で人気が一、二を争うのもうなずけてしまう。まあこの人顔いいうえに性格もいいとききた。村にいたときの俺なら勘違いしてコックつて振られちゃうな。振られちゃうのかよ。

「……ほん。それで、二人とも？」

「……？」

「私の私服姿を見て、何か言うことはないのかな？」

俺はそのDEAD or DEADのような質問に思わず絶句してしまう。変なことを言ってもきもがられるし素直に言えば俺の心が死ぬ。どうすれ（そんなもの褒めに褒めまくっていい雰囲気にしてお持ち帰り）黙れくそジジイ！

頭の中で変なじじいが出しゃばってきたがどうするか真剣に考える。取り敢えず無難なセリフを言うことにした。

「…そ、その、すつごく…いつもより、若々しく見えます」

「そうですね。とても似合ってますよ？」

「こちら！私はまだ十九だぞおー！」

「あいたたたたたたたたたたつ!？」

「い、いたい、痛いですよエイナさん!？」

エイナさんが細い腕を首の付け根あたりに巻き付けヘッドロックを決める。そして俺の頬に男の希望が…ありがとうございませす！

「誰かとこんな風に買い物行くなんて、久しぶりだなあ」

「そう、なんですか？エイナさんならだれも放っておかないと思うんですけど。…その、男の人だったら、特に」

「ふふ、上手だね、ベル君。でも本当だよ。ギルドに入ってからはずっと仕事一筋だったから」

空は快晴だった。時間帯もあって大通りは賑やかで人通りが激しかった。そんな人どおりにげんなりしながらエイナさんに気になっていたことを聞いた。

「あの、エイナさんこれどこに向かっているんですか？」

「ん、着いてからのお楽しみ、だと流石に意地悪かな？うん、じゃあ、教えてあげる。今日行くところは…ダンジョンだよ」

「ええっ!？」

「正確にはダンジョンの上にある、あの摩天楼だね」

『バベル』はダンジョンの蓋の役割を果たす超高層の塔、つまり摩天楼施設だ。蓋と表現したのは、バベルはダンジョンの監視と管理という役割がある。

「バベルって…冒険者用のシャワールームとか、公共施設があるだけじゃないんですか？」

「お前…来る前に一緒に調べてただろ…」

「あははっ…」

若干あきれながらベルにバベルのことについていろいろと説明をする。ベルは説明を聞きながら納得したような顔をするが君一緒に俺と勉強してたよね？そんなことを

ような大金もつてないですよ!?!ハチマンも知ってるよね!?!」

「まあまあ、それは着いてからのお楽しみってことで」

「僕はずっとはらはらしっぱなしですよお!?!」

「安心しろベル腹をくくればいいだけだ」

「それ全く安心できないよ!?!」

泣き叫ぶベルを見たエイナさんはベルの手を握り引つ張っていく。そしてなぜか俺の手も握られる。行き成り女性に手を握られた俺はきよどりそうになるが周りの冒険者たちの殺気むんむんの視線で冷静になる。

「あ、あのエイナさん手を放していただけるとありがたいんですけど…」

「オラリオでも一流の鍛冶の【ファミリア】にいくんだから、鍛冶師についてもちよつと知っておこうか。二人とも『発展アビリティ』って知ってる?」

どうやら俺の話は聞きとつてもらえなかったらしい。見るとベルも顔を真っ赤にしながら青ざめたような表情と言う器用な顔をしていた。てか割と死活問題なんですけどエイナさん…。

俺はあきらめて、質問に答えることにした。

「確かLvが上がると任意で発現することができるとアビリティのことですよね」

「正解それでその人の【経験値】の傾向で発現できるアビリティの選択肢は決まってくる

「ただ、その中に『鍛冶』って言う発展アビリティがあるんだ」

そこからエイナさんによる『鍛冶』アビリティ講座が開始された。ベルは真面目に聞いて驚いたりして居るが俺は大体知っていたので半分くらい聞き流していた。そんな話をして居るうちにバベルの門までやってくる。

「ここからは…」

「上だね。バベルが場所を提供しているのは四階からだから」

そういつていくつも存在してる円形の台座の一つに乗り、備え付けの装置みたいなのを操作すると台座は地面から離れて浮遊しそのまま昇り始めた。

「!?」

「あはは、私も最初そんな感じだったよ」

ほどなくしてバベルの四回に到着する。

「お目当ての店はまだ上の階なんだけど、せつかくだから寄つていこうか? ベル君達もちよつと見たいでしょ?」

ざつと見ただけでも武器防具で視界が埋められている。この《ヘステイア・ソード》を使つてから武器に興味が出ていた俺は領き、ベルも少し興奮しながら領いた。

(うえ…三千万ヴァリス…)

一番近くにあった紅の件の値段を確認するとその高さには思わず顔を歪めてしまう。

横のベルも値段を見たのか渋い顔になっている。そんな俺達にエイナさんが苦笑しているのがわかる。

「いらっしやいませー！今日は何の御用でしょ…う…か…」

陳列窓の商品を凝視していると、店員さんの明るく声を掛けられた。その女の子は身長は低いけど、容姿は整っており、身長には似合わない大きな胸が盛り上がっており、とてもいい営業スマイルを浮かべていたが

俺たちの姿を見て絶句していた。

「…」

「…何をやってるんですか、神様」

「…」

そして俺は絶句し、ベルは困惑しながら問いかけた。ひくつ、とヘスティアの営業スマイルが引き曇る。暫く見つめあうと俺はその主神に似ている店員さんに近寄り店のドアより奥へと押し

「間違いました」

「何がっ!？」

そう言いドアを閉めた。なんかヘスティア（幻覚）が言っていた気がするがガン無視した。確かヘスティアはオラリオ名物『じゃが丸くん』の販売バイトをしていたはず、だ

からこんなところにいるはずがない。しかもあんなミニスカートに胸が強調されるような服装で。

「ハ、ハチマン？あれって神様なんじゃ…」

「いいかベル俺達は疲れてるんだ。あれは幻影だ気にするな」

「あのハチマン君あの人ってこの前お会いした…」

「すいません今鼓膜が破れたんで何も聞こえません。多分ここから離れば治るのでさあ早く行きましょう」

「さつきまで普通に話してたよねっ!？」

ベルが突っ込んでる気がするが俺は鼓膜が破れてるから聞こえない。そして足早に去ろうとすると

「誰が幻影だっ!？」

恐らくフリーズしてたであろうヘスティアが正気に戻ったのかドアを勢いよく開けて叫ぶ。

「ハチマン君っ、酷いじゃないか！何だ間違いでしたって!!」

「そっだぞベル何でそんなこと言ったんだ」

「いったのハチマンだよね!?!何で僕のせいになされてるの!?!それと神様何でこんな処にいるんですか!」

「うっ…いいかいベル君、ハチマン君今あったことは全部忘れて、目と耳を塞いで大人しく帰るんだ…！…ここは君が来るにはまだ早い！」

適当にベルに擦り付けてその場を脱却した俺とあーだこうだ言い合いを始めるベルとヘスティア。今の姿を見られたことが恥ずかしいのか俺達を帰らせようとしている。そしてしばらく言い合いをしていると店の方からヘスティアを呼ぶ怒号が聞こえ小さな背中が店の奥へと消えていく。

「かみさまあゝ…」

「……あ、相変わららず、変わった神だね？この親にしてこの子ありって言うか…」
情けない声を出すベルに、エイナさんは対応に困ったような笑みを浮かべる。

「お見苦しいところをみせてすいません…」

「大丈夫だよ。じゃあ、上に行こうか？」

頷く俺達とエイナさんは目的地、バベルの八階へと移動を始める。今度もあの装置に乗り上階へと昇った。

「はい、到着」

「しちゃいましたね…」

静止した昇降機のドアを開けると、四回と似たような光景が俺たちを迎えた。

「ヘファイストス・ファミリア」みたいな高級ブランド、自分には縁がないものだと思

ルくん思ってるでしょ？」

居心地悪そうにしてるベルにエイナさんは問いかけ、ベルは肯定する。エイナさんはそれを見て、ここぞとばかりに鼻高々に笑ってみせた。

「実はそうでもないんだなあ。まあ、百聞は一見にしかず！ちよつとついてきて」

エイナさんは俺たちを連れて最寄りの店に入って行く。店内へと進むと窓際に設置された槍棚の前で足を止める。ベルは恐る恐ると言う感じでゆっくり目を開けると

「あ、あれ…?」

「ふふ、驚いた？」

「は、はい。でも、どうして?」

呆気にとられたベルにエイナさんは上機嫌に答える。

「【ヘアアイストス・ファミア】がほかの鍛冶師の【ファミア】と違うところは、末端にあたる職人にもどんどん作品を作らせて、それをお店に並べちゃうところなの」

「えっ…いいんですか?だつてそれ、一流の人達と比べたら全然…」

そこからもエイナさんの説明が始まりそれを聞く。そして説明が終わり、二手に分かれた方がいいものが見つかるというエイナさんの言葉を受け、いったん彼女とは別れることにし俺とベルは一緒に店内を回ることになった。

店の中に入ると、鎧の森と言ってもいい程圧巻の一言だった。

(すっげえ…)

純白のトルソーが様々な鎧をまとった形でおかれている。他にも等身大の人形などもあり装備した自分の姿をイメージさせるものもあつた。

(こんだけあると迷うな…)

ベルと二人で歩みを進めていると防具の各パーツを山積みにしたボックスが目に入る。ベルも気になったのかそのボックスに近寄る。

「あ、やっぱり売り物だ…」

ボックスの下に値札がかかっており、見た限りどれも安価になっている。値段で言えばお手頃である。あまり防具などに執着がない俺はこの中で選ぼうと決め適当に漁る。

(ん…?)

色々と漁っているとある防具が目にとまる。それを手に取りよく見ると、それは黒のライトアーマーだった。膝あてや小柄のプレストプレート、ほかにも肘、小手、腰部など最低限の箇所のみ保護する仕組みだが、不思議とそれでもこの装備なら問題ないそんな気がした。そしてプレートの重さはほかに比べると少し重いが恐らく動きに支障は出ない程度の重さだ。さらにサイズもぴったり。

「…」

俺はこれにすることを決めベルの方を見ると似たような防具を手に取り目を輝かせ

ていた。見た目は俺のとほぼ一緒だが色が全く違う。あつちのは純白で何となく俺のよりも軽そうだ。俺は視線を手元に戻すとくるつと裏返すと

(あつた。製作者は…ヴェルフ・クロツゾか…)

「おい、ベル君！ハチマン君！私いいの見つけちゃったよ！プロテクターと革鎧！ちよつと高いけど、どっちか一つは買つといた方がつ…あれ、ベル君も何か見つけたの？」

戻ってきたエイナさんは俺たちの持つている防具を見るとムムツという顔をした。

「…それに決めちゃった？」

「はい。僕、これにします」

「俺もこれにします」

「はあ…君たち本当に軽装が好きなんだね。せつかく選りすぐってきたのになあ…」

「す、すいません」

「ご、ごめんなさい」

申し訳なくなつて肩を狭める俺たちにエイナさんは「いいよ気にしてない」と苦笑した。

「君たちが使うんだもんね。私としては身の守りのことも考えてほしいけど…君がこれ、つて決めたんなら、それでいいと思う」

「…ありがとうございます」

お礼を告げた俺たちは立ち上がりボックスを抱えカウンターへと向かい支払いを済ませる。

「あれ…?」

「どうしたベル?」

「いやエイナさんの姿が…」

そういわれあたりを見回すとニコニコしながら俺たちの後ろに立っていた。

「2人とも。はい、これ」

「…へっ?」

「…えっ?」

おもむろに渡されたのは、細長いプロテクターだった。付属の籠手に取り付ける形で手首から肘くらいまでの長さ。色はベルに向けられているのが緑玉色、俺に向けられているのが紅玉色。

「こ、これって…」

「私からのプレゼント。ちゃんとしてあげてね?」

「ええ!?!いい、いいですつ、いらないです!か、返しますつ!」

「なあに?女の人からのプレゼントはもらえないって言うの?ほらハチマン君も受け

取って」

「いやでも…」

「いいから受け取る！」

「素晴らしい強引に俺たちに渡す。」

「私はもらってほしいの。私のためじゃなくて、キミ自身のために」

「…」

「ほんとにさ、冒険者はいつ死んじゃうかわかんないんだ。どんなに強いと思っていた人も、神の気まぐれみたいになくなっちゃう。私は、戻ってこなかった冒険者をたくさん見てきた」

「…」

「…いなくならないでほしいんだ二人には。あはは、これじゃやっぱり私のためかな？」

笑っておどけて見せるエイナさんは、その間も僕のことをずっと見つめていた。

「だめ？」

「…そんなこと言われたら受け取らないわけにはいかないじゃないですか」

「ふふっ、ずるかったかな？」

「いえ、そんなことないですよ。まあいつかこの恩は返します」

「いいよ気にしなくてこれは私のわがままだから」

「ならこれも俺のわがままです」

そう言うとき、エイナさんは少し目を見開き、頬を染めながら微笑む。改めてこの人は本当に容姿が整っているのだと再確認させられる。そんな人に見られていることに気恥ずかしくなり、視線をそらす。すると顔を真っ赤にして俯いているベルの姿が目に入る。暫くするとがばつと顔を上げ

「ありがとうございます」

「どういたしまして」

手元にある紅玉色の防具が、なんとなく熱を持った気がした。

#8 サポーター

「遅くなったな…」

「そうだね…」

茜色になっていいる空を眺めながらそつと呟いた。俺の独り言にベルも同調する。買
い物を終えた俺達はエイナさんを家に送ってから帰路についていた。

（あの人ほんとずるいな…）

さっきのエイナさんの言っていた言葉を思い出す。表情と言葉と言いとでも勘
違いしそうになる。村にいたときやジジイの教えがなかったら恐らく勘違いしていた
だろう。

「…足音？」

立ち止まり路地裏の奥から、俺たち以外の足音が鳴り響く。リズム的に走って言うの
だろう。人数は一人…いや二人か。子供くらいのもものと大人のもの靴音の大小がはっ
きりしており察することができた。

「どっだ…？」

来た道を振り返ればまだ路地裏に入ったばかりで大通りの人の行き来がはつきり見

える。てことは足音は前方から聞こえるわけだが、分かれ道が多くどこからなっているのかわからない。そんなことを考えていると隣のベルが動き出す。不安そうな表情を浮かべながら俺たちがいつも通る道を覗き込もうとする。

「あうっ!」

「えっ?」

覗き込んだベルの前を小さな影が勢いよく転がる。どうやらベルの足に引つかかったらしい。声音的には女性。体格的には子供もしくは…。

「追いついたぞ、この糞。バルウムがっ!!」

その答え合わせにするように怒声をまき散らしながら一人のヒューマンが現れる。

「もう逃がさねえからな…ッ!」

息を切らす男は目をぎらつかせて悪鬼のごとき表情をしている。すると何を思ったのかベルがその男の前に立つ。

「…ああ?ガキ、邪魔だそこをどきやがれ」

男は少女の事しか目がなかつたのか今俺達に気付いたようだ。

「あ、あの…今からこの子に、何をするんですか…?」

「うるせえぞガキっ!!今すぐ消え失せねえと、後ろのそいつごとたたつきるぞ!」

その男の前に立つたくせにベルは涙目で震えている。お世辞にも助けに来た王子様

には見えなかった。

(はあ…しようがねえな…)

心の中でそんなことを呟くと俺もベルの隣に立つ。

「あんまり怒ってるとしわが増えるぞ?…ってベルが言ってたぞ」

「言つてないよっ!?!」

「がき…! マジで殺されてえのか…!?!」

「ほらベル怒っちゃってるじゃないか」

「ハチマンのせいだよね!?!」

「おい無視してんじやねえよ何なんだよテメエらは!?! そのチビの仲間なのかっ!」

「初対面ですネ」

「じゃあ何でそいつをかばってんだ!?!」

これに関してはベルが出たからとしか言いようがないが当の本人は…

「…お、女の子だからっ?」

「何言ってるんだよテメエっ…!」

本当に何を言ってるんだろうこいつ。

「いい、まずはてめえからぶっ殺す…!」

「がんばれベル」

「助けに来てくれたんじゃないのっ!？」

案外余裕だなこいつ。それでも緊張がとけたのかちやんと相手を見据えている。その証拠に男が手を後ろにやり剣を抜いても即座に反応し同じくナイフを抜いて構えている。はっ、つと息をのむ音。見ればパルウムの少女が目を向いてナイフを見ている。そして次の瞬間、男が一気に飛び掛かってくる。

「やめなさい」

芯のこもった鋭い声が、場に割って入る。その聞き覚えのある声の方向を向くとそこに立っていたのは、大きな袋を抱えたエルフの少女だった。

（確か『豊饒の女主人』にいた…）

（次から次へと…!?今度は何だあ!?!）

「貴方が危害を加えようとしているその人達は…彼らは、私のかけがえのない同僚の伴侶となる可能性のある人たちです。手を出すのは許しません」

この人何を言っているんだろう。

「どいつもこいつも、訳の分からねえことを…!ぶっ殺されてえのかあつ、ああ!?!」

「吠えるな」

大声を散らしていた男が言葉を飲み込んだ。これまで感じた事のないほどの威圧感。思わず俺も息をのむ。

「…っ、…!?!」

「手荒なことはしたくありません。わたしはいつもやりすぎてしまう」

恐らく、というか確実に本当の事なんだろう。そう思わせるだけのオーラが彼女から伝わってくる。

「く、くそがあ!?!」

男は顔色を青く染め退散していった。

「…」

「大丈夫でしたか?」

戦わずして冒険者を追っ払ってしまった目の前のエルフの少女にある興味を抱いてしまう。この人は確実に俺より格上で強者だ。なら今の俺が…どこまで通用するのか。そんな無謀にも近い疑問が胸の中で渦巻いた。

「あ、ありがとうございます、助かりました…」

「いえ、こちらこそ差し出がましい真似を。貴方達ならきつと何とかしてしまっただでしょう」

「いえ、そんなことはあ…」

そう謙遜しているが実際は俺やベル一人で何とか出来たと思う。ただベルは本心からそう言ってるのか頬をかいて視線を横にそらす。

「リュ、リュューさんはどうしてここに？」

「夜の営業に向けて買い出しをしました。昼間とは異なり冒険者が店に押し寄せますから、準備をしておかないと大変なことになるので。その途中であなた方を見かけてしまい、つい」

なるほど。確かに前行った時も繁盛していた記憶がある。てかこの人リュューさんって言うのか…覚えておこう。

「貴方はここで何を？」

「ん？そういうええば忘れてたな…あれどこ行った？」

「ほんとだ…あれ？」

周囲を見渡してみたがあのパルウムの少女は忽然と姿を消していた。

「誰かいたのですか？」

「まあ…いたんですけど…」

「そうですか…そろそろミア母さんに叱られてしまうのでこれで」

「はい、本当に、ありがとうございました」

やがてお互いにその場でお辞儀を交わしあい、その場で別れた。

「よし…」

新調した装備を身に着け自分の姿を鏡で確認する。

「それじゃあベルそろそろ行くか」

「うんそうだね。いこっか」

「じゃあへステイア行ってくる」

「神様行つてきますね！」

「うーん、いつてらっしやうい…」

疲労がたまつてるのかベッドに沈んでいる主神からの返事を確認し出入口へと向かい教会の隠し部屋を出発する。裏道を経由してメインストリート、そして中央広場。冒険者の波にもまれながらバベルまでやってくる。

「お兄さん、お兄さん。白髪とアホ毛のお兄さん」

明らかに俺とベルのことを呼ぶ声が聞こえる。

「えっ？」

ベルはその呼ぶ声に反応し、俺とベルは振り返る。

「お兄さん、下、下ですよ」

その少女の声に従い下を向くと、いた。身長はおよそ100c。その身長には似つか

ない一回りも二回りも大きなバックパックを持った少女がそこにはいた。きいたことのある声に昨日の路地裏での記憶が呼び覚まされる。

「き、君はっ…」

「初めまして、お兄さん。突然ですが、サポーターなんか探していたりしていませんか？」

ベルの声を遮って、少女はその小さな指で俺達のバックパックを向けた。ソロもしくは少数パーティーの冒険者がバックパックを装備している光景を見れば誰であつても心中を察するのは容易だ。しかしそれにしても…何個か違和感を覚えた俺は様子を見ることにした。

「え…ええっ!?!」

「混乱しているんですか?でも今の状況は簡単ですよ?冒険者さんのおこぼれにあずかりたい貧乏なサポーターが、自分を売り込みに来てるんです」

目を丸くするベルを横に、少女は満面の笑みを浮かべる。嘘は言っていないしかし恐らく本当の事も言っていない。その仮面にまみれた笑顔にさらに違和感を覚える。

「そ、そうじゃなくて…君、昨日の…?」

「…?お兄さん、リリとお会いしたことがありますか?リリは覚えていないのですが」
少女は首を可愛らしくかしげる。うまい。恐らく仮面にまみれた笑顔を見なければ

騙されていただろう。俺でそうなのだからベルは…。

「あれえ？」

見事に騙されていた。

「それでお兄さん方、どうですか、サポーターはいりませんか？」

「ええつと…で、できるなら、欲しいかな…？ハチマンは…？」

ベルは俺に問いかける。それに伴い少女の視線も俺に向けられる。正直断りたいが…目に見えないところで何かされるよりはましか…。結論を出した俺は返事を返す。

「ああ、俺も欲しいと思ってたしいぞ」

「本当ですかっ！なら、リリを連れて行ってくれませんか！」

少女は無邪気にはじやぎ、そしてフードと前髪の奥に隠れている瞳が露になる。その大きな目はベルの腰にささってるナイフに釘付けになっている。

「いや、それはいいんだけど、うーん…？」

「あつ、名前ですか？失敬、リリは自己紹介もしていませんでした」

少女は一步後ろに下がり、朗らかな表情を浮かべる。

「リリの名前はリリルカ・アーデです。お兄さん方の名前は何というんですか？」

俺達のことを見上げる少女の瞳に、怪しげな光が浮かんでいた。

「じゃあ、君は無所属のフリーターじゃなくて…」

「そうですよ、リリはちゃんと『ファミリア』に入っています」

バベル二階の簡易食堂。アーデが持ち掛けてきた話を吟味するためにここにやってきていた。

「ファミリア」名は？」

「ソーマ・ファミリア」ですよ。お兄さん。割と有名な派閥だとリリは思っています」

アーデの話を聞くと最近まで組んでいたパーティーに契約を解消されたらしい。それで困っている所で俺達を見つけ出したのだという。俺はこの時点でアーデの目的を見抜いていた。ベルも見抜くとまではいかなくとも違和感を持っていたのか疑っている。

「どうして違う『ファミリア』のボクに？別々の『ファミリア』の構成員がつながりを持つことはあまり良いことじゃないのに…君の『ファミリア』の仲間とはパーティーを組まないの？」

「えへへ、リリはこんなに小さいですし、腕つぶしもからつきしなので。何をやっても鈍臭いリリに、『ファミリア』の方々は愛想をつかして邪魔者扱いにしているんです。頼んでも仲間に入れてくれないですよ」

(っ…)

アーデのその言葉に昔を思い出す。ただ奪われるだけで弱く醜い自分を。だから俺は強くなろうと決めた。思わず拳に力が入る。

「…チマン！ハチマン！」

「ん…ど、どうしたんだ？」

考え込みすぎていたのかベルへの反応が遅れる。まずい全然話を聞いていなかった。

「ハチマン話聞いてた？」

「いやまあ、聞いてたぞ？一割くらいは」

「それ全然聞いてないじゃん…。えっとリリルカさんと一日だけダンジョンに行くことになったんだけど…」

「あー…わかった俺もそれで賛成だ」

「ほんとですか!?!それなら…」

そこから三人で色々と話し込んだ。

「ふっつ！」

『ギシヤアアツ!?!』

「ハチマンっ！」

「おう」

現在七階層。俺達は間断なく押し寄せてくるモンスターの群れと戦っていた。

『ジギギギギギギギギギギッ!』

「よっ、とー!」

「ふっ!」

『ビュギッ!』

『ギギッ!』

ベルは上空から降下してきた『パープル・モス』を往なし、羽を断つ。片翼を失った巨大蛾はバランスを失いそこにとどめを刺す。俺はキラーアント二匹に突っ込み、片方の胴体を串刺しにする。目の光が消えたのを確認し、もう一匹のキラーアントの対処をしようとするが——剣が抜けない。

「やっべ……」

割れた硬殻ががっちり剣の柄に引っかかっている。俺は動きを止めてしまった。その間に、同胞を殺されて

怒り狂うモンスターは大きく回り込み、その鋭い爪を俺目掛け振り下ろす。俺は咄嗟にプロテクターを付けた腕を掲げた。

『ギッ!』

「ハチマン!」

ガキンツッ!と鉤爪をはじき大きくのけぞったモンスターにベルがとどめを刺す。

「さんきゅ」

俺はベルに感謝の意を伝えると剣を回収し、直ぐに残存しているモンスターの群れへ休むことなく駆け出す。

「ベル様、ハチマン様お強い〜!」

俺達がモンスターを蹴散らす光景をわきに、リリは俺達が屠った死骸を一点にまとめていた。手慣れた動きだ。俺達の邪魔にならない範囲で動き尚且つ邪魔になりそうな死骸は回収する。

「シッ!」

『キュツ!?!』

「はあっ!」

『ギヤアッ!?!』

リリの働きにより足場が自由になった俺達は自由に駆け回り俺は厄介なキラアーントを最優先でつぶしベルは残りを狩りまわる。広いルーム内での戦闘は、完全に俺達の手綱を握っていた。

『ーグシュ…ッ!シヤアアア!!』

「わああっ!ま、また産まれましたあー!?!」

ダンジョンの壁面を破ってキラアアントが生まれる。

「ベルっ！」

「任せて！」

脚の速いベルにそいつを任せベルの敵を俺が引き受ける。

「せえー、のツツ!!」

『グヴ?!』

ベルの飛び蹴りが炸裂する。ズンツと鈍い音が響き渡り、モンスターの首が折れ曲がり絶命する。

「あくあ…どうするんですか、ベル様？このキラアアント、壁に埋まっちゃってますよ？」

「ど、どうしようかつ？」

「ベル様はお強いのに、どこか変わっています。あはははっ！」

「…笑わないでよお」

「まあ、ベルは変だからなしようがない」

「ハチマンにいわれたくないよっ！」

そんなやり取りを交わしているとベルがゆっくりと苦笑する。その後ようやくルムに静寂が訪れひと段落を迎え、魔石の回収作業に入る。といってもリリ以外は襲撃を

警戒するくらいいしかやることはないけど。

「しかし上手いな」

「リリはこれくらいいしか取り柄はありませんから。このモンスター達を倒してしまったハチマン様達の方がずーっとすごいですよ」

「…あのさ、そのベル様っていうのは流石にやめてほしいんだけど…」

「すいません、そういうわけにもいかないんです。仮契約とは言え、上と下の立場ははっきりつけなければいけません。冒険者様には、サポーターはへりくだらないといけませんです」

「ど、どうして呼び方くらいでそんな…」

「…サポーターなんて聞こえはいいですが、蓋を開けてみればリリたちはただの荷物持ちです。命をかけて直接モンスターと戦っている冒険者様からしてみれば、リリたちは安全な場所に逃げ込んで傍観するだけの臆病者で、何もしてないくせに甘い蜜を吸おうとする寄生虫なんです。リリたちが冒険者様と同格であろうとすることは傲慢です。冒険者様も許しません。もしそんなことをしてしまえば、冒険者様は怒ってリリ達に分け前など恵んでくれないでしょう」

恐らくこれが古くからあるしきたりで冒険者やサポーターの中での共通認識何だろう。だからアーデもそれを肯定し歪んだ。俺はそれを聞き理解したうえで一言呟く。

「くだらねえ」

「ハチマン（様）？」

多少怒気がこもっていたのだろうか。リリは少しおびえた表情でベルは驚いたような顔で俺の顔を見ている。

「何が同格じゃねえだ。何で命を懸けてないみたいない方をするんだ。ダンジョンに潜ってる時点で安全な場所なんてないし全員が命を懸けてるんじゃないのかよ」

「確かにダンジョンは危険ですけど冒険者様達とは明らかに危険度は違います。それなのにリリ達ができることは死骸を端っこに寄せるくらいで……」

「それのおかげで助かってる事実があるのにか？」

「……」

「今日のアーデの働きで俺達は動きやすかった。それに今魔石を取る時間も明らかに普段より短縮されてる。十分すぎるほどにありがたいことをしてもらってるのに冒険者は同格として扱うことを許さない？ 本当に下らねえ」

「……ハチマン様達がお優しいことは、分かりました。それでもリリははじめをつけなければいけません。もしリリがお二人を敬わなければ生意気なサポーターだと言う風評が流れてしまったら、お二人以外の冒険者様とダンジョンに潜ろうとするとき、リリは全く相手にされなくなってしまう。精々ただ働きがいいところでしよう」

「あるだろここに」

「えっ?」

「確か同格であることは冒険者が許さないんだっけか。なら冒険者の俺が許す。これで今ここに生意気でも相手するってパーティーができたわけだが?」

「そ…れでもお二人が体調を壊したりしたら…」

「その時は俺かベルとアーデの二人で潜ればいい。この七階層くらい今の俺達のステータスならソロでも潜れる。そこにアーデが加わるならソロよりも稼げるだろ。それにもし俺たち二人が体調を崩していけなくなったりしたらその次の日の報酬を増やせばいい。それが何日も続くようなら契約の中にその場合はお金を払うってことにすればいい」

「ハチマンそんなことしたら…うち貧乏なんだし…」

「よく考えろ二人して何日もぶっ倒れてるなんて稀だ。それにそれが続いたって今のこのペースを見る限り長期的に考えて明らかにプラスの方が多い。得はあれど損はないはずだ。それでアーデどうだ?」

アーデの方に視線を送ると目を大きく開けて信じられないと言ったような表情で俺のことを見ていた。がすぐに表情を切り替え

「…考えさせてください」

とだけ呟き魔石の回収作業に戻った。俺はそれを確認するとベルの方に近寄り話しかける。

「すまんベル勝手に雇うみたいな流れ作って」

「い、いやいいよ僕も同じこと考えてたし…」

それ以降は特に会話することなく周りの警戒に戻る。暫くするとアーデがベルに話しかける。

「ベル様」

「あ、終わった？」

「いえまだ…あの壁に挟まったキラアートの魔石も取りたいんですが…」

「ああ、そうだね。でもどうやろつか？」

「あの細い胴体を切っちゃえばいいと思います。魔石は胸の中にあるんですし。あとはリリがやっちゃいます」

「なるほど。じゃあ…」

「はい、ベル様」

「え…あ、うん」

アーデは自分が持っているナイフをベルへとわたし、それを受け取ったベルはキラアントに歩みよる。アーデはちらちらとこっちの様子を伺っていた。それがわかって

いる俺はわざとそつちを向かずずっと明後日の方向を向いていた。

「っ?」

「終わりましたか?」

そろそろ頃合いだろうそう判断した俺は振り返るとアードがちょうどベルの隣に並んで、ぐつと背伸びをしてモンスターを見上げようとしていた。目を丸くさせたベルは苦笑し、ちよつと待つてと手を動かす。すぐに切断されたキラーアントは、リリによつてあつという間に魔石を摘出された。

「それでは今日はこれくらいにしましょう」

「えっ、もう? 僕はまだ余裕あるけど」

「いえいえ、それは油断です。ベル様が今日沢山倒したパープル・モスは毒鱗粉をまき散らすモンスターです。即効性こそありませんが、何度も浴びれば『毒』の症状が発生します」

目的を終え早く撤収したいのかアードがそう提案してくる。しかしそんなの常識である。もちろんベルは解毒薬を…。

「うっ、嘘!」

……………。

「『毒』つてどうなるんだろうな…うわあ、症状が出るまで時間はないのかな? 帰り道の

モンスターは全力で倒しに行かないと……

…あの俺の横で勉強してた白髪の子は誰なんだろうなあ……。おかしいなあ……。そうこう言ってるうちにかえることが決まったらしくアーデの指示に従いなら帰り、バベルに到着する。そこで明日の集合場所や分け前の話をし、解散と言う流れになった。

「それじゃあ、ハチマン治療しに行こうか」

「いやいらねえよ。ほれこれ」

「えっ?」

俺はベルにそう言うのと解毒薬を投げ渡す。

「ええ!!ハチマンもつてたの!」

「そりゃな。パープル・モスが毒鱗粉まき散らしてるのは知ってたし一緒に勉強したはず

ずなんだけどな?」

「あははっ……ごめんなさい」

「今度また勉強しとけよ?」

「はい……:ていうかハチマンもつてたならなんであの時言わなかったの?」

「呆れてたんだよ誰かさんにな。そしたらいうタイミング逃した」

俺が冷ややかな視線を送るとベルは気まずそうに眼をそらす。まあ言わなかったのは意図的なんですけど。

「反省したなら魔石の換金とかやつといてくれ俺ちよつと寄るところあるからそれじゃ」
「は……」

ベルにそれだけ告げると俺はアーデを追いかけた。

「……」か

屋根の上でハチマンはそつと呟いた。ベルと別れた後すぐにリリが行った方へ走り見つけるとずつとその後を追っていた。理由はアーデの家と売るための手段を知るため。今現在アーデが看板を掲げている店っぽいところに入数分滞在している。おそらくここでモノを売っているのだろう。

（ベルのナイフはベルが持たないとしたのなまくらだ。てことは売られることはないはず。売られたとしてもなまくらの値段なんてたかが知れてる……だけどなあ）

当初考えていたことよりも大分リスキーになったことに歯噛みする。

元々ハチマンはリリの目的を全部見抜きリリを現行犯で捕まえるつもりだった。しかしリリの話を聞き自らの過去を想起させ、その身長と仕草からいつの間にか妹であるコマチの姿をリリに重ねるようになっていた。そして見てしまった。ナイフを盗った時のあの悲しげな表情を。

（くそ……）

心の中で悪態をついていると一人ドアを乱暴に開け出てくる。その手元にはベルのナイフがあることを確認する。

(やっぱ売らなかつたか…まあ売ってたら買うかなんかしてたんですけど)

暫く売れなかつたことにイラついているのか乱暴な足取りのアーデを追っている。進行方向に二つの人影が見える。買い物をしていたのか二人とも紙袋を抱えている。

(てかあれシルさんとリユーさんじゃん…)

アーデがその二人の横を通り過ぎようとするがその足が止まる。

(話してる…? 何で…?)

話して数秒その場が軋む。

(!?)

その威圧に当てられたアーデが逃げようと地を蹴るがリユーさんは手元にあつたり
ングを投げアーデの手に当てる。当たったリングはそのまま砕け散った。

(何ちゆう膂力…! ていうかやべえ!)

俺が動こうとしたときにはリユーさんはすでに間髪を入れずに詰めアーデを蹴り飛ばしていた。蹴り飛ばされたアーデはそのままの勢いで大通りまで倒れこみそこでなぜかその先にベルがいた。

(どういふタイミングで来てんだあいつ…てかあの慌てようあれナイフないの気付いて

るよな…ベルには悪いことしたな…)

ベルに今度お詫びすることを決め、俺はその場を後にした。

#9 壁

翌日。俺とベル、リリは朝早くからダンジョンに赴いていた。結局リリとは契約することになり、その際「リリのごことはリリとお呼びください」と言われ呼び方を変えることになった。

「…ベル様」

「ん？」

「あのナイフは、どこにしまったんですか…？」

「うん、今度は落とさないようにプロテクターの中へ鞘ごと収納しているんだ。格納スペースがちやうどあつたから」

「そ、そうですか…」

明らかに気分が沈んでいるリリ。どうやらまだ諦めていないらしい。それでもコマチの面影を重ねた俺はもうリリを捕まえようなんて考えが一切起きないようになっていた。しかし容易くもう盗ませる気もなく常に見張ることにした。そして目を光らせながら七階層まで行き、帰ってきたのだが…。はつきり言つてリリの存在は劇的だった。まずリリがでつかいバックパックを持つてくれているおかげでバックパックが満

帆になることはなく一々上に戻って換金する手間が省けるようになった。そうすると長時間ダンジョン内にいることができ俺もベルも身軽になり好きだけ暴れ、その合間合間でリリが魔石とドロップアイテムを回収する。これを繰り返しまくった結果。ギルドの換金所から受け取ったお金は――。

「……」

口が開いた亜麻色の袋の中身を、俺達三人は覗き込む。その中にあるのはあふれんばかりの金貨金貨金貨。

「「五万千ヴァリス……」」

俺は絶句し残り二人は袋から顔を上げ見つめあつた瞬間。

「「やああー……」」

二人は歓喜して飛び上がった。

「すごい、すごいですっ！ドロップアイテムは数えるくらいしか出なかったのにつ、ベル様とハチマン様のお二人で二万五千ヴァリス以上稼いできました!!」

「わっ、わっ、わっ！夢じゃないよねっ！現実だよね!!一日でこんなにお金が入るなんて……これもリリのおかげだよ！」

二人は興奮が冷めぬままに騒ぎ散らかしていた。

（確かLv1の冒険者五人で一日に稼げるのが二万五千ヴァリス……。サポーターって偉

大なんだな……)

改めてサポーターの有用性を知り感心する。

「……では、ベル様、ハチマン様そろそろ分け前をいただけませんか？」

「お、おうそうだったな。えっと五万千ヴァリスだから……ほれ」

どぼつと一万七千ヴァリスをリリに渡す。

「……………へ？」

「ああ、これなら普通に神様に美味しいものを食べさせてあげられるかも……」

「そうだな。しかもこれが続くようなら結構夢が広がるぞ」

「ねー!」

ベルは握りこぶしを作って思わずガツツポーズをしまっている。その隣でなぜかリリが目を丸くしていた。

「あ、あの、これは……?」

「分け前だよ、決まってるじゃん! あ、そうだ! せっかくだしリリ、よかつたらこれから一緒に酒場行かない? 僕、美味しいお店知ってるんだ!」

ベルは上機嫌にお誘いするとリリは瞠目して息をのんでいる。その差庇つてもしかして『豊饒の女主人』じゃないよね? リリ死んじゃうよ? ベルさん?」

「じゃあ、行くうりり!」

「べ、ベル様！」

完全に自分の世界にトリップしていたベルはリリの声でようやく現実に戻ってくる。

「…ひ、独り占めしようとか…お二人は思わないんですか？」

「え、どうして？」

心底不思議そうにベルは問い返す。純白と言っていい程綺麗な心を持っているこいつには想像もつかないだろう。そんなベルにリリは心を詰まらせる。

「まあ俺たち二人じゃ絶対に稼げなかつた額だからな」

「そうだよ。リリがいてくれたから、でしょ？」

だから、ありがとうとも付け加え、これからもよろしくねとさらに添え、リリと出会えて本当によかつたよと笑って見せる。何この子天然なの？ 恥ずかしくないの？ しかし顔を見ると至って真面目である。

「…リリ、ほら、行こう？」

ぼうつとベルはリリに手を差し伸べる。差し出された手をリリはおずおずと自らの手を重ねた。

「…変なの」

取り敢えず俺はそんな二人を見てジジイから習った言葉を心の中で唱えた。リア充

爆発しろ、と。

ベル・クラネル

L v. 1

力 : D 5 9 6

耐久 : G 2 3 3

器用 : C 6 0 8

敏捷 : B 7 0 5

魔力 : I 0

ハチマン・ヒキガヤ

L v. 1

力 : C 7 0 1

耐久 : F 3 0 2

器用 : B 7 0 6

敏捷 : C 6 4 1

魔力 : I 0

「ぬあああああつ…!？」

目を覚ましたヘスティアのうめき声が聞こえる。

「だ、大丈夫ですか、神様？」

「す、すまない、ベル君、こんな見苦しいところを…」

「いえ、そんな。…えっと、昨日ミアハ様にも聞きましたが、やっぱり？」

「…ああ、どうやら飲みすぎたみたいだ」

ヘスティアは寝たままの姿勢でベルに水を軽く飲ませてもらっている。どうやら昨日ミアハ様と酒を飲みまくって潰れたらしい。その後ミアハ様がヘスティアをうちまです送ってくださってその際「少し疲れているようだ。僅かでもいい、かまってやってくれ」と意味深なセリフを残して去っていった。

「…君達、ダンジョンに行かなくていいのかい？」

「今の神様を放っておけませんから。今日はハチマンに任せて僕は休むことにしました」

「そう言うことだ。ほれ取り敢えず朝飯。あつさりしといたのにしといたから好きな時に食つといてくれ」

俺は作つておいた朝飯をヘスティアの前に置きダンジョンに行く準備をする。

「神様、これ、食べられますか？」

「…ちよ、ちよつと辛いかなあ。ベル君、食べさせてくれないかい？」
「あ、はい、わかりました」

準備を進める俺の後ろでイチヤコラする二人に多少イラつとする。このフラグ製造機め…。そして暫くして準備を終えた俺はドアにまで行き手をかける。

「それじゃあ行つてくる。今度からは気をつけるよ」

俺はそう言いドアを閉じダンジョンまで足を進めた。

(よく考えたらこの道を一人で通るのは初めてだな…)

いつもベルとダンジョンに向かう道を通りながら心の中でそう思う。

「ハチマンさんー！」

「ん?」

一人で道を進んでいると後ろから声を掛けられ振り返る。するとそこにはシルさんが息を切らしながら立っていた。恐らく俺のところまで走ってきたんだろう。

「今日は、ベルさんはいないんですか?」

「ああ実はヘス…主神が体調を崩してましてその看病をしてるんですよ」

「なるほど…」

それを知るとシルさんは少し悲しそうな顔を浮かべる。

(あいつ何人とフラグたててるんだよ…)

その表情を見て心の中で辟易する。

「ハチマンさんは看病していかなかったんですか?」

「俺はそう言うの柄じゃないですし最近サポーターを雇ってパーティーを組んでるんですよ。何で連絡もしないといけないんでベルに任せてきました」

それにミアハ様のセリフを考えてもそういう役回りに向いてるのはベルだろうか。

「そうですか…。それじゃあこれ」

「え?」

「お弁当です。いつもベルさんに二人分渡してるんですけど…」

「あ、ああ。ありがとうございます?」

「ふふつ、何で疑問形ですか」

この手のことに慣れていない俺はついついきよどつてしまう。それを笑われ思わず顔をそらしてしまう。

「ベルさんもそうですけどハチマンさんもからかいがいがありそうですね…」

「いやマジでやめてくださいほんとにお願いますマジで」

俺の心が持つ気がしないから本当にやめてほしいところである。そんな風に雑談

(?) を交わしているとシルさんの後ろから声がかかる。

「シル、こんなところで何を…おやヒキガヤさんも一緒でしたかおはようございます」

「お、おはようございます」

部屋ぎなのかいつもの『豊饒の女主人』の制服とは違う服装に多少驚いてまたきよどつてしまう。いやだつてしようがなくなない？美人の部屋着だよ？そんな誰に聞こえるわけでもない言い訳を心の中で羅列していく。

(こんだけ綺麗でも俺よりも強いんだよな…)

数日前心の中で渦巻いた疑問を思い出す。今の俺がどこまで通用するのか。

「…」

「あの…ヒキガヤさん、そんなに見つめられると困るのですが…」

「へ？…いい、いやちがつ…その…ごめんなさい」

「いや別に大丈夫ですが…」

どうやら考え込んでいるうちにリユーさんをガン見していたらしい。いや女子の部屋ぎガン見するつて変態かよ俺。そんなどぎまぎしている俺の横でシルさんが目を見開いていた。

「…それでハチマンさん。リユーがどうかしたんですか？それともリユーみたいな女の子がタイプなんですか？」

「いつ!？」

「シ、シル?」

しかしそんな表情もすぐになりを顰め、満面の笑みに変わり俺に問いかけてくる。可愛らしいはずのその笑みがなぜか今は恐怖しか感じなかった。本当にめちやくちや怖い。

「い、いやまあその…」

「なんですかもしかして人に言えないようなことをリユウで考えていたんですか?」

「シル?!」

なんか暴走気味のシルさんを止めるために思っていたことを洗いざらいはいた。

「なるほど…。リユウにどれだけ通用するか…。ですか…」

「…ヒキガヤさんいつから気付いていたんですか?」

「まあ初めてあの酒場に入った時から…。なんなら他の従業員の人たちもそうですね?」

「ええそうですね…。よくわかりましたね」

「なんか一つ一つの動きが洗練されてたと言うか…。体運びが明らかに冒険者のそれだったんですね」

(すさまじい観察眼…。ばれないようにしていたつもりなのですが…)

「失礼ヒキガヤさんが冒険者登録したのはいつですか？」

「確か…一週間とちよつと前ですね」

「…到達階層は？」

「七階層です」

「…」

リユーはそれを聞き絶句する。

（冒険者登録をして一週間とちよつとで七階層？しかも私の実力を見破った…？）

明らかに異常事態その類を見ない成長速度に恐れを抱きながらも興味を持つ。

「ヒキガヤさん」

「？はいどうしました？」

「これから時間はありますか？」

『豊饒の女主人』の広い庭のような空間。そこで俺は地面に倒れリユーさんは木刀を持つて涼しげに立っていた。あの後俺が時間があると答えると「ならあなたの疑問に答えましょう」と言われここまで引つ張つて連れてこられ木刀を握らされる。行き成りの展開に戸惑っていたが戦いたかった俺は「では始めましょう」というリユーさんの言葉を皮切りにリユーさんとの戦いを始める。結果だけ言おう。文字通り手も足も出な

かった。一撃も与えることができなかった。何度か惜しい場面はあったものそれも全部躲され、ものの見事にぼこぼこにされたのだ。

(強い…これがLv4…)

(…駆け引きや技はまだまだ未熟。それでも全くないという訳でもない。この状態でもかなり厄介だった。この人は確実に伸びる)

戦いを通じて確信にも近い何かをリユーは得ていた。

(【ステイタス】の成長速度はさることながら、技や駆け引きの呑み込みもはやい。この戦いの中でも確実に成長し、私に一矢報いようと襲い掛かってくる)

本当に恐ろしいLv1だ、と心の中で付け加える。

「…今日はありがとうございました。おかげで自分に足りないこととかいろいろなことが分かりました」

地面に転がったままハチマンは感謝を述べる。

「いえこちらこそありがとうございます。久々に体を動かせて楽しかったです」

「…それはよかったです」

(まあそうは言っても微々たるもんなんだろうけど…)

その証拠にリユーさんは息切れをぼぼ起こしていなかった。対して俺は息も絶え絶え地面につつ倒れて死にかけている。ここでもさらに差を感じる。

「…ヒキガヤさん」

「？」

「もしヒキガヤさんがよければなんですが、これからも朝ここでこうして何銭か交えていただけませんか？」

「」

俺はその提案に思わず跳ね起きる。

「…いいんですか？」

「ええ、朝は元々素振りなどはしていたのですがそれではどうしても物足りなかったの
で」

心の中で大きくガッツポーズをする。これは毎朝自分より格上と戦うチャンスがやってくるってことだ。つまり強くなれる。しかも今の戦いで強く実感させられた未熟な技や駆け引きを鍛えられると言うこと。是が非でもと言う感じで俺はその提案に飛びついた。

「…ところでハチマンさん」

「？はい」

自分でもテンションが上がっているのを自覚しながらずっと俺達のことを見ていたシルさんに声を掛けられる。

「ダンジョンに行かなくてもいいんですか？」

「あ」

そんな上がったテンションもその一言で地に落ち俺は顔を青ざめさせた。

「本当に申し訳ありませんでした」

「い、いいですから！顔を上げてください！」

雲一つない青空。そんな青空の下で俺は自分より身長の高い女の子にヘステイア直伝の土下座をしていた。シルさんの一言を聞いてからリユースさんと予定を決め急いでバベルまで走っていた。そしてリリを見つけるなり俺は土下座をかましたわけである。そこからは本当にリリに慌てられ今日の分け前はリリが六で俺が四と言うことで話がついた。その提案をしたときはリリは目を見開き「遅刻だけで…？この人達はもしかして頭がおかしいんじゃない？」とガチトーンで言われた。失敬な。

「てことは今日はベル様は来ないんですか？」

「まあ今日はもうあの様子だとヘステイアにつきつきりだろうな」

下層へと向かう階段の最中怪物祭以来ヘステイアのベルに対する雰囲気が変わっていた。だからつきつきりって言うかつきつきりにされるって言うか…。今回ベルに押し付けたのもこれが理由の言ったんだつたりする。

「なるほど…ところでハチマン様…なんでダンジョンに潜る前にそんなにボロボロなんですか？」

「ああ…これはちよつと来る前にぼこぼこにされて…」

「本当に何があつたんですか…」

それを聞くとリリは小声で「やっぱりこの人…」なんて呟いている。別に頭おかしいわけじゃないからね？

そんなやり取りを交わしながらモンスターを狩り七階層まで到達する。

「じゃあ行きますか」

「はいっ！行きましょう！」

その声と共に昨日同様俺は自由に暴れまくった。

1 0 何かの正体

「……？」

俺達は足を止める。二階層と一階層を繋ぐ階段の途中で、首を巡らせて下の方を見る。

「どうしたんですか？」

「……いまダンジョンが揺れなかった？」

すぐ後ろにいたりリリが不思議そうに俺達のことを見る。そんな視線を受けながら下層の方へと視線を向ける。

「揺れ、ですか？リリは何も感じませんでしたか？」

「……気のせいかな？でもハチマンも感じたんだよね？」

「ああ……まあ気のせいだろ。揺れたところで何だつて話だしな」

「確かに……。それにしても今日は長引いちやったね」

「はい。ちよつとどころか、かなり、ですけど。もう夜中の十二時を回りますよ」

「えっ、本当に!？」

ええ、とりりは金色の懐中時計を手にし答えた。短針と長針が見事に数字の十二に重

なろうとしている。

「うわ、マジかよ。全然気づかなかった」

「まあ、最後の方はモンスターに群がられていましたしね。時間を確認する余裕がなかったのでしょうか」

はちきれんばかりのバックバックを背に背負いそう呟く。俺達がリリと契約して数日が経とうとしていた。ここ数日はリリのおかげもあり順調すぎる日々を送っていた。冒険者として収入は安定し、モンスターを狩る速度も上がり、リユースさんにぼこぼこにされ低かった耐久も格段に上がっていた。まああれめちやくちや痛いんですけど。最近は攻撃が軽く掠るようになり始めていた。それも含めやはり充実していると見えるだろう。

「それじゃあ、リリ、今日の報酬も稼いだ分の山分けでいい？」

「…ベル様とハチマン様は、もう少し常識と物欲と言うものを知った方がいいと思います。ありがたく頂戴しているリリが言える立場ではありませんが…人が良すぎです」

「でも、リリだってお金が必要なんですよ？」

「そうなんですけど…。でも、リリはハチマン様はともかくベル様のことは危なっかしくて見て居られないと言うか、知人に預けられた兎にはらはらさせられてつい世話を焼きすぎてしまうと言うか…うゝ、何だか毒されているような気がしますゝつ」

「…リリはベルの毒牙にかかったか…」

「ハチマン？その言い方悪意あるよね？」

「ないぞ…半分くらいは」

「それもう半分はあるってことなんじゃ…」

「もう茶化さないでくださいっ！」

襲いかかってくるゴブリンたちを屠りながら一階層を進み、ダンジョンを後にする。
シャワーを浴び換金所によってから門をくぐって外に出る。

「ほんとに真っ暗だな」

「ね、すっかり夜になっちゃってるよ…」

「それじゃあここでわかれるか…。リリ送らなくて大丈夫か？」

「…大丈夫ですリリだって冒険者ですから」

「そっかそれじゃあまた明日」

「じゃあねリリ！」

「はいまた明日！」

俺達はそこで別れ家路についた。

「そう。また強くなったのね」

眩きが落とされる。遙か下方に見える小さな黒と白の影。

「それでいい。貴方達はもつと輝ける……」

フレイヤは自身の一室からベルとハチマンを見下ろしていた。

「もつと、もつと輝いて？ 貴方達には、私に見初められた故の義務がある……」

フレイヤは二人の少年——ベルとハチマンに執心していた。

「より強く、より相応しく……それがあなたたちの義務」

彼女は魂の色を見抜く目を持つていた。そんな彼女がある日の早朝メインストリートを歩く彼らの姿を発見する。その瞬間フレイヤは手に入れたと思った。ベルやハチマンは今までに見たことのない魂の色をしていたのだ。ベルはどこまでも透き通る透明の色。ハチマンは濁りつつもその奥はベルにも負けないくらいの透明さを持つていた。

「楽しみだわ。貴方達がどこまで強くなるのか、どこまで輝けるのか……どんな色になるのか。でもあなたのそれは何かしら？」

ハチマンの魂の色に重なるようにいる光。まるでその魂に二人いるかのようだ。

「ふつつ面白いわね……あら？……また気付いたの？」

視線の先のベル達が立ち止まり、振り返る。ベルの方は頻りに顔を振って探しているみたいだがハチマンの方は明らかにこちらを見ていた。

「貴方達を私のものにするのは待ち遠しいけれど…複雑ね、来ないでほしくもある。今この時こそが、一番胸躍るときなのかもしれない」

恋する乙女のような表情で、ベル達を見つめ続ける。

「…でも、そうね。『魔法』はそろそろ使えてもいいかもしれない」
トン、と人差し指を顎に当て思案する。

「これがいいかしら？」

部屋の隅に鎮座している本棚まで歩み寄り、ある分厚い二つの本を取り出す。

「オツタル」

「はっ」

フレイヤが名前一つ呼ぶと現在のオラリオで最強の男が答える。

「この本を…」

本を差し出そうとするがその言葉を途中でできる。

「どうかなされたのですか？」

「…ふふっ、いえ、なんでもないわ。今のは忘れて頂戴」

「は」

オツタルはそう短く返事をする。そんなオツタルからは視線を外し、手の中の本へ視線を移す。

(あそこへおいておこう。彼らを見つけた大通りのそばのあの店へ)

フレイヤは薄暗い部屋の中で従者に見守られながらくすくすと笑みをこぼした。

「ベル様、いけません!? 足元っ!」

「えっ?」

リリの悲鳴が俺の耳に届く。現在の居場所七階層。キラアアントの二体と対峙していた俺の後ろの状況を確認する。見るとベルの死角となる位置から『ニードルラビッツ』がベルの左足目掛け襲いかかっていた。

「ッ!」

ちようど踏み込みの足だったため避けることができず左ひざを曲げ防具がついている膝部分で防御する。ガキンツツと金属音を立てその衝撃からバランスを失う。助けに行こうにも目の前のキラアアントがそれを許さない。

(邪魔だっ!)

地面を踏みこみキラアアントまで急加速する。その通り過ぎざまに二閃し、キラアアントを絶命させる。それを確認し振り返り、更に逆宝庫のベルのもとへ疾駆する。そこで目に入るのはキラアアントに体当たりされ食べられようとしているベルの姿と――
——短い剣を持つリリの姿だった。リリの思惑を察した俺は急ブレーキをかけ、それ

を待つ。

「ダメ——ツ!!」

その高い掛け声とともに炎の塊が飛び出す。その瞬間また駆け出す。

「っ!!」

『ツギヤアアアア!?』

「ベル様あ!」

「ふっ!」

『ギユ!?』

ベルに襲いかかろうとするキラアアントの近くまで寄るとその首を飛ばす。その勢いのまま二体目にも一撃必殺を見舞う。

「うわあああああああああつ!」

時を取り戻したベルは逆方向を向き不意打ちを見舞おうとしているニードルラビツトヘカウンターの要領で打ち込む。

『キ、ア…』

「…っ、は!」

ルームにいたモンスターの最後の一匹を仕留めたベルは、ため込んでいた空気を一気に吐き出し中腰になり汗を拭う。

「ベル様、無事ですか!？」

「ベル、大丈夫か？」

「…リリィ、ハチマン。ありがとう、助かったよお」

駆け寄ってきた俺達を見て安心したのか脱力する。へなへなと腰を下ろしてしりもちをついている。

「今のは不用意でした！確かに意地悪な状況でしたけど、ベル様にも非がありますっ！」
「ごめん…」

ほんとに反省しているようでそれは雰囲気からわかった。なのでその辺はリリに任せ、俺は何も口出しせずただ見守っていた。これでベルが反省しなければ流石に俺も入るが。ある程度話がまとまり会話が終わりそうになった時ふと思いついたことを口に出した。

「ていうかりり『魔剣』なんて持っていたんだな」

「…はっ!？」

俺の指摘に右手に持っている小さな紅のナイフを慌てて背中に隠す。無意識だったのかよおい。

「べ、別にベル様を助けようとしたわけじゃないんですからね！ベル様がいなくなっってはリリの収入が減るからこうしたまでです。か、勘違いしないでください！」

「…何を言ってるの、リリ?」

どうしたんだろうかこの子。

「…まあこれはちよつと色々ありまして…」

「へえ。でも確かに魔剣つて、使いすぎると壊れちゃうんでしょ?」

「そうですね、リリはここぞという時にしか使わないようにしています。でも、お二人の為ならリリは出し惜しみなんかしませんよ!」

さつきと全く違うことを言っているけどこの子…。ややあつて俺達は昼ご飯を食べることにした。モンスターの死骸を片付けルームの真ん中に陣取る。

(そういえばあれ返してねえな…)

簡素な食料品を口にしながら、リユースさんから受け取ったバスケットのことを思い出す。最初のリユースさんとの朝の稽古(?)の終わり俺がダンジョンに向かうときリユースさんがご飯の入ったバスケットを渡してくれた。それからそれが恒例になり昨日も例にもれずもらっていたのだが返す余裕もなく今日の朝は寝坊し『豊饒の女主人』に立ち寄れていなかった。今日は返さないとなあ…。それから俺達は雑談に興じた。そこでベルが「ソーマ・ファミリア」のことを聞くがそこからリリの表情の陰りが見えるようになりまだある溝が浮き彫りになってしまう。普段から誰かと慣れ親しんだりしたいわけじゃないが何故かリリのこととはほつとけずその理由も理解している俺は自

らの女々しさを心の中で笑ってしまった。

あれから二日たった。一昨日、リリは用事があると言ってダンジョンに行けないという旨を伝えてきた。そして昨日ベルは気分が乗らないらしくダンジョンに足を運んでいなかった。俺も何となく気分が乗らずダンジョンに行っていないかった。それをベルに伝えると心底驚いた顔をしていたけど。こいつ俺の事なんだと思ってるんだ？ここ二日リユースさんのところにもいつていない。実はここ数日リユースさんにぼこぼこにされたダメージが回復しきつておらず体中痛かったからだ。別にずっと沈んだ表情をしているベルが気になっていっているわけではない決して絶対確実に。本当だよ？そんな俺達は今何をしているかと言うとソフアーに転がって惰性に過ごしていた。

「…あー、駄目だこんなんじゃあ」

ベルが寝つ転がっているソフアーから身を起こして、頭を乱暴にかく。やはり何かをずっと気にしているらしい。恐らくリリのことだが。

「…少し掃除でもしようぜ暇だし」

それを見かねた俺はそう提案する。そんな俺をこいつは本当にハチマンか？みたいな顔をするがすぐに何かに気付いたように微笑む。

「ありがとねハチマン」

「…なにが」

「気分転換に提案してくれたんではよ？」

「いや別にそういうわけじゃ…」

「そっかじゃあ掃除しよっか！」

何かを察したように優しい目を向けられむずがゆくなる。そしてお互い行動に移ろうとソファアールから立ち上がり…棚の上に放置されている二つのバスケットが目に入る。

「…あ」

やべ。

「本っ当つに、ごめんなさいっつ！」

「本当にすいませんでした」

「あははは…」

「…」

ベルはばんっつ、と両手を合わせ勢いよく頭を下げ、俺は再び土下座を繰り出す。日が燦燦と輝いてる中俺とベルは急いで『豊饒の女主人』に駆け込み現在の状況になっていた。元々休む日があるかもしれないことは伝えていたがまさかのバスケットを返し忘れる体たらく、本当に間抜けである。

「顔を上げてください、ベルさん。私は気にしていませんから」

「そうです。ヒキガヤさん顔を上げてください」

「いや、でも…」

少し顔を上げリユーさんの顔を見上げる。見上げたリユーさんは優しく俺のこと見つめていた。

「本当に気にしないでください。私は気にしていませんから」

「そんなこと言ってリユー四六時中物足りなそうな表情浮かべてたじゃない」

「なっ！そ、それは…」

リユーさんはちらちらと俺の方を見ていた。何この人可愛い。

「…まあ今度からできるだけ来れるようにします…」

「そ、そうですかそれは良かった…です…」

そうしてお互い目をそらしリユーさんは厨房の方に戻っていった。何あの人ほんとに何あの人。そんな俺達のことをシルさんが頬を膨らませ見ている事に気付く。と言うか俺を睨んでいた。その視線から逃げるようにゆっくりと目をそらす。

「あれ、前にこんながありましたっけ」

店の隅の方まで視線を逃がしているとふと見覚えのない本が目に入る。

「ああ、それはお客様のどなたかが、お店に忘れて言ったようなんです。取りに戻られた

際に気付いてもらえるように、こうしておいておいて」

へえ、と声を漏らす。見た目はかなり分厚くそれも二つあり中々読みごたえがありそうなの本を暫く見つめる。

「その本読んでみますか？」

「え？」

「読んでみたいんじゃないんですか？」

「…いいんですか？」

「はい。ちゃんと返してもらえれば問題はありません。それにベルさんも気分転換にどうですか？」

「それじゃあ…貸してもらってもいいですか？」

「ふふっええどうぞ…ベルさんはどうしますか？」

ベルは少し悩んだようだがシルさんが「力になりたいな…」みたいなことを言うとか笑い本を受け取る。その際手が当たったようでお互いが顔を赤くしている。これだからリア充は困るんですよ。イチヤコラを見せやがって爆発しろ。切実に。

「そ、それじゃあありがとうございましたっ。えっと、ボク達もう行きますね？」

「はい。ご来店ありがとうございました」

俺とベルはお礼を述べ店を後にした。

ホームに戻った俺達はさつそく本を読んでみることにした。椅子を引くと本を手に取り表紙をパラパラとめくってみる。

『ゴブリンから教わる現代魔法！その一』

「…」

俺はそのまま本を閉じそうになったが何とか堪えそのまま読み進めていく。出だしこそ頭おかしかったが中身は普通みたいだ。そしてタイトル通り魔法に関することが記してある。魔法に憧れのアツた俺はのめりこむように読み始め段々と視界が何かに侵され真つ白な空間に立つ。そして目の前には顔があり目があり鼻があり口がある。

『じゃあ、始めよっか』

目の前の何かが話始める。

『ハチマン君にとって魔法って何？』

起死回生の一手。それを使えば戦況を覆せるような圧倒的なもの。

『ハチマン君にとって魔法って？』

守るための力。みんなを救えるようなそんな力。

『ハチマン君にとって魔法はどんなもの？』

もの？ものか…そうだな。炎だ。あの日目の前で何もできなかった日。理不尽の象

微でもあるあの日に悠然と見下すように燃え盛っていた炎。俺はあの炎を理不尽を体現したい。

『魔法に何を求める?』

より強くより高みに。盾でもあり矛でもあるそんな何か。

『欲張りだなあ…でも君らしい』

目の前の何かは微笑む。

『それじゃあこつからは個人面談だ』

そう目の前の何かが眩くと俺の意識は暗転した。

「…チマン君…ハチマン君…ねえ起きて!」

声が聞こえる。どこか懐かしいような声。ずっと昔にあったようなそんな声。

「ハチマン君っ!!」

次の瞬間覚醒する。

「んん…ヘスティアか?今なん…じ…だ…」

俺は寝ぼけ目をこすりながら体を起こすと周りを見渡し目を疑う。そこには限りなく暗闇が広がっていた。いや暗闇と言うのはおかしいかもしれない。現に周りは真つ

暗なはずなのに俺の体を見ることができたからだ。

「どこだどこ…!?」

「…ここは一種の精神世界みたいなものだよ」

「っ!?!」

俺の口からこぼれた問いに答える声が後ろから聞こえ、と振り向く。しかしさらに目を疑う。そこには声の主は見つからず白い靄が浮いてるだけだった。

「どこから…?」

「ここだよ今君の目の前にいるだろう?」

「いや目の前って…靄しかないんですけど…」

「それだよ」

「これなのかよ…」

困った俺は取り敢えず今の状況を整理してみることにした。

ホームで本を読む↓なんか変なのに話しかけられる↓そこから意識失って周り真っ黒のところに来る↓また変なのしかも靄に話しかけられる↑NEW

……………よし。

「ハチマン君?何をしてるの?」

「いや疲れてるみたいだから少し睡眠を…」

「別に私は幻覚なわけじゃないよ?」

どうやら靄さん(?)は幻覚じゃないらしい。うんどう言うこと? 暫く考え込むが俺はそこであることに気付く。

(…どつかで聞いたことが…。! そうだあの時…)

あの時の声とは怪物祭でオークと戦う前に聞こえてきた声のことだ。

(待てよ確かここは精神世界みたいなものって言うってたな…たしかあの声も俺の中で響いてたな…ってことは…?)

考えられるのは二重人格の線。それなら精神世界の話も説明も付く。でも…。考えに考え答えが出ることはなく特に敵意も感じられなかったので聞いてみることにした。

「なあ」

「ん? どうしたの?」

「あんた一体何者なんだ?」

「私?…ああそういえば全然説明してなかったね。私は…」

靄さんはそこで言葉を区切り、一泊おいて

「私は精霊ですよ」

そう耳を疑う答えを言つてのけた。

1 1 新たな力

「せい…れい…?」

「そう精霊」

「精霊ってあの…?」

「どのかわからないけどたぶんその」

「…」

目の前の自称精霊の言葉を聞いて思わず絶句する。精霊とは伝説とまで言われている存在。どの著書を読んでもその存在については詳しく書かれていなかった。それほどまでに希少で稀有な存在。それが今目の前にいて俺と話していると言うのだ。驚かない方が無理である。しかし驚いている反面ハチマンはどこか納得していた。

この空間明らかな異常事態、神と似たような能力を保有しているとも言われている精霊がやったと言うなら納得だ。ただそれを抜きにしても受け入れるのが早い気がする。何の違和感もなく素直に受け入れている事に逆に違和感を覚える。

(前々から感じてたこの懐かしい感じ…。何の違和感もなく明らかな異常事態受け入れ

イレギュラー

てること……。まさか……)

「昔にどこかで会っている……?」

「正解」

「!?」

思わず漏れた声に精霊さんが答える。

「その様子だと記憶は戻ってないけど推測したってところかな?」

「なんで……というか記憶……?」

「うんハチマン君の推測通り私たちは昔に会っている」

「!?」

「そしてその時に色々あつてあなたの中に入って私と会った記憶を消してるの」

「……それを聞いても?」

「もともと話す気だったし記憶消したのは私の独断だしそれじゃあハチマン君おでこ借りるよ」

「ちよつと待って今なんっ!?!」

いきなり精霊(?)さんが近付きおでこに何かぶつかる。その瞬間頭の中に記憶が流れ込んできて――

クラネルの家に來てから数か月がたったある日俺は近くの森にやってきていた。理由はモンスターを探すため。ここに来る数か月前強くなることを決めた俺はまずクラネルの家にある書物で知識を蓄えていた。昔の英雄譚、モンスター図鑑、モンスターの弱点、剣術、極東の技、様々な知識をここ数か月蓄えていたハチマンの耳にある情報が入る。

『あそこの森でゴブリンが出たらしい——』

と言う情報が。その情報を聞いたハチマンは好奇心に駆られる。

(ゴブリンは、さいじやくのモンスター…ならおれでも…)

その思考が一回でも浮かべば消えることはなく日々増大していくばかりだった。そして今日好奇心を抑えられなくなった俺はクラネルのおじいちゃんに近くで遊んでくると嘘をつき家にあつたナイフを持ってゴブリンが出たという森に足を運んでいた。

(いない…)

しかしゴブリンの姿は見つからずほとんど森の奥へと足を進めていく。怖さはなかった。ただあるのは好奇心と強くなりたいたいという思い。そして暫く森の中を歩いていると何かの音が耳の奥をかする。

(…う…なんだ?)

その何かの音が聞こえる方向を探すために耳を澄ませる。

『…すす…て』

(声…か?)

声のする方へ歩みを進めると言っていることがはつきりと聞こえてくる。

『たす…けて…』

その言葉を理解した瞬間気付いたら俺は走っていた。

(誰かが助けをもとめてる…だれかがきずついてる…っ！)

フラッシュバックするのはあの日の光景。誰も守れなかったみんなを見捨ててし

まったあの日。

(っ！)

走って数秒段々と声のする方に近寄り…少し開けた場所にたどり着く。その真ん中には湖がありそのほとりで見つける。

(いたっ！)

俺と同じ年くらいの銀髪の女の子が水の際で尻餅をついておりその目の前には――

(ごぶりんっ！)

当初の目標であるごぶりんがその女の子を今にも襲おうとしていた。

(走っても間に合わない…なら…)

俺は周りを見渡し手のひらサイズの石を拾いそれをゴブリンの方に投げ注意を引こうとする。

「おいっ！(ぎ)ぶりんっ！こっちだ！」

その石が近くにおちこちらに気付いたゴブリンに駆け寄りながら呼びかける。

『ギイ……！』

ナイフを持って走り寄ってくる俺を警戒したのか女の子から俺の方に視線を向けている。

(よしっ！)

完全に俺の方に敵意を向けることに成功した俺は勢いを止めることなくむしろスピードを上げる。

(何度だつて想像した……本で読んだことと一緒に考えた……だから……負けない……！)

「あああああああつ!!」

『ギシヤア!!』

ある程度距離を詰めたところでゴブリンが俺に飛び掛かる。それを横にずれることで避け着地した瞬間を狙い横から一突きする。

『ギイアっ!?!』

手で何かが碎ける感触が伝わる。どうやら狙い通り魔石を碎いたらしい。

(…倒した…)

達成感が胸に残る。一步踏み出したそんな思いが胸を満たす。しかしその思いも振り切り襲われていた女の子の方へ近寄る。

「あの…大丈夫ですか？」

「…」

襲われた恐怖がまだ残っているのかずっと無言を貫いている。

「あの…」

「…」

視線はこちらに向いているが以前口を開くことはなかった。しようがないと言えばしようがないのかもしれないがさすがにちよつとへこむ。

(まあでもこのままほつとくわけにもいかないよなあ…)

よく見ると少女は震えていた。そんな少女を放置しとくわけにもいかずその少女の横に座る。

「!？」

「…」

横に腰かけた俺に少女は驚いたような顔を浮かべるが特に拒絶されることもなくそのまま二人一緒に時間を過ごす。どれくらい過ごしただろうか。一時間か二時間かそ

れくらいたったところに少女が初めて口を開く。

「あ……の……」

「!?!」

今度は俺が驚く番だった。いきなり話しかけられたことに驚いた俺は言葉を返せずにいると少女はぽつりぽつりと言葉を繋ぐ。

「たすけ……て……くれて……ありがとうございます……」

「あ、いや……その、どういたしまして?」

元々はなすことが得意じゃないハチマンはどぎまぎしながら言葉を返す。そして少女は立ち上がり去ろうとしていたがなぜか俺はその少女の服の袖をつかむ。

(?・何で止めた……?)

少女は俺の行動にまた目を見開き驚いている。そして俺自身も驚いていた。何で自分が引き留めているのかわからなかった。ただなんでかこの子が消えてしまうようなそんな気がした。

「あ……の……?」

「あ……その……すまん……」

不思議そうに見られ俺は謝りながら袖を離す。

「ど、どう……したんですか?」

「い、いやその俺もよくわからん…」

「…」

ぽかーん、と俺の顔を見ていたがその表情は崩れかすかに破顔する。

「ふ…ふ…ふ…」

「…」

「あ、ご、ごめん…なさい…」

「…いや大丈夫だ気にするな」

目をそらしながらぶつきらぼうに返す。

「じゃあ…そろそろ…」

「あ…」

俺が立ち上がり、来た道を帰ろうとすると今度は少女が俺の袖をつかむ。

「ど、どうしたんだ？」

「…」

少女はまた口を閉じたままになる。しかし言いたいことはその表情を見れば一目瞭然だった。

「…またあしたここにくる」

「！」

「もしだれかいたらまあうれしいな」

「…」

さつきまで寂しそうな顔を浮かべていた少女は俺のセリフを聞き嬉しそうに表情を崩す。

「まあだから…その、またあした…なそれじゃ」

「う…ん…！」

そこからはその少女との奇妙な日々が始まった。最初の内は無言で一緒にいるだけだったがその内段々と言葉を交わすようになり数日経てば口調も砕け普通に会話できなくなっていった。その反面少女の表情に陰りがさすことも増えて言った。そしてある日。

「ね、ねえ」

「ん？」

その日は珍しく彼女の方から話をかけられる。

「もし、もしさ君の仲のいい人が人じゃなかったら…その人とはもうかかわらない？」

いきなり変な質問を投げかけられる。特殊な質問だったが悩むことなく俺は即答をする。

「べつにどうもしないとおもうぞ。そいつがひとじゃないからって関わらない理由には

ならないからな。なんならこんなのかかわってくれているなら、おれから頼んでかわってもらうまである」

俺のその回答を聞くと彼女は嬉しそうな悲しそうなそんな複雑な表情を浮かべる。しかしそれもすぐで彼女は泣き出してしまふ。

「ど、どうした？そのなんかしたか？」

その姿を見てかなり慌ててしまふ。しかし当の本人はそんなのお構いなしに俺に近寄りそして抱きつかれる。困り果てた俺は取り敢えず彼女を抱き返し泣き止むまで頭をなで続けた。

「おちついたか…？」

「…」

彼女が泣き止み暫くして声をかける。しかし彼女からの返答はなかった。先程から彼女は決意したように顔を上げては俺を見て俯くと言うのを繰り返していた。ただ俺は何となくあることは察していた。

(たぶんこのこは…何かを抱えてる)

普段の会話からも名前を聞いても答えようとせず、なにより初日は拙かった言葉もなぜかここ数日で流暢にしゃべれるようになっていた。そこから違和感があった。しか

し俺がそれを言ったところでこの子が逃げてしまうことは想像に容易かった。だからどうするか考えていると。

「ハチマン君…私のお話を聞いてくれないかな」

「…俺でよければ」

「ありがとう…」

しばらく無言の時間が流れる。数秒後彼女は意を決したように俺の目を見る。その目には恐怖に覚悟、後悔様々な感情が浮かんでいた。そして口を開く。

「あのね…私ってね人間じゃないの」

「…」

驚き無言になっている俺を置いて彼女は話を進める。

「私実は世にいう精霊ってやつだね。でもね私出来損ないなの。普通精霊って炎とか水とか何かを司ってるの。でも私は何も無いの。それでもなぜか精霊として存在してる。おかしい話だよ。だから私は出来損ない」

「べつにそんなことないだろ」

「え？」

自分とは次元の違う話だったが自分を卑下するような口調に思わず口をはさんでしまふ。

「べつに出来損ないとかじゃないだろ。精霊って本でよんだことあるけどすごいんだろ？それならその時点ですごいし、いまなんにも司っていないってことはこれから自分の好きなようになれるってことじゃん」

そういつた俺の方を泣きそうな顔で見つめてくる。そして何かをこらえながら絞り出すように声をもらした。

「…だめ、だめだよハチマン君。なんでそんなに優しくしてくれるの？嫌われようと思つたのに…だから人じゃないことも打ち明けたのになんで、なんで受け入れてくれるのダメ、ダメなんだよ…」

もしかして嫌われていた？なんて考えが頭に浮かぶが彼女の次の一言でそんな考えも全部吹き飛ばす。

「私もう少して消えちやうのにつ…！」

「は…？」

「っ！」

やってしまったそんな顔を浮かべるがそんなのを気にする余裕はなかった。

「なん…で」

頭の中でぐるぐると思考が回りきこうと声を出そうとするが絞り出したその声は自分で驚くほどにか細かった。

「…」

「なんでどうして」

また目の前で誰も守れないそんな絶望に似た何か胸を満たす。

「お願いだ…答えてくれ…」

「…ごめんごめんねハチマン君」

「…なんで謝るんだよ」

「こうなることは分かっていたのにあの時引き止められて嬉しかったのそれでつい引き止めちゃったの優しいあなたが傷付くことくらいわかってたのに」

謝りながら俺の目の前で涙を流す。

「私生まれただけの精霊なの。でも何も司ってないから力が弱い。だから…」

だからもうすぐきえてしまう——そう言葉を繋ぐ。その言葉を耳で聞きハチマンは放心状態に陥る。がすぐに頭を振って正気に戻る。精霊のことは本で読んで多少の知識はあったが雀の涙ほどでほぼ無知に近かった。その上司るものがない精霊なんて前代未聞であることは間違いない。いくら考えても何も出てこない。混乱に混乱を重ねるがハチマンは助けたいその一心で彼女に問う。

「…助かる方法はない…のか…?」

「…ないことはない…と思う…」

「!? 本当か!？」

「…私力が弱いつて言ったけど、力自体はあるの。でも何も司るものがないからその力を扱うことができずに垂れ流したままになって…だから私が普通の精霊になれば…」

多少冷静になった少女はそう言う。でもそんなこと不可能だとも言うように顔を歪める。そんな彼女の顔を見ながらハチマンは思考する。

（原因は力が垂れ流しになってること…。つまりそうなるには力を完全に掌握し制御することが条件…？でもそんな事一朝一夕でできることじゃない。でも時間があればもしかしたら…）

思考の海へと潜っていく。最初こそ絶望しかけたが助かる方法があると聞いてすでにハチマンは彼女のために何ができるかそのことで頭がいっぱいだった。そして考えに考え精霊についてあることを思い出し一つの可能性にたどり着く。ただ不確定なことが多くそのピースを埋めるために少女に声をかける。

「一つ考えがある。それを聞いてどう思うか聞かせてくれ」

「え？か、考え？」

「ああ、俺なりに色々考えてみたんだ。まあ一つしか思い浮かばなかったんですけど」

「…」

少女は啞然としていた。自分ですら諦めていたというのに彼は諦めずに考え、一つ思

いついたことがあると言ったからだ。そのことに暫く呆けていると返事がないことを訝しんだハチマンは少女の顔を覗き込む。

「もしかしてダメか？」

「い、いやいいよ……うん……」

完全に毒気を抜かれた少女はさつきまでの悲しい気持ちなんて吹き飛んでいた。そんな彼女を放っておきハチマンは話を始める。

「まず普通の精霊になるってこと……これについては定義がわからない。だから原因の方に目を向けてみた。確か力があふれ出てるから普通の精霊とは違ってしかもそれが原因で力がなくなり消えてしまう……て認識であってるか？」

「うん」

「てことは溢れ出すことがなくなれば消えることはないってことだ。その方法としてその力を完全に掌握して制御することができればいいわけだ。でもこれまでの話を聞く限りそんなの一朝一夕じゃできないと思う。なにより時間が足りない」

「……っ」

改めて事実を突きつけられ彼女は齒噛みする。

「なら効率化を図ればいい」

「……え？」

「つまり効率よくすればいいわけだ。てことは溢れ出る精霊の力を一人じゃ制御できないなら二人で制御すればいいんじゃないかって。そこで思い出したんだよ。昔に精霊の力を使える人がいたって話を。そこで一つ聞きたい」

俺はそこでいったん言葉を切り彼女の顔をまっすぐ見つめる。

「俺の身に宿ることは可能か？」

俺が言っていることがいかれてるからか彼女はその目をあらん限り見開く。自分でも頭おかしいことを言っている自覚はある。なんせ女の子に俺の体に入れるかって聞いているんだからな。あれ変態っぽくね？まあそんなことは置いておいて。俺の考えてることは不確定要素も多いしこれで助かるかって言われれば素直にウンとは領けない。でももうこれしかない気がした。そして俺は彼女の答えを待つ。彼女は暫く俺を見ていたが考えるようなそぶりを見せ口を開いた。

「かのう…だと…おもうけど…」

「なら試してみよう」

「だ、だめだよっ！分かってるの？精霊ってのはすごい力があって出来損ないとは言ってもそれなりにあるんだよ？そんな事したら君がどうなるか…」

「まあただじゃ済まない可能性が高いだろうな」

「ならなんで…たった数日過ぎただけだよ？何でそこまで…」

「…もう目の前で誰も守れないのは嫌なんだよ。それにここで女の子を見殺しにしたなんて妹に知られたら怒られてちまうしな」

「…ばか、馬鹿だよ君ほんとに馬鹿だよ…」

「しってる」

呆れたような声音でそう言うが今にも泣きそうな表情をしていた。

「まあこんだけいろいろ並べたけど実際どうなるかわからん。でもこのまま消えるよりはましだと思う。だからどうだ？」

「でもハチマン君が…」

「過去に精霊の力を使っても大丈夫だった人がいるんだからその辺は大丈夫だろ多分知らんけど」

さんざん悩んだ少女はハチマンの提案を承諾する。しかし単純に受け入れたわけじゃなかった。少女は最初はハチマンに嫌われて一人で消えようと考えていた。しかし実際は自分を受け入れ肯定し消えない方法を考えてくれてそれが自分に危険が及ぶことでも厭わないそんなハチマンの言葉を聞いていくうちにある思いが芽生え始めていた。

ハチマン君と一緒に生きたい、と。

しかしこの方法はもしかしたらハチマンに危害が及び最悪死んでしまう。そんなの

は嫌だ。でも辞退してもこの少年は認めてくれない。ならどうするか。そこで少女はあることを考えつく。

「わかった」

「…そうかそれなら頼む」

「うん」

その言葉を皮切りに彼女の周りで不穏な空気が纏わりつく。

「…本当にいいの？」

「ああ、来い」

俺がそう言うのと少女は俺の方に近付き、当たり前そうになった時体が光ったと思ったら

「…何でここにいるんだ？」

記憶がなくなっていた。

「おい」

「…てへ」

「おい」

全部記憶を取り戻した俺はくだんの彼女の方を冷ややかに見る。

「何でおれの記憶がなくなってたんだよ」

「やっぱ精霊の力を宿すって代償があるものなのようんうん」

「……………」

「な、なによ」

「…ほんとうは？」

「いやだから代償で…」

「お前記憶戻す前記憶消したの私の独断って言ってただろ」

「…てへ！」

「…」

そこからひたすらジト目で見ていると堪忍したのかぼつぼつと話し始めた。聞いた内容をまとめるとどうやら取り敢えず記憶を消しておいてなんかあった時にすぐに出ていく気だったらしい。

「…」

「そんな睨まないでよ…」

「い、いや別に睨んでないけど…」

「私だって生きたかったけどハチマン君に何かあつたら嫌だったんだもん…」

「ぐっ…」

段々と尻すぼみになっていく彼女の様子に言葉が詰まり何も言えなくなる。ていうか可愛い。いや見た目靄なんだけどね？そんな風に考えていると彼女が靄だったことを思い出す。そういえば何で靄なんだ？そんな疑問が沸き上がると更にいろんな疑問が頭の中で思い浮かぶ。それを解消しようとハチマンは彼女に話しかける。

「少し質問いいか？」

「いいよ」

了承をもらいそこから質問を重ねていく。

「何で靄なんだ？」

「いやあ久しぶりにハチマン君に会うってなるとなんか恥ずかしくて…」

「そ、そうか…」

恥ずかしそうなその声音でほんとに恥ずかしがっていることがわかる。と言うかこっちまで恥ずかしくなる。

「でもその…元に戻ってくれと助かる。今のままだと違和感しかねえ…」

「…わかった」

そう言うのと彼女（靄）が光り思わず目をつむる。そして光が収まり俺が目を開けるとそこには赤髪の美少女がいた。風貌は昔と変わっていなかったが成長し身長は俺の首元ほどで綺麗な赤髪をしている。その容姿に思わず見とれてしまう。

「ど、どうしたの？」

「い、いやその何でもない。それより次の質問だ、その名前は何なんだ？」

誤魔化すように次の質問を投じる。

「そういえば誤魔化して教えてなかったね。私の名前はティポだよ」

「なんで誤魔化してたんだ？」

「ハチマン君の前からいなくなるつもりだったからね。すぐ忘れてほしかったし教えてなかったんだ」

「…そっか」

「まあ消えることはなかったんだけどね」

「そうだまだいるってことは普通？の精霊になれたんだな。何の精霊になったんだ？」

「ん？ハチマン君を司る精霊」

「へえ…え？」

「え？」

「…何を司る精霊だった？」

「ハチマン君」

「…」

「この子は何を言ってるんだ？俺を司る精霊？ただただ困惑しているとその様子を見

たタイプが説明を加えてくれる。

「まあハチマン君を司ってるって言うかハチマン君専用の精霊？みたいな？」

「どういうことだよ…」

「私もよくわかんないけどね。ただ何かいつの間にかそうなった。まあそんな気にしないで。私でもよくわかんないし私は存在してる。それでいいんじゃない？」

「そういわれ、確かに当初の目的は達成してるしいいのか？と納得する。当の本人もわからないって言ってるんだったら俺に分かるはずないし。それで無理やり納得した俺は次の質問に移る。」

「それじゃあ三つ目、何で赤髪になってるんだ？確か会った時は銀髪だった気が…」

「ああ、それはハチマン君の魔法のせいだよ」

「魔法？俺魔法なんて発現してないぞ？」

「？気付いてなかったの？君とベル君が読んでたのって魔導書だよ」

「…え、魔導書？」

「そう魔導書」

「…まじ？」

「マジよ」

「マジかあ…」

魔導書。それは読むだけで魔法が発現すると言う優れもの。勿論そんなもの何個もこの世界に存在してないそのため値段は張りそれこそ「ヘファイストス・ファミリア」の武器かそれ以上の価格となっている。そしてそれを俺は読んだと言い、なおかつベルもそれを読んだと言うのだ。しかもどつちも借り物。信じられないし何より信じたくなかった。

「それでその魔法を通してこうやって話しかけてるんだけどハチマン君が望んだ魔法って炎なんだよね。だから髪が赤になってるんだよ。炎なら赤、水なら青って感じだね」
「…」

そう説明を重ねてくれるティポの声を聴きながら頭を抱え、これから始まるであろう借金生活に思いを馳せる。

（やべえぞこれ…。…いやそもそもこんな高価なもの忘れる方が悪い。つまり俺は悪くない。てかなんならいつそ燃やせば…。）

「ハチマン君」

お得意の責任転換で無理やり納得し、問題を解決（？）したところでティポに声を掛けられる。

「どうした？」

「そろそお別れみたい」

どういうこと、というより早く俺の体が浮上する。

「!?」

「外でヘスティア様が君の事を起こしてゐるみたいだから行つておいで。それじゃあまた後で」

ティポは微笑みそう告げる。それと同時に俺の視界は暗転した。

「…マン君。ハチマン君っ!」

俺を呼ぶその声に反応し俺は瞼を開ける。

「…ヘスティアか」

「ああ、そうだよ、僕だ。どうしたんだい、二人してテーブルで突っ伏したりなんかして?寝るならもつとましなところで寝ればいいじゃないか」

そう言われ横を見ると今起きたのか目を眠そうにこすつている。そんなベルを見ながら今一つ働いていない頭で何があつたのか思い出す。

(確か…部屋で本を読んで…変な靄が…!?)

そこでティポとの事を思い出し、思わず辺りを見回すがもちろんそこはホームでティポはいない。

「ど、どうしたんだい?ハチマン君」

「いや…なんでもない。気にしないでくれ」

その答えに納得したのかヘステイアは

(あれは…夢か…?)

『夢じゃないよ』

(うおっ!?)

いきなり頭の中でティポの声が響き、声には出さなかったものの驚き硬直する。

『ふふっ』

(笑うなよ…ていうか喋れるんだな)

『うんこうやって話すことはいつでもできるから用があるときは呼んでね』

(…了解)

そこで会話は終了し、その後は夕食の準備をし順番にシャワーを浴び、「ステイタス」の更新をすることにした。ヘステイアは針を出して刺し神血をにじませている間にベルが上着を脱ぐ。俺はその間ソファーに身を任せる。

(疲れた…まあでもよかった)

たったそう思いながらティポのことを思い出す。あの時驚きすぎてそんなこと考える暇もなかったが今頃になってティポが生きていたその事実をかみしめる。そうこうしてらうちにベルのステイタス更新が終わるが最初はヘステイアその次にベルが悲

「軽いなっ!？」

いやだつて事前知ってたし…。まあ知った状況が状況だったからティポに言われ
ても全然驚かなかつたけど。そんなことを考えながらヘスティアから紙を受け取る。

ハチマン・ヒキガヤ

L v. 1

力：S 967

耐久：S 902

器用：S 996

敏捷：A 891

魔力：I 0

《魔法》

【サラマンダー】

・付与魔法（エンチャント）

・炎属性。

・詠唱式【纏え】
ファイ・オーガ

《スキル》

【

「…」

俺は紙を無言で眺める。事前に知ってはいたがやはりそれが事実だと確認できると喜んでしまう。

「魔法まで発現しちゃうなんて…例のスキルが魔法に影響を？うーん、わからない」

ヘステイアが横でぼそぼそ言っている。しかしその内容は聞き取れなかった。

「君たちの水を差すように悪いんだけど、早速魔法について考察しよう。気になることがあるんだ」

「はいっつー！」

ベルは立ち上がって大きく叫ぶ。だからうるさいっての。

「いいかい？ 掻い摘んで話すけど、魔法ってのはどれも『詠唱』を経てから発動させるものなんだ。これくらいは知ってるかな？」

ヘステイアの問いに俺もベルも交換した互いのステイタスが書かれた紙を見ながらうなずく。

（「ファイア・ボルト」ねえ…。名前に雷もしくは炎の魔法か。それに速攻魔法…あれか詠唱は魔法の名前ってことか）

「本題に入るね。ボクの友人に聞いた話だと、詠唱分は魔法が発現した際（ステイタス）の魔法スロットに表示されるんだ。ハチマン君のようにね」

「え…でも僕のところにはそんなのなかった気が…」

「そう、それなんだ。おっと、ボクが書き忘れたなんて勘ぐらないでくれよ?」

どうやら勘ぐってたらしいベルは気まずそうな顔をする。

「ここからはボクの完全な推測だ。スロットに捕捉されている詳細情報、この文面からすると…ベル君の魔法は…『詠唱』が必要ないのかもしれない。ハチマン君はどう思う?」

「俺もそうだと思うぞ。速攻魔法って多分そういう事だろ」

「じゃ、じゃあ、この「ファイアボ」——むぐつ」

ベルがその魔法名を言おうとするや否や俺とへスティアが口に手を当て黙らせる。

「…迂闊に魔法の名前を言わない方がいい」

「むぐうつ?」

「多分魔法の名前がトリガーのはずだ。しかも名前から考えるに炎か雷の魔法でことは…」

ベルの顔がさあ、つと青くなる。今ここでそんなものぶつ放せばどうなるかどうなるかわかったのだろうか。

「結局推測だから、何が正しいかなんて当てにならないけど…明日ダンジョンで試し撃ちでもしてくると言い。それで君の魔法の正体はつきりするはずさ」

「えっ、明日…?」

「おいおい、今からダンジョンへ向かう気かい? シャワー浴びちゃっただろう? 慌てなくとも君の魔法は逃げたりなんかしないぜ?」

「あ、はい…:そうですね」

不満そうな顔をしていたベルはヘスティアに諭され寝る準備を始める。そして消灯。
 (ふっ…おもちゃを与えられた子供みたいにわくわくしてんな。それにこういうのはヘスティアが寝た後にでも…)

『ハチマン君も変わんないと思うけど』

うるさい。

「やつぱお前(ハチマン)も同じこと考えてたか(考えてたんだね)」

ダンジョンの一階層。そこでざつ、と二つの足を止める音が響く。同じことを考えていた俺達はダンジョン内で出会う。

『ギイ…!』

そこにタイミングよくゴブリンが二匹現れる。

(付与魔法…:てことはナイフにでも付与するの…?)

獲物を見つけた俺は魔法に関して考える。そうこうしてるうちに隣では手をグー、

パー、と開閉を繰り返して右腕を真つすぐごぶりんへと突き出す。そして少しの呼吸の後それを咄く。

「フアイアボルト！」

次の瞬間、ベルの手から稲妻上の炎が放たれる。そして一直線にゴブリンへと向かい着弾し、まばゆい爆光が炸裂する。

『…ア』

全身を黒焦げにし、至る所からももうもうと煙を立ち昇らせるゴブリンは、呻き声だけを残し絶命する。

「…うそ」

隣で信じられないと言う風に咄くベルに負けじと俺もそれを咄く。

【フイ・オーガ纏え】

その瞬間俺の腕、足、背中から炎が上がる。それを目視で確認すると感嘆の息を漏らす。

(すげえ…これが魔法…よし)

確認を終えゴブリンの方を向き、踏み込む。

「いっ!?!」

『ギヤツ!?!』

しかし予想外の加速に驚き態勢を整える暇もなくゴブリンに体当たりしてしまう。そして何とか着地をする。

(なんだこれ…体の調子が違いすぎる…でも…)

思わずベルと顔を見合わせる。確かな手ごたえ、確かな前進、魔法を使った実感。目に見える大きな成長。それを認めてしまえば後ははやかかった。

「つつ!!」

お互い思わずガッツポーズをしてしまう。ティポに伝えられた時やヘスティアに伝えられた時も状況が状況で喜ばなかった反動が今ここである。そしてお互い調子に乗ってしまった。次なる得物を探し、その場から二人で駆け出す。

「ファイアボルト!」

「ファイ・オーガ!」

『『エブシツ!?!』』

モンスターを見つけては魔法を纏い倒す。

「ファイアボルトオオオオオオオオオオツ!!」

「ファイオーガ!!」

『『ブギアアアアアアアアアアアア!?』』

即見即殺。何度も魔法を連発しどんどんとダンジョンの奥に進んでいく。

「やべ、五階層まで来ちゃった…」

冒険者登録をした初日を思い出し、少し反省する。冷静になった俺は精神疲弊を危惧マインドダウンしてベルの方に呼びかけようとするが

『やっぱハチマン君も子供じゃん』

頭の中でティポの声が響く。

(しようがないだろこれは不可抗力。つまり俺は悪くない世界が悪い)

『…』

何かあきれられてる気がするが気のせいだろう。

『あ、そういえばその魔法イメージしたらある程度のものなら作れることができる炎で
だけど』

(え、まじ?)

それを聞いた俺はさっそくイメージをする。イメージするのは剣。それをイメージしながら詠唱式を呟く。

「ファイオーガ纏え」

すると俺の目の前で剣らしきものが精製される。炎で。

(でもなるほど…使いようによっては便利だな…)

見た目こそ不格好だがそこは練習次第だろう。ある程度検証を終え結論を出した俺

は今度こそ帰ろうと――

「――あ?」

そこで違和感に気付く。グラリ、と視界から音が鳴る。

「う…!?!」

この感覚には知識があった。

(魔法使用後の急な酩酊間…これは…マインドダウン!?!さつきまで余裕があったはずなの…!?!)

『あ、イメージで作るの消費激しいの忘れてた』

(原因はそれかよ…!?!でもベルが…)

薄れゆく意識の中でベルの方を見るともうすでに倒れていた。

(あの野郎…)

ふざけんなど言う前に俺は意識を手放した。

#12 面影

「……？」

「どうした、アイズ？」

二人の冒険者が五階層に足を踏み入れていた。

「人が倒れてる」

「モンスターにやられたのか」

ホームの真ん中にぼつねんと、二人の冒険者が転がっていた。まるで行き倒れのように倒れてるそれに、二人は近付く。

「外傷はなし、治療および解毒の必要性も皆無…典型的な精神疲弊だな。こつちも…ん？この少年は…」

思い出されるのは数日前での酒場での事。うちのベ^馬ト^鹿がそしり我々「ロキ・ファミリア」に宣戦布告をした少年。

「どうしたのリヴェリア…あ…」

「気付いたかこの子あの時の少年だ」

「うん。それにそつちの子も…」

「…なるほど。件のもう一人の少年か」

リヴェリアはアイズからベルのことは聞いていた。あの日逃げだした少年が嘲笑されたもう一人の少年だと。リヴェリア自身はその話を聞いて何よりハチマンの言葉を聞き深く反省した。彼等には悪いことをしたと。

「リヴェリア。私、この子達に償いをしたい」

「…言いようはほかにあるだろう」

硬すぎる、とため息をつく。しかし当の本人は何を分かっているかというのでリヴェリアは何も言わないことにした。

「まあ、この場を助けるのは当然の礼儀として…」

まだまだ起きそうにないことを確認すると、ちらりと横目で少女を見やった。

「…アイズ、今から言うことをこの少年にしてやれ。償いなら、恐らくそれで十分だ」
「何?」

リヴェリアは簡単に内容を伝えた。

「…そんな事でいいの?」

「確証はないがな。だが、この場を守ってやるんだ、これ以上尽くす義理もないだろう。…それにお前のなら喜ばない男はいないさ」

「よく、わからないよ…」

分からなくてもいいいき、とリヴェリアは苦笑した。アイズは暫く考え込み、やがて顔を凜々しく構える。

「わかった。私はこつちの子にするからリヴェリアはそつちの子に」

「ああ、わかった私はもど…え？」

「？」

きよとん、とアイズは首をかしげる。それがさも当たり前と言わんばかりに。

「リヴェリアはしないの？」

「いや、私は…」

「でもこの前リヴェリアも反省してるって…」

純粹な瞳で見つめられリヴェリアは身動きする。

「…わかった私もしよう」

そこでリヴェリアはおれ、二人で償いをするようになった。

まどろみに抱かれていた。包み込んでくれるようなぬくもり。穏やかだ。ずっとこのまどろみに包まれていたい。

(…?)

そつと頭を撫でられる。優しい優しい指使い。昔遠い昔誰かに頭をなでられた気が

する。

(…おふくろ?)

遠い向かしまあ生きていたところにそう頭をなでられた気がする。そこからおずおずと瞼を開ける。すると瞳にぼんやりと輪郭がうつる。

(!?)

かすむ瞳を一気に見開く。次第にはつきりしていく顔のパーツ。最初に見えたのは緑の髪。そして長い耳に整った顔。最後は髪の色と同じ瞳。

[…]

「む、起きたか?」

目は覚めたしかし頭はさえない。状況の理解ができない。ただ何となく予想はついている多分膝枕をされている。周りを見るとモンスター死骸が転がっており横にはアイズ・ヴァレンシユタインに膝枕をされているベルの姿があった。なるほど…。

「…夢?」

「…現実だ」

それから全力で立ち上がり飛びのき距離を取る。そして改めて顔を見る。

(この人酒場に…てことは【ロキ・ファミア】か…。緑の髪と瞳そしてエルフ…つまり)「九魔」だああああああああああああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああ!!」…

俺が咳こうとするとベルが全力で叫びながら走り去っていく。それを俺とヴァレンシユタインさんと「九魔姫」が啞然とした顔で見送っていく。また気まぎれなぞでメエこの野郎!!

「…何でいつも逃げちゃうの?」

「ぷっ…ぷっ…」

「…むう…」

悲しそうに咳くヴァレンシユタインさんを見た「ナインヘル」が笑う。それを見たヴァレンシユタインさんは頬膨らませながらポカポカ、と「ナインヘル」を叩いていた。叩いているといつても俺が殴られてもいたくないような威力だ。するとナインヘルは堪えられないと言う風に声を上げて笑い出す。その光景をただただおれは眺めていた。

（何あれ可愛い…ていうかあんな美人に膝枕されてたならもうちよつと『ハチマン君?』なんでもないですええ）

「黒髪の少年」

「ひゃい!!」

いきなり声をかけられた俺は素っ頓狂な声を上げてしまう。くそ恥ずかしい…。そして二人と視線を合わせると最初はむくれ顔だったヴァレンシユタインさんもナイン

を思い出し何を言いたいのか理解する。要するにベルが逃げたことを気にしてるんだろう。そのあまりに悲しそうな表情に思わず声をかけてしまう。

「あー、その、ベルはああベルってさっきの白髪のやつですけどそいつは嫌で逃げたわけじゃないですよ」

「ほんと…!?!」

「ち、ちかいちかい」

おれがそう言った瞬間ヴァレンシユタインさんが鼻と鼻が触れ合いそうなほど近づいてくる。速い近い近い匂い

「ほ、ほんとですよ。女性に耐性がないんでああやって恥ずかしがって逃げただけですよ」

「そっか…。ねえ君名前は？」

「ハチマン・ヒキガヤです」

「ハチマン…ハチマンは私の事怖い？」

「ヴァレンシユタインさんが？」

「うん。それと私のことはアイズでいい」

「ヴァレン「アイズ」ヴァレ「アイズ」…アイズさん」

俺がそう呼ぶとヴァアレ「アイズ」おい脳内にまで来たぞこの人。

『素直に呼んであげればいいのに』

(俺みたいなのにはきついんだよ…)

『でも嬉しそうだよ?』

(気のせいだろ)

俺はティポとの会話を切り上げアイズさんの問いに答える。

「まあ怖いとは思いませんよ」

「!ほんと?ほんとに?」

「だから近いって…!」

ほんとにこの人のパーソナルスペースどうなってるんだよ。勘違いしちゃうだろ。そして告白して振られるまでである。わお振られちゃった。『どんまい』お前はマジで黙れ。

「ぶっ…」

そんなアイズさんと俺のやり取りを見てナインヘルはまったくすくすくと笑い始める。

「あの…ナインヘルさん笑う前に助けてくれませんかね…?」

「ふふっ…いやすまない。普段見ないアイズの姿について…な。それと私もリヴェリアでいいぞ」

アイズさんも呼んだのだからどうにでもなれとリヴェリアさんもそう呼ぶことにする。ここで俺はこの人達に喧嘩を売っていたことを思い出す。今更ながら冷や汗が出る。

てくる。取り敢えず謝つとこう。

「そういえばあの日すいませんでした」

「あの日?」

「あの酒場でのことです。まああの犬に謝る気はありませんけど空気を悪くしてしまつたでしょうし」

「いや原因はうちの馬鹿者だ。それにあの時止めきれなかった私にも責任がある。こちらの方こそすまなかつた」

「い、いや頭を上げてください。それより他の「ロキ・ファミリア」の人にも言つといてくれると助かります。あの犬以外」

「ふふつ、ああベート以外の者には伝えておこう。といつても大半のものは気にしていませんと思うが」

ならよかつた。今【ロキ・ファミリア】に襲われたら勝つ見込みなんてないからな。まああの発言を嘘にする気もないけど。

「それじゃあ俺はそろそろここで。助けてくれてありがとうございました。この恩はいつか返します」

「気にしなくていい。あの時のお詫びだと思つて受け取つておいてくれ」

「いやいつか返しますでは」

「あ……」

俺はそう告げると足早にダンジョンの出口を目指した。

「いつちやった……」

寂しそうにつぶやくアイズの姿を見てまた心の中で笑ってしまふ。

（本当に変わったな……）

思い出すのは初期の頃のアイズ。モンスターを狩ることしか頭になく、そのバーサーカーっぷりには私もフィンも肝を冷やしたものだ。それが今ではハチマンと言う少年の別れやベルと言う少年に逃げられたことを悲しんでいるように見える。

（それにしても……あの少年……）

酒場での一件以来の邂逅。

（話してみると捻くれてるが面白い少年だ）

あの時とは別人だが、と苦笑する。Lv6である私が押されたほどの圧が彼からは一切感じられなかった。今でもあの時と同じ少年だと言うのが信じられない。

（ハチマン・ヒキガヤ……覚えておこう。……それにしても……）

リヴェリアはその名を呟くとともに先程のセリフを思い出していた。

（私のも……嬉しかったと言うのほんとだろうか）

意外に乙女なリヴェリアたんであった。

ダンジョンから出てきた俺は一度ホームへと帰りダンジョンに潜る準備をし『豊饒の女主人』へと足を進めた。ホームに戻った際ソファアの上で蹲って嘆いているベルがいたが、めんどくさそうなので放置した。

「おはようございますー」

小声で挨拶をしながら『豊饒の女主人』の裏手にある庭の扉を開ける。

「ーおはようございますヒキガヤさん」

するとリユーさんから反応が返ってくる。見ると素振りをしていたのか木刀を片手に佇んでいた。そこから俺は同じ木刀を受け取りリユーさんの前で構える。お互い口下手なことも相まって挨拶をすると特に会話をすることもなく戦闘態勢に入る。

「行きます」

合図はいつも俺から。その合図と同時に俺は踏み込みリユーさんの目の前まで迫ると下から上へ木刀をふるう。

(前よりも速いっ！)

確かにハチマンは速かった。しかしそれはあくまでLv1の中での話。多少驚きはしたもののリユーはその刃を軽くないです。そして反撃と言わんばかりに木刀をふるう。

それをハチマンは避け時には受け流し反撃をし…その激闘の中でリユーは純粹に恐怖する。

(初日とは比べ物にならないほどの速さ…。それに駆け引きと技。貪欲すぎるほどの渴望。本当に未恐ろしい)

この少年は将来必ず化ける、と確信があった。そうこうしてらうちにも少年の攻撃が頬をかする。リユーはそのお返しに木刀を縦にふるった。それをハチマンは木刀を横にし両手を添え受け止める。そしてハチマンは支えていた方の手を離しそれを見たリユーはまた受け流される、と考え力を抜き次の一手に備える。その瞬間ハチマンがニヤリ、と笑う。

(っ!?)

それに気づいた時にはもう遅かった。ハチマンは離れた手を振りかぶり勢いをつけ木刀を殴った。それによりリユーの木刀は払われ僅かに宙に浮かぶ。ほんの一瞬の隙。木刀を払われたリユーの胴体は今無防備。

(しまっ!?)

その一瞬の隙をハチマンが見逃すわけもなく胴体目掛け木刀を一閃する。そしてその攻撃は抵抗されることなくリユーの脇腹を直撃する。

(っ!!)

(やっと一発…!?ぐべれっ!?)

やっと一発入れられた、そのことで喜び一瞬油断したハチマンはリユートの蹴りが横腹に入り吹き飛ぶ。

「…ハチマンさん」

「…はい」

「覚えておいてください人はとどめを刺す時などもっとも油断する」

「はい…肝に銘じます」

とどめとまではいかなくても攻撃を入れたことで油断してしまったハチマンは素直に反省する。そしリユートに対し流石だ、と関心するが当の本人は内心バクバクだった。

(今のは危なかった…)

別に油断したわけじゃなかった。なのにも関わらず一撃入れられた。この事実があの瞬間リユートに本気を出させた。その証拠にハチマンはリユートに本気で蹴り飛ばされ未だにそのダメージから回復できていなかった。

「今日はこの辺にしましょう」

「はい…」

未だダメージから回復してないことや一撃入れられたこともありハチマンは了承する。そしてその直後

「シルさんはいますかっ!」

忙しないベルの声が響いた。

開店してないにもかかわらず騒がしい『豊饒の女主人』の扉を開ける。すると丁度焦った表情のベルとシルさんが話している所だった。

「…それは、大変なことをしてしまいましたね、ベルさん」

「ちよつとシルさん!? 何でさも他人事みたいに言ってるんですか!？」

「うるせえっ!」

「あつ! ハチマンっ! た、大変なんだよ! 僕たちが読んだの魔導書らしくて!」

「おうそやか」

「軽いよっ!？」

「うっとおしいよ、坊主。人様の店で、朝っぱらから」

そういう問答を繰り返していると、騒ぎを聞きつけてか、なんと女将のミアさんが姿を現した。ミアさんにビビって固まっているベルの手の中から二つある本のうち一つをひよいつと抜き取ってパラパラと中身を確認する。

「確かに魔導書だねえ…でもまあ、読んじまったもんは仕方ない。坊主、気にするのはよしな」

「ええっ!?で、でもっ…」

「こんなもの読んでくださいとばかりに店に置いて言ったやつが悪い。坊主が読まなくたって貴重な魔導書を見つけたら、自分のものだと嘘をついてまでそこの冒険者が目を通していたよ。これはそう言うもんさ。それにその坊主は割り切っているみたいだしね」

「そう言うことだべル。気にするな」

「…あんたはもう少し気にした方がいいと思うけどねえ」

「あつはは…」

ミアさんは呆れたような顔で俺の方を見る。その後ミアさんは俺達のことを一瞥すると店の奥へと帰っていった。

「…えつと、すいません、お騒がせしました。じゃあ、ボクはこれで」

暫くしてから俺とベルは顔を見合わせ踵を返そうとすると、ベルはシルさんに、俺はリューさんに引き止められる。

「ヒキガヤさん…その…」

「…も、もらいます」

おずおずと差し出されるバスケットを受け取る。見るとベルも受け取っており顔を赤くしている。そして俺達は顔を赤くしながら感謝を伝え今度こそ『豊饒の女主人』を

後にした。

いったんホームに戻った俺達は魔導書を置き、ベルの準備を待つ。

「そうだハチマン！」

「ん？」

「回復薬ももう切らしたし、ミアハ様のところによつてみない？」

ベルにそう言われ確認してみると回復薬の数が心許ないことに気付き、それを了承する。そこから準備を終えダンジョンへと向かう。そしてその途中の西のメインストリートを外れた少し深い路地裏。そこにぽつんと建てられた一軒家。

「すいませーん、おはようございまーす…」

両開きの木扉を少し開けて覗いてみると、薄暗い店内では一人の獣人の女性は戸棚の中身を物色していた。彼女は俺達に気付き、半分瞼の下りた眠そうな目を向けてくる。

「おはよう、ベル、ハチマン。久しぶり…」

抑揚のない声で挨拶を告げてくるが彼女はこれが素だ。前回たまたまあつたミアハ様に案内された時も彼女はこんな感じだった。

「朝早くからすいません。今、大丈夫でしたか？」

「大丈夫、ベル達が帰ったらお客なんて来ないから…。それで、今日は何を買ってきてくれる

？」

笑えないブラックジョークを言いながらカウンターをはさんで俺達と向き合う彼女はしまつてあつたケースを出して、カウンターのの上に置いた。幅広い箱の中で色彩様々な液体が詰まつた試験管が丁寧に並べられている。

「そういえば、ミアハ様は？いらつしやらないんですか？」

「ミアハ様は私用で夕方まで帰つてこない。今日は私一人だけ……」

ベルの問いにそんな答えが返ってくる。

「ベル、どう、そろそろこのハイ・ポーションなんか使つてみない……？」

「いつ、いやあ、僕にはまだまだ早過ぎますよ」

数万ヴァリスで販売されてる高等回復薬を差し出されベルは引き攣つた笑みを浮かべている。そこから俺は二人のことを見ながら適当に回復薬を見繕つていく。

『ハチマン君つて装備品とかあんまりこだわらないよね』

（ん？あーでも確かにそんなこだわっていないのあつたらつて感じだな）

『強くなりたくないんじゃないの？』

（……ああまあ強くなりたいたけどステータスとか武器とか何もなくても俺の中に残る強さが欲しいんだ。まあ確かに守るためには装備がいるのは否定できないからな。だから全くこだわってないってわけでもないぞ）

『ふうんなるほどね』

ティポは納得したのかそれ以上声をかけてくることはなかった。

「わかりました。それで、買います」

「ありがとう、ベル。愛してるよ…」

どうやらベルとナーザさんの会話も終わったらしくそんな声が聞こえてくる。原価九〇〇〇ヴァリスの愛。ずいぶん安い愛だなおい。

俺も回復薬の買い物を終え店を後にする。

「ちよろいな、ベル…」

そんな声が聞こえた気がするがベルの為にも聞こえないふりをしておいた。

店を経った後西の大通りを進んで、中央広場に出る。晴れ渡る空の下今日も円形広場で完全武装をした戦士たちが集っていた。

(リリが遅刻…?珍しいな)

そう思いつつ辺りを見渡してみるとそれらしい姿も見えなかった。仕方がないと思いつつもバベルまで赴こうとすると、その途中三人の大男に囲まれているリリの姿が目に入る。その大男達の形相はとても穏やかとはいえない。難くりりの方も必死に顔を横に振っている。決している雰囲気とは言えない。気づいたら俺はわき目もふらずに歩み

寄っていた。

『…いいからっ…寄越せっ!』

『もうっ…ない…ですっ!本当に…!』

リリの抵抗する声が入る。何の考えもなしにすぐさまその場に飛び込もうとする。

「おい」

「!？」

しかし突然。その動きを肩を掴まれ邪魔をされる。驚きそつちの方を見ると男の冒険者が俺とベルの肩を掴んでいた。

(あ?こいつ…)

「やっぱりあの時のガキどもか…まあいい、聞かぜ。お前、あのチビとつるんてるのか？」

この声と見た目。間違いないあの時小人族を襲っていた男だ。

「オイ、さっさと答えやがれ。お前ら、サポーターを雇ってんのか？」

「…あの子は、貴方が追いかけていたパルウムのことは違う子ですよ」

正体に気付いていないベルはそう言う。しかし俺は全部気付いていた。多分種族が違うのは魔法かスキルだろうと踏んでいた。そんな信じているベルを目の前の男はそ

れをあざ笑った。

「バアカ……と言つてやりてえが、思うのはテメエの勝手だ。せいぜい間抜けを演じてろ」
そのセリフにベルは怪訝な顔を浮かべる。恐らくそのセリフに違和感を抱いているんだらう。そして男は嘲笑を引つ込め顔つきを改める。

「それよりお前ら、俺に協力しろ。……あのチビをはめるんだ」

「なっ……」

「ただとは言わねえよ。報酬は払つてやるしアレから「断る」……あ？」

言葉を遮られたせいかわそれとも断られたせいかわ男は不機嫌そうに俺を睨む。さつきからイライラしてた俺はそのまま言葉をぶつける。

「お前に何を言われようとそんな作戦に乗る気はない」

「クソガキがあ……」

男は顔を歪め凄味を利かせてくる。がひるまず睨み返す。暫く睨み合いが交わされるが、男は舌打ちをし踵を返す。

「……お二人とも？」

「……」

背後からの眩き。ばつ、と後ろを振り返るとリリが呆然と俺達のことを見上げていた。

「リ、リリっ？いつからそこに？」

「ちようど今ですけど…あの冒険者様と、何をお話していらっしやったんですか？」

「ちよつとあの冒険者にいちやもんつけられて…な」

俺は咄嗟に嘘をつく。そんな俺を口を引き結んで少し暗い表情をしている。

「そ、そうだっ！なんだか絡まれていたみたいだけど、リリは大丈夫だった!？」

「見ていらっしやったんですか…。安心してください、リリはこの通り無事ですから」

リリは両手を広げその場でぐるりと回り、微笑んで見せた。取り敢えず乱暴された形跡はなく安心する。

「リリ、あの人達は…」

「リリもハチマン様達と一緒にでいちやもんをつけられてしまいました。リリもハチマン様もベル様も、やはり弱っちく見えてしまうんでしょうか？」

明らかな拒絶。これ以上踏み込んでくるなど言わんばかりに話を遮る。

「さあ、行きましょう。リリは二日も探索をさぼってしまったので、今日はベル様のご活躍を期待させてもらいますよ?」

俺達のわきを通ってリリはバベルへと足を進める。その後ろを黙ってベルがついていく。

『どうするの?』

(どうするもこうするも何もしない)

『何もしないって…危険じゃない?』

(まあ危険だろうな)

『ならなんで…』

(…妹に似てたから?)

『…シスコンめ』

(誰がだ)

お前だよ、とティポは思わず言いそうになるがどうせ何を言っても無駄だろうと察して口には出さない。

(あーあ、もっとハチマン君の役に立てればな…)

これが新たなスキルのきつかけになるとは思わずにティポは心の中でその思いを溶かした。

「話ってなんだいハチマン君?」

ダンジョンから教会の隠し部屋に帰還した後、ベルがヘステイアにリリのことを相談しベルとヘステイアとで色々話し合いをした後俺はヘステイアだけを呼び出した。

「いやちよつとリリのこと話がある」

「さっきのサポーター君の事かそれでどうしたんだい？」

俺はリリのこれまでの事を全部包み隠さずに話した。その話をしていくうちにヘスティアの表情が色々と代わっていく。

「つてわけだ」

「…」

話し終わるとヘスティアは目をつぶり何かを考えこんでいるのかずつと無言でいる。暫くしてヘスティアがゆっくり眼を開き口を開く。

「それで…君はどうしたいんだい？まさかこれを伝えるためだけに呼び出したわけじゃないだろう。キミは時々ポンコツだけど考えもなしにこんなことをする男じゃない」

「お見通しつて訳ね…」

ヘスティアはそこから怒るわけでもなく俺の意見を聞こうとしている。本当にいい神様だ、と再確認する。なんか馬鹿にされた気がするけど。

「キミはベル君ほどじゃないけど分かりやすいからねえ。それで言いたいことは何だい？」

「この一件ベルも言っていたがベルに任せてほしい」

「…何でだい？」

「今のリリにはベルみたいな真のお人よしが必要なんだ」

「なるほど…。もう一つ何で任せてほしいと言ったんだい？」

「…妹に似てたから」

俺はずっと考えていた。何で明らかに自分に害があるリリをこうやって放置しているのか。考えに考えて単純明快な事だった。俺はもうすでに守るべきものにリリをカウントしていたのだ。俺の姿を重ねコマチの姿を重ねたあの時から。本心からあいうことをやっていないことは時々見せる悲痛な表情からもわかっていた。助けようなんて更生させようなんてそんなことは考えていない。ただ見守ることにしたのだ。それこそ妹の粗相を叱る兄のように。だから俺はあえてこれを理由にする。

「…」

俺のその発言を聞いたヘステイアはポカン、と俺の方を見るが段々と眉間にしわを寄せていく。

「本気で言ってるのかい？」

「本気だ」

暫く俺の目を見つめると溜息を洩らし不満げな顔を浮かべる。

「わかった君とベル君に任せよう。ただこれだけは絶対に約束してくれ。その子に嵌められそうになったらすぐに逃げることに危険なことはいらないこと。いい？」

「！わかったありがとう」

「まったくベル君もだけどこの子も中々のお人好しだね…」
「？」

「いやなんでもないよ」

「そうか…：そうだステイタス更新頼んでもいいか？」

「いいよそれじゃあ中に戻ろうか」

「ベル様？ハチマン様？」

「ん」

「！」

思考が浮き上がる。名前を呼ばれ、昨日の記憶から現実に戻される。

「あつ…：り、りり、おはよう」

「うつつ」

「おはようございませす、ベル様。まさかこんな時間にお二人がいるなんて、りりはりりの目を疑ってしまいました」

「あはは、そうだね。どんな時でもりりは僕より早く来てたし」

そんな二人を見ながら俺は周りを見渡す。昨日の男どもを警戒してだ。ダンジョンの外で問題を起こすとは考えにくいがそれでも警戒をする。

「ベル様、ハチマン様」

「あ、ごめん、なに？」

「今日は十階層まで行ってみませんか？」

「えっ…」

隣でベルが驚きその様子をリリはずっと見つめていた。

「どうして、いきなりそんな…？」

「ベル様、リリがお気付きにならないと思つていたのですか？ベル様もハチマン様もとうに踏破できる実力をお持ちになつていたのでしょう？」

…」

リリがベルを説得していく中俺はティパに話しかける。

（どう思う？）

『んー多分何かしらのアクションがあるとは思うけど…とめなくてもいいの？』

（昨日の冒険者のこともあるし、結局先延ばしになるだけで意味がねえ。それにベルが行くと決めたなら俺はそれに従うよ）

『何回も言うけど危険なんじゃ…それにヘスティア様とも危険なことはしないって』

（まあ10階層なら俺もベルも遅れは取らないはずだから大事はないはず。だからこれは危険な事じゃない。それより問題はリリだな）

『屁理屈う…まあいいけど…それに危なくなったらあのスキル使えばいいか』

(あれかあ…大丈夫か?)

『うん!大丈夫だよ!』

(そうか…すまん頼む)

そこからリリがベルの説得が終え、三人で十階層に向かい歩みを進めた。

「頼んだぞ、チュール。査察とは言うが、嚴重には取り締まりすぎないように」

「はい、分かりました」

ギルド本部を出たエイナは上司に見送られ、北西のメインストリートを出発した。

(結局、ベル君達とはあえずじまい、か…)

エイナは昨日ベル達のサポーターであるリリが所属している「ソーマ・ファミリア」について「ロキ・ファミリア」で情報を仕入れていた。ロキから最後に警告をもらいそのことですつと不安を抱いていた。

(順序が逆になつちやうけど…せつかくだし、先に神ヘステイアに事情を話しておこう)
今日自分が査察を行うテナントで働いている女神の顔を思い出しながら、エイナは今日の予定を決める。

「あ」

「……？」

大通りから中央広場に足を踏み入れ、少し進んだ時北のメインストリートの方角からアイズ・ヴァレンシユタインが近付いてくる。

「…お、おはようございます、ヴァレンシユタイン氏」

「…おはようございます」

動揺しながら挨拶をするエイナに対し、アイズはぺこりと頭を下げた。

「ヴァレンシユタイン氏、今日はどうなさったんですか？」

「道具を、買いに行こうと思ってます」

「えっと、バベルに、ですか？」

頷くアイズと会話を進めていくと、どうやら彼女はこのままダンジョンに潜るらしい。

(…まだテンションが高い？のかな？)

エイナは普段のアイズのことを知らないが昨夜ロキがアイズの様子を見て「あのアイズたんが上機嫌やて!？」と驚いていた。そしてその様子は今日に至っても変わっておらずエイナは何となく察する。そこでふと、エイナの視野にとある光景が入り込む。視界の隅の一本の広葉樹、その根元に身を寄せ合っている「ソーマ・ファミリア」のエンブレムを付けた四人の冒険者。エイナは反射的に読唇術で唇の動きを読んでいた。

『——手筈通りに——しくじるんじゃあ——』

『わかつて——アーデの方は——』

距離が開いているため一部を取りこぼしたが、アーデと言う単語を認める。やがて彼らはバラバラに散り、ダンジョンへと向かっていく。

「…どうか、したんですか？」

エイナの異変を悟ったのか、アイズが顔を上げ、声をかけてくる。表情を常より険しくするエイナは、アイズのことを暫く見つめたのち、心の迷いを放りだし、彼女に頭を下げた。

「無礼を承知の上で申し上げます。私の担当冒険者を、ベル・クラネルとハチマン・ヒキガヤを助けてください」

「…」

「私の思い過ごしかもしれません、ですが、彼らは恐らく厄介事に巻き込まれつつあります。厚かましい真似だとはわかっていますが、どうかお力を」

「それは、昨日の…？」

昨夜応接間で話を聞いていたアイズは、直ぐにエイナの言ってることに察しをつけたようだ。顔を上げたエイナは頷き、これまでの詳しい経緯を話す。エイナの話聞き終えたアイズは、「わかりました」と頷いた。

「よろしいのですか?」

「はい…確認したいこともあるので」

最期の言葉に一瞬疑問を感じながらも、エイナは道を譲る。そのままダンジョンへと向かっていくアイズを見届けた。

ダンジョンは8〜9階層で景色と地形が大きく変わる。ルームの数が多くなりしかも広い。しかし出現するモンスターは強化されたゴブリンやコボルトが出てくるようになるだけなので油断さえしなければ楽な階層だと言える。そこまでは比較的楽にたどり着くことができた。しかし肝心の十階層。この階層は…。

「霧…」

深くはないしかし視界を妨げる白い霧が立ち込めていた。

「リリ離れるなよ」

「…はい」

先程から俺とベルで何度も警告する。理由としてはこの霧ではぐれるのもまずいが昨日の冒険者を警戒していたためだ。

「…!」

進んでいた通路を抜け、視界が明ける。草原が続く広々としたホーム。景色の中には

葉と枝を失った枯れ木があたりに点々と立っていた。

「…」

そんな木々の様子にベルが顔をしかめる。取り敢えずモンスターが生まれる壁際は避け広間の奥に進んでいく。木々の様子に目を向けると木肌は意外にもしつかりしており幹は下から上に行くほど極端に細くなっている。それを見ていたベルは俺達の方を顧みる。

「どうしよう。これ、先に切っておこうか？」

「いやそんな暇ないぞ」

前方を見ていた俺は現れたそいつを見据えながらベルに伝える。

『『ブグツウウウ…』』

低い呻き声と一緒に大型モンスター、『オーク』が二匹姿を現す

「やっぱり、大きい、よね…」

「逃げてはいけませんよ、ベル様？」

避けては通れぬ道です、と言うリリにベルはつばを飲み込みながら頷く。

『ブギツ、ブフォオオオオツ…！』

オークはその瞳で俺達のことを射抜く。獲物として俺達を視認し木々の合間を抜け、おもむろに手を伸ばす。そしてその巨腕で一本の木を引き抜いた。先程まで木だった

それは引き抜くと無骨な棍棒へと代わる。

『迷宮の武器庫』

ダンジョンの厄介な特性の一つ。ダンジョンが支援をするように与えられる天然武器。素手でも一癖も二癖もあるのに武器を持つことで更にめんどくさくなる。

「タイミング、悪いよ…」

『迷宮の武器庫』は破壊可能だがダンジョンの一部の為時間がたてば復活してしまう。かと言ってやすやすと強化させるわけにはいかなないので破壊をするのだが…本当にタイミングが悪い。

「…」

二匹いるオークの前に俺とベルはそれぞれ対峙する。そしてオークは待ちきれんとはばかりに雄叫びを上げる。

『ブゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツッ!!』

戦闘開始の合図。それを聞いて俺もベルも地を蹴り駆け出す。

(あの時以来だな…)

怪物祭の時のことを思い出しながらオークの挙動を確認する。オークはその手に持った棍棒を高く掲げている。

(よっ、と)

それを確認すると俺はオークの攻撃のタイミングに合わせ横にずれそれを回避する。そして回避しその腕に一闪を見舞う。

「ふっ!!」

『ブグウウウツ!』

腕からは鮮血が飛び散りオークは雄叫びを上げ少し怯む。

「ほっ!」

『グボ——』

その際に俺は飛び上がりオークの首を飛ばす。絶命したのを確認し、ベルの方を見ると丁度終わったらしく近くでオークが倒れていた。

「リリ。やったよ、お…」

ベルはそこで言葉を切る。気付くと周りには俺とベルしかおらずあとは白い霧を残すのみとなっていた。

(動いたか…?)

そこで異臭が鼻につく。そして異臭の原因はすぐに見つかる。

「これは…」

そこには特殊に加工された血肉が置いてあった。これは効率を上げる為にモンスターをおびき寄せるトラップアイテム…。それに気づくと同時に地響きが鳴り響く。

恐らくオークだろう。しかも足音は一つじやなく複数聞こえてくる。

「?でしょ…?」

——八体。それらを視界に入れたベルが眩く。

「いっ!」

立ち尽くしていたベルがバチン、という音の後に悲鳴を上げる。それに反応しそつちを見るとベルのホルスターに金属矢が刺さり宙を舞っていた。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!』

「いっ!」

一瞬意識をそらした間にオークは距離を詰め俺達に襲いかかる。それを横に飛びよけすぐさま相手を見据えるとそこから二撃、三撃と襲い掛かってくる。それを避け続けているとリリの姿が目に入る。

「リリ!!」

見つけたと同時に叫ぶ。当の本人は宙に舞っていたホルスターを手に取り中から《神様のナイフ》を取り出す。

「ごめんなさい、ベル様。ハチマン様。もうここまでです」

「リリ、何を言ってるの!?!」

「…」

「お二人はもう少し人を疑うことを覚えた方がいいと思います」

瞳はフードで覆われその表所はうかがえない。しかし浮かべている小さな笑みは寂しそうにしていた。

「折を見て逃げだしてくださいね。さようなら、お二人とも。もう会うことはないでしょう」

最期に別れを告げリリは霧の中へと消えていった。

「リリ、リリイ!?」——つつ、あーもうつつ、やつかましいいつ!!」

ベルが焦りながらそう声を上げる中俺はティポに話しかける。

(ティポ…頼めるか?)

『任せて!』

(すまん)

言葉少なく会話を終わらせると今度はベルの方に話しかける。

「ベル」

「な、にかな!?!」

「行け」

「え?」

「ここは任せてリリを追いかけろ」

「だ、駄目だよ！それじゃあハチマンが……！」

「このままリリをほっとくわけにもいかないだろ。それにこの状況を打破する策はある。だから行ってくれ」

「……ごめんハチマン」

「気にすんなほら言った言った」

ベルは俺の言葉に申し訳なさそうな顔を浮かべリリが向かった方向へと走っていった。リリは最後悲しそうに口をゆがめていた。ならリリの中にまだ迷いがあるんだ。なら今リリに必要なのは^{真性}の^{お人好}しベル・クラネルの言葉。普段なら馴れ合いと一蹴してるが今はベルを信じることにした。

(さて……やるぞティポ)

『うん！』

俺は自分の仕事を全うすべく八体のオークを睨み

『【二重存在^{ダブ}存在^{ブル}】』

新しいスキルの名前を呟いた。

#13 リリルカ・アーデ

アイズはダンジョン内を走っていた。腐った目で黒髪の少年と白髪に深紅の瞳の少年を探し求め、片っ端から聞き込みをしながら。そして目撃証言をもとにどんどん階層を下っていき九階層を走破した時にアイズの胸に疑問が生じる。

——十階層？

アイズの知る少年らは駆け出しの冒険者。約二十日前、ミノタウロスに殺されかけていた彼らの動きはL V I Iの中でも底辺——それこそ恩恵を授かったばかりだと言っても過言ではなかった。

(成長、した…?)

この短期間のうちに？当時のアイズですら十層まで行くのに半年かかった。それ彼らは二十日で？しかしそれはあり得ない。

(速すぎる——)

いくらなんでも荒唐無稽だ。そんな冒険者聞いたこともない。ならなんで——ここままで考えたアイズは頭を振る。今は少年たちの救助が最優先。それに聞きたいこともあったのだ救助した後にも聞けばいい、と心の中で結論付け無理やり心を切り替

える。そして十階層にたどり着き、アイズは感覚を研ぎ澄ます。

「！」

するとモンスターのかげり声と、激しい戦闘音、そして人の声が聞こえる。その聞き覚えのある声が聞こえた瞬間アイズは転進する。長い通路を疾走し、音の出どころへと向かう。段々とその姿が見えてくる。暴れまわる巨大な影にその影と交戦する二つの影。

『ティポ！大丈夫か？』

『うん大丈夫だよ！』

そんな会話が聞こえるとともに霧の海が晴れていく。見開かれたアイズの瞳に移るのは吹き飛ばされるオークに、炎を纏った男が冒険者が二人。

——間違いはない！

少年たちを見つけたそう確信するがアイズは違和感に気付く。

（白髪の子がいない……？）

戦っているのは黒髪の少年二人だった。しかしエイナに聞いた話だとハチマン達は三人パーティーで一人がサポーターだと言う。しかしあの動きは明らかにサポーターの動きではなかった。そして二人がこちらの方向を向き顔が見えるようになり顔を確認すると——

（ハチマンが……二人？それにあの魔法……）

何とハチマンが二人いるのだ。しかもオークやインプを相手に奮闘している。この訳の分からない事実達がアイズの足を止める。そして暫く戦闘が終了する。

「ふう…」

「やったよハチマン！全部倒せた」

「ああ、そうだな…しかし改めてみるとなんか嫌だな。まあどうでもいいや急ぐぞ…」

エレフエロン
【解除】

戦闘が終わりハチマンが二人で会話？を交わしつつ嫌そうに顔を歪め、エレフエロン【解除】と呟くと二人いたハチマンの内の一人が消える。そこで初めてアイズは硬直から治りゆつくりとハチマンのもとへ歩き出す。

「さて…ん？」

ハチマンがアイズに気付きアイズの方を向きアイズはハチマンに話しかける。

「ハチ…マン…？」

「あー、すいませんアイズさん事情は今度説明するんで許してくださいほんとうにすいません」

「あ…」

ハチマンはそれだけ告げると九階層へと続く道へと走り出す。

ファイオーガ
【纏え】

「!!」

ハチマンがそう唱えるとハチマンを炎が包み込む。

(せいいい……?)

ハチマンの魔法から精霊の気配を感じアイズは暫く棒立ちになっていた。

アイズさんと別れた後俺はリリを探し走り回っていた。

『ファイアボルトオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!』

すると遠くで聞きなれた声が聞こえる。俺はすぐさまその声が聞こえた方向に転進し地を蹴る。そして走りに走って角を曲がって目に入った光景は半円形のルームを埋め尽くすキラアアントとリリを庇いながら戦うベルの姿だった。

「リリィー!ベル!」

「ハチマン!!」

俺がそう叫ぶとリリとベルは俺に気付き、ベルは嬉しそうにリリは目を見開いていた。

「ハチマン生きてたんだね!」

「あほ勝手に殺すな言ったろ打開する策があるって!」

そこから俺達は会話をやめ目の前の敵に集中する。時には斬り刺し燃やし穿ちモン

スターを狩っていく。そして戦いを始めて少ししてホームに立っているのは俺たち二人になつていた。

「…して」

「ん？」

「どうしてですか？」

気付けばリリは言葉を漏らしていた。

「何でリリを助けたんですか？ どうしてお二人はリリを見捨てようとしませんか？」

「…ええええ？」

「まさかご自身が騙されていたことに気付いていないんですか？ リリがお二人を驚かせようとしてナイフを持って行ったなんて、そんな馬鹿な事を考えているんですか!？」

間抜けな顔をするベルにリリはとうとう声を荒げる。

「お二人つて何なんですか！ 馬鹿なんですか！ 間抜けなんですか!？ 救いようのない能天気な頭の持ち主何ですか!？」

「あほっ…!？ ちよ、りりっ、落ち着いて…!？」

「そうだぞりり落ち着け。馬鹿で間抜けで救いようのない能天気な頭の持ち主はベルだけだ」

「何でこの流れで僕だけなのっ!？」

「無理です!!それにハチマン様もです!!お二人は気づいてないでしょうがリリは分け前をくすねたりしてたんですよ!？」

そこからいきなりリリの悪事暴露大会が始まる。分け前をちよろまかしたただのアイテムを買う際に多めに金額をもらっていたあのそんな話が暴露される。

「これで分かりましたか!?!リリは悪いやつです!盗人です!お二人に嘘ばかりついていた、サポーターの風上にも置けない最低なパルウムです!」

「え、えと…」

「それでもっ…それでもベル様は、ハチマン様は、リリを助けるんですか!？」

「うん（ああ）」

「どうしてっ!？」

息を切らしながらリリは俺達を見つめている。そしてリリの剣幕に押され続けているベルが口を開く。

「お、女の子だから?」

「ばかあつ!ベル様の馬鹿ああつ!!またそんなこと言っつ、あの時と同じじゃないですか!?!ベル様は女性の方だったら誰でも助けるんですか!?!信じられませんっ、最低ですつ!ベル様のすけこましっ、女つたらしっ、すけべっ、女の敵いいいい!!」

リリが涙目でベルに向かって不満をぶちまけまくっていた。そんなリリの様子をベルは俺の方に視線を向け苦笑しながら見つめ、リリの頭に手を添える。

「じゃあ、リリだからだよ」

栗色の瞳がいつぱいに開かれる。

「僕、リリだから助けたかったんだ。リリだから、いなくなつてほしくなかつたんだ」

「ふ、えっ……！」

「上手い理由なんてさ、見つけられないよ。リリを助けることに、理由なんて……」

リリはその言葉をきっかけに涙を流す。いつまでもどこまでもその涙声が響き続けた。ハチマンはベルの言葉を聞きながら微かに顔をほころばせていた。

あれから二日リリと別れすっかり音信不通になっていた。探そうかと思つたが何となく近いうちに会えるそんな気がしていた。

「！」

そして今日バベルの前でクリーム色のローブを身に着け大きなバックバックを背負っているパルウムを発見する。それに気づいた俺とベルはその子に近寄る。相手も俺達に気付いたのか小さく身動きを繰り返していた。

「…」

「…」

お互いに触れあえる距離までやってくる。リリは顔を上げ口を開こうとするがすぐに俯くことを繰り返していた。

「サポーターさん、サポーターさん。冒険者を探していませんか？」

「えっ？」

辛抱を切らしたベルがそう話しかけ俺はやろうとすることを察し乗ることにした。

「混乱してるのか？でも、今の状況は簡単だぞ？サポーターの手を借りたい貧乏人が自分を売り込みに来てるんだ」

リリもここで気付いたらしく頬は赤く染まり目には涙をためていた。

「俺達（僕達）と一緒に、ダンジョンに潜ってくれませんか？」

俺とベルは手を差し伸べる。

「——はいっ、リリを連れて行ってください！」

リリは満面の笑みを浮かべ俺達の手を取った。

ハチマン・ヒキガヤ

《スキル》

【精霊テイの加護ホ】

・ 任意発動。

・ 自身と同一存在を作り出す。起動式は『二重存在ダブ』

・ 武器またはモンスターに変身可能。起動式は『顕現せよエビゾク』

・ 武器像は詠唱時のイメージ依存。

・ モンスター変身像は討伐したモンスターののみ。

・ 解呪式エレフエロン【解除】

バベルから北に進んだメインストリート。冒険者よりも市民の姿が目立つ子の大通りに、オープンカフェが面していた。からつとした日差しのもと多くの客が談笑を交わしている。多くの日傘が開き影を作る中、ベルとリリ、俺の三人は白いテーブルを挟んでいた。

「じゃあ、【ソーマ・ファミリア】の方はもういいの？」

「はい。リリはじきに亡くなったことにされるでしょうから」

俺達がパーティーを結成してから一日。リリを取り巻く今の状況を確認するためリリから説明を受けていた。

「死人と言う扱いになれば【ソーマ・ファミリア】にかかわる必要もないですし、あちら

からも付け狙われることはないでしょう。何せ、もういないことになってるのですから」

なのでお二人にはご迷惑はかけません、とりりは笑って言った。そんな感じの二人の会話に耳を傾けているとリリが真面目な表情に変わり俺達を呼びかける。

「…ベル様、ハチマン様」

「ん、どうした？」

「お二人は、本当にこのままでいいんですか？」

「え？」

「リリをこのまま許してしまっただけいいんですか？」

明るくなっているベルの表情とは逆にリリの表情は暗くなる。

「リリはお二人をだましていたんですよ？お二人の厚意に付け込んで、あまつさえ裏切ったんですよ？」

「…」

「しかも、くすねたお金は返せません。このまま許されてしまったら、リリは…」

「気にしなくていいだろ」

「え？」

「騙していたから罪悪感があるんだろ？なら少なくとも俺は騙されていないから許す

云々の話は関係ない。だから気にしなくていい」

「それはどういう…」

「おーい、ベル君！ハチマン君！」

「あつ、神様！」

リリがどういうことですか、聞こうとしたタイミングでヘステイアがやってくる。

「お待たせ。すまない、待ったかい？」

「そんなことないです。それよりもすいません、バイトに都合をつけてもらって…」

「ボクの方は平気さ。それより…彼女がそうかい？」

「あ、はい。この子が前に話した…」

「リ、リリルカ・アーデです。は、初めましてっ」

視線を向けられリリは慌てて椅子を降りて一礼する。

「あつ…いけない。神様の椅子を用意してもらってないや…」

「…！なあにつ、気にすることはないさ！この客の数だ、代わりの椅子もないだろう！よし、ベル君座るんだつ、ボクは君の膝の上に座らせてもらおうよ！」

「あはは、神様もそんな冗談言うんですね。ちよつと待っていてください、店の人に頼んできますから」

笑いながらベルは去っていった。いや多分冗談じゃないと思うんだけど…だって凄

いしよぼくれてるし…。

しかしそれも物の数秒でヘスティアは俺にチラっチラっ、と視線を送り始めた。俺はその意図を察する。

「すまんちよつとトイレ」

俺はそう一言声をかけ席を外した。

「さて…パルウム君ちよつと付き合ってもらおうよ。あの子達もすぐに帰ってくるだろうしね。自己紹介なんかはお互い知ってるだろうから省こう」

「は、はい」

「率直に聞くよ。サポーター君、君はまだ打算を働かせているのかい？」

「——っ」

言葉違わず真つすぐに切り出された問いに、リリは動揺する。

「——本人には口止めされているんだが一つ話をしよう」

「…っ？」

「もう率直にいうよハチマン君は君のことを初日から見抜いていたよ」

「それはどういう…」

「君ナイフを盗ってからドワーフの店に売りに行ったんだっけか」

「!？」

「ハチマン君はね初日から君の打算を見破り犯行現場も目撃していた。なのにハチマン君は君のことを捕まえるどころか俺とベルに任せてくれってわざわざ呼び出して頭まで下げたんだぜ？それで理由を聞いてみたら妹に似てるからって大真面目に言うてるんだよ」

『騙っていたから罪悪感があるんだろ？なら少なくとも俺は騙されていないから許す云々の話は関係ない。だから気にしなくていい』

そこまで言われさつき言っていたハチマンの言葉の真意をリリは理解する。自分にはなから騙されていない全部知っていただから気にする必要はない、と。

「あ、ああ……」

その不器用で優しさの詰まった言葉にまた涙があふれそうになる。

「それじゃあ言い方を変えてもう一回きこう。これを聞いたうえでなお打算を働けるかい？」

「あり得ません。リリはあの方々に助けられました。裏切るようなことは絶対にしたくない」

涙があふれ出そうになるのをこらえへステイアを見据え力強く答える。

「……うん、わかった。キミのその言葉信じよう。ただしもし同じことを繰り返して、あまつさえあの子達を危険に晒したら……ボクは君の事をただじゃおかないからな」

——リリは体を硬直させる。呼吸の仕方を忘れるくらいの威圧感。そんな圧に当てられながらもリリは前を見据え口を開いた。

「…誓います。もう二度とあのようなことはしないと。ベル様にも、ハチマン様にも、ヘステイア様にも…何より、リリ自身に」

何も知らない街の活気が賑やかに流れていく。無言の二人の時間はヘステイアが瞑目をすることで終わりを告げる。ヘステイアはわかったよ、と言うように視線を飛ばし、リリは我慢できずに脱力する。リリに釘をさしたヘステイアは腕を組み押し黙った。

「…サポーター君、正直に言うよ」

「は、はいっ」

「ボクは君のことが嫌いだ。ベル君とハチマン君に付き纏ってほしくないと思っていい」

「!」

リリが目を見開く間に彼女は声を連ねた。

「当り前だろう。ハチマン君の話聞いた時から君に対するボクの心証は最悪さ。二人の人の良さに付け込んで好き放題誑かして、あまつさえ今は手のひらを返したように取り入ろうとして。何が目的だ、この泥棒猫めっ」

魔法によつて生えている耳が揺れ、汗を流す。

「大体さつきから何だい？あつた時からずつとしよぼくれたような顔をして。見ているこつちがほとほと憂鬱になつてくるよ」

目を尖らせたヘステイアの言葉は止まらない。

「優しい二人に助けられて、心を入れ替えたなんて言っている君のことだ、どうせ今度はあの子達が優しすぎて、困り果てているんじゃないかい？」

「!？」

「あの子達が君になにもしようとしなから、君は罪悪感に潰れそうなんだ。ボクから言わせればそれはただの甘えだね。本当に嫌な奴だ、君は」

とうとうヘステイアは言葉にも険を乗せ始めた。

「ハチマン君には任せてくれと言われているけど、ボクが君をさばいてやる。言つとくけど拒否権なんてないぜ。疑似『神の審判』だ、光栄に思うといいさ」

ふんと鼻を鳴らしヘステイアはふんぞり返る。ひるつみばなしのリリはかろうじて頷くことしかできなかった。リリは落ち着きなく次の瞬間を待った。ヘステイアはと言うと歯をかみしめ溜息と共にその言葉を吐いた。

「二人の、面倒をみてやってくれ」

「…えっ？」

思いつきり不機嫌な顔をしながらヘスティアは続ける。

「言つとくけど、君の為なんかじゃないんだからな。ボクは今回の話をあの子達から聞いて、つくづく彼らのことが心配になったんだ。とうか、確信した。：ハチマン君がいる限り二人が騙される可能性は低いけど当の本人がさつき聞いた通り馬鹿であるお人好しっぷりだ。絶対に手遅れなことが起きる」

「…」

「だから君に頼むんだ。変な奴に引つかからないように目を光らせてくれ。お目付け役さ」

リリは今度こそ驚く。

「そもそも断罪なんて生意気なこと言ってるんじゃないよ。今時神だつてそんなことしないぜ？ 罪悪感なんて、結局自分のことを許せるか許せないかでしかないんだ」

それをあの子二人に求めるな、と語気を強くした。

「あの子達の後ろめたいことがあるなら、満足いくまで恩を返せばいい。当たり前だろう。それが誠意だ。けじめだ。キミが心を入れ替えたと言うなら、行動で証明して見せろ」

一気に浴びせられた言葉はそこで終わった。辛辣にも聞こえるそれらは単に罵倒しているのではなくチャンスを与えているのだ。彼女は寛大で神格者だ。そんな彼女に

リリは黙って一礼をする。そんな彼女たちの間では沈黙が流れる。

「ごめんなさーいつ、遅くなりましたー!」

「すまん遅くなった」

「…パーティーの加入は許可する。あの子達のお守りも任せた。けどつ、くれぐれもつ、出過ぎた真似はしないようにッ」

「はっ?」

静寂を破ったヘステイアの警告に、リリは目を丸くした。真意を訪ねる前にベルが椅子を持ってきたテーブルに戻る。そしてヘステイアはハチマンとベルの腕を取り自分のもとへ引き寄せた。

「——なっ」

「神様…?」

「おいっ」

「さてあらためて…初めまして、サポーター君。ボ・ク・のベル君とハチマン君が世話になっていたようだね」

ボクのを強調させのたまうヘステイア。纏う雰囲気は一変し、まるで縄張り主張する虎のように威嚇する。リリはそんな威嚇を二人の手を取り真っ向から迎え撃った。

「いえいえこちらこそ。リリにはお優しいお二人には、いつもよくしてもらっています

から」

「…っ！」

そんな幼女達の威嚇の仕合をなんで俺まで…、と見当違いのことを考えながら眺めるハチマンだった。

#14 特訓？

北西のメインストリート、冒険者通りを走って進んでいく。俺とベルはヘステイア達と一回別れ、ギルド本部を目指していた。どうやらベルが俺が見ていない間にリリのことをエイナさんに相談していたようで事の顛末を報告しようと言いだしたのだ。最初はめんどくさいから断ろうかと思ったが当事者である以上その願いは届かなかった。

そしてギルド本部へとたどり着き、その中へ足を踏み入れる。

（…ん？）

今は冒険者がダンジョンに潜っている時間なので人は少なく目的の人物は直ぐに見つかった。しかし先客がその人物と話していた。そのことに少し首を傾げているとエイナさんがこちらに気付き緑の瞳がはっと見開かれた。そしてその反応の原因を探すように件の人物はこちらを向く。

（アイズさん…）

その見たことのある風貌に人物の名を呟く。

「「「「…」」」」

長い沈黙が場を支配している中横にいるベルが回れ右を繰り返して背を向ける。

「ふんっ」

「ぐえっ」

そこから全力疾走をかましたであろうベルの首根っこをとらえそれを阻止する。

「な、何やってるの、キミは！いきなり走り去ろうとするなんて失礼でしょ!」

「す、すいません、エイナさん…」

俺がベルを止め、逃げだそうとしたことに気付いたエイナさんがこつちに駆け寄りベルを叱る。それに対しベルは反射的に謝るが、視線はちらちらとアイズさんの方を向いている。こいつ膝枕の事意識してやがんな…。

「はあ…ヴァレンシユタイン氏が、二人に用があるそうなの。だからあとは三人で話してねそれじゃあ」

それだけ言い残しエイナさんはカウンターの方へと戻っていく。それだけ見届け振り向くと、アイズさんは手にしていた荷物の紐を解く。そこから出てきたのは、どこかで見た事のある緑玉色のプロテクター。それを見てベルが目を見開く。

「…あの、これ」

「!」

アイズさんはプロテクターを手にもってベルに近寄り差し出す。ベルはその差し出された

プロテクターを受け取りはするものの完璧に固まっていた。恐らくと言うか確実に美人に寄られてビビってるんだろう。

「ごめんなさい」

「え……？」

「私が倒し損ねたミノタウロスのせいで、キミ達に迷惑をかけて、いっぱい傷付けたから……ずっと謝りたかった。ごめんなさい」

アイズさんは目を伏せがちにして頭を下げる。その様子にベルはこれまでの緊張をかなぐり捨て声を張る。

「ち、違います！悪いのは迂闊に下層に潜った僕でつ、ヴァレンシユタインさんは、貴女は全然悪くなくて!?むしろ助けてもらった命の恩人で！ト言うか謝らないといけないのはお礼を言わずに散々逃げ回っていたボクの方でつ……ご、ごめんなさいっっ！」

動揺に動揺を重ねたベルは、途切れ途切れになりながらも言葉を繋ぐ。

「その、えっと、だからつ……何度も助けていただいて……本当に、ありがとうございました！」

ベルは勢いよく頭を下げて、腰を折る。そんなベルの勢いに瞠目していたが、アイズさんは直ぐに微笑む。そして今度は俺の方を向く。

「キミも…前の時は謝れなかったから、ごめんなさい」

ベルの時同様頭を下げるアイズさん。

「頭上げてください。アイズさんは命の恩人です。感謝こそすれど恨むのは筋違いです。何より気にしてません」

俺は単純に気にしてないことを伝え感謝するとまたアイズさんは優しく微笑む。

「…」

「…」

「…」

しかしそこから会話が途切れる。それはそうだだって無口にコミュ障おまけに美人に緊張しまくりのやつ飲み会に居たら全く盛り上がらない最悪の組み合わせである。

「…ダンジョン探索、頑張ってるんだね？」

「は、はいっ!？」

この無言の時間を見かねてかアイズさんが声を投げかける。それにさらに言葉を続ける。

「もう、十階層にたどり着いたみたいだったから…すごいね」

「い、いえっ、それは色んな人に協力してもらったおかげでっ、ぼ、僕は全然まだまだと言おうか!?!も、目標にも全然手が届かなくて…! 戦い方だって、我流と言おうか素人と言おうか!?!」

か、変なことをしてモンスターにやられることもあつて…」

「落ち着け」

「うぐっ!?!」

俺以上にいきよどつているベルにチョップをかます。俺のチョップを食らつたベルは変な声を上げ頭を抱えた。

「…」

そんな俺達に、アイズさんはじつと視線を注いでいた。やがて何かを考えるように顎を軽く引く。

「あの…どうかしました?」

黙りこくつて視線を注いだできたいたから気になり聞くと、ちらつと俺たちの方を見て逡巡するようなそぶりをした後、更に数秒。彼女はおずおずと言葉を切り出した。

「それじゃあ…私が教えてあげようか?」

「…え?」

「…戦い方。教えてくれる人がいない、んだよね?」

「な、なんで、ど、どうしてそんなことを…!?!」

「…強く、なりたそうだから、かな。私もその気持ち、わかるから」

それを聞きベルは顔を赤くしながらぶつぶつと呟き悩み始める。かくいう俺も割と

悩んでいた。オラリオでも最高峰であるアイズさんに戦い方を教わる。これ自体は魅力的な提案だ。しかし現実にはファミリア間の問題があるし、なにより俺が勝手に思っているだけだが今はリユーさんと訓練をしている。それは失礼じゃないのか？と考えてしまう。そのことで頭を悩ませている間にベルは教わることを決めたらしく視線を上げアイズさんに頭を下げる。

「ご、ご教授を、よ、よろしくお願いします！」

「…うん。よろしく、お願いします。…それで、キミは？」

「いや、俺は…」

リユーさんに失礼だと結論を出した俺は断ろうとするがその時頭の中で声が響く。

『ねえハチマン君』

(うお、どうした?)

『うん、あのねアイズさんの申し出を受けてほしいの』

(いや、そうは言っても…)

『ハチマン君はしたいんでしょ?』

(うぐっ…)

『だからね——』

空が夜に包まれている。空からはまだ日が上がっておらず、夜と朝の境界が曖昧になっていた。いつものリユーさんとの特訓と同様の時間に起きて準備をした俺とベルはオラリオを囲む市壁の上によつてきていた。

「準備は、大丈夫?」

「あ、は、はいっ!」

「大丈夫です」

その声に振り返り、俺達はアイズさんに向き直った。俺たちが今この市街地の上にいるのはアイズさんから戦い方の教えを受けるためだ。彼女が所属する「ロキ・ファミリア」が遠征に向かうらしく、一週間と言う期限付きで。

「ごめんね、こんなところに呼び出して…」

「い、いえっ、大丈夫です!」

アイズさんは自分のファミリアの幹部も務めており、本来こんなこと出来ない筈なのだ。だからそのことを考えれば場所や時間を設けるのは至極当然の事。

「え、えつと、ヴァレンシユタインさん、それで、僕は何を…」

「…アイズ」

「はっ?」

「アイズ、でいいよ。みんな私のことはそう呼ぶから。…それとも、嫌だった?」

とんでもないと言う風にベルは嫌じゃない旨を伝える。あれ? そいや俺の時強制だった気が…あれ?

「…あ、アイズ、さん。僕達は、これから何をすればいいですか?」

「…何を、しようか」

「…えっ」

若干重苦しいアイズさんの声音に、思わず声を漏らす。

「昨日から、ずっと考えて…いたんだけど」

そつと視線をそらし、叱られた子供のように、どこか形見を狭そうにするアイズさん。この人前から思ってたけどもしかして…。俺の疑惑をよそにアイズさんは取り敢えずと言う感じで提案をする。

「…素振りを、してみようか」

「…あ…は、はい(う、うっす)」

少量の汗を流しながら、アイズさんの指示に従いそれぞれ短刀を取り出し素振りをする。アイズさんは素振りをする俺達をじーつ、と観察する。

「君達は、ナイフだけしか使わないの?」

「え…?」

「私が知ってるナイフを使う人は、蹴りや、体術を使うから」

俺達を一瞥するとアイズさんは「貸して」と言いナイフを受け取る。どうやら体術の見本を見せてくれるらしい。

「……う」

右手でナイフを逆手持ちし、左膝を軽く真上に上げる。軽く真上に上げたまま……首を傾げる。足を下ろし、もう一度上に上げて……そして再び、彼女は首を傾げた。

「……？」

「……」

アイズさんは似たような動作を繰り返しその度に首を傾げていく。この人もしかしてとかじゃなくて確実に天然だな……。

「——んっ」

と、確信を得た矢先。まるで何かを掴んだようにアイズさんの体がぶれた。

「——えっ?」

軸足である右足がギャリツと石畳を鳴らし、全身を一回転させ所謂回し蹴りを放つ。俺のあご目掛けて。

「あ」

Lv5の見よう見まねの一撃は、恐ろしい速度で俺のあごを撃ち抜き俺の意識を刈り取っていった。

ハチマンがアイズに蹴り飛ばされ意識を失った同時刻豊饒の女主人の庭にあたる場所
所で木刀を持った二人が剣を交わしていく。

「——ぐえっ！」

風のように舞うエルフの少女が黒髪の少年に回し蹴りを食らわせる。それを直に喰らった少年は変な声を上げ少し飛ばされ尻餅をつく。

「いったい…」

「…すいませんその力加減が…」

「い、いえそんな！私が未熟なので…」

似合わない女口調で喋る少年。それにエルフ——リユー・リオンがおかしそうに口角をわずかに上げる。

「?どうしました?」

「いえすいませんヒキガヤさんがその口調で喋っている姿を見ると少し…」

おかしい、と言うリユーの言葉に自身もハチマンが女口調で話しているところを想像し、思わず笑ってしまう。

「ふふ…あはは、確かにおかしいですね。これじゃあ集中できなそうですし姿を変えますか」

「…変えるのですか?」

「はい! っって言つてもハチマン君の姿か元々の私の姿後は倒したモンスターの姿くらいですけど」

「それは…凄いですね。スキルとは言えそれはとても強力だ」

「まあ、肝心の私が今何もできないんですけどね。それじゃあ【顕現せよ】!」
エビフアネイア

悲しげな笑みを浮かべた後にスキルの起動式を唱える。ハチマンがいないとモンスターや武器への変身はできないがハチマンの姿か自身の姿かは今ハチマンの中にいる少女——テイポ一人でも変えることができるのだ。

「ふう…これでどうですか?」

起動式を吹き光を放っていたハチマンの体から光は消えそこから銀髪の美少女が現れる。その容姿にリユーも思わず瞠目し見惚れる。そんな見惚れられているなんて気付かない本人は「それじゃあ再開しましょう!」と言う言葉を放ちリユーに斬りかかる。テイポは斬りかかりながらも昨日のことを思い出していた。

『だからね——リユーさんのところには私が行く』

(は?)

『だから私が【二重存在】でリユーさんのところに行く。それで私が特訓を受ける』

(ちよつ…いやえつ? そんなことして大丈夫なのか?)

『?何が?』

(リユーさんはLv4でしかも相当強いぞ。それこそぼこぼこに…)

『大丈夫だよ。そりゃ手も足も出ないだろうけど君が学んできた技と駆け引きがある。【二重存在^{ダブル}】を使つて戦つた時に分かつたんだけど多少の技と駆け引きはハチマン君の体が覚えてるみたい。だからあの時戦えた。それでも一般人に毛が生えた程度だしハチマン君には到底及ばない。せつかく役に立てそうなのに今の状態だとハチマン君の足を引つ張つちゃう。』

そこでことばを区切り、一呼吸おいて言葉を繋ぐ。

『だから私は強くなりたいの。ハチマン君の役に立てるくらい負けなくらいに。それによこぼこにされる覚悟なんてもう出来てるよ』

(…)

意思のこもった声でそうハチマンに告げた。その言葉にハチマンは言葉を詰まらせた。危ない真似はしてほしくないしかしそんなことで止められるほど彼女の覚悟は甘くない。そう確信していたからだ。

(…リユーさんがOKしたらな)

『!うん!』

結局ハチマンがおれその後豊饒の女主人まで赴きリユーに確認を取り了承をもらいさっきのような形になっていた。実はその事を伝えたときリユーさんが少し寂しそうな表情を浮かべたのは内緒。そんなことを思いだしながら更に木刀をふるうのだった。

「は、ハチマン!? ハチマン!？」

「…」

訓練を開始した市壁の上で目の腐った少年は気絶し白髪の少年はそんな少年のそばにより呼びかけ、少年を蹴り飛ばした少女はひたすらおろおろしていた。

「き、気絶してますね…」

「どう、しよう…」

「時間がたてば起きると思いますけど…どうしましょう?」

ベルは困り顔でシュンつ、と落ち込んでしまっているアイズに話しかける。しかしアイズからの返答はなかった。

(起きたら謝らないと…あ)

そこでアイズは先日のことを思いだしていた。それは精神疲弊で膝枕をした日の事。アイズはリヴェリアの償いになると言う言葉を真に受けハチマンの言い方は捻くれていたものの嬉しかったという言葉聞きそれが償いになると完全に信じていた。そし

て目の前には償うべき少年があの時と同じような状況で横たわっていた。そうなれば天然アイズのとる行動は一つ。

「…」

「あ、アイズさん?」

無言でハチマンのところまで歩み寄りそつとハチマンの頭を持ち上げ折りたたんだ腿の上のにせる。

「んっ…」

腿にかかるベルとはまた違った少年の重み。膝枕をするアイズは慣れない恥ずかしさを感じ頬を染める。

「…っ?…?」

突然のアイズの奇行にベルは完璧に固まり疑問符をひたすら浮かべていた。そんなベルを置いてアイズは気まぐれにハチマンの額や頬、頭を指で撫でた。

「…ベル」

「…!は、はい!」

「素振りを、続けておかしいところがあつたら、私が言うから…」

「わ、わかりました?」

目の前の奇妙な光景に疑問符を浮かべながらもベルはアイズの指示通り素振りを開

始する。

「ベル脇の締めりが甘い」

「は、はい」

「ベルもつとそこは小回りに」

「は、はい！」

「ベル時々体術もいれて」

「はいいい!!!」

ベルの甘い部分をアイズはどんどんと指摘していく。そうやって指摘をしながらもアイズはハチマンの髪を撫でるのをやめなかった。

（落ち着く…）

心が洗われるようだ、とアイズはハチマンの寝顔を見ながら微笑を浮かべる。そしてアイズは償いと言う本来の目的を忘れこの膝枕の時間を堪能しながらベルの指摘を続けた。

「ん…」

ややあつてハチマンの臉が揺れる。はつとしたアイズは撫でていた手の動きを止め、腰の後ろに両手を隠す。その様子からハチマンが起きたことに気付いたベルは素振りをやめハチマンを覗き込む。固唾をのんで二人で見守っていると、目を開けたハチマン

はゆっくりと覚醒する。

「…」

「おはようハチマン」

「…おはよう」

「おはよう、ハチマン」

「…おはようございます」

ハチマンは二人に挨拶を返すと状況を把握できず辺りを見回し膝枕されている事に気付く。それに気づいた瞬間ハチマンは全力で飛びのいた。

(むっ…)

その反応に少し不満を覚えるアイズ。

「な、なんで膝枕…!? どう…なん…えっ?」

「…気絶させちゃったから、お詫びを…」

「お詫び…?…ああそういえば蹴り飛ばされたのか俺」

起きた状況が状況だけにハチマンは今更気絶した原因を思い出す。

「まあその気にしてないから大丈夫です。だから今後これはやめてくださいお願いします」

俺の心が持たない、とハチマンは心の中で付け加える。

「もしかして…嫌、だった？」

「えっ？いや前にも言ったけど別に嫌なわけでは…」

「じゃあ、されてもいいの？」

「されてもいいって言うか、確かに嬉しいけど心が持たないと言いますか…」

「されてもいいの…？」

「うっ…まあ嫌じゃないんで…いいですけど…」

それを聞くとアイズはしゅたつと素早く立ち上がり、鞆を構える。その金色の瞳が、物欲しそうにハチマンの頭をとらえる。

「ベル、ハチマン」

「は、はい？」

「お、おう？」

「訓練の内容、決めたよ。ひたすら私と、戦ってもらおう。いい？」

「あ、アイズさん？目の色がおかしいと思うんですけど…」

「気のせい」

嫌そうにされたと言う不満。何よりもう一度膝枕をしたい欲求がアイズの中に芽生えていた。癒されたい。モフモフしたい。

じり、じり。

徐々に間合いを詰めてくるアイズに、二人は口を引きつらせる。

「あの拒否権って……？」

「ない。それに私はリヴェリア達みたいにくまく教えられないから……これが、一番いい」
怯えながら短刀を構え後退しようとする二人だったが、背後には壁があり既に逃げ道はなかった。瞳を興味津々にしながらアイズは次の瞬間飛び掛かり、約二秒後、ぎゃあー！、という二つの叫び声が上空に轟いた。

ダンジョンの十七階層。本来Lv2の冒険者が縄張りとする階層に一人の獣人——
——都市最強の冒険者オツタルが探索を行っていた。

「……む」

オツタルの歩みが止まる。真正面の横穴からぬうつと赤黒い牛頭が生える。

『ヴウモオツ……！』

「出たか」

血走った眼玉が立ち止まっているオツタルをとらえる。オツタルが自身の適正よりも低い階層にとどまっていた理由。それは目の前に現れたモンスター『ミノタウロス』の捕獲だった。

『ヴウウウウウツ……！』

ミノタウロスは興奮していた。そんなミノタウロスをオツタルはこれは当たりかと、目を細める。そしてその時。

『ヴヴヴヴ…』

今度は左の横穴から目の前のは別のミノタウロスが現れる。それを視界に納めた瞬間2体のミノタウロスは、ぐわつと目を向いて走り出す。

『ヴウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

ダンジョンの床を蹴り持っている石斧を上段にもう一匹は横に振りかぶる。そして眼前に迫ったミノタウロスの踏み込む足が、床を陥没させた瞬間、オツタルはゆるりと両手を掲げる。

『『ヴウオオオオオオオオオオオツ…ヴウオ!?!』』

「…上々だ。お前たちに決めたぞ」

受け止める。その事実にはびびったミノタウロスは後ろへ後退する。その隙にオツタルは武器に手をかけ——あろうことかミノタウロスの前に投げた。

「先程の動きなら問題あるまい。使いこなしてみせる。…いや使いこなしてもらおうぞ」
(あの方の寵愛を受けると言うなら、超えて見せる)

その言葉を皮切りに金属音が何時間もダンジョン内に響き渡った。

ハチマン・ヒキガヤ

《魔法》

【サラマンダー】

- ・付与魔法（エンチャント）
- ・炎属性。

・詠唱式【纏え】（ファイ、オーガ）【纏え】

アイズの魔法の炎バージョン。精霊の力が宿っており非常に強力な魔法。

《スキル》

【強者願望】（デイトス・アントラス）

- ・早熟する
- ・強者おになりもたいいが続く限り効果持続。
- ・強者おになりもたいいの丈により効果上昇。
- ・全ステータス上限突破しなければランクアップ不可。

ほぼベルの憧憬一途と変わりなし。違う点は全ステータスSSに到達しなければランクアップができないこと。

【守護者】（ガーディアアン）

- ・守りたいものの為に行動するときステータスの高補正。

・守りたいものの人数により効果上昇。

誰かを守りたいと思うほど守りたい人が多い程ステータスの補正をするスキル。

【孤軍奮闘】^{ソロバリエ}

・少数対多数の時の高補正。

・パーティの人数により効果上昇。

・相対人数又は強さにより効果上昇。

敵の数や力がハチマンを上回る場合ステータスの補正が入るスキル。

【精霊の加護】^{テイホ}

・任意発動。

・自身と同一存在を作り出す。起動式は「二重存在」^{ダブ}

・武器またはモンスターに変身可能。起動式は「顕現せよ」^{エビフアネイア}

・武器像は詠唱時のイメージ依存。

・モンスター変身像は討伐したモンスターののみ。

・解呪式【解除】^{エレフエロシ}

要するに「二重存在」は影分身をして、「顕現せよ」で武器又はモンスターに変化する。

武器に化ける場合はハチマンのイメージ次第。モンスターの場合はハチマンが討伐し

たことあるもののみ。いずれにしろ化けるのは必ずテイポの方。

性格

くられた。
ほぼ原作と変わらず。ゼウスにベルに聞かせられないような女性の話を聞かされ捻

#15 嵐の前

「ベル様…ハチマン様は前からでしたけどどうしてこの頃、ダンジョンに潜る前からもうボロボロなんですか？」

「は、ははっ…ちよつとね」

リリに疑問にベルは笑って誤魔化す。あのアイズさんの過酷な訓練を受けるようになってから二日。ダンジョンにこもる前からぼこぼこになっていることが腑に落ちないらしい。前からぼこぼこの俺のことも気になっておるらしい。まあその理由は…。

「ハチマンはその…大丈夫？」

「ああ…なんとか」

『ごめんなさい』

(いや気にすんな)

俺が前よりぼこぼこになっているからだろう。理由として二つ。まず一つ目にティポが謝っている理由でもあるんだが「二重存在^{ダブル存在}」を使ってみてメリットとデメリットが分かった。まずメリットはティポが稼いだ経験値が俺に戻ることで俺に反映される点つまり普段の二倍経験値が入ること。そしてデメリットは経験値なんかも反映される

せいかダメージや疲労も結構反映されること。つまり今現在アイズさん（Lv5）とリューさん（Lv4）にほこほこにされたダメージと疲労が今の俺に降りかかっているのだ。ワイタイキウチノジョウシヨウガタノシミダナー。

そして二つ目になぜかアイズさんは俺の時だけ俺の意識を飛ばすのだ。つまり攻撃がすつごい来る。ダメージ凄い。俺疲れる。だから俺も対抗して魔法を使うんだが返り討ちに会う。なんか使う度にアイズさんが驚いてる気がするけど。そう言う訳でベルよりもボロボロになっているのだ。いやあ正直割ときつい。

「すいません、ハチマン様。そんな状態でリリの荷物を持たせてしまつて」「いや空のバックバックくらい平気だから気にすんな」

地下につながる階段の一つを下っていると、リリが申し訳なさそうに肩を小さくした。何でそんなことを言つてると言うか今俺とリリは装備を入れ替え、俺がサポーターリリが冒険者のふりをしているからだ。リリが死んだ扱いになっているとはいへばれない可能性がないわけじゃない。だからこうして入れ替わり作戦を実行していた。

「それにすぐ交代だろ？なら大丈夫だ」

「うう、リリはお二人に借りを作つてばかりなのが心苦しいんですよ…」

リリは声のトーンを落とすねたように言う。現在は狼人に変身しており頭の上に見える生えている獣耳が、先端をクルリと器用に丸めた。苦笑しながらも改めてリリの姿を見

る。俺らが持つと短剣になる《バゼラード》も、リリが持つと大剣に見え実に微笑ましい。別にロリコンなわけじゃない決して。

「あ、あのっ…やつぱり、変ですか？」

俺の視線に気付いたのか、今度は不安そうな声を出してリリは見上げてくる。

「いや似合ってるぞ」

「ほ、本当ですかっ？」

「ああ」

顔を上気させリリは直ぐに前を向いたが、耳はぴんと立ち尻尾はぶんぶん左右に揺れていた。

『ゾンビと狼…』

『ゾンビとオオカミ…』

『あのゾンビ…きつと働き詰めにされてるんだぞ見ろよあの目』

『うわあマジじゃねえかありゃ手遅れだな』

そんな微笑ましい光景を見守っているとそんな声が聞こえてくる。おい誰が手遅れだおいこら。

「ねえ、リリ。リリはこれから【ステイタス】を更新できないんだよね？」

「どういうことですか？」

「…ほら、『ソーマ・ファミリア』には近寄れないからさ、神様にも会えないじゃない?」
「実を言うと、それに關してはリリも多少思うところがあるんですが…でも、恐らく大丈夫ですよ。少なくとも今はまだ」

「そ、そうなの?」

「はい、何とかやっつけていけると思います。モンスターをあしらひ方ならリリは得意ですし…証拠に、ここ半年近く、リリは『ステイタス』を一度も更新せずにやっつけてきました」
「は、半年!?!」

リリの口から出た言葉に俺も声こそ出さなかつたが驚く。

「『ソーマ・ファミリア』で『ステイタス』を更新するには、資金集めのノルマを達成しなければいけないかつたんです」

「え…それって」

「はい、ソーマ様の事情です」

話を聞くと最初こそ全員に『ステイタス』更新をしていたのだが趣味に没頭したいから『ノルマを超えたら『ステイタス』を見る』と宣言したらしい。

「じゃあ、リリはノルマを稼げなかつたから『ステイタス』が更新できなかったの?」

「それが、ちよつと違うんです。リリはあまり目立ちたくなかつたので」

「目立つ?」

「ノルマを達成できると言うことは、それなりに実入りがいいと言うことです。戦えな
いリリは、周囲から見ればそれこそ格好の餌になってしまします」

「要するに金はあつたが、目立ちたくないから献上してなかつた」と

「そう言うことです」

そんな現状を聞き俺はくだらないと心の中で吐き捨てると同時にヘステイアのファ
ミリアに入れてよかつたと心底思う。

「やはり、軽蔑しますか？」

「…」

「誰も彼も騙すような真似をしていたりリリをです。リリは、嘘の塊でした」

その瞳は俺らをうつさずに前だけを見ている。

「リリは冒険者が嫌いです。ベル様やハチマン様を除いて、未だに嫌悪を：偏見を持ち
続けています。お二人になんと思われようとも、リリは自分がしてきたことを謝罪する
つもりはありません：反省もしません。こんなリリを、お二人は、軽蔑しますか？」

「別に」

「え？」

「軽蔑なんてしねえよ。嫌悪や偏見を持つことなんていつばいあるし嘘なんて誰でも吐
くだろ。俺なんかこの世のリア充ほぼ恨み爆発すればいいと思ってる。それにお前が

やってきたことは環境がそうさせたんだろ。ならお前は悪くない社会が何なら世界が悪いら

俺がそう言いのけるとリリは目を見開く。

「…僕も軽蔑しないよ。だって僕、リリの事好きだから。だから軽蔑できっこないし、嫌いなにもなれないよ」

「ほんと変な人たちです」

その目元にたまっている涙と声音に俺達は気付かないふりをした。

『ヒヤアアアアアア！』

『ギイイイイ！』

甲高い鳴き声を喚かせ小悪魔のモンスター『インプ』が俺とベル一匹ずつに突っ込んでくる。

「っ！」

飛び跳ね間合いを詰めてくるインプを俺は神様のソード《ヘスティアソード》で迎え撃つ。目前まで迫っていたインプは無数の牙をむき出ししながら、俺に向かって左手の爪を振るった。

『ギイイイッ！』

「全つ然つ、おせえツツ（のろいツツ）！」

アイズさんのスピードより断然遅い！弧を描く鋭利な爪をもつ腕を素手でつかみ取る。

『ゲツ、ギイイ!?!』

インプが驚愕に次いで金切り声を上げる中、俺はインプを引き寄せ思いつき蹴り上げる。

『ヒギヤ!?!』

体の軽いインプは簡単に真上に浮く。その隙に胴に一閃を入れ斬りすてる。

「お二人共、後ろからっ！」

—— わかつてる。

リリの警告にも動じず、俺はモンスターの気配を正確に捉えていた。視界は広く、死角は決して作らない。俺は振り向き、自ら突っ込みてにもつ神様のソード《ヘステイアソード》で突きを放つ。

『ギエ——!?!』

「ふああ…お二人共、すごい」

油断はせずに霧の奥でゆらめく影を視界に入れ、俺は残るモンスター達へと駆け出した。

現在位置は十階層。この二日ほど、俺とベルはアイズさんの教えを復習するようにモンスター達と戦っていた。

『ヒャアアアアアアアアア!!』

今俺たちが相手にしているのはインプの群れ。オークよりも頻繁に顔を出す小型のモンスター。このインプ実は少し利口で決して単独では戦わず群れで挑んでくるのだ。

『ギイイ!』

「よっ!」

背後から襲いかかった攻撃をプロテクターで受け止め反撃をしようとするのですが霧の奥に引っ込んでいく。所謂一撃離脱。

(めんどくせえ…)

思わず心の中で悪態をつく。見ればベルも攻めあぐねておりめんどくさそうにしている。

「しようがない。ファイ・オーガ【纏え】」

そう唱えると体に炎が纏わりつく。そして踏み込み加速する。

『ギャツ!!』

一匹のインプが絶命しインプたちの間で動揺が走る。その隙をベルが逃すわけもな

く一匹を即座に両断。俺も足は止めずにしつちやかめつちやかに走りまくりモンスターの群れを蹴散らしていく。

「……お二人共、少々凄いのが来ました！」

「！」

ルームを揺らす地響き。俺もすぐに気づいた。『オーク』そしてその周りには子分のようにインプが取り巻いておりその上空には『バッドバット』。

「ちよつと多いね……」

「はい。多種のモンスターがああまで群れるなんて珍しいくらいです。どうしますか、オークだけでもリリがひきつけましょうか？」

「いやベル空のバッドバットを頼む。俺は下のやつらをやる。リリは援護を」

「了解です」

「あはは、少し頼りすぎちゃってる気もするけど……」

俺はそれを伝えオークの集団に突っ込む。そんな俺を上にいるバッドバットが音波で攻撃しようとするがそれよりも早く

「【ファイアボルト】！」

炎の雷がバッドバットを穿ち、ものの数分で俺は下のモンスターを全滅させた。

「ねえリリ、ハチマン。僕、魔法に依存しちやつてるかな？」

ベルはサンドイツチをつまみながら、俺達にそんなことを聞いた。モンスターを粗方倒した俺達は休憩を挟もうと、九階層と十階層を繋ぐ階段まで引き返していた。ここは見晴らしがよく奇襲される可能性をぐっと減らすことができるのだ。俺はいつも通りリユーさんが作ってくれたランチを口に含む。と言っても受け取ったのはティポだけだ。ちなみにベルとリリそしてヘステシアにはティポのことは話していた。スキルの名前からヘステシアとベルに問い詰められ、リリには「二重存在」の姿を見られ説明した。三人とも半信半疑だったが「二重存在」のティポを見せヘステシアは普通に、ベルはそのヘステシアの言葉に、リリは取り敢えずかこの話をして納得していた。その際リリに「この人昔からおかしいのでは？」なんて小声で言われたが。

閑話休題

まあそんな訳でランチを食べていた。ちなみにリユーさんは料理が苦手らしい。これで察してくれ。

「うーん、リリはそこまで気になりませんが…確かにベル様の魔法は使いやすい節もありますし…」

「まあそれがベルの魔法の利点でもあり欠点でもあるからな」

「欠点？」

「ああ、使いやすいさやその発動の速さは強みになるがその分必殺としてはちよつと見劣りするんだよ」

「長文詠唱型の魔法は時間をかける分、効果も高いわけですから、大きな局面に波紋を投じることも可能とします。まさしく起死回生の一手ですね」

「つまり…僕の魔法には、その力がない…?」

「いやそういうわけでもないぞ。さっきも言ったがお前の魔法の利点は速さだ。正直時間をかける特大の一発よりもお前の「ファイアボルト」の方が怖え」

「リリも同意見です」

「それにこれから魔法のアビリティ次第じゃそれより威力上がるってことだろ? そう考えるとほんと怖いよお前の魔法」

「それはハチマン様も同じなんじゃ…」

そんな呟きを無視し、俺達はその後もダンジョン探索に精を出した。

「…」

俺はゆつくりと目を開けた。青い空が見える。横からはナイフが空を切る音が耳に届く。全身の痛みを自覚しながら、最後の記憶をたどっていると…思いだすのは凄まじい速度で繰り出されたアイズさんの一撃だった。なるほど。不意にひよいつ、と仰向け

になっている俺の顔を金の瞳が覗き込んでくる。

「大丈夫?」

「…」

「体は、平気?」

「…はい」

また膝枕をされてしまう。もう何回か止めたんだが気絶させれる度に膝枕をされ、もう俺は諦めていた。今日は一日中、俺達はアイズさんに稽古をつけてもらう手筈になっている。というのも、リリから今日は下宿先での仕事を手伝わなくてはいけないので、ダンジョン探索に同伴できないと言う連絡があったからだ。ちなみにティポはいつも通りの時間に鍛錬を終え俺のもとに帰ってきていた。

「そうだ…ずっと、聞きたいことがあったの」

「?」

「ハチマンから…精霊の気配がするのは、何で?」

「…精霊の気配ですか?」

「うん。なんかこう、感覚的に?」

「…」

その問いにどうするか悩み本人に聞いてみることにした。

(ティポ)

『どうしたの?』

(アイズさんがこう言ってるけど、どうする?)

『どうするつたつて…任せるよ』

(任せるつて…)

『そりゃバレたらまずいけどハチマン君が話してもいいって判断したなら別にいいよ。それに彼女微かに精霊の気配がするし』

(…どういうことだ?)

『多分精霊の血が流れてるんじゃないかな?だから私の気配に気づいたんだと思うよ』

(…)

いきなりの爆弾発言があつたが取り敢えずはその事は一旦おいておきどうするか考
える。

(アイズさんだし…いつか…)

そう判断した俺はアイズさんの方を向き視線を上げる。

「あの説明はするんで取り敢えず見てもらえますか?」

「うん…うん?」

(じゃあいいか?)

『うんいいよそれじゃあ』

『【二重存在^{ダブル}】』

ハチマンがそう唱えると隣に銀髪の少女が現れる。その事にアイズさんは目を少し見開きティポのことを見ていた。

「精霊……?」

「どうもアイズさん。初めましてかな?」

「……どういう、こと……?」

「まあ、色々あります……」

「……そっか」

アイズさんはそれ以上追及してくることはなく、また無言の時間が流れる。手持無沙汰になったティポはベルと模擬戦を始め、俺はそれを眺める。

「……聞いても、いい?」

「ん?」

無言の時間から暫くアイズさんがおれに声をかける。

「どうして君は、そんなに早く、強くなっていけるの?」

「つよく……?」

問われた内容に思わず問い返してしまう。つよって言葉は今の俺には似合わない

ものに聞こえて仕方なかったからだ。実際目の前にいるアイズさんと比べたら天と地ほどの差がある。しかし当の本人は真面目におれがつよくなっていつてると言う。その真面目過ぎる双眸に少し真剣に考えてみる。と言ってもそんなの決まり切っている。「強くなりたいたいから…だと思う」

俺は簡潔にそれだけ言う。俺の原点にして簡単にいえて難しいもの。その俺の答えにアイズさんは少し目を見開きおもむろに頭上を仰ぐ。

「そっか…」

膝を抱えた姿勢で空だけ見上げる。

「…わかるよ」

「え？」

「私も…強くなりたかったから…だから何も感じなくなつて…リヴェリア達に迷惑をかけて…テイオナ達を、仲間も巻き込んできた。そんなの冒険者じゃなくて怪物と一緒に」

昔を思い出し、まるで変われない自分に向けてアイズは言う。

「だから君は私のようにには、なっちゃいけない」

視線を足元に落としながら己を卑下する。

「俺はあなたのようにになりたいですよ」

「え？」

俺の言葉が予想外だったのかアイズさんは顔を上げ俺の顔を見つめる。

「関わった時間は短いですが、全部を知ってるなんて傲慢なことはいけません。でも今の俺が知ってるアイズ・ヴァレンシユタインは怪物なんかじゃなくて他の人よりちよつと強くて凄いい女の子ですよ。そして俺はそんなあなたに追いつきたい」

アイズはハチマンのその言葉を聞き思わず顔を赤くする。冷え込んでいたアイズの心にささやか温もりが灯る。

「ありがとう…」

そこからはまた無言の時間が流れて数分。都市の東の方角で、正午を告げる大鐘が鳴り響き始める。

「んっ…」

「？」

隣から漏れ出た吐息に振り向くと、アイズさんが口元に手を当てていた。小ぶりな口を開き…欠伸をしていた。それから少しして。

「昼寝の訓練を、しようか」

「はっ。」

あまりにも訓練にそぐわない提案に俺は目を点にする。

「ダンジョンじゃあ、いつでもどこでも、寝れるようにしないとイケないから」
「…」

「直ぐに体力を回復させることは、大切だよ」

「それアイズさんが眠いだけなんじゃ…」

「訓練だよ」

「いや…」

「訓練だよ」

「はい…」

ずいつ、と近付けられたアイズさんの顔に、俺は冷や汗をかきながら頷いた。

「それじゃあ失礼、します」

「え？」

アイズさんはそう断りを入れると何をとち狂ったのか俺の肩に頭を乗せそのまま寝息を立て始めた。

「…なんで？」

ハチマンのその眩きは誰に届くこともなく溶けていった。

ぐーすかと昼寝をした後（主にアイズ）、訓練を再開をさせていた俺達は、市壁の上か

ら一旦離れ都市に出かけていた。

「ア、アイズさん、やっぱいいですよ。あ、あれは事故みたいなもので…」

「大丈夫、私もお腹が空いたから」

…というのも、厳しい指導に俺たちの動きに陰りが見え始めた頃、ベルがお腹を鳴らしたのだ。そんな顔を真つ赤にさせたベルを見てアイズさんが軽食をとろうと提案したのだ。

「これどこに向かっているんですか？」

「北のメインストリート。じゃが丸君のお店があるって、ティオナに教えてもらったから」

北のメインストリート…じゃが丸君…まさか…。そんな俺が懸念を抱いている中アイズさんは何かを探すようにわき道に入る。脇道に入つてすぐ、その露店はあった。

「いらつしやいまあ…せ、え？」

そして店員の姿を見て俺は固まり、店員——ヘスティアも俺の姿を見て固まった。

「…」

「…」

「…」

「う、うん美味しい」

「何関係ないみたいな顔してるの（してるんだい）ハチマン（君）っ!!」
「ちっバレたか」

このままアイズさんとじゃが丸君を食べて傍観者でいるつもりだったのに…。と丁度その時。

「ヘスティアちゃん、お店の邪魔だから、痴話喧嘩なら他所でやっておくれよー」
「す、すまない、おぼちゃん！君達、こっちに来るんだ！」

露店の獣人の店員さんに言われ、ヘスティアはくいつと手首を返す。ぐいぐいと引つ張られていくベルの後ろを俺とアイズさんも付いていき人気のない細道で、俺達は軽い輪になった。

「…ふう。まずは、詳しい話を聞こうか」

冷静を取り戻したヘスティアがそう切り出し、ベルがこれまでの経緯を説明する。腕を組んで瞳を閉じていたヘスティアは、話を聞き終わるとやがて鷹揚と頷いた。

「…うん、話は分かった。それじゃあ、三人とも、もう縁を切るんだ」

「はいっ!？」

「駄目、ですか…?」

「ああ、ヴァレン何某君、ボクのベル君とハチマン君にもう関わらないでくれ。君にだつ

てくださった。

「言っておくけど、ベル君とハチマン君に変な真似をしたらその時点でこの話はなかったことにする、いいね?」

「はい」

「誘惑なんてもつてのほかだからなあ…!」

「はい…?」

「それじゃあ、今日はボクも君達の訓練を見物させてもらおうかな」

「えっ!」

「何だい二人共、その顔は。大切な眷属に何をされているのか確かめるのも、神の義務つてもものだろうか?」

「え、えーっと、バイトはどうするんですか…?」

「今日はもう上がる」

待ってるんだぞ、とびしりと指を向けて露店を駆けていくヘスティアを見送る。

「優しい、神様だね…」

「…はい」

「なあ、二人共。君達、ボコボコにされているだけじゃないか。もうやめてしまおうぜ、

きつとヴァレン何某君にとって君達は体のいいサンドバック代わりなんだよ」

「か、神様……」

市壁の内部の石造りの階段を下りる途中、ヘステイアがさりげなく言う。何故かさぶる機嫌よく。

「もう、着きます……」

小型の魔石灯を先頭にいるアイズさんは俺達のそう告げる。そのうち階段を下りきり、出口である扉をあけ放つ。

「あ、あの、神様？外には出ましたし、手はもう離しても……」

「何を言ってるんだよベル君。メインストリートの方とは違って、こっちはかなり薄暗いじゃないか。ボクが転ばないようにしっかりと手を繋いでおいてくれ」

俺とアイズさんの後ろでベルとヘステイアがイチヤイチャをかます。ほんと一発くらい殴らせろベル。そして暫く歩いていくと俺は異変に気付く。

——見られてる。しかも複数人

辺りの魔石街灯は破壊され複数の視線が俺をさす。

「止まれ」

しかも明らかに敵視の視線アイズさんも気付いていたのか俺が声をかける前にとまりヘステイアとベルは俺の声にとまる。

「どうしたのハチマン？」

「見られてる」

「？見られてるつたつて誰も——」

ヘステイアがその言葉を言い切る前に建物と建物の細い間隙から、何者かが歩み出てくる。

（キヤットピール…）

黒色の防具にインナー、そしてバイザー。金属のバイザーで目と口を覆う頭部には、獣人特有の猫耳が生えている。性別は男しかもかなり強い。思わずソードに手を伸ばそうとした時トント、と石畳に軽い音を鳴らして、かき消えた。

「——」

次の瞬間、一つの影が俺達の目の前に現れていた。一瞬で食われた間合い、とんでもない敏捷能力。死の文字が頭をよぎる中真横から伸びたサーベルが眼前の相手を弾き飛ばす。そこから更に斬りあいが生じ、火花を散らす。

「お、おいおいおいっ!？」

慌てふためくヘステイアの声が響く中で、凄まじい剣戟の音でそれは塗りつぶされる。

（反応出来なかったっ…!）

槍の軌道が、劍の斜線が、そして何よりさっきの一撃が。全てにおいて高次元。反応出来ず追えなかった自分に少し齒噛みしてしまう。

「——っ」

その時、アイズさんの頭上から四つの小さな影が蠢く。人家の屋上に出現した劍、槌、槍、斧を装備した影達はアイズさんの真上から急襲する。

「アイズさん!？」

(っ…)

目の前で繰り返される死闘。俺達の入る隙なんてない程の別次元の世界。

【ファイオーガ纏え】

「ハチマン…?」

だからどうした。足手まといのままでもいいのか。違う強くなるって決めたんだ。でも悔しいことに今はまだ守られる側だ。なら今俺のできることをやる。

「出てこい後ろのやつら」

俺は振り向き建物の影に呼びかける。声をかけ数秒男性と女性が二人ずつ計四人が出てくる。そして姿を確認し俺がソードを構えた瞬間彼らは同時に俺へと駆け出す。

「っっっ！」

迎え撃つ。向ってくる四人組の先頭にいた短剣を持った冒険者の攻撃を避け反撃す

る。

「かはっ……!」

そして瞬時に反転し次の攻撃を繰り出そうとしている冒険者の長剣による突きを横に避け蹴りを入れ後ろにいるもう二人の冒険者の方へと蹴り飛ばす。

(こいつら…俺と同じLv1?)

蹴り飛ばされた冒険者を受け止めた三人を見ながら確信する。

「ふっ!」

見るとベルも神様のナイフ《ヘステイアナイフ》を持ってさっきの短剣の冒険者と戦いを始めていた。

「はああっ!」

その際に重装備の冒険者が気合の声と共に大剣を振り下ろす。それに対し俺はそのまま神様のソード《ヘステイアソード》を放ち敵の剣の腹の真横を捉え、勢いよく打ち払う。

「はああっ!?!」

まさか大剣が剣に払われるとは思ってなかったのか、先程と同じセリフで驚愕をあらわにする。俺はそのまま右足を軸にして、回し蹴りを相手の顔面へとぶつける。

「ぐ、あっ」

大剣使いは横手に飛び、その手から武器が離れる。その大剣を手に取り一斉に飛び掛かってきていた二人にふるう。

「っ！」

「「がつ——！！」」

大剣による回転切りが、飛び掛かってきていた二人を吹き飛ばす。それを確認するとすぐに顔を上げアイズさんとベルの方を確認する。アイズさんは未だに死闘を繰り広げていて、ベルはもう戦闘を終えアイズさんの方に右手を突き出していた。

「アイズさんっ！」

ベルの叫び声に反応したアイズさんは目を僅かに見張り瞬時にその場から離脱する。

「【ファイアボルト】！！」

六連発。瞬時に六条の炎雷が男達のもとに炸裂する。裏通りが一瞬緋色の光に染まり、轟音と火の粉がまう。しかしその火の海から男達は、炎を切り分け悠々と歩み出てくる。

「詠唱を抜いて魔法を撃ちやがった…」

「そつちの男も強力な魔法を手に入れている。あの方に報告だな。きつと喜ばれる」

(…?)

それだけ言い残すと男たちはこの場を後にする。

「怪我はない？」

「あ、僕は大丈夫です」

「俺も大丈夫ですそれよりアイズさんは…？」

「私も、平気だよ」

傷一つ見えないアイズさんは、いつものように平然と答えた。

「しかし何だったんだあいつら。全員顔も隠して…」

「闇討ちなら、よくあるよ」

「あるんですか!？」

「うん。ダンジョンの外で仕掛けてくるのは珍しいけど…」

てことはダンジョンの中では珍しくないのかよ…。

「しかし解せないなあ。ヴァレン何某君が狙われるならともかく、しっかり僕達、いやベ

ル君とハチマン君まで襲われていたじゃないか」

「それは…」

「しかも彼等、キミ達に合わせて力量が分かれてなかったかい？」

確かにそこが不自然な点なのだ。アイズさんには最低でもLv5が、俺達にはLv1

があてがわれていた。しかも最後のあのセリフ…まるで俺達のことを確認しに来たよ

うな口ぶりまさか…？

「襲つてきそうな相手に何か心当たりはないのかい、ヴァレン何某君？」

俺が色んな懸念を抱いているとヘステイアがアイズさんに問う。

「…ありすぎて、逆に」

「まったく、ほとほと物騒だなあ、ロキのところは」

「ごめんなさい…」

「うっ…ま、まあいいさ、それよりここから早く離れよう。騒ぎを聞きつけていつ人が来るかもわからないからね」

ヘステイアとアイズさんが会話を交わしながら、この場を後にする。そんな二人の後を俺とベルも追いかけてようとした直後。

「———っ!？」

ぞっ、と体が震える。心臓を鷲掴みにされるような圧倒的な視線。反射的にばっ、と後ろを振り返る。正確にはバベルの最上階。

「…」

俺は嫌な予感を胸に茫然とその場に立ち尽くしていた。

16 冒険者

周囲の喧騒が渦巻く中、俺は手に持つ紙をじつと眺めていた。

「Lv6…」

「本当に少し前だったかな。ヴァレンシユタイン氏が「ランクアップ」したって公式発表されたのは…」

そんなエイナさんの言葉を聞きながらも俺は紙から目を離さないでいた。

「階層主を、一人で倒しちゃったらしいんだ。下層域より下の、『深層』のダンジョンで…」

階層主：『迷宮の孤王』。それは本来大規模の冒険者パーティーで攻略する存在。しかも深層の階層主ともなれば今のオラリオでも倒すことのできるファミリアは数え切れるくらいだろう。それを一人でなんて流石だとしか言いようがない。

「あのね、二人共。無理かもしれないけど、今回のことは気にしない方がいいと思う。階層主を一人で撃破しちゃうなんて、私も聞いたことがないもん。ヴァレンシユタイン氏が…特別なんだと思う」

エイナさんは紙を見て無言になっている俺とベルを見て沈んでいると思ったのかそ

んな言葉をかける。しかし俺の心は沈むどころか猛っていた。

(流石だ…俺もこれくらい強くなりたい今よりももっともつと)

しかしそんな俺とは逆に横のベルは沈みまくっていた。

「ベル君…?」

「…あ、すいません。ぼうつとしちゃって。今日はもう、帰ります」

そんなベルをエイナさんは心配そうにのぞき込みベルは苦笑を浮かべお辞儀をしギルド本部を後にする。俺はそんなベルを見届けこの猛った思いを消化しようとしてエイナさんに別れを告げダンジョンへと足を運んだ。

暁の空を超え光が差し、都市の外縁部が照らし出される。終わりの時が近い。市壁での激しい武器の応酬を交わしながら、俺はその事を悟る。鞘の連撃が俺の身をかすり、時にはかわし防ぎ弾く。瞳を僅かに見開きながら放たれる攻撃に対して、最初の頃とは比べ物にならないほど防御を重ねていく。

「——ッッ!!」

そしてある一撃幾多の中の一つの一撃を真正面から防御し反撃をする。

「……!」

鳴りあつた金属と金属の音。あつさりと弾かれた俺の一撃。しかし確かに届いた。

「はあっ…はあっ…」

だらんと腕を下げ、肩で呼吸をする俺を、アイズさんは黙って見つめてくる。

「これで、終わりだね…」

ぼつりと、アイズさんが呟いた。先程アイズさんと剣を交わし反撃に成功していたベルも俺の横に並びアイズさんに頭を下げた。

「今日まで、ありがとうございました」

石畳を見つめながらこの長いようで短かった一週間を思い出していた。ややあつて上体を戻すと、アイズさんが感情の乏しい顔で、けれど目尻は和らげながら、惜しむように口を開く。

「私も、ありがとう。…楽し、かったよ」

金色の朝日に照らされながらアイズさんはほのかに微笑む。

「…それじゃあ、頑張つてね」

「…はい」

言葉少なに俺達の方に背を向け、あの人はゆっくり遠ざかっていく。

「…」

その背中を見つめながらいつか追いつく、と心で決意し俺とベルはその逆方向へと、走り出した。

バキリ、とカップの取っ手が割れる。

「…」

ヘステイアはぴたりと動きを止め、じつとその陶器を見下ろす。

「…」

暫く押し黙ってカップを見ていたヘステイアは、顔を上げ、キッチンを忙しなく駆け回っているベルとめんどくさそうにしているハチマンを見る。そんな二人を見ながらヘステイアは何故か嫌な予感に襲われる。

「じゃあ神様、後片付けはもうやっておきましたから！魔石装置だけお願いします！」

「あ…ベル君！ハチマン君！」

軽装をの詰まったバックパックを持って出ていこうとするベルとハチマンは、ヘステイアの突然の呼びかけに足を止める。

「どうしたんだ？」

「あ、あ…ほら【ステイタス】を更新しておかないかい？ヴァレン何某君との鍛錬も終わったんだしいいだろう？」

「…そうだな」

実はハチマンがアイズさんとの鍛錬が終わるまでステイタス更新はしないと決めており、バレたときにその旨をヘステイアに伝えていた。理由としては技と駆け引きを鍛えるのにステイタスに頼らずに戦えるようにしたかったらしい。

「それじゃ始めるよ」

ヘステイアはひとまず破損したマグカップを放置し、手早く「ステイタス」の更新に取り掛かった。

「……うーんと、二人共、あのサポーター君とはうまくやっているのかい?」

「ヘステイア……その質問もう五回目だぞ……」

「そ、そうだったかい?」

黙っていると落ち着かないヘステイアは言葉を並べていたが、二人に苦笑されてしまう。

(んなっ!?)

ややあつて全ての作業を終え「ステイタス」をじっくり俯瞰していると……ヘステイアは静かに口を痙攣させた。

「うわっ……。神様、ごめんなさいっ、僕もう行きます!」

「うお、時間やべえな。すまん俺ももう行くわ」

時計を見て二人は血相を変えて体を起こし、そのまま荷物を持って扉へ直行する。

「ちよ、ちよつと、【ステイタス】が……！」

「ごめんなさい、帰ってから聞きます！ 行ってきます！」

慌ててベルが部屋を後にし、ハチマンもいつてきます、と言うとベルの後を追った。取り残されたハステイアは溜息をつき、今一度、二人のステイタスの情報を思い返す。

ベル・クラネル

L v. 1

力：S 982

耐久：S 900

器用：S 988

敏捷：SS 1049

魔力：B 751

ハチマン・ヒキガヤ

力：SSS 1407

耐久：SSS 1590

器用：SSS 1415

敏捷：SSS 1398

魔力：SS 1048

「何なんだよ、この数値……」

頭を抱えるように、ヘスティアは額を右手で覆った。

ちり、と首筋が疼いた。

「……」

「どうしたんですか?」

俺は首筋に手をやり、ぐるつと周囲を見渡した。すると隣にいるベルも似たような行動をとっていた。

「……お前もか?」

「うん、なんか変な感じ」

そんな俺達をリリは怪訝な顔をし見つめる。

「リリ、ここで装備を取り換えてもいいか?」

「あ、は、はい」

嫌な予感がした俺はリリから装備一式を受け取り身に着け万全の態勢を整えた。

「おかしい……」

「おかしい、ですか?」

「モンスターの数が少なすぎる」

リリが何かを言い、ベルが顔を青ざめさせる。何か聞いてきた。聞き覚えのある何か。俺は首を後ろに回す。音の方向は俺が通ってきた道からだった。この一本道の奥に、何かがいる。リリが固唾を？んで目を凝らしている中それは現れた。

『…ヴウウ』

『…』

「——え？」

『…』

何となく予感していた。その聞き覚えのある声にこの嫌な感じがそう告げていた。

『オオオオオオオオオオオオオオオオ…』

ミノタウロス。

「な、なんで、九階層にミノタウロスが…」

「まじか…」

隣でそんな呟きが聞こえてくる。

『ヴウオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

狂牛が咆哮する。洒落にならないほどの威圧と下迫力。そして更なる絶望が俺達の

目の前に現れる。

『ヴウウ…』

通路の奥から更にもう一匹ミノタウロスが姿を見せる。二体目のミノタウロスを目視した俺は思わず固まってしまふ。そして件のミノタウロス二体は血にまみれた銀の剣を見せつけ、一步地面を踏みつけた。

「につ、逃げましょう、お二人共!?!今のリリ達では太刀打ちできませんっ!しかも二体も……ベル、様?」

「!おいベルっ!」

リリの声に我にかえり横にいるベルを見ると顔を青ざめさせ固まっていた。そんなベルに俺とリリは呼びかけるが固まった動かない。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオッ!』

「っ!」

そうこうしている内にミノタウロス二体が弾丸となつて俺達との間合いを喰らいつくす。俺は前に出て武器を取り出し袈裟に振り下ろされた大剣を受け流す。

(こんのっ…!?)

しかし上手く受け流すことに成功するがその馬鹿力を完璧に受け流すことはできず一秒にも満たない時間硬直する。硬直している隙に俺の横を通りベルの方に肉薄すし、大剣を振り下ろす。

「あ!?!」

(まずっ……！)

そしてそのままミノタウロスは俺ごと振り上げ近くの壁まで投げ飛ばされる。

「があっ!?!」

壁に当たった瞬間衝撃が爆ぜ、肺の中の空気がすべて吐き出される。

「~~~~~~~~っ!?!……あ、ぐっ……」

壁に着弾した俺はダメージを負いながらも再び立ちミノタウロスを睨む。

「ベル、様あ、ハチマン様あ……」

視界の隅で小さな影が身動きする。ぐらつく体を支えて立ち上がり、霞んでいるであろう視線を俺とベルの方へと向けた。そんなリリを見て余裕のない声で俺とベルは叫ぶ。

「リリ、逃げろ(逃げて)っ!!」

悲鳴に近いような声でリリに呼びかける。しかしリリは動かず立ち尽くしたまま、泣きそうな顔でこちらを見ている。

「逃げてっ……逃げろよっ!?!」

更に叫ぶベルの言葉にリリは泣きながら頭をぶんぶん振った。本音を言うならベルにも逃げてほしい。しかし今の俺にそんな余裕はなかった。流石に二体も相手取れる、なんて思うほど慢心なんてしていなかった。そしてそれが逆に自分をイラつかせ

た。今はまだ守られる存在なんだと自覚させられるから。

「早くっ、いけえええええええええええええええ!!」

イラついてた俺とベルの怒鳴り声がりりを突き飛ばした。とめどなく涙を溢れさせ、りりはクシヤツと顔を歪めて俺達に背を向ける。

「…畜生ッ!!」

ベルの歯噛みするようなやけくそ気味に吐き捨てられたその声を皮切りに戦闘が再開する。

『ルヴツ、ヴウウツ、ウウウツ!』

「…」

大剣を片手にミノタウロスが俺に攻撃を繰り返して出し、俺はそれを避けて避けて避ける。天井一面に灯っている燐光に見下ろされながら、茫漠としたルームを四つの影が動き回っていく。

「う——わあああああああああああああああああああつ!!」

ミノタウロスが大剣を俺の頭上目掛けて振り下しそれを避けた時ベルの叫び声がルームの中に響き渡る。

「ベツ、がつ!?!」

その声に一瞬ほんの一瞬だけベルの方へと視線を動かしてしまう。それは格上の相

手との戦いにおいて最悪手そしてその時を待っていたと言わんばかりにミノタウロスは俺の横腹に拳を叩き込む。鎧と拳が接触した瞬間衝撃が爆ぜ、ベルのもとまで弾き飛ばされる。

「くっ……そっ……!」

目がちかちかし痛みが止めどなく押し寄せてくる。油断した、余所見をしてしまった、最悪だ、やらかしだ、と色んな後悔が押し寄せてくるがすぐに斬って捨てミノタウロスを見据え、耐久が上がってたおかげかふらつきながらも立ち上がる。

『ウウ……!』

地響きを鳴らしながらミノタウロスがこちらへと近づいてくる。俺は《神様のソード》を構えようとした瞬間。

「――」

目の前で金の髪が揺れた。何処までも澄んだ黄金の長髪。青色の鎧。銀のサーベル。どこかの市壁で見た事のある女剣士が俺達に背を向け立っていた。一人の少女を渦巻くように風を鳴らしながら。

「いたあー、アイズウー!?!」

「ちっ、つまんねえことに振り回されてんじゃねえつての!」

続々と足音と声がこちらに駆け寄ってくる。しかしそんなのが気にならないほどに

心臓が唸った。

助けられる？

また？

高みで目標であるこの人にまた助けられる？

また守られる立場に甘えるのか？

誰が？

——俺が？

「はっ……」

あり得ない、笑えない、ふざけるな。頭に火が付く。体も背中も燃えるように熱くなる。横を見るとベルも苦しげに立ち上がりしかしその瞳には覚悟が燃え滾っていた。そんなベルを見て俺はベルを信用し目の前の敵に集中することだけを決める。

「……ないんだっ」

ベルはアイズさんの手を掴む。そして力強く前へと歩み出る。

「アイズ・ヴァレンシユタインに、もう助けられるわけにはいかないんだっ！」

ミノタウロスの前に躍り出て再びナイフを構える。

「そう言うことだアイズ。退いてくれ」

俺もそんなベルの後を追うように前へと躍り出てソードを構える。

(ティポ、力を貸してくれ)

『ふふっ…わかった』

(ありがとう)

再び現れた俺とベルにミノタウロス達は目を見開き、獰猛に笑った。

「勝負だ(っ!!)」

冒険を、しよう。強くなるために、全部守るために、誰も傷付かないようにするために。俺達は今日、初めて冒険をする。

少年達が駆け出していく。アイズは唾然とした視線を受け、小さな冒険者達は待ち受ける巨大なモンスターの目の前に立ちはだかる。

「ま、ダンジョンで獲物を横取りするのはルール違反だわな。振られたな、アイズ」
「…」

おいてかれてしまったアイズの背中で、ベートは二人の背中を見ながら暢気に言う。ルームにはベートとティオナに続いてティオネが到着しており、遅れてリヴェリアとフィンも足を踏み入れていた。

「あの白髪頭にアホ毛頭…もしかして、あの時のトマト野郎共か？くっ、はっははははっ！何だよ、つくづくミノタウロスと縁があるみたいだな、あのガキ共！」

「あ、確かによく見たらあの酒場の……」

「ああ、間違いねえ！ミノタウロスに惚れられちまったんじゃねえか！あのガキ共が恋しくて……ああ？」

そんな「ロキ・ファミリア」の幹部たちが目撃する中、ハチマンはそれらを唱えて言った。

「二重存在^{ダブル}」

「えっ……？」

突然何もない空間から人が生まれアイズを除いた「ロキ・ファミリア」の幹部達は見張る。そこから更に現れた少女は赤い大剣に代わり、ハチマンはミノタウロスの方へと駆け出していく。

「人が……現われて……武器に変わった……？」

「……魔法か？」

「いや、ハチマンから魔力らしきものは感知できなかった。恐らくスキルの類だろう」

「てことは人を生み出して武器にするスキルってこと？そんなのってあり？」

「あり……と言わざるを得ないね。実際に見せられてるわけだし」

「……ね……す」

「あ？」

ハチマンのスキルについて話していると、そこにかき消えてしまいそうな声がかかった。小さな影がずるずると己の体をひきずり、よろめく。

「お願い……します、冒険者様。お二人を助けてください……」

「パ、小人族ちゃん……」

「な、何だよ！ 離せつての!?!」

変身のとけているリリが倒れこむようにベートの服を掴んだ。

「御恩には必ず報います。リリは何でもします、何でもしますからっ……ベル様とハチマン様を、助けてくださいっ……!」

「お、おい……」

朦朧としながら必死に言葉を紡ぎだす小人族バルウムの姿に、ベートは頭上の獣耳を垂らし、この時ばかりは弱り切った顔をした。リリの背後に歩み寄ったリヴェリアが膝を折り、そつと両目を右手で覆い、左手を腹部に回し、そのまま抱きしめるように自分の胸の中へ誘った。

「まだ無理をするな。傷は塞がっても、流れた血は戻ってこない」

リヴェリアが詠唱を口ずさみ、翡翠色の光が目元を大館から発せられる。

「お願いします、お願い、します……っ」

「……ちっ」

「行くのか?」

「勘違いすんな。雑魚なんて助けるのはまつびら御免だ。だが、自分より弱えやつをいたぶる雑魚に成り下がるのは、もっと御免だ」

リヴェリアに無愛想に言い返し、ベートは足を進めた。ベル達の方に顔を向け、背中を見せているアイズに声を張る。

「どけ、アイズ!俺がやる!」

「…」

「おい、何ぼさつと突っ立ってっ…」

アイズを追い越そうとして彼女の真隣に並んだベートは、びたりと動きを止めた。相変わらず乏しい少女の顔は無表情で——その金色の瞳だけが、驚愕に見開かれていた。

「…あ?」

ベートも見た。そして、固まった。大剣を振り回すミノタウロス二匹と、ナイフを閃かせ、片や大剣とソードを巧みに使いミノタウロスに斬撃を見舞っている少年達を。お互いに一步も引かずに、凄まじい剣戟を繰り広げていた。

「……………ああ?」

苛烈な剣舞の音が鳴り響く。あらゆる物を粉碎する轟音と、どんなものも切り裂く速

度の清音が鼓膜に届きやがてダンジョン全体に染み渡っていく。交わされるのは銀の光や紫紺の光、緋色の輝きの応酬だった。銀の輝きが振るわれたかと思えば、紫紺の光が円弧をつくり、その剛腕が振るわれれば緋色の輝きがそれをいなす。ミノタウロス二匹とベル、ハチマンがお互い形相を作り、互角のハチマンに関しては互角以上の攻防戦を展開していた。

「え……あ、あれ？」

「……あれがL V 1？嘘でしょ？」

その交戦模様にはティオナ達も気付く。そこには誰もが予想したミノタウロスのワンサイドゲームなんて存在しなかった。あるのは、互いの命を平等な条件の下で賭けた、確かな死闘だった。一際甲高い音響達が炸裂する。ベルは大剣をナイフで弾き、ハチマンは大剣を大剣で真正面から受け止めた。それを見たティオナ達は視線を少年達からきり、ベートの方をばつと振り向いた。どうということか、と。しかし当の本人には応える術がなかった。

「ボクの記憶が正しければ……」

落ち着いた声音が鼓膜を揺らす。びくつと肩を上下させたベートは、己の背後を顧みた。彼等の団長であるフィン・でいむなが短い歩幅でゆっくり近付いてくる。

「一か月前、ベートの目には、あの少年達がいかにも駆け出しに見えたんじゃないの

「かい？」

「…」

（もつとも黒髪の子のあの圧は駆け出しには見えなかったけどね…）

彼方で爆炎が咲いた。爆風は肌を撫で、緋色の熱光に二人の顔が照らし出される。じつと見上げてくる青い瞳に、ベートは目を震わせたじろいだ。駆け出しだった。間違いない。ミノタウロスに散々追いかけていたあの子供達は、一目でわかる新米冒険者だった。

（何が、起きやがった…!?)

しかし激変を遂げていた。今ミノタウロスと渡り合っているのはベートが忌み嫌っている雑魚なんかではない。確かな実力を見せる冒険者だ。この場にいる全員の視線がベルに、ハチマンに釘付けになっていた。

『ウヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!』

「あああああああああああアツツ!!」

雄叫びが上がる。モンスターとヒューマンの純然たる殺し合い。自然にアマゾネスの姉妹はアイズ達のもとへ引き寄せられ、リリを抱えるリヴェリアも合流する。精鋭である【ロキ・ファミリア】の冒険者たちがその死闘を見守った。そんななかテイオナはゆつくりと目を細めた。

『アルゴノウト』…』

それは一つの御伽噺。

「あたし、あの童話、好きだったなあ…」

テイオナは両手を胸に抱き、宝物を見るように少年たちの戦いを見守った。

体が軽かった。

頭が冴えわたっているのがわかる。

想いが燃えていた。

視界を絶え間なく駆け回る大剣をくぐる。咆哮を浴びせられても、自身も獣になりは

て咆哮で相殺する。

今の俺じゃ何も守れない。守られる側だ。俺は弱い。

だから俺は。

強く、なりたい。

戦いが激化していく。四本の脚は何度も場所を入れ替え踏みしめては離れ戻り再び

駆けていく。

(集中しろ)

大剣が俺の髪をかすり斬られた髪が宙を舞う。

(研ぎ澄ませ)

互いに肉を切り裂き互いの血があたりに飛ぶ。

(こいつの動きは愚直で雑だ。リユースさんやアイズさんと比べたらのろい)

ミノタウロスの攻撃は当たらない。少年がソードでさばき、ティポ^大で受ける。ハチマンはこれまで培った技と駆け引きでミノタウロスの攻撃を往なし、時には神様のソード《ヘステイアソード》反撃を繰り出していた。

「…さつきから何なんだ、あの武器は？自分よりずっとでけえ大剣を弾いてやがんど？」
「いや、武器の性能もそうだが…」

「上手い。技でミノタウロスの攻撃を捌いてるよ」

「それもそうだが、ハチマンの方はミノタウロスの攻撃を時折真正面から受けている。Lⅴⅴの冒険者にそんな事…」

本来Lⅴⅴがミノタウロスの攻撃を真正面から受けければ必ず力負けする。そのあり得ない光景はハチマンのスキル【守護者^{ガーディアン}】と【孤軍奮闘^{ソロバトラー}】のフル稼働によって可能にしていた。躲しきれないと思つた攻撃は大剣で、それ以外はソードで大剣の側面を叩き軌道をそらしていた。

「本当によく凄いでいる。でも…」

「攻めきれないっ」

事実ハチマンは互角以上の攻防を繰り広げながら決め手を欠いていた。ハチマンは最初から神様のソード《ヘステイアソード》じゃ決め手になりえないことを見越してティポに力を借り大剣へと変化させていた。しかしなれない大剣と言うこともあり精々受け止めることが現状の限界だった。そしてミノタウロスもハチマンの持つ武器どちらも最大限に警戒していた。同時にハチマンも感じ取っていた。俺が本格的に攻撃に転じようとした瞬間、防御を捨ててつぶしに来る、と。

ならどうするか。それに対しハチマンの出した答えは簡単なことだった。これ以上に火力を上げればいい。

「ファイオーガ
纏え」

消えかけていた炎に薪をくべ、その思いに応えるかのように炎はわが身を焦がさん勢いで猛り狂う。そして再び大剣と大剣が重なり合い拮抗する。

「ああああああああつ!!!」

『ヴゴオっ!?!』

しかしその拮抗もハチマンの魔法によつて崩れ去ることとなる。重なり合った大剣をハチマンは弾き飛ばし、ミノタウロスの横っ腹から右肩までにかけて斬撃を食らわせる。その傷を負ったこととして大剣を弾き飛ばされたことでミノタウロスは一度距離

真つ向からの突撃を断行した両者に、リヴェリアは目を細める。

「馬鹿がつー！」

「駄目です、お二人共!!」

ベートの罵声も、リリの悲鳴も今の二人には届かない。ただ耳には切り裂く疾風の音だけが鼓膜を揺らしていた。一気に縮まる間合い。どんとどんと大きくなつていく互いの姿。肌を打つ猛々しい覇気。大剣が右肩に振り上げられ、一角がまくように右肩へ溜められる。振り下ろしと、すくいあげ。寸分違わず同時に発進する。瞬く間に、決着の一撃が邂逅した。

（
）
ミノタウロスの角が砕ける音。ミノタウロスの角に食い込んだ大剣が、そのまま突き進み、肩から入り胸から腹へ。

「あああッ!!!」

そして腹から更に奥へと突き抜けハチマンの視界が開ける。

一刀両断。

『
』
ツツ?!?』

声すら発することを許されずミノタウロスの体は二つにわかれ、灰となり、巨大な魔石が、ザンツと地面に突き立った。

#17 二つ名

「真正面から斬り伏せて、勝ち、やがった…」

呆然とベートは呟いた。信じられないものを見るかのように、視線の先のベルとハチマンを見る。

「…精神枯渇」

「立ったまま気絶しちゃってる…」

《ヘスティア・ナイフ》を片手にびくりとも身動きしないベルとハチマンに、ティオネとティオナの姉妹も啞然と呟きをこぼした。

「つ……！質問に答える、小人族！あのガキ共は一体つ……!？」

「ベル様あ！ハチマン様あ！」

「おい!?…ちっ！」

覚束ない足取りで駆け出して行ったりリリにベートは舌打ちをする。

「……私に盗み見をしろというのか、お前は」

「……私に盗み見をしろというのか、お前は」

「あんな堂々と晒しておいて盗み見になるかよ！あれをこのまま放置しておけば、お前

が見なくなつて他の奴等が目にするだろうぜ！」

晒されているベルの背中を見て、ベートはただ視界に入っただけとリヴェリアに詰め寄る。博識のリヴェリアは嘆息しながらも、好奇心が勝ちすつとベルの背に視線を走らせる。

「おい、まだかよつ」

「待て、もうすぐ読みおわ——」

リヴェリアはそこで中途半端に言葉を切つた。

「……くつ、ふふ、はははつ」

「何なんだよ、オイ!? つたくつ、アイズ、お前もちつとは「神聖文字」が読めんだろ! 何かわからないのかよ!」

心底おかしように肩を揺らすリヴェリアに悪態をつき、アイズへと視線を向けた。

「……S」

「…はつ?」

「全アビリテイ、オールS」

『オールS!?!』

「ああ、動きを見る限りハチマンも、その黒髪の少年も同じかそれ以上だろう」

ベート達は驚愕の声を揃える。そしてその次の言葉にも言葉を失つた。動きを見て

ベート達はハチマンのステイタスはベル以上だろうと察していた。しかしそれを改め
てありえない事実と共に突き付けられ絶句する。

「名前は？」

沈黙を破る静かな声が響く。

「彼等の名前は？」

「し、知らねえ…。聞いていない…」

「：リヴェリア。いつまでも笑っていないでくれ」

「ふふつ…ああ、すまない。それで、何だったか？」

「彼の『ステイタス』を読み取ってくれ。彼等の真名を、だ」

「ああ、そうだったな。この子らは…」

「ハチマンとベル」

「アイズ？」

「黒髪の子はハチマン・ヒキガヤ、白髪の子はベル・クラネル」

【ロキ・ファミリア】の面々の心には少年達の名前が焼き付いた。

所要期間一か月。

ベル・クラネル及びハチマン・ヒキガヤLv2到達三日前の事だった。

「あ、エイナのお気に入り冒険者君、はっけーん」

「！」

ある日の朝。ギルド本部で仕事をしていたエイナは友人の間延びた声に顔を上げる。

「あれれ、今日はなんだか一段と機嫌がよさそうだね、あの子達」

「…」

隣にいる友人——ミイシヤの言葉が左から右へと流れてしまう。ここ数日顔も見せず九階層にミノタウロスが現れたと言う情報入手し心配していたエイナは大丈夫そうなお少年達の様子に思わず口元を緩ませる。

「おはようございます、エイナさん！」

「おはようございます」

「おはよう、ベル君、ハチマン君。久しぶり。探索は頑張ってる…なんて、聞くまでもないかな？」

「はい、頑張ってます！今は、最後に潜った日から間が空いちやってますけどー」

「ふふつ、休息も大事だからね。休む時はしっかり休まないといけないから、ちようどいいんじゃないかな？」

顔を綻ばせながら、エイナは上機嫌なベルと会話を進めた。

「それで、二人共何かいいことでもあったの？」

「わ、わかりますか？」

「ベル君だけならともかくハチマン君までそんな顔してちやあ、誰でもわかっちゃうよ？」

「俺を何だと思ってるんですか……」

そんな二人にエイナは苦笑をこぼした。

「じ、実はですねっ……」

「うん」

「僕、とうとうLv2になったんです！」

——バサバサバサツ、とミイシャが書類の山を落下させた。ベル達に背を向けた状態で、石のように固まっている。エイナを通してベル達のことを知っているミイシャは、彼が冒険者になって『一か月しかたっていない駆け出し』であることを、知っている。

「あ、俺もっす」

「はっ。」

今度こそミイシャは言葉を漏らした。彼女らしからぬ口調で。そしてエイナは笑っ

ていた。それはもう綺麗な顔で笑っていた。

「…ん？」

「だから、Lv2になったんです、僕達！三日前に！」

「…Lv2？」

「はい！」

「三日前？」

「はい！」

「二人共？」

「はい！」

「嘘なんかついてないよね？」

「はい！」

「ベル君、ハチマン君、冒険者になったのいつ？」

「確か…一か月前ですね」

質問の嵐はそこで打ち切られた。ヒューマン二人とハーフエルフの間で、無言の時間が交わされ続ける。そして数秒後——エイナは爆発した。

「一か月で、Lv2……………つ!？」

周囲のざわめきを丸呑みする大音声。そして目の前にいる二人は身を大きく仰け反

らせるのだった。

「ごめんっつ！」

両手をバンツと鳴らし、エイナは頭を下げる。場所はギルドの面談用ボックス。机と椅子が揃えられた一室で、エイナは対面にいるベルとハチマンに謝罪していた。

「他の『ファミリア』の人達がいるところで叫んじゃって…本当にごめん！」

数分前のロビーにて、エイナが衝動的に声を上げてしまったことにより、ベルとハチマンの「ランクアップ」はあの場にいた全員が知るところとなった。

「別に大丈夫ですエイナさん。どうせ公開されるんですし…」

顔を上げないエイナさんに、俺はまったく気にしてないと告げ、彼女は氣まずそうに視線を戻す。

（その通りなんだけど…問題は「ランクアップ」自体じゃなくて、そのかかった時間なんだから…）

Lv2到達が一月と言うのは言葉で説明するのが馬鹿馬鹿しい程に異例の最短期間だ。

「あの、エイナさん…？」

「…ううん、何でもないよ。ごめんね、ぼーっとしちゃって」

色々思案をしていたエイナは難しい顔を浮かべていた後、何とか苦笑を作る。

「二人共、ごめん、先にこつちのお願いを聞いてもらつてもいいかな？せつかく来てもらつたのに悪いんだけど…私もお仕事しなくちゃいけないくて」

「あ、はい、大丈夫です。何ですか？」

「今日までの冒険者の活動記録を教えてほしいんだ」

「えつと…」

「大雑把でいいよ。どんなモンスターと戦つたとか、こんな冒険者依頼をこなしてみたとか」

羊皮紙と羽根ペンを机に用意しながらそう告げ、私事を決して犯さないように注意しながら、少年達の軌跡を聞き出していった。そして、少年達の話が三日前まで遡つた時だった。二度目の頭痛がエイナを襲う。

「ミ、ミノタウロス…」

くらつ、と後方によるけそうになる頭を右手で押さえる。エイナはそんな眩暈やらなんやらに耐えながら、二人を怒るように睨んだ。あれだけ冒険するなど言つたのにつ。という非難がましい視線に、ベルは委縮しハチマンは委縮しながらすすつ、と気配を消す。(もうつ、どんな魔法を使つたのよ、キミ達はつ)

どうすればミノタウロスをLv1の冒険者が一騎打ちで倒せるのか、小一時間ほど間

い詰めたくなった。

「…はあ。大体わかったよ、キミたちが私の言いつけを、ちくつとも守ってくれる気がないってことは」

「いや、別にそんなことは何でもありませんよごめんなさい」

両目を瞑りつんとそっぽを向くエイナに、ハチマンは慌てて弁明しようとしたが、エイナさんに睨まれ速攻で頭を垂れる。

「…二人共。その場になかった私の言葉は見間違いかもしれない。安易に逃げようとしなかった君達の判断は、もしかしたら最善だったのかもしれない」

「…」

「私には何も言う資格はないかもしれないけど…でもね？これだけはどんな時でも忘れないで。…死んじやったら、何も意味がないんだよ」

お願いだよ、とエイナはベルとハチマンのことを見つめる。

「いい？無茶は絶対ダメ。わかった？」

「は、はいっ」

「…善処します」

「わかった？」

「いや善…」

「ん？」

「はい……」

最期に鼻の先を押してうぐつと少年達を呻かせた後、二人へ優しく微笑んだ。

「……ベル君、ハチマン君、Lv2到達おめでとう。頑張ったね」

鼻を押さえていた二人は、目を見開き感謝の言葉を伝えた。

「じゃあ、今日は『ランクアップ』の報告だけってことでいいのかな？ まだ私に用事があつたりする」

「あ、そうだった……実は……」

そこからベルと俺は思いだしたように『発展アビリティ』についての相談をエイナさんにして帰路についた。

「帰りました、神様ー！」

俺達はホームである教会の隠し部屋の扉を開け、ベルが大きな声で挨拶をする。その声に反応しソファアで本を読んでいたヘスティアは読んでいた本から顔を上げ、にっこり微笑んだ。

「お帰り、ベル君、ハチマン君。それで決まったかい？ 君達の選ぶアビリティは」

「はい。僕、『幸運』のアビリティにします」

「君は？」

「俺は『理性』で」

エイナさんに相談した結果、ベルの『幸運』も俺の『理性』も過去に発現した人は聞いたことないそうだ。だからこの『理性』つてのが俺に役立つのか効果はどんなものかなんてものは一切わからない。けどエイナさんの話を聞いてこれにすることにしたのだ。

「そつか…じゃあ、早速やろうか。君達の「ランクアップ」を」

目の前で見上げてくるヘスティアに、俺達は同意した。三人で一緒に定位置となつているベッドへ移動し、「スティタス」の更新を開始した。

「とうとう君達もLv2かあ…なあって普通ならいうんだらうけど、君達の場合、感慨を感じる暇もなかったね」

「そ、そうですか？」

そんな雑談を交わしながら俺とベルの更新がおわり、ヘスティアの手が止まる。

「…終わったよ」

ヘスティアが腰から降り、俺達は上半身を起き上がらせた。すぐ横でヘスティアに見られながらも手を握ったり開いたりを繰り返した。

「…特に、何も変わらないですね」

「ああ、そうだな…」

「『ち、力が溢れてくる…!』…なんて起きると思つていたのかい?」

「ま、まあ…」

「体の構造が作り変わるわけでもないしね、劇的な変化なんて期待させていたなら悪かつたよ」

「まあ、そんな期待してたわけじゃないけど…」

『嘘である』

(うるさい)

「ふふつ、でもね? 『ステイタス』の昇華は本物さ。君と言う『器』は高次の段階に移つた。神達に近付いたって言えばわかりやすいかい? ベル君やハチマン君が意識できてないだけで、いざスイッチを入れればさつきまでとは比べ物にならない動きができる筈だよ?」

おかしそうに笑つたヘステイアはそう言うのと、いつものように紙に「ステイタス」を記していく。

「…驚かせようと思つたけど、先に言つておこうかな」

「?」

嬉しそうに微笑んでいるヘステイアは、用紙を渡しながらそんなことを言つていた。

「朗報だぜ、二人共？」

「何がだ？」

「スキルと魔法、さ」

「へっ？」

「君達の何個——じゃなくてっ！……うん、ほら、あれだ。ベル君はスキル、ハチ

マン君はスキルと魔法が発現しているよ」

俺とベルは数秒間抜けな表情を浮かべていただろう。ヘステイアの言葉を受け止め、

用紙に視線を落とした。

ハチマン・ヒキガヤ

L v 2

力：I 0

耐久：I 0

器用：I 0

敏捷：I 0

魔力：I 0

理性：I

《魔法》

【サラマンダー】

- ・付与魔法（エンチャント）

- ・炎属性。

- ・詠唱式【纏え】
ファイ・オーガ

【ゾイ・ステイーシマ】

- ・付与魔法（エンチャント）

- ・庇護属性。

- ・詠唱式【汝らの傷我がもらい受ける】

《スキル》

【精霊テイの加護ホ】

- ・任意発動。

- ・自身と同一存在を作り出す。起動式は【二重存在ダブ】

- ・武器またはモンスターに変身可能。起動式は【顕現せよエビフアネイア】

- ・武器像は詠唱時のイメージ依存。

- ・モンスター変身像は討伐したモンスターののみ。

- ・解呪式【解除エレフエロシ】

- ・交信可能。

アウトフェイスア
【自己犠牲】

・ダメージの貯蓄。

・能動的行動に対するダメージエンチャント実行権。

・貯蓄ダメージは回復後も痛みは残存。

そして俺は目を見開き頬を引き攣らせた。

(この魔法詠唱的に傷をもらい受ける感じか……う……いらねえ)

『とか言いつつハチマン君はきつと使うよ』

(俺別にDMってわけじゃないんだけど……)

『さてどうだかね、ミノタウロスには向かっていくし』

(うぐっ……悪かったって……)

実はあのミノタウロス戦の後目が覚めた時結構ティポにめちやくちや怒られたってわけじゃないけどかなり小言を頂戴した。

『まあいいよ。あの時も言ったけど基本的に君の行動にケチつける気はないけどやっぱり心配しちゃうんだよ。それだけは覚えておいて』

(……わかった)

何となく怪訝な目で見られている気がするがおめでどう、と言いつ残しティポからの反応はなくなる。そこからベルが自分のスキル名の事で絶叫を上げたり、それを俺とヘス

ティアでいじりまくって更に発狂したりと色々あったが一段落付いたところでヘスティアが出かける準備を始める。

「どっか行くのか？」

「うん、今日は三か月に一回の神会の日なんだ」

「神会って…も、もしかして？」

「ああ、そうさ。暇な神達の会合だよ…『ランクアップ』したものの称号を決める、ね」

「なるほど、俺達の二つ名決めか」

「ああ、君達ボクは泥水をすすることになっても、必ず無難な二つ名を勝ち取ってくるよ

…」

「ああ…頼む」

「任せてくれ！それじゃあ行ってくる！」

そんな誓いの言葉を残し、扉の向こうへと消えていった。

「今回『ランクアップ』した子供は多いらしい」

「ああ、豊作って聞いた。楽しみだな」

神会の会場は都市中央に位置する摩天楼、その三十階。

「ここに顔を出す神もかなり増えたか」

「ひひっ、いなくなつた奴も多いけどな」

出席をしている顔ぶれは様々だった。そんな色んな神が居座る中、ヘスティアは、用意された席の上で周囲の者達を軽く眺めていた。

「案外落ち着いてるわね?」

「緊張する理由もないだろ?」

「もつと張りつめているかと思つたわ。いつもみたいに、ぐぬう、って顔をして」

「:何かが変わるんならいくらでも呻いてやるさ。でも、そんなところを見せるだけ、周りのやつ等を楽しませるだけだろう?」

「違うないわね…」

様々な神の視線を受けながら二人とも苦笑する。

「先に言つておくけど、私の発言なんて期待しないでよ。多数決のまえじゃ、こつちの意見もたつたの一票に過ぎないんだから」

「わかつてるよっ」

ヘスティアが語尾を荒くしたところで、「じゃ、始めるでー」と間延びした声が響いた。「第ン千回神会開かせてもらいます、今回の司会進行役はうちことロキや!よろしくなー」

『いええーい!』と言う声を皮切りに情報交換と言う名の雑談が開始され、ある程度たつ

たところでロキがまとめ今日の本命に移った。

「ほんなら、次に進もうか。命名式や」

神会の醍醐味と言っても過言でもない命名式と言う言葉が出た瞬間神達の顔に緊張が走る。

「資料はいきわたつてるなー？ならいくでー？んじやあ、トップバッターは…セトのこの、セテイっちゅう冒険者から」

「た、頼む、どうかお手柔らかにっ…!!」

「「「「「「「断る」」」」」」」

「ノオオオオオオオオオオオオオ!!」

そこからは命名式と言う名の地獄の時間が始まった。神々の感性により、所謂痛恨の二つ名が大量につけられていく。これこそがヘスティアが意気込んでいた理由であり、ハチマンが苦い顔をしていた理由なのだ。ベルなんかは神々の感性に感動を覚えていたが。

「ん、次の二人で最後やな」

「本当にLv2になったのね、あんたのこの子は…しかも二人も」

周りの神々はデザートだと言わんばかりに下品の笑みを浮かべた。そしてその中でロキが静かに席から立ち上がった。

「…ロキ?」

「二つ名を決める前になあ、ちよつと聞かせろや、ドチビ」

周囲の反応は一切合切無視し、棘を滲ませながらそつと細い眼を開く。

「一か月でうちの『恩恵』を消化させるつちゆうのは、一体どういうことや?」

バンつ、とベルとハチマンの資料の上に手をたたきつけ、ロキは瞠目するヘスティアを睨んだ。

「うちのアイズでも最初の『ランクアップ』を迎えるのに一年、一年かかったんやぞ? それをこの少年達は一か月やと? 何あほ抜かしとんねん。うちの『恩恵』はこういうもんじゃない。一か月で子供らみんなが器を一変させたら、世話ないつちゆう話や。それができへんから、どいつもこいつも苦労しとるんやろうが」

『神の恩恵』は即席の力じゃない。あくまで促進剂的役割しかない。つまり自分を成長させるための鍵でしかないのだ。

「おいこら、ドチビ、説明せえ」

「…」

凄味を利かせるロキに、ヘスティアは内心でだらだらと汗をかく。

「いえんのか? まさかうちらの力をつかったんじゃないんやろうな?」

「そ、そんなことするわけないだろうっ!」

「じゃあ、ほれ、言ってみい。後ろめたいことがなかったら、楽勝やろう」
「うっ…」

言葉巧みにまんまと誘導され返答を促される。万事休すか、とヘスティアが諦めかけた、次の瞬間。

「あら、別にいいじゃない」

美しいソプラノの声が響き渡った。

「…え?」

「ああん?」

ヘスティアに向けられた視線が、声の主のもとへと向けられる。

「ヘスティアが不正をしていないというのなら、無理に問いただす必要はないでしょう?」
「【ファミリア】の内部事情には不干渉、とりわけ団員の能力は禁制なのだから」

「二か月やぞ?この数字の意味わかつんのか、色ボケ女神」

「ふふ、どうしてそこまで強情になつているの、ロキ?私には、今の貴方の態度の方がよっぽど不思議に思えるけれど。…もしかして、焼き餅?自分のお気に入りの子の記録が、ヘスティアの子たちに抜かれたから?」

「んなわけあるか」

吐き捨てるロキに対し、フレイヤは「本当かしら?」と微笑を崩さない。そんな旧知

「えっ?」

「アホウ、気付け。あの女神が、男庇ったんやぞ?」

「っ……?」

「かつ、ほんとうにわからんのか。幸せなやつぢやな。……まあ、ええ、そもそもうちには関係ないし」

あほくさ、と呟いてロキは自分の席に戻っていく。ヘステイアがそんなロキの背中を見つめている時、円卓がどつと爆発した。

『『『決まったあー!!』』』』

「来た、届いたぞっ! 神会の結果!」

ギルドのロビーで誰かの声がこだまする。その声を皮切りに大量の人が殺到し、その手に羊皮紙が渡っていく。

「やっとか!」

「おい、みせてくれ!」

神会の結果——つまり二つ名の発表。そしてそれはギルド職員にもわたっており、ハーフェルフはそわそわしながらその用紙を受け取る。隣にいる友人のヒューマンとその用紙を上から順に追っていき、二枚目、三枚目、と紙をめくる。そし

て最後の頁にたどり着いたところで、一番下にお目当ての名前を発見した。

「——あははっ」

「ん、ベル君とハチマン君のやつ？」

思わず笑い声がこぼれた。肩越しから覗き込んでくる友人に向けて、エイナはその二つ名を読み上げた。

「【ホワイト・ルーキー】と【ブラック・ルーキー】だって」

#18 クロツゾ

「あ、やつと来たニヤー！」

「あはは、よく遅れるねえ、冒険者君」

「いやあ……ちよつと……追いかけられて……」

豊饒の女主人の入り口の扉に手をつけて息を乱しながらアーニヤさんの声に答える。

「シル達はずつと待つてるニヤー。厨房の方もクソ忙しいのに融通利かせているんだから、さつさとするニヤ」

「す、すいません」

「主役がないようじゃ始められないからね、早く行ってあげな」

アーニヤさんに促され酒場に足を踏み入れる。

「ベル様ー！ハチマン様ー！こちらですよー！」

全席に客が埋まり店内は繁盛を見せる中、奥の方でリリがぶんぶんと手を振ってきた。そのテーブルにはリリの他にシルさんとリユーさんがついていて、格好は制服のままだ。微笑んでくるシルさんと会釈を交わすリユーさんに、俺とベルは遅刻した非を詫びるのもかねて頭を下げた。

『ベルにハチマン…?』

『「ヘスティア・ファミリア」、か?』

俺とベルが足早に向かっていると、複数の視線が刺さる。賑わっていた店内が、少し趣の異なるざわめきを灯していた。

『白髪のヒューマンに黒髪腐り目のヒューマン…間違いねえよ。何つつたか…「ホワイト・ルーキー」に「ブラック・ルーキー」だったか?』

『あんなガキどもがか』

『ワールドレコード世界最速、らしいな』

『おいおい、決まりかよ? 神の野郎どもが騒いでるだけだろ? 一か月はいくら何でもねえって』

『ちげえねえ』

『でも、ミノタウロスをやりやがったのは本当らしいぞ、ほれ、例の九階層の奴』

いくつものテーブルを縫って進んでいく中、あちらこちらから視線を送られ軽くげんなりする。

「一躍人気者になってしまいましたね、お二人共」

「そ、そうなの? 何だか凄く落ち着かないだけ…さつきも、知らない神様達に追いかけまわされちゃって…」

「名を上げた冒険者の宿命みたいなものです。お二人に限った話ではないので、そんな顔しないでくださいハチマン様」

「どうやら顔に出ていたらしくリリに指摘される。」

「ふふ、じゃあお二人共いらつしやつたことですし、始めましょうか」

「あの、シルさん達はお店の方は…?」

「私達を貸してやるから存分に笑って飲めと、ミアお母さんからの伝言です。後は金を使えと」

リユースさんの落ち着いた声にミアさんの方へと視線をやると不敵に笑いながら手をぱっぱと振っている。今日くらいは羽目を外せてことなだらう。

それからすぐ、俺達は乾杯とそれぞれグラスをぶつけあった。ミアさんの勧めもあり、俺とベルとシルさんはお酒を、リリは「苦手だ」といいジュースを、そしてリユースさんはおみずをちびちびと飲む。

「そういえばティポさんは来ないのですか?」

水を飲んでいたリユースさんが顔を上げて問う。その問いに確かにという具合にベル達の視線が俺へと集まる。

「どうもこういう場合は苦手なんだと。まあ俺も何だけど」

「なるほど…ペットは飼い主に似るって言うことでしょうか」

「ペットって…」

「勿論ヒキガヤさんがペットです。ティポさんをペットと言うのは失礼だ」

「俺はいいのをおい」

俺とリユーさんの問答にベル達が笑みをこぼす。お互い無口な質ではあったがこういう軽口くらいなら叩けるようにはなっていた。まあ主に俺が罵倒されるだけなんですけど。

「さあ、ベルさん、ハチマンさん。たくさんお飲みになってください。今日の主役は二人何ですから。それとも、何かお飲みになりますか？」

「あ、ありがとうございます…」

そんなことを思いながら酒をあおっているとシルさんはいつの間にか隣に来て甲斐甲斐しく俺とベルの世話を焼こうとする。酌をとったり、料理を盛ったり、頻りに声をかけ、せっせっせっせつと…何故か普通に笑っているリリと無言で見つめてくるリユーさんが怖かった。

「なんだか…すごい機嫌がよさそうですね、シルさん」

「そう、ですか？」

ベルにそう指摘され上気した頬に手をやり、くすぐったそうにはにかんだ。

「私のお手柄というのはおこがましいんですけど…あの本を渡して、ベルさんのお役に

立てたのかな、つて。そう思ったら、なんだか嬉しくて」

本とは魔導書の事だろう。シルさんは熱っぽい視線で上目遣いをし更に微笑みながら俺達のことを見る。それは中々に強烈だった。

「ですが、本当におめでとうございます。よもやミノタウロスを単独撃破し【ランクアップ】をするとは…貴方はもつと誇つていい」

「確かにとてもすごいことだとは思いますが、ドリリは心配で心配でたまらなかつたんですよ？何度この胸が張り裂けそうになつたことか…」

「ご、ごめん、リリ…」

「…でも、格好良かったですよ、お二人共」

素直な賞賛の言葉の嵐に俺は聞こえなかつたふりをしジョッキを口に運ぶ。

「ヒキガヤさん、今後はどうするのですか？」

「？」

「貴方達の動向が、私はいささか気になっています」

リリ達との会話（？）の後、リユーさんから声がかかる。そんな彼女の質問に対して、取り敢えず明日の予定から口にする。

「えーと、取り敢えずは俺とベルの防具が壊れたんでバベルにでも行こうかな、と」

「それじゃあ、明日二人で買い物に行かれるんですか？」

「そう、ですわね」

「でしたら、私も付いて行つていいですか？」

「…どうしてまた？」

「私もそろそろ買い出しに行かないといけなくて…邪魔かもしれないですけど、お二人がよろしければ一緒に買い物をして回りたいんです」

「馬鹿言つてんじゃないよ」

「うきゆう!?!」

シルさんの背後に大きな影が現れ、トレイを頭に振り下ろす。

「そう簡単に休まれちゃこつちも堪ったもんじゃないんだよ、この不良娘。調子乗つてゐるんじゃないよ」

「アタシに話も通さないうでさぼろうだなんてどういう了見だい」とミアさんは続けた。シルさんはテーブルに伏せ、恨みがましい視線で抗議する。

「そんな目をしてても無駄さ。ここじゃあアタシが法なんだからね。リユウ、明日はシルを見張つておきな」

鼻を鳴らすミアさんはリユウさんの返事を待たずに踵を返し、カウンターに戻つていった。

「…ベルさん、ハチマンさん、私、傷物にされました。どうか頭を撫でて慰めてくれませ

んか?」

「だとよベル」

「今ハチマンの名前も出てたよね?」

「気のせいだろ」

「気のせいじゃないですよ?」

「ほら気のせいだつてよ」

「絶対違うよねっ!?!」

横でベルがギヤーギヤーと騒ぎ立てるが俺は無視を決め込む。

「それでヒキガヤさんその後は?」

「え?」

「装備を整えた後、どうするつもりなのか、そう聞いています」

「:それは『中層』に行くかどうかでことですか?」

俺のその質問にリユースさんは肯定する。そして肯定の意をみた俺はベル達と視線を合わせる。

「どうするんだベル」

「えっ?ぼく?」

「ああだつてお前リーダーだろ」

「僕リーダーなの!? ハチマンじゃなくて!? ていうかいっ決まったの!」

「俺はリーダーって柄じゃない。ってことでリーダーはお前だ今決めた」

「…ハチマンそれってめんどくさいからって理由じゃないよね?」

「まさか」

「そっか…」

「半分くらいしか」

「ハチマン?」

「そんな事よりどうするんだ?」

「…はあ、ええつと、取り敢えず十一階層で今の体の調子を確かめようと思っています。

もしそこで攻略が簡単に進みそうだったら、十二階層までは足を伸ばすつもりです」

「ええ、それが賢明でしょう」

取り敢えず「ランクアップ」した自分たちの力を確認する、とベルは述べる。それに俺とリリは賛成しリニューさんも賢明だと判断する。

「そういえばティポさんも一緒に潜るのですか?」

「いやティポは潜りませんよ」

「…理由を聞かせてもらっても?」

「別にいいですよ」と答え俺は理由を説明していく。これはティポを連れてダンジョン

に二人で潜った時に気付いたことなんだが何故か接触したモンスターは絶対にティポを狙うのだ。もしかして引き寄せてるのか？と考えた俺は色々試した。そして結果だけ言うなら別に引き寄せているわけじゃなかった。ただモンスターの視界の中にティポと俺が収まった場合100%ティポが狙われることになるってことだった。最初俺の影の薄さのせいか、とか思ってたが普段は無視されることはないのだからそれは直ぐに斬って捨てた。しかしそれに関してはティポが「精霊だからじゃない？」と言い、その辺は全く分からないのでティポの意見で納得することにした。

そしてこれの何が問題なのかと言うとダンジョン内で接触する限りずつとティポは狙われ続けることになる。つまりそれだけティポの負担が大きくなると言うことだ。それにより集中力が切れもしティポが死んでしまったら？ティポ曰く「二重存在^{ダブル}」の状態^ダで死ぬほどの攻撃を喰らっても死ぬことはないらしい。ただそれだけのダメージを負った時ティポは俺の中に戻り、その瞬間俺にダメージがフィードバックしてくる。死ぬほどのダメージが入ってくるのだ。これはダンジョン内において致命的な隙になることは間違いない。最悪俺がショック死なんて話もあり得ない話ではない。

要するにティポと俺と一緒にダンジョンに潜る場合いきなり二人分かける可能性があるあるってことだ。一人ならともかく二人しかもパーティー内最高Lvが二人も抜ける…それはこのパーティーでは致命的なことになりかねない。だからティポは奥の手と

して封印しダンジョンには潜らないと言うことにした、と説明をし終える。

「なるほど…それならば納得だ。しかしそれならまだ中層に潜ることはやめておいた方がいい。貴方達の状況を見るに、少なからず私はそう思います」

「…つまりリユー様は、この三人では中層に太刀打ちできないと、そうお考えなのですか？」

「そこまで言うつもりはありません。ですが、上層と中層は違う。最低でも三人一組が理想です。しかしこれは本当に最低ラインです。なので貴方達はパーティーを増やすべきだ」

三人一組…つまり攻撃、防御、支援の連携が機能する体系だ。確かに本当に最低ラインで増やすした方がいいのは明確だ。リユーさんはこれからのダンジョン攻略に差し当たって厳しいものがある、と判断したのでだろう。

「万全は期すべきです。貴方達は少なくともあと一人、仲間と呼べるものを見つけた方がいい」

リユーさんの言ったことはもつともだ。その意見に反対はないのかりりとベルも頷き一考すべきと伝えてくる。しかしそれに関しては俺は何とも言えない。自分で言うのも何だが俺はコミュニケーション能力は皆無と言っていい。そのことにこめかみをつい押さえてしまう。

「はっはっ、パーティーの事でお困りかあつ、ルーキー共!」

そんな話を交わしていると別のテーブルについている客の一人が酒をあおりながら声を張り上げていた。

「話は聞いーた。仲間が欲しいんだってなあ? なんなら、俺達のパーティーにてめえらを入れてやろうか?」

「えっ!?」と声を出し驚くベルを横に俺は相手を観察する。

「ど、どういうことですか?」

「どうもこうも、善意だよ、善意。同業者が困っているんだ、ひれえく心も持つて手を差し伸べてやってるんだよ。ひひっ。こんなナリじゃあ似合わねえかあ?」

「い、いえっ、別にそんなことは…」

「だあろおう? 助け合いつてやつだ、助け合いくい。それに今、話題かつさらつてるお前さんなら、俺達のパーティーに入れても構わねえし…なあ!」

「うっ…!?!」

酒の匂いが強烈なのかベルは思わず仰け反っている。他にもシルさんは苦笑し、リリは顔を歪め、リユーさんは何事もないように顔色一つ変えずに椅子に座っていた。

「それで、だ! 俺達がお前を中層に連れてつてやる代わりによお…この嬢ちゃんたちを貸してくれよ!? こんのえれえー別嬪のエルフ様達をよっ!」

「…」

「俺もエルフに酌を受けて見てえんだよ、なあわかるだろ？お前さんがいくら払ったかは知らねえけどよお、仲間なら助け合い分かち合うが基本だ！そうだろう!？」

そのリリやリユーさんをなめるように見るその視線に不快感がこみあげる。こいつらとパーティーはごめんだ、と結論を出し断ろうとした。

「いい。結構です。貴方達の手は、彼に必要ない」

けれどそれより早く黙っていたリユーさんが口を開いた。

「…おお？何でだい、妖精さんよお？俺達じゃあそいつ等のお守を務まらないかい？」

「ええ、だから帰りなさい」

「ひひっ、おいつ、聞いたかあ！ぼつと出の新人相手に、俺達は足手纏いだとっ！逆じゃなくてよ、はっはっ!?!嬢ちゃん、俺達はこれでもずつと前から中層にこもってるんだぜ!?!」

「そうでしたか」

「ああ、Lv2さ。俺達全員、な」

「わかりました。では、失せなさい。貴方達では彼らに相応しくない」

ピクリ、と豪快に笑っていた男の顔が揺れ、笑みを一旦消して、もう一度笑う。不穏な空気が立ち込める。

「…嬢ちゃん、そんなに俺達は頼りねえかい、そのカスみたいなクソガキ共よりよお？」

一歩近づいた冒険者の男は自分の左手をリューさんの肩に置こうとする。

「触れるな」

それと同時に俺は立ち上がり、男の左腕を掴む。

「ああ？なんだクソが、いつ、ででででででででででででででででででええっ?！」

掴んだ腕をそのままひねり上げ、力を込めていくと男は悲鳴を上げる。

「その手でリューさんに触んな…殺すぞ」

目の前で悲鳴を上げる冒険者とその仲間を睨みつけ暫く仲間の方へと男を投げる。

ドタツと音を立て、床に尻餅をつく。

「…て、てめええ!？」

「このクソガキっ!」

「何しやがる!？」

俺の言葉に激昂した男達は武器を手に襲いかかろうとする。それに対し迎撃をしようとする。うと構えるとその前にガツンっ!と鈍い音が彼等の頭の裏に炸裂した。

「はげっ!？」

男の仲間が地面に叩きつけられる。愕然とした男の背後で、二人のキャットピープル

が半壊した椅子を肩に担いでいた。

「—— ニュフフ、後頭部がお留守にニヤっていますよ、ニヤ」

「男つてーのは本当にめんどくさいニヤー」

「お客さん。うちのエルフは凶暴だから、そこまでにしといたほうがいいよ?」

臨戦態勢に入っている豊饒の女主人の店員三人組が不敵な笑みを浮かべたついていた。周囲からは『あーあ、やつちまった』と言う声が聞こえてくる。

「…なつ、何なんだつてめえ等はあああああああ!?!」

男が腰に手を伸ばし、白刃を煌めかせる。それを見た俺は臨戦態勢に入り腰を落とす瞬間。別の方向から大爆発が起きた。

(!?)

いきなりの爆音に振り向くと、言葉を失った。水平だったはずのカウンターがV字に変形し握り拳を振り下ろしたミアさんの姿がそこにはあつた。

(うそん)

店内は静まり返っていた。カウンターにいた客は口を半開きにし、ベルは言葉を失い、俺は若干引いていた。

「で、そのアホンダラ。そこに転がつてる馬鹿どもを連れてきつきと行つちまいな。もし今度面倒を起こしたら——この店の下に埋めるからね」

男は一言も喋れないまま顔を上下に振り、仲間を抱え込んで足をもつれさせながら出口へ急ぐ。

「アホンダレエエツ、金は払っていくんだよお!!」

「は、はいいいっ!?!」

ミアさんの怒号が響き、男は有り金を全部置いていったようだ。だって財布ごと投げてるし。

「ヒキガヤさん、ありがとうございますごさいました」

酒場が喧騒を取り戻し始めた頃、リユースさんは律儀に俺にお礼を述べた。

「え、あ、いや、そのどうも?」

「なにどもつてるんですかハチマン様」

「いやだつて…これ俺必要だった?」

俺がそう言うのと全員が目を逸らした。おい。

「ま、まあ仕切り直しましょうか?」

シルさんが笑顔でそう言い俺達は夜遅くまで美味しい料理とお酒に興じた。

「ハチマンも探してる人一緒だったんだね」

「ああ」

あの祝賀会から一夜明けた朝。俺とベルは昨日言った通りバベルのテナントにやってきていた。バベルのテナントについた俺達は店内を回り依然見つけた鎧のパーツが山積みされたボックスを覗き込んで探していく。しかし見つかることはなく二人して落胆している所で何を探しているのか聞いたところ同じ人を探していることが分かり一緒に店のカウンターの向かっていた。

(それにしても…クロZZ、ね)

名前に思うところがありませんが私も進んでいくと微かに声が聞こえてくる。

『何でっ…あんな…!』

「?」

どうやらカウンターで「ヘファイストス・ファミリア」の店員と、客らしき人が揉め事を起こしているようだった。

「何でいつもいつもっ…あんな端っこに…!俺の恨みでも…!」

目前までやってくると声のはつきり聞こえてくる。言い争いをしていたのは黒の着流しに真つ赤な髪 of 青年だった。

「こちとら命懸けでやってんだぞ!もうちょっとマシな扱いをだなあ!」

「ですが上の決定ですし…せめて売れるようになっていただかないと…」

「おまつ、それを引き合いに出すのか!? だったら尚更——!!」

い光沢溢れる鉄色のライトアーマーと黒い光沢溢れる漆黒のライトアーマー。ついこの前まで俺とベルが使用していたものとほぼ同じ防具だった。

「どうだ、使ってくれるか？」

「え？こ、これ、貴方のものじゃないんですか…？」

「ああ、俺のものだな。…俺の打った作品だ」

「——え」

「どうせだから名乗っておくぜ、得意客一号二号。俺はヴェルフ・クロツゾ。「ヘフアイ ストス・ファミリア」の、今はまだ下っ端の鍛冶師だ」

「じゃあお前達がああ【ホワイト・ルーキー】に【ブラック・ルーキー】か!？」

「ちよつ…声でかい…!」

大声を出すクロツゾさんに声を抑えるよう言う。

「本当に俺より年下なんだな。いや、冒険者に年齢なんてそれこそ関係ないか？」

「えつと、クロツゾさんの年は…？」

「今年で十七だ。で、そのクロツゾさんって言うのはやめてくれ。家名、嫌いなんだよ」

「えつと…ヴェルフさん？それで僕達に用って…？」

「おいおい、さん付けか？…まあ今はいいか。じゃあちよつと話を聞いてくれ」

ヴェルフは備え付けの椅子から立ち上がり、俺達を見下ろす格好になる。

「単刀直入に言うとな、俺はお前さん達を離したくなかったわけだ」

「?」

「俺の作品は剣だろうが鎧だろうが全く売れない。自分で言うのも何だが、いい作品を出している自信がある。けど、からつきしだ。購入される後一步で返却されるらしい。解せねえ」

「:」

俺もベルも『『兎鎧』や『黒鎧』とネーミングセンスに問題があるんじゃないやあ、何て思ったが口には出さなかった。

「だが、そこにお前たちが現れた。お前たちは二度も俺の作品を買いに来てくれた。俺の顧客、本物だ、違うか?」

「まあ、そう、かな?」

「なら、もうちよつと奥まで踏み込ませてほしい。ベル・クラネル、ハチマン・ヒキガヤ、俺と直接契約しないか?」

——直接契約。それは鍛冶師と冒険者が交わす契約で、冒険者はドロップアイテムを提供、鍛冶師はそのドロップアイテムで武器を打ち格安で譲ると言うもの。願ってもないその申し出に思わず言葉がこぼれる。

「…いいのか?」

「おいおい、それはこっちのセリフだぞ。Lv2のお前達と『鍛冶』のアビリティも持っていない無名の俺とじゃあ、釣り合わないだろう?」

ヴェルフは中腰になり俺達の首に腕を回し、笑みを近くまで寄せる。

「それにだ、ぐずぐずしていると他の鍛冶師だってお前たちのことを狙ってるんだ。せつかくの顧客がいなくなっちゃう。だから俺は是が非でも契約したいわけだ」

「それに将来有望な冒険者と契約出来れば箔がつくしな」と快活に笑う。

「…まあこんな話の後じゃ信じてもらえないだろうが、Lvがどうでも良かったんだ。あんな数ある鎧の中から、俺のものを選んでくれたからな。挙句に、俺の作品をいただいたなんていわれた日には…な? こうぐつとこみあげてくるものがあるってもんだろ?」

ヴェルフはそう言い、はにかんだ。

「…わかりました。ヴェルフさんと、契約を結ばせてもらいます」

「俺もよろしく頼む」

「よし、決まりだ! 断られたらどうしようかと思っただぞ!」

差し出された手を取って立ち上がる。

「それじゃあよろしくなベル、ハチマン。それで正式な契約書とかはまた今度に回すと

して…」

ヴェルフは口を動かしながら、握っている手をぶらぶらと揺らす。

「で、早速何だが…俺の我儘ってやつを聞いてくれないか？ 勿論見返りはするぞ。お前さんたちの装備、タダで俺が新調してやる」

「ええっ!?!」

「だから驚くなつて。鍛冶師が冒険者にものをねだるんだ、これくらいは当然だろう」

その申し出に声に出さずも驚いた俺達を差し置いてヴェルフは本題を切り出した。

「俺を、お前たちのパーティーに入れてくれ」

#19 スキル

「やってきたぜ、十一階層！」

腰に手を当てて自身の得物を肩に担ぎながらヴェルフは快活に言い放った。

「感謝してるぜ、ベル、ハチマン。『ファミアリア』は閉鎖的だなんて言うが、捨てたもんじゃないな」

「まあ、色々もらったし『鍛冶』のアビリティの為なら俺達も無関係ってわけじゃないかな」

「しっかし、こんなにいるか？」

「まあ、ちよつとな」

ヴェルフはそう言いながらリリが背負っているバックパックの横についているナイフや両刃剣などに視線を向ける。明らかに俺達が扱う分には多すぎる武器がそこにはあった。

「…新しいお仲間が増えたと聞いてみれば、なーんですか、ただお二人がモノに釣られて

買収されただけではありませんか」

会話を交わす俺達の横で、不機嫌そうな声が発せられる。非難と不満が込められた物言いと視線が俺とベルにぐさりと刺さる。

「ハチマン様がいるから厄介事なんて起こらない…なんて考えていたりリリがバカでした」

「いや厄介事って…」

あまりの物言いに流石の俺も軽く引く。

「どこが違うんですか！せめてリリに相談をしてください！」

「何だ、そんなに俺が邪魔か、チビスケ？」

そこでヴェルフが口を挟み、リリは「チビ」と言われ、栗色の瞳を一層尖らせる。

「チビではありません！リリにはリリルカ・アーデと言う名前があります！」

「そうか。じゃあよろしくな、リリスケ」

「…もういいですつ、構うだけ無駄ですな！」

恐らく馬鹿にしているだろう声音で笑いかけてくるヴェルフに、リリはどうとうそっぽを向いた。

「…えーと、リリ。今更だけど紹介するよ？この人はヴェルフ・クロツゾさん。【ヘファイストス・ファミリア】の鍛冶師なんだ」

「クロツゾっ?」

ヴェルフの名前を聞いたリリが弾かれるように振り返った。

「呪われた魔剣鍛冶師の家名?あの没落した——むぐっ」

最後まで言い切る前に俺はリリの口を手でふさいだ。

「ストツプだリリ」

いきなり口を塞がれたリリは軽くヴェルフは驚いたようにベルは訳が分からないと言う風に俺に視線を送る。

「…知ってたのか?」

「ああ、魔剣が打てるようになった理由も、な」

「…もしそれを俺が打てる、と言ったら…どうする?」

「別にどうもしねえよ」

「はっ?」

「俺が使いたいと思ったのはヴェルフの装備だ。魔剣なんてどうでもいい」

今度は目をあらん限り見開き、言葉を失った後笑い声をあげる。

「ははっ、こりやかなわねえ」

「いてえよ…」

楽しそうに笑いながら俺の背中をバンバンと叩く。普通に痛い。

「……………」

「ん？」

その時だった。向かい合っている俺達の耳に、ピキリ、と言う音が響く。動きを止めたのは少しだけ、ダンジョンに慣れている俺達はその音が何なのかすぐに気づき武器を構える。

「う、わっ……！」

「…でけえな」

『オーク』、ですな」

「きたな」

それぞれが反応する中で、ダンジョンの壁がひび割れ、破れる。

『ブギツ……オオオオオオオオ……！』

潰れた産声を上げながら、オークは壁から生まれ落ちる。それに続いて大量のモンスターが生まれ落ちていく。

「よし、オークは俺に任せろ」

「えっ、いいんですか？」

「むしろ大歓迎だろ？動きはトロいし的是でかい。俺の腕でも楽勝に当てられる。まあこの数はきつそうだが」

「なら真正面の二体は頼むその他のオークは俺がやる。リリはヴェルフの援護、ベルは好きに動け」

「了解です（わかった）」

指示を出した俺は膝を曲げオーク目掛けて地を蹴った。次の瞬間草原が爆ぜる。

『ブオ?』

オークの巨体が目の前に現れる。

(…)

洒落にならない加速力に内心で驚きながらも《神様のソード》を繰り出し、サンツツ、と言う快音が響く。

『!?!』

オークの首が宙を舞う。仲間が一瞬で狩られ棒立ちになったオークに俺は襲い掛かる。敵の合間を縫い胸を刺し一閃し倒していく。

「速くなってる…」

違う。全然違う。これまでとは次元が違う。これがランクアップ。強くなっている結果にテンションが上がりながらも冷静にモンスターを処していく。

「ふっ」

『ブギヤアツ!?!』

最期のオークを倒し一息つこうとした瞬間。

『ロオオオオオオオオオオオッ!』

「!」

雄叫びを上げながら同じモンスターが迫ってくる。全身を震わせ、二匹いるアルマジロのモンスター——『ハード・アーマード』が俺の方に真つすぐ向ってくる。

フイ:オーガ
「【纏え】!」

『!?!』

炎を《神様のソード》に付与させ真正面から対峙する。ハード・アーマードはドワーフの攻撃を跳ね返すほどの鉄壁っぷり。そんなハード・アーマードを前に真正面から対峙すると言うのは普通なら愚行である。しかしそれは普通の冒険者の話で

『——ガッツ!?!』

そんな常識が当てはまらないハチマンはハード・アーマードの胴体を両断する。その勢いのまま他のモンスターも抹殺していく。

「つ……クロッゾ……様……」

「……」

勢い余ってヴェルフの周りに居るシルバーバックも撃破し、そこで戦闘がすべて終了する。

「ん？どうした？」

「…いえなんでもありません」

呆然と俺の方を見ていたヴェルフは、ふっと微笑して、大刀を肩に担ぎなおした。

「やっぱいいよね、仲間って言うのは」

その男前な笑みに俺とベルは同意した。

大群だったモンスターとの戦闘を終え、俺達は小休憩をとり太刀を背中中の鞘に戻して腕を組んでいるヴェルフ達と十一階層のルームにて雑談を交わしていた。

「やっぱ頭一つ飛びぬけたやつがいると戦闘は楽になるな。頼り切るのも駄目なんだが」

「でも、僕も戦ってて、前より負担って言うのが減ったような気がします」

「パーティーの利点だな。俺の方も大分余裕があったし」

「にしても、よく働くな、リリスケ」

「この時ばかりは、サポーターの人に悪い気がしますよね…」

確かにと笑うヴェルフと俺達の視線の先には、リリがせっせと魔石を回収する姿があった。

「ところで、他の連中も増えてきたし、どうする？この後は場所を移すか？」

「うーん、そうですね…」

「いつそ昼飯の時間にするか。人はいるからモンスターを警戒する必要もなさそうだし」

「なるほどな、ただ場所を譲るのも癪だし、利用させてもらうか。いいぞ、俺は賛成だ」俺の提案にヴェルフとベルは賛同し、リリが戻ったら早いお昼にしようと言うことが決まった。そこから手持ち無沙汰になった俺はふと視線をルームに巡らせながら警戒はしつつもぼーっとする。

(あ、そいやスキル…)

ぼーっと辺りにいる冒険者を眺めそういえば発現していたスキルのことを思いだす。魔法に関してはタイプに聞いて大体わかったのだがスキルに関してはほとんど触れていなかった。

(能動的行動に対するダメージエンチャント実行権…自らの意思で攻撃するときのためにダメージを付与するってことか…?)

ここまでは理解してもその先がわからなかった。何がきつかけでダメージがたまるのか、どう付与するのか、どれにしても何かしらのきつかけがあるんだろう。しかしそのきつかけがわからない。

(ダメージの貯蓄…念じてみるか?)

荒唐無稽な話だが特に心当たりもないので取り敢えず念じてみる。すると頭の中でカチリツ、と音が響く。そしてその音が頭の中で響くと体にあつた傷に一瞬漆黒の粒が灯る。

(これで貯蓄完了…なのか?)

試しに小さな傷に少量の回復薬をかけると傷は治つたが微かに痛みが残り続ける。

(なるほど大体の感覚は掴んだ)

「…おい、ベル。それ、何だ?」

「?」

色々試している所にヴェルフの声が耳を叩き、ベルの方を見るとベルの右手で白い光の粒が明滅していた。

「…えっ?」

ベルもそれに気付き目を丸くする。俺の光とは違って雪のように白いその光は吸い込まれたと思つたら、新しく光粒が生まれ、また収縮していく。また、リン、リン、と言う高く細かい音が生じる。

「「…」」

俺達は一斉に顔を見合わせた。ベルはただただ困惑しそれを見かねたヴェルフが口を開こうとした——その直前だった。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!」
 耳を聳するほどの、凄まじい猛り声が轟く。

「「ぐぐ」」

俺達は、ここにいる冒険者全員が顔を振り上げ声の主に視線を向ける。頑丈そうな琥珀色の鱗、長い尻尾に鋭利な爪。体高はざっと百五十C、体長は四Mを超える小竜。

「『インファント・ドラゴン』：!?!」

名も知らぬ冒険者がその名を呟く。そのモンスターは数ある種族の中でも最強と謳われる竜種で、十一、十二階層に出現する絶対数の少ない希少種。

「ツツツ!!」

雄叫びと共にインファント・ドラゴンが動き冒険者を襲い暴れ始める。それを皮切り
 に普段はいがみ合っている冒険者たちはこの時ばかりは一丸となり、討伐しようと後衛
 は詠唱を始め、前衛は一斉に駆け出す。

「リリスケエツ、逃げろっ!?!」

そんな中、余裕のないヴェルフの絶叫が飛びその前に俺は魔法を唱え駆け出した。遙
 か先にいた魔石を回収するリリのもとに小竜が突き進み始めていた。それにいち早く
 気付いた俺はステイタスと魔法にものを言わせリリのもとまで辿り着く。

「文句言うなよ」

#20 ソロ

ベルがインフロント・ドラゴンを吹き飛ばした翌日。俺は一人でダンジョンに潜り、十一階層の食糧庫で戦闘を繰り返していた。シルバーバックやオークなどの無数のモンスターが視界を埋め尽くす中、「サラマンダー」を纏いながらティポが変身した剣と《神様のソード》を手に狩りまくっていく。

「ふうっ！」

飛び込むのは自殺行為としか言えないほどの怪物モンスターパーティーの宴。その中に俺は身を投じ猛威を振るう。

普通は成立しない戦い。蹂躞劇だけが行われるはずの戦いはハチマンが優勢の状態を保っていた。その理由はハチマンの戦い方にあつた。ハチマンはオークやシルバーバックなどの大型のモンスターを無視し、インプなどの小型モンスターや厄介なバッドパットなどを優先的に狩っていた。その結果その数や大型モンスターばかりがその場に残されモンスター同士が邪魔をしあい隙が生まれる。その隙にハチマンは一撃で殺し離れ気をうかがいまた殺しを繰り返していた。

「ふうっ……」

それを何回かこなしモンスターモンスターの声が聞こえなくなった時俺はそつと一息つく。とんでもない戦闘を繰り返しながら調子を確かめる。いたりを繰り返しながら調子を確かめる。

『君も無茶をするねえ?』

武器になつているティポの声が脳内に響く。

「いや別にそんな無茶でも…」

『食糧庫で信じられないくらいモンスターパーティーの量の怪物の宴と戦う事のどこが無茶じゃないのさ』

「うぐつ…」

『はあ…それで、体の調子はどう?』

「滅茶苦茶いい、と言うかよすぎて怖い」

『そりゃあよかつたんだけど、そうじゃなくて…』

「?…ああ、これか」

ティポの言葉に一瞬疑問符を浮かべるがすぐに理解し、傷へと意識を集中させる。すると体中にあつた傷からは煙が上がり始めどんどんと塞がっていき、たちまちダンジョンに潜る前のような無傷の姿へと変わる。その様にさしものティポも引いており、剣でありながらも心の中で苦笑いを浮かべていた。

この信じられないほどの回復力はハチマンがランクアップした際に手に入れた能力

である。能力といってもステイタスにスキルとして発現したわけではなくハチマン自身の能力に他ならない。

ティポ曰く、元々ハチマンは半分人間半分精霊という風な種族だったが、それがランクアップによる器の昇華によりハチマンはより精霊に近づき、精霊の奇跡が行使できるようになってしまったらしい。

その結果がこの回復力でその他にも副次効果を及ぼしていた。寿命が延びたり、【精霊の加護】^{ティ}の効果が増大などがある。しかしこれらを含めてもティポが一番恐ろしいと感じているのはこれがまだ成長途中である伸びしろが残っているということ。ランクアップ毎に何かしらが起こると確信したティポは軽く頭を抱えた。

もしかして私、とんでもない爆弾作り上げてんじゃね、と――

その事実を確認した瞬間当の本人であるハチマンがこれらを告げられても強くなれる手段を手に入れたとしか考えていないためティポは考えるのをやめた。もうどうにでもなれ、と。所謂やけくそである。

ちなみにこれらはベルどころか主神であるヘスティアも認知していない。ハチマンは最初報告しようとしていたがティポがそれを止めた。その理由はハチマンの存在はそのものがイレギュラー。精霊でハチマンの中でしか実体を伴わない自分ですら胃痛や頭痛が幻痛として表れていたのなら、現実にいるヘスティアがこの話を聞けば絶対に

やばいと心配してのことだった。

しかし近い内に何故自分だけ悩まなければいけないのか、という思考になりハチマンに許可を出しこの事実を新たな能力とともにあるファミリアとその主神そしてヘスティアの前でハチマン本人が暴露し、胃痛頭痛仲間を増やすことになるのを彼女はまだ知らない。

そして視点は戻り——ハチマンは十一階層内を駆け回っていた。

『本当にやる気?』

(ああ)

『もしかして昨日のこと?』

(…)

『ありや凶星?』

剣であるティポがわけのわからないことを言っているのは無視して辺りに意識を巡らせ目標を探す。

ちなみに剣であるティポとこうして会話で来ているのは性能がアップした【^{テイ}精霊の加護^ポ】の交信可能と言う効果なのだ。具体的には【二重存在^ダ】の状態で遠く離れていても交信が可能と中々の優れもの。これの何が凄いつて密偵^ダなんか容易にできること。しかしそれをこんな会話に使っているのだから完全に宝の持ち腐れである。

「しかし…やっぱそう簡単にはいかないか…」

通り過ぎざまにオークを一閃しながら眩く。

ハチマンは単独行動と言うこともあり敏捷の数値にものを言わせ走り続ける。パーティープレイではない完全なソロプレイ。

それはダンジョン内において危険以外の何物でもない。モンスターに囲まれてもしたら完璧アウト。それを防ぐためにも駆け抜ける。

『そりゃ、希少種だもん。そう簡単にはいかないでしょ』

「いやまあそうなんだけどさ…」

ティポの眩きに返し今日はこのまま終わるか、なんて考えていた時。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!』

「う、うわああああああああつ!？」

「!!」

昨日聞いた叫び声と冒険者らしき人の悲鳴が鼓膜を揺らす。

『ハチマン君』

「分かつてる、ファイ・オーガ【纏え】」

魔法のトリガーを引き、それを纏い音の原因のもとへと速度を上げ向かう。霧をかき分けながら進んでいくと段々と目標であるそれが現れる。

(いたなっ…!!)

目に入ってきたのは、絶望の表情を浮かべている冒険者パーティーとそれを悠然と見下ろすインファント・ドラゴンの姿。

(獲物の横取りはご法度だけど…まあ今はいいだろ。…いいよね?)

冒険者パーティーの方は装備なんかを見る限りLv1のパーティーであり、周りに他の冒険者の姿もなくなるともあの冒険者パーティーが勝てるとは思わなかったため乱入する。だって諦めて武器離してる奴いるし。

「危ないぞ」

「へっ?うわあっ?!」

取り敢えず近づき一番前にいた前衛職であろう男の首根っこを掴み後ろへと放り投げた後、すぐにその場を離れ冒険者パーティーのもとへ避難する。

そして数秒後俺と前衛職のいた場所にインファント・ドラゴンの足が振り下ろされる。それを見た投げ飛ばした前衛職は顔を青くする。

「おい、あいつもらつてもいいか?」

「「えっ?」」

「だからあいつもらつてもいいかって」

「え、その、どうぞ?」

「あざす」

目を白黒させている冒険者パーテイーの一人から許可をもらったハチマンは、先程から睨みつけているインファント・ドラゴンの元へと走り出す。

自らの攻撃を邪魔した存在が突っ込んできたことでインファント・ドラゴンは嬉々として足を振り上げ俺を踏みつぶそうと攻撃を仕掛ける。それを俺は横っ飛びをし回避する。

(まずは…)

攻撃を回避した俺はまず機動力を奪うために俺を踏み抜こうとした前足へと剣を構え斬り飛ばす。

『ギャアっ!?!』

いきなり前足を失ったインファント・ドラゴンは痛みによる叫び声をあげバランスを崩し失った足の方へと傾く。その間に逆の前足の方へと移動し同じく斬り飛ばす。

『ッ!!』

それにより最初に失った足の切断面が地面につくと、今度は逆の方向へとバランスを崩し先程切り飛ばした足も地面へと着く。

インファント・ドラゴンはエジプト座りの逆バージュョンのような体勢になり、身動きの出来ない格好になる。その光景にティポが若干引きながらもそんなのお構いなしに

低くなったインフアント・ドラゴンの眼前へと飛び上がる。

そこで俺はスキルを発動させる。スキル名は「アウトフィシア自己犠牲」。これまでためたダメージを————と言っても体に傷はない————ティポへと付与する。する

と剣の周りを黒の粒子が舞う。それを確認すると剣を持つ手に力を入れ

「————ふっ！」

ただただ剣を横に一閃する。はたから見たらただの一閃。しかもその攻撃は敵には掠つてもおらず、普通ならダメージなんてはいりはいらない。

しかしハチマンが剣を薙ぎ終えた瞬間インフアント・ドラゴンの首が胴体から離れ宙を舞う。

「やつばやべえなあれ……」

『君がやばいのは元々だよ』

一閃をかまし胴体を蹴り冒険者パーティーのもとまで行き着地し自分の行ったことを思いだし軽く引く。なんか馬鹿にされた気がするがそれは無視する。

先程ハチマンがやって見せた一閃は「アウトフィシア自己犠牲」により斬撃自体を強化した結果それを飛ばすことを可能にしたのである。

そしてそんな光景をずっと見ていて口を半開きにししている冒険者パーティーが一つ。

「……なあ、あんたの名前を聞いてもいいか？」

「ん？」

いち早く硬直からなおった投げ飛ばした前衛職の人が近付き名を訪ねる。それに対し素直に名前を答え獲物を奪ってしまったことを謝罪する。

「い、いや謝らないでくれ。と言うか助けてもらったんだから感謝してるくらいだ。ありがとう」

「気にしないでください。好きでやったことですし」

「…」

「それじゃあ俺はこれで」

ハチマンはそれだけ伝えると満足したように背を向け歩き出した。

「あれが【ブラック・ルーキー】か…」

「すごかったね」

「ああ、巷ではインチキなんて言われてたが実力なんだろうな。しかも助けたのに見返りも求めやしねえ」

そんなハチマンの背をまるで英雄を見るかのように眺め憧れを抱く冒険者一同。しかしこれらの行動はベルがインファント・ドラゴンを倒したのを見て先を行かれた感かして悔しかつただけなんてことを言うのは邪推だろう。

そして当のハチマンはと言うと――

「二体目いないかな…」

『…』

自らの相棒に呆れられながらも二匹目を探してまた十一階層内を走り回っていた。

#21 中層

「ここが、中層…」

「話には聞いていましたが、今までより光源が乏しいですね」

インフアント・ドラゴンをぼっこぼこにした一週間後、エイナさんから中層進出の許可を貰った俺達は最初の死線フリーストラインとも言われている十三階層に所謂『中層』に足を踏み入っていた。

「十三階層はルームとルームを繋ぐ通路が長いのが特徴です。安全に戦闘を行う為にも、まずリリ達は迅速に最初のルームに到達しなければいけません」

リリの説明を聞きながら、俺達は確認し合うように頷く。

「モンスターと出くわさない内に少しでも前進しましょう。ヴェルフ様、ハチマン様、この通路は一本道なので、道なりにガンガン進んじやってください」

「わかった（了解）」

リリにの指示に俺とヴェルフは前に出て進んでいく。

因みに今の陣形はと言うとヴェルフが前衛、俺が前衛兼遊撃、ベルが中衛でヴェルフのサポート、リリは後衛と言うものになっている。初の中層と言うこともあって程度を

知るまではティポは俺の中でお留守番と言う形で収まった。

その際『役に立てなくてごめんね…』と心の中でティポが謝っていたが、俺が気にするな、といいイレギュラーがあつたら頼むと付け加えるとすぐに機嫌をなおし納得してくれた。

そんなこんなで四人一列で中層の奥へと足を踏み入れていく。

「…それにしても、やつぱり派手だよな、コレ」

『サラマンドー・ウール』のことですか？」

「ああ。着心地は文句ないんだがな」

静寂が訪れるダンジョン内で、ヴェルフが軽い調子で話題を振ってくる。それにリリもあつさりに乗る。

「リリはこんな立派な護符を着れる日が来るなんて、思いもありませんでした。ありがとうございます、ベル様。大切にしますね？」

「あははは…割引してもらったものだけだね」

「しかしこんなヒラヒラした服が、上級鍛冶師の作品も顔負けする耐熱装備つてのが納得いかねえ…まあ、それ以上におかしいやつがいるけどな」

着流しの裾を引っ張りながら口にした最後のセリフに、全員が俺の方へと視線を向ける。

「なんだ精霊がいるから『サラマンダー・ウール』はいらねえって…」

「ええ、本当に。なんなんですか生身一つで精霊の護符より性能が上って。本当に人間なんですか？」

「ふっ、気にしたら負けだぞヴェルフ、リリ」

「それを張本人のお前（ハチマン様）が言うんじゃねえ（言わないでください）っ!!」
 そう、二人の言うとおり俺は今『サラマンダー・ウール』を身に着けずいつも通りの装備でここまで来ていた。

その理由としてはティポ曰く精霊である俺と俺が持っている魔法がそのまま司るものになるらしいティポがいればそこら辺の精霊の護符なんて目じやないらしい。しかしその際

『私も精霊で君も精霊みたいなもんだよ？それに君の魔法を思い出してみて？』『サラマンダー』だよ？要らないならそんなの要らないよ。精霊の護符？精霊そのものがあるんだからこつちの方が性能高いに決まってるじやない。それとも何浮気？他の精霊に浮気するの？私なんかよりもあんな布切れがいいの？』

とかかなり早口でティポにキレられたハチマンがいたとかいえないとか…。

「ですが、正直にありがたいです。非常識ハチマン様が居てくれるおかげで費用は浮きますし、なにより全滅のリスクがぐっと低くなりました」

「…なんか字おかしくなかった？」

『ヘルハウンド』、だよね？」

「あれ」

「もし遭遇した場合はハチマン様かヴェルフ様が真っ先に処理と言う形で…」

「おう、任せろ。俺だって火葬は御免だ」

「…」

無言になっていいる俺は無視され話し合いは終わり、洞窟を装う一本道を歩き続ける。

そして数分。それまで動いていた俺達の足が、ほぼ同時にとまる。

「…いきなりか」

前方の暗闇から姿を現したモンスターを見てヴェルフが呟く。

ごつごつとした黒一色の体皮に真っ赤に輝く両の目。『放火魔』とも呼ばれる十三及

び十四階層での死亡原因第一位、ヘルハウンド。

「ハチマン様」

「了解」

俺が駆け出すのと同時にリリが指示を飛ばす。その指示へ返事を返し、二匹いるヘルハウンドのもとまで肉薄し間合いを潰す。

こいつらは身体能力も高いが真に恐ろしいところはその口から放射される火炎攻撃

にある。その炎は並の防具ならいとも容易く溶かしてしまうほどの高威力。それを遠距離で吐き出せると言うのだから本当に恐ろしい。

ならどうするか。答えは簡単、やられる前にやれ、だ。

「シッ！」

『アガッ!?!』

目視した瞬間間合いを潰されたヘルハウンドは驚いているのか動きを止め、その間に一匹は真つ二つに一刀両断する。

「つとー！」

『キャウツ!?!』

そしてもう一匹は下から蹴り上げ宙を無防備な状態で舞う。

「ヴェルフ！」

「わかつてる！」

そのヘルハウンドを俺に続いて出て居た前衛のヴェルフが突き刺しヘルハウンドは呻き声と共に崩れ落ちた。

「よし…幸先は良さそうだな」

「うん、いい感じだった」

一旦戦闘を終え、パーティーの空気が弛緩する。

「つと。また来たぞ」

「!」

しかしそれもつかの間。ヴェルフがモンスターに反応し直ぐにその方向へと視線を向ける。

道の奥からやってきたのは、兎の外見をした三匹のモンスターだった。

「あれは…ベル様!」

「違うよっ!」

「ベルが相手か…冗談きついで」

「いや完璧に冗談だから!」

「かかってこいベル」

「だから違うっ…待ってこっち向いてソードを構えないで!」

俺がベル（本物）の方を向いてソードを構えると本人は泣きそうな表情になる。そんな茶番の間にもベル達（偽物）は天然武器をの石斧を装備する。

「四対三だな」

「言っておきますが、あくまで四対一を繰り返すんですよ?」

「ああ、分かっている。それじゃあまず右をやるぞ」

「う、うんっ!」

「おうっ！」

「それにしても、初めてモンスターを倒すことに抵抗を覚えますねえ：普通に可愛いです」

『キャウツ！』

『キィ、キィ！』

四人一組、三匹一塊。計七つの影が、正面からぶつかり合った。

アルミラージの鳴き声が四方八方から俺達の耳を殴る。

「息つく暇もない、つてな！」

「無駄口叩く暇もないです！」

次々と襲いかかってくるモンスターの群れを捌きながらリリとヴェルフが叫ぶ。

ヴェルフは大刀を振り回し、リリはそれを援護、俺とベルは魔法を解禁しモンスターの数を削っていく。

「ヴェルフ、伏せろ！」

「うおっ!？」

二匹のアルミラージがヴェルフに攻撃を仕掛けようとしていたのに気付き声を張る。

俺の声に反応ししやがんだヴェルフの上を飛び越えアルミラージを殴り再起不能ま

で追い込む。

(多すぎる…)

十一階層の時とは質も量も全然違う。しかも負担はLvが上である俺とベルに集中しており大分疲弊していた。

休憩が必要だと誰が見るよりも明らかだったが何せその暇がない。内心どうするか、悪態をついていたその時に気付く。

(…?)

六人で編成されたパーティーが段々と俺たちのほうへと向かって近付いてくる。

そしてその後ろには大量のモンスターが後を追って

「——つ?!まじい(です)、押し付けられたっ!!」

その行為と目的にほぼ同時に気付いた俺とリリが声を張り上げる。

「え…?」

「囿にされた、すぐにモンスターが来る! 退却するぞ! 全員右手の通路だつ、急げ!」

「おいおいおいつ、冗談だろ!」

普段出したことのないような切迫した声にベル達は動く。

「ハチマン様、魔法で…」

「分かってるっ!」

消えかけていた魔法をもう一度唱え火力を増やし通路をふさいでいるモンスターとの距離を詰め蹴散らしていく。

——ティポをだすか？

一瞬考えが浮かんだがすぐにそれを否定する。もしこんなところで出したらティポはこの数のモンスターから集中砲火を受け速攻お陀仏。ついでに俺もお陀仏からの全員道連れなんて最悪なことになりかねない。

そうこう考えているうちにも人が通れる程度の間をあけ、そこに全員がその身をねじ込む。

(追いつかれる)

どんどんと通路の奥へと進んでいくうちに迎えるだろう結末に気付く。

それは単純な話。追いかけてくるモンスターのほうが速いのだ。ベルや俺はともかくサポーターで「ステイタス」の低いリリでは一本道において中層のモンスターたちから逃げきれないのは道理だった。

どうすれば、そこまで考えた時に横から投げかけられている視線に気づく。その視線の先のほうを見ると真つすぐと俺の目を見つめ、すぐにその思惑に気付く。

理解してくれた——と判断したのかベルはすぐに後ろを振り向き立ち止まる。

「っ!? ベル様!」

「おい、ベルー！」

「足を止めるなっ！」

その行動に気付いたリリとヴェルフが制止の声を上げるが、それをかき消す。

そんな俺たちの問答も無視し、ベルは盾を装備している左手を真つすぐ突き出し、砲声。

「【ファイアボルト】！」

通路に向かって魔法を三連射。

瞬間的に精製された炎雷は狭い通路の中で光り輝き、モンスターを一掃していく。

(くそっ)

その光景を見ながら俺は心の中で悪態をつく。

こういう場面での自らの魔法の火力不足を改めて自覚させられる。何時ぞやに言った必殺技として劣る、その言葉が今自分へと深く突き刺さる。もっと火力のある魔法があれば――

そう考えた時通路を埋め尽くしていた爆炎の中から四つの影が飛び出してくる。

(っ!?)

飛び出してきたのは四頭のヘルハウンド。

モンスター達は比喻抜きで燃えており、満身創痕のはずだった。しかし自らが炎を吐

き出す為か全身を焼かれてもしぶとく生きていた。

『オオオオオオオオオオオオオツツ?!』

「つつ!」

怒り狂いながら飛び掛かってきたうちの二匹はベルが受け止めるが、その横を残る二匹が抜いていく。

「っ!」

脇目もふらずベルの左右を通過していったヘルハウンドは、本能故かりりとヴェルフの元へ疾走する。

それに気付きベルの悲鳴が飛ぶ中、ヴェルフには悪いがまずリリに襲いかかってくるヘルハウンドを処理するため居リリの前に立つ。

『ガアアアアアアアアアアアアア!!』

「くそがつ!」

「舐めんなアツ!」

交錯する。俺は飛び掛かってきたヘルハウンドを斬り払い、ヴェルフは大刀を振り払いモンスターとすれ違う。

「三人とも、平気!?!」

「は、はい…!」

「大丈夫だ」

「なんとか、な…畜生め」

ふらつきながら立ち上がるリリと、腕を押さえながら情けなさそうに薄笑いを浮かべるヴェルフ。

敵の爪が掠めたのか、切り裂かれたその肌は出血していた。

庇いきれなかった——その思いがすぐに胸を満たし、思わず顔を歪めてしまう。どうしてもこんな状況をこの数による理不尽を打ち破れる火力が欲しい。そんなことを望んでしようがない。

しかしそれもベル達の背後の光景にすぐさま目の色を変える。

「つーまだ来るぞー」

通路の奥からこちらへ向かってくる大量のモンスターの影に、警戒するように呼び掛ける。

しかしリリ達は俺とは反対の方向を見つめ声を漏らす。

「挟み撃ち…」

「気が滅入るどころじゃないな…」

その声に炎の弱まった一本道に目を向けると、先程とは違う別のアルミラージが跳ねながら出てくる。

「中層つてのは何でこう、モンスターが寄ってくるのが早いんだ。休む暇がないぞ」
「中層だからだろ」

「は、ははっ…」

そんな軽口をたたきながら、リリがバックパックから取り出した回復薬を二人に回す。

俺はと言うとその受け取りを拒否し、温存するように言う。

確かに疲弊はしていたがベルとヴェルフほどではなく逆に余裕があり集中力も未だに続いていた。発展アビリティの効果か？なんて考えながらも《神様のソード》を構えなおす。

「三人とも、リリは逃げることを上策とします。なんにしても態勢を整えなければキリがありません。なので…」

「片方を強引に突破…か」

「ええ」

俺とリリの問答に、他の二人も頷く。

「前には俺が出る。何でか普段よりも動けるしまだ余裕がある」

「わかりました。それでは…」

「おう」

「…行くぞ」

ビキリ、と。

数え切れないほどのモンスターを捌き疲労が頂点を迎えようとしていたハチマン達のもとに不穏な音が届く。

その音に反応し咄嗟に視線を周囲に巡らせた。しかし壁面に異常はない。ならどこから。

(横じゃない——)

それにいち早く気付いたのはハチマンだった。精霊に近付いていた彼は普通の人より索敵能力が高かった。

その音源は頭上。天井を仰ぐハチマンに釣られベル達も顔を振り上げ、息をのむ。

まるで蜘蛛の巣のようにあり得ない数の亀裂が天井に走る。広すぎる、今のハチマン達には絶望的な効果範囲。

——やばい。

そう思った瞬間。

耳を塞ぎたくなるほどの破碎音をまき散らし、ダンジョンはその牙をむいた。

『キィアアアアアアアア——！！』

甲高い産声を上げ夥しい数の『バッドバット』が天井から生まれ落ちる。と、同時に辺りに散つていき岩の天井を黒一色に染め上げる。

その視界を遮られた奥で、穴だらけとなつた天井は限界を迎え安定を失い、崩落する。

「——ツツ?!」

ベルも、リリも、ヴェルフも、俺もなりふり構わず地を蹴つた。

降り注ぐ殺人的な岩雨。一つ一つが命を奪う可能性を孕み満を持して俺達に襲いかかってくる。

轟音に次ぐ轟音。命を奪わんとしているそれらを俺達は必死に避け続ける。

「ぐっ、う……!」

ようやく落石の雨が収まった時。通路全体に土煙が立ち込め、ヴェルフのうめき声はどこからか漏れてくる。

確かめずともその脂汗が滲みだしたような声音に負傷したことを悟る。遠くではリリの荒い呼吸音が、ベルの息遣いが聞こえてくる。

生きているそれだけが確認できた時。

『ウウ……』

立ち込めた砂埃が薄れ、徐々に薄れていく視界の中絶望を現したような漆黒の体躯が

いくつも影を作り俺達を見下ろしていた。

『ガア……!』

全てのヘルハウンドが地に低く伏せる。それは爆炎を放射するときの構え。

() いけない)

リリは青ざめる。

() 間に合わねえッ)

ヴェルフは己の不甲斐なさを心底呪うように歯を食い縛る。

()

ベルは言葉を失い瞠目する。ここが中層か、と。納得するように。

その間にもヘルハウンドたちは一斉に頭を振り上げた。誰もが待ち受ける次の瞬間に絶望しながらも男は動いた。

【守れ】ファイオーガツツ!!

ヘルハウンドがその内包した熱を解放すると同時に、ハチマンは三人の前に躍り出て何時ぞやに試したように空中に炎の壁を作り出しそれを手で押さえる。そして次の瞬間。炎の壁を通して衝撃が襲いかかる。

「ツツ!!」

数秒、それに耐え続ける。炎の壁の温度は上がり、手は焼け爛れていくがそれをすぐ

に精霊の奇跡で直していく。ティポの加護がなければ消し炭になっている手を見ながら感謝しながらも思いを燃やす。

そして耐えて更に数秒かかっていた圧力が消える。

それを確認した俺はこれを解除しヘルハウンドに斬りかかろうとした瞬間。

またビキリ、と音が鳴る。

(またかつ!?)

パーティーメンバー全員が同じ思いを抱き、辺りにすぐ視線を向ける。しかし上へ横へ視線を巡らせようとも亀裂が確認できない。

その間にもビキリ、ビキリ、と音は鳴り続けそれに気付く。

「ちがう、ハチマン、したっ——」

俺と同時に気付いたベルが声を上げるがそれを言い切る前にダンジョンの床が限界を迎えた。

「「!!」」

ダンジョンの床が抜け、その穴へと俺達は吸い込まれるように落ちていった。

2 2 決意

迷宮は静かだった。周囲にモンスターの気配はせず、湿った空気が石の香りとともに灰色の洞窟内を埋め尽くす。

そんな迷宮内で乱れた呼吸が四つ。はっ、はっ、と乱雑に吐き出されたそれはあたりに残響する。

ヘルハウンドの一斉砲火を被った俺達は、辛くも一命を取りとめていた。

しかし複数のモンスターからなる凄まじい爆炎を耐えぬいた後、限界を迎えた床が抜け十三階層より下へと落ちてしまっていた。

「…っ。行き、止まり」

パーティーメンバー全員がまただ、という言葉を口の中で噛み潰す。

完璧に迷った。ダンジョンでは一番回避すべきその事実には歯噛みしながらも、焦つても仕方ないと心を落ち着かせる。

現在位置さえわからず地図もない。十四階層の地形を頭に入れてはいるがどうにもさつきから合わない。

幾度となく現れる行き止まりに、ベルやヴェルフ、リリまでもが瞳を眇める。

「一旦、落ち着きましよう」

壁の前で立ち尽くしていた三人に声をかけようとしたところで、リリが大きく深呼吸をし、その言葉を告げる。その言葉に振り開けると、彼女は汗を流しながら、俺と同じく冷静になろうとしていた。

その提案にベルとヴェルフは荒れかけていた胸が冷え提案に乗り、地面に座り込む。

「まずは、パーティーの装備の確認です。リリは、回復薬が四、解毒薬が二個あります。ベル様達は？」

「俺は何も残っちゃいない」

「俺もだな」

「僕はまだ、レッグホルスターに回復薬が何個か」

その間にバックパックから水筒を取り出し、それを全員で回す。

「次は武器の確認です。ハチマン様に言われて常備していた短剣なんかの軽量の武器はどこかに行つたみたいです。大剣やバゼラードなんかの重量のあるやつは残ってますけど…それでリリの装備ですがボウガンを先の崩落で失いました。ヴェルフ様の大刀は無事で…」

「ベルは大剣に、後は短剣と小型盾をなくしたのか」

「う、うん。でも、ナイフはどつちも無事」

『サラマンダー・ウール』も、まだ生きてるな」

「なるほど…：それでは次です。ハチマン様、ティポ様を呼んでください」

「…了解。【二重存在^{ダブル}】」

リリの台詞に了承の意を伝え、起動式を唱える。そしてその起動式に呼応し俺の横でティポが本来の姿で発現する。

実はこの中層進出が始まる前にティポを呼び出す際の条件なんかを決めていた。それは何か重篤なイレギュラーが発生した場合に協力を仰ぐぎ、その判断はリリがするというもの。

これはティポきつての提案でありティポ曰く『ハチマン君はよっぽどのがない限り私を出さない。だからその判断はリリちゃんにお願いしたい』とのこと。これをそのまま全部リリに話したら納得し、任せてくださいと意気込み、承諾した。

そしてリリにとって今がそのタイミングであり、はなから異論反論意見その他一切を認めない、とティポにもリリにも厳重に注意されていたのでハチマンは反対せずそれに従う。

「ふう…：リリちゃん、ベル君久しぶり、それでヴェルフ君は初めましてかな？」

「お久しぶりですティポ様」

「久しぶりです」

「は、初めまして?」

テイポは現れると同時に挨拶を告げ、それに三者三様の反応を示す。ヴェルフは若干きよどつてるけど。

軽い挨拶みたいなのを済ませたテイポは状況は把握済みと言わんばかりに口を開く。

「状況はハチマン君の中で見てたから分かつてる。それで私は前衛をすればいいのかな?」

「はい、負担は大きくなつてしまいましたが——」

「待て、前衛には俺も出る」

「なっ…ば、馬鹿なんですかっ!」

「いや、馬鹿つて…」

「これを馬鹿と言わずに何を馬鹿というんですかっ!あの十三階層の猛攻で全員疲れ果ててしかも一番負担がかかっていたのはハチマン様なんですよ!?!奇跡的に全員無傷で済んでるとは言え休んだ方がいいに決まっています!特にハチマン様はっ!」

「リリちゃん落ち着いて。ハチマン君は馬鹿で阿保で間抜けでスカポンタンだけど、何の考えもなしにこんなことは言わないから」

「ちよつと?」

「分かってますっ!分かってますよそんな事、馬鹿で阿保で間抜けでスカポンタンですけど、ちゃんと考えがあるんだらうってことくらいっ!でもだからってハチマン様がずっと危険に晒されることを受け入れろって言うんですかっ!」

「なあこれ泣いてもいいよな?」

「駄目だこれはお前が悪い」

「ええ…」

「俺はリリ助の意見に賛成だ。そりゃあテイポさんに全部ひとりで任せてるのは心苦しいが今はそれが最善だろ?なら無理してお前が出る理由は…」

「いやある。よく考えてみる、今は大剣やバゼラードなんかの重い装備しか残ってないんだぞ?ならヘルハウンドが出た時はどうする?」

「それは俺の魔法で…」

「マインドにも限りがある。いざって時に残しておいた方がいいに決まってる。ならこの中でも一番速い俺が前に出てやった方がいい」

「それなら僕が前に出れば」

「馬鹿か、そんなことしたら遠距離で牽制する奴がいなくなるだろ。俺の魔法はそういうのに向いてない完全近距離専用。でもお前の「ファイアボルト」は違う。遠距離中距

離でも対応できるしそれで牽制もできる。それで時間が稼げれば俺かティポが戻ってこれる」

ここでいったん言葉をきり、さらに言葉を続ける。

「それに他にも理由がある。ティポばつかに前線を任せてティポが死んだら？当然俺に痛みがフィードバックしてくる。そしたら足手纏いが一人完成してしかも最高戦力がもう一人抜けてベルの負担が増えるだろ。それならティポをカバーできる奴が、それもいいとなればティポを出し入れが可能な奴が前に行った方がいい。前線ならタイミングも見極めやすいしな。それにそれでお前達がしっかり休めればその分俺も休めるし。だからこれが本当の最善だ」

「でも体力が…」

「回復薬がある」

「……………なら集中力…」

「俺の発展アビリティの影響か知らんけど集中力はまだ続いている。少なくともベルとヴェルフよりはあると思うぞ。多分、知らんけど」

俺がそう言い切る？とティポを除いた全員が顔を歪める。ティポも若干表情を変化させているが、これはほかの三人と違って呆れ半分、って感じなんだろう。

しばしの沈黙が場を支配する。様々な感情が表情に浮かぶ中、三人はそろって悔しそ

うな顔を浮かべる。

そしてその沈黙を最初に破ったのはリリだった。

「わかり、ました」

「リリっ？」

「ここで言い争っても不毛なだけです。それに悔しいですけどハチマン様の言ってることは正しく最善です」

「…なんかすまん」

「そう言うならそういう事提案しないでくださいっ！」

リリはひたすらジト目を俺に送り続け、暫くして溜息をつく。

「…話を戻します、今後の方針何ですが、ティポ様が変わったとは言え、武装も道具も限られてますし、何より一番疲弊してるはずのハチマン様が前衛に立つことが最善の時点で、生きて帰るのは絶望的なことに変わりはありません。なのでできる限りモンスターとの戦闘を避けなければいけません。状況が許すならば、逃げの一択です」

ティポを除いた全員が片膝をついた体勢で、リリの話を聞きいり、ティポはその精霊特有の索敵能力で辺りを警戒しながらリリの話に耳を傾ける。

それにベルとヴェルフは渋々ながらも異論はないと頷く。

そしてそこで見計らったように口を開いた。

「四人共、取り乱さず聞いてください。これはリリの主観ですが…今いる階層は、十五階層かもしれません」

「……」

その言葉にベルとヴェルフは絶句するが、リリはなおも言葉をつづけた。

「あの崩壊で落ちた時間を顧みるに、二階層分の距離を落下した可能性があります。この階層の特徴も、通路の幅や光源、迷宮の難解さなど、十三、十四階層より十五階層のそれに近いです」

その並べられる言葉達に落ちていている間の体感時間を思い出す。一階層をおちたにしては長すぎるその落下時間を。

そして何よりリリの言うとおり、この階層のつくりと俺が覚えてる十四階層の知識とでは相違点が多すぎる。

それを含めるとリリの言葉は根拠と説得力に溢れていた。自身もその可能性を考えていた為納得する、と同時に心の中で齒噛みする。

この状態では地上の生還は絶望的だ、と。いくらティポがいるからと言ってモンスター達が弱くなるわけではない。十三階層ですら死にかけていたのに十五、十四、十三と越えて更に残り十二階層？おまけにこっちはかなりの疲労付き。希望がないわけじゃないがほぼ不可能に近い。

他のメンツもそれに気付いたのか表情に絶望の影が差し始める。ここまで来たら方法は一つしかない。

そう考えて口に出そうとしたが恐らくリリも同じ考えだろうと思いついて待っているとリリが一息置いて、声を次いだ。

そしてリリの提案をを聞いていくと大体、と言うか全部俺と考えてることは一緒だった。

それは縦穴を使用し十八階層を目指すというもの。

一見今ですら限界なのにさらに下を目指すなんて馬鹿だ、と思うかもしれないがこれが一番生存確率が高い。一番の要因はやはり縦穴の利用による時間の大幅な短縮だろう。

十七階層にいる階層主、ゴライアスが懸念ではあるが二週間前に討伐され期間的にはまだぎりぎり間に合う。これらを聞いた上でヴェルフは重苦しく口を開いた。

「本気か、お前……？」

「ええ、本気も本気、大マジですよ。少なくともハチマン様はこの策に賛成みたいですよ」

俺が大して驚いていない様子からそう判断したのかりリリがそう言うのとヴェルフとベルは俺の方を向きリリに言ったように本気か？と視線で訴えてくる。

確かにベルとヴェルフ、リリそして特に俺の疲弊具合は結構やばい。あの炎を受け止めた時の回復で結構体力持ってたし、こいつらに言っていないが結構きついことになってる。唯一その行為を知っているのはティポだけだが、本人は特に口を挟むことなく黙っていた。

そんなティポに感謝しながらも————なお本人からはとんでもなくジト目はずっと向けられているが————ヴェルフの問いに答える。

「ああ、理由はリリが説明した通り俺もこれが一番生存確率が高いと思ってる」

「勿論、これは選択肢の一つです。ベル様達がおっしゃったように、素直に上を目指した方が、差し当たって安全であることは間違いありません。歩き回っていれば、他所のパーティーと会って助けを乞うこともできるかもしれませんが」

リリは自分の考えを言い終えた後、締めくくくる様に、ベルのことを真つすぐ見つめる。「このパーティーリーダーは、ベル様です。ご判断は、ベル様にお任せします」

ベルの瞳が微かに揺れる。パーティー全員の命がかかった判断を自分がするのか、と。そして助けを求めるかのように俺とヴェルフの方に振り返る、が。

「いい、決める。どっちを取ったって、俺はお前を恨みはしない」

「ヴェルフに同じく、パーティーリーダーはお前だ、お前が決める」

まあ、めんどくさいし俺の柄じゃないから投げ出したんですけど、というセリフは心

の中にしまいベルを見つめる。

その視線を一挙に受けたベルの瞳がまた更に揺れる。決意という炎を奥に秘めながら。

「進もう」

様々な感情が渦巻いたその一言にヴェルフはにと男前に笑みを浮かべ、リリは苦笑い、俺はベルから視線を外し、ティポは未だに俺に呆れの視線を、いやさつきよりも数倍強い視線を送っていた。そんな呆れますか？

そんなこんなで中層の奥へと進む決意をしたパーティーはその歩みをまた先へと進める。しかしその中で誰も気付かない。明らかに怪我をしていた人物がいたことに。その本人でさえ記憶を軽くいじられそれを覚えていないことに。そして今も脂汗を流しながら気付かないほどの、ほぼ無意識で足を庇うように歩き、それを蓄積チャージしていることに。

今ここに苦難が予想される中層探索が再開した。

#23 ゴライアス

汗が顎を伝って、地面へと落ちた。

中層の湿った空気が肌を撫で、汗がさらに流れ落ちながらも俺達は薄暗い迷宮の中を移動していた。

陣形は俺とティポが前、ヴェルフとベルが真ん中、リリが後ろというものになっている。

あの十八階層へと向かう、と決めたあの話し合いから随分経っているにもかかわらず俺達は未だに十五階層を彷徨って居た。その理由は単純で未だに縦穴が発見することができていなかったからだ。

全員がまずい—————と思いながらもその足を止めることはせず通路の奥へ進んでいく。後ろついてくるリリは常に、はっ、はっ、と小さな呼吸音を漏らす。その前のベルやヴェルフは息こそ整っているものさつきから汗をかく動作が増え、何よりその表情は歪んでいた。まあこれは違う原因のせいもあると思うけど。

「っ……リリスケ、この臭いはどうにかならないのかっ」

とうとう我慢の限界が来たのかヴェルフが後ろにいるリリに声を飛ばす。

その訴えに対し死んだ目をしながら言い返した。

「我慢してください…お言葉ですが、リリの方がこの悪臭に悩まされています」

ヴェルフ達の臭いと言うのはさつきからベル達が顔を歪めている原因であり、リリが首から吊り下げた袋から発せられる悪臭の事だ。

俺とティポは一番前にいるから被害はそんなだが——それでも大分臭い——

後ろにいるベルとヴェルフ、ましてやそれを至近距離で嗅いでるリリなんかは地獄だろう。

「リリ達にも有害ですが、この臭いはモンスターの毒そのものです。この悪臭が続く限り、よっぽどのがなければモンスター達は近寄ってきません」

何故わざわざこんな臭いの爆弾を使用しているかと言うとリリの説明通り『モルブル強臭袋』という名前の臭い袋の道具は、その臭いによりモンスターが近寄らないというもの。

現に今は中層息のモンスターが一切襲ってこない。効果は靦面だった。まあさつきから言ってる通り臭いっていうデメリットはあるけど。

そんな感じでモンスターの気配や唸り声を通路の先々で感じつつも、俺達は交戦することなく、移動を続けていた。

「…」

しかしそのまま順調、という訳にはいかず一本道の通路の先で複数の真つ赤な目が浮

かび上がる。

俺達のことを完璧に捕捉し『強臭袋』の効果が薄れる三十Mほどの距離で陣取っているのは、ヘルハウンド。中層息で凶悪な遠距離を仕掛けられるモンスター。

それを視界に納めた時地を蹴ろうと力をこめようと腰を落とした瞬間。

「やるしかないな…任せろ」

俺より後ろにいたヴェルフがそう呟いた。すぐに突貫する姿勢を解除し、ヴェルフの方を見るとその右腕を突き出し掌底をヘルハンドへと真つすぐに向ける。

「燃え尽きろ、外法の業」

紡がれたのは超短文詠唱。

「ウィル・オ・ウィスプ」

イグニス・ファトゥス その歌が紡ぎ終わった瞬間、ヘルハウンド達は自爆し三つの大爆発が起こった。

「魔力暴走!?!」

リリの驚愕の声上がる。これには俺も目を見開き驚いた。

イグニス・ファトゥス 事前にヘルハウンドに有効かもしれない魔法があるとは聞かされていたがまさか魔力暴走を引き起こすものとは思わなかった。見ると横のティポも驚いたように――

――じゃなくてただ単に顔を引き攣らせていた。

「成功したか…」

「ヴェ、ヴェルフ今のはっ?」

「俺の魔法は特殊らしくてな。一定の魔力の反応を火種にして、爆発させるらしい」

【ウィル・オ・ウイスプ】———アンチ・マジック・シールド対魔力魔法。

それを聞いて俺もティポと同じく顔を引き攣らせた。

よく考えてみてほしい。エルフ以上の魔法種族である精霊の俺達が使う魔法が火種になつたら? しかも俺の魔法は付与魔法。エンチャントそんなの全身火種になっているのと変わらない。

「モンスターで試したことは今までなかったんだが…首の皮一枚、繋がったな」

またしてもにつと男前に笑うヴェルフ。

しかし俺とティポは全く笑えない。どう考えても天敵。味方でよかつたなどと安堵しているところなのに気付く。

「…待てよ? モンスターでつてことは…」

「ああ。同じ【ファミアリア】の連中に頼んでな。見事に爆発した」

「…ヴェルフ様、それは」

「いや、確かに俺も悪かつたがつ、効果を試させてくれとは言つたんだ。何が起こるかわからないのはあいつ等だつて承知して…いや俺が全面的に悪いんだけどなっ?」

それを聞きりりもベルも俺達同様に顔を引き攣らせ同じことを考えた。

『白い目で見られてるのこれが原因じゃあ…』

しかしここで考えるのをやめ本人の名誉のためにもこれは心にしまっておくことにした。

そしてそれから俺達はモンスターをやり過ぎし続けた。

リリが必死に我慢しながら臭い袋を装備し、モンスターの奇襲を退ける。勿論それでも近付こうとする奴はいたが、前方から来た敵は俺とティポが、後ろから来た奴はベルが「ファイアボルト」で追い払った。

ヘルハンドは基本的に早く動ける俺がどうしても距離がある場合はヴェルフが無効化していく。

「ヴェルフ、これ…」

「なんだ、回復薬か？」

ベルが濃紺の液体が詰まった試験管をレックホルスターから取り出す。

ヴェルフはそれを半分ほど飲むと、驚いた顔を作った。

「精神力回復薬、じゃないよな？体の重さも消えたぞ」

ベルが渡したのは二属性回復薬。この道具は「ミアハ・ファミリア」であるナーアザさんが作製したものだ。

その効果は体力と精神力を回復するという優れたものでヴェルフは目に見えて回復し

ていく。

「いいな、それ。今度売つてるところ、紹介してくれよ」

「帰つたら、いくらでも紹介するよ…はい、ハチマンもこれ」

ベルは飲みかけの二属性回復薬をあおると、もう一本あるそれを俺に差し出す。

それを素直に受け取り、半分ほど飲むとティポの方を向きそれを差し出す。

「ほれ、俺と違つて魔法ちよいちよい使つてるだる飲んどけ」

ティポの前にそれを差し出すと何故か驚いたように目を見開きポーシヨンと俺を交

互に見やる。

「?どうした?」

「いや…あはは、何でもないようん」

何故か顔を少し赤くしながらそれを受け取り、ぼそつと「気にしてるこつちがバカみ

たいじゃないバカ」と呟きをこぼし試験管を一気にあおる。

これでティポはほぼ全快、俺は全快とまではいかずとも回復することができた。

「…ベル様、リリとも回復薬を分け合いましたよう」

「え、今ちよつと飲んだし、大丈夫だよ?もつたないし」

「ずるい、ずるいです!ヴェルフ様だけずるいです!」

「何を言つてるんだお前は」

「じゃあハチマン様！」

「いやなんでだよ」

パーティーの間で織り交ぜられる、弛緩した会話。これまで張りつめていた空気が少し和らぐ。

油断は決してせず、しかし時折張り詰めた精神を緩め、ダンジョンの中層を探索していく。

「あつた……」

いくつ曲がったかも分からない横穴の曲がり角からかを出したその先、洞窟上の道のど真ん中にそれはあつた。

向こうの通路とこっちの通路を分断するように、歪な縦穴が大きく口を開けていた。

全員がその穴の縁まで近づき、そつと覗き込む。そして全員の視界の先には下の階層がうつし出され、それぞれが視線を交わし頷き合う。俺はリリのバックパックを左手に抱え、最後に息を軽く吸い込んだ後、全員で縦穴へ飛び込んだ。

「……臭い袋が、なくなりました……」

死刑宣告にも近いリリの発言で限界まで張りつめた空気が弾ける。

場所は十六階層の通路の一角。俺達はそこで足を止めていた。いや、止めざるを得な

かった。

モンスターから俺達を守っていた臭いは霧散し、代わりに濃厚な殺気が肌にまとわりつく。

そしてそれと同時に通路の奥から強烈な気配が発せられる。

やがてドンツ、ドンツ、と、闇の奥から地響きが響く。

その体を隠していた闇は晴れていきどんどんとその形を現していく。まず見えたのは赤胴色の体皮。

荒い鼻息を吹き出し、その身を守る筋肉を膨張させ、岩のような蹄を踏みしめた。

┌

牛頭人体。二Mを超す巨躯を持つ猛牛のモンスター。その名を『ミノタウロス』。

それを視認したヴェルフとリリは死を覚悟する。

『ヴォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!』

戦意がおられた気力も意思も全部。

そしてとどめに強烈な『咆哮』。

生物の本能によりリリとヴェルフは強制停止に追い込まれる。

——死ッ。

戦つてすらいないかしすでに己の最後を二人は覚悟した。

そして最後に横一閃の大振りを胴に打ち込みミノタウロスは背中から倒れこみ、完全に沈黙する。

「…エビフアネイア【顕現せよ】」

ヴェルフ達が呆然とするのも束の間、ハチマンは起動式を唱えナイフを斧へと変化させるのと同時に通路の奥から新しくミノタウロスが三体现われ、こちらへと突き進んでいた。

ハチマンはその姿を確認するとともに斧を後ろにいる俺達の方へと投げける。その行為にほかん、とするヴェルフとリリだが唯一その意図を察した少年が前へと飛び出し空中でその斧をつかみ取る。

リン、リン、と。

鐘に似た小さな音を奏で、斧を持つベルの両手が白い光粒に包まれる。

空中での【英雄願望】によるチャージ。ベルはハチマンの横に着地した瞬間地を蹴り疾駆する。

時間にして五秒分のチャージ。ミノタウロスの眼前まで迫ったベルは斧を右肩に振り上げ、振り下ろす。

「ツツツ!!」

光の大斬撃が解放される。チャージされた斧の攻撃はミノタウロスの胴と下半身を

分断する。しかしチャージが足らなかつたのか一匹生き残る。

『ヴォー——』

「ふっ！」

それを石斧を手につの間に走り出していたハチマンが横に一閃し、悲鳴を上げる暇すら許さず片付ける。

「……」

一歩も動けずにいたヴェルフとリリは、声をかけるのも忘れ立ち尽くした。

こちらに背を向け佇む少年二人は、浅い呼吸と共に肩を上下させる。

ミノタウロスの連続撃破。視線だけでやり取りされた連携。

Lvやスキル、魔法の存在を度外視しても窺える、技と駆け引きの冴え。

ヴェルフはこの時、少年達のミノタウロス単独撃破が与太話ではないということを確信する。

——
オックス・スレイヤー
猛牛殺し。

その二人の少年の背中に、ヴェルフを息をのみ戦慄した。

『ハチマンヴェルフ君が危ない』

三匹のヘルハウンドが通路の先から現れ、火炎放射の予備動作を見せた時ティポの声

が頭に鳴り響く。

その声に反応し、ぱつとヴェルフの方を見ると例の魔法を使おうと右腕を突き出してた。しかしその表情は歪み、汗は垂れ流し、呼吸も荒かった。

それを見た俺は直ぐにティポの言わんとしててことを悟る。

マインドダウン
精神疲弊。

恐らくヴェルフは精神疲弊寸前、最悪この一発で倒れる可能性があった。それに気づいた俺は直ぐに声を張り上げる。

「燃え——」

「ヴェルフ詠唱をやめろっ！」

「!？」

そう声を張り上げると同時に俺はヘルハウンドへと駆け出しナイフを構える。

ヘルハウンドは既に放射する構えに入っており間に合うかはギリギリだった。そう判断した俺は、手に持っていたナイフを二つとも投げる。

その行為に後ろで息を？む気配が背中越しに伝わる。それもそうだ。

対するヘルハウンドは三匹、もしこの二本のナイフで一匹ずつやっても一匹余り尚且つ俺は得物を手放してる。

何をしてるのか、と言う視線を背中に受けながらもナイフがヘルハウンドの眼前まで

迫つた時俺はそれを唱えた。

「【解除】っ！」
エレフ エロシ

その瞬間一方のナイフが姿を変えティポが現れ、投げたもう一方のナイフを手でつかみ取る。

それにヘルハウンドは目を見開く。そしてその隙にティポは一番手前のヘルハウンドを切り裂き、そのちよつと後ろで立っているヘルハウンドにはナイフを投げる。

そのナイフはヘルハウンドの口へと吸いこまれ体の奥深く刺さり絶命する。しかしもう一匹はもう既にため終わっており、その猛火を振るわんと口を大きく開く。だがティポはそれに慌てずヘルハウンドの下顎を蹴り上げ、ヘルハウンドは上へと浮かび、その蹴りによる口は固く閉ざされ爆発をする。

「…」

戦闘は終了し、特に口を開くことなくティポは振り返りハチマン達の元へと歩を進めた。

ハチマンがやったことは【テイ精霊の加護ゴ】の解呪式を唱え、武器状態だけの部分解呪。

それによるティポはハチマンの中に戻ることもなく武器状態だけが解除され、人間の姿をして空中にいきなり現れたという訳だ。

そしてティポが帰ってきてハチマンが労いの言葉をかけ、武器状態に戻すとベルが口

を開く。

「ハチマン、いきなりどうしたの？」

「ヴェルフが精神疲弊寸前だったからやめさせた」

「！」

俺の話の聞くとベルは驚いたようにヴェルフへ視線を送り納得したように表情を変え
える。

「すまん」

荒々しく呼吸をこぼしながらヴェルフは謝罪の言葉を述べる。それに対して全員が
気にするなと声をかけた。

これは俺達がヴェルフを頼り過ぎたことに原因がある。度重なる魔法の行使で精神
力を多量に使わせてしまった。

ヴェルフには回復薬を渡し、何事もなかったように探索を再開していく。

しかし内心かなり焦っていた。頼りになっていたヴェルフはダウンし、リリも大分疲
弊していた。所々で回復薬を渡してはいたがさつきヴェルフに渡したやつで回復薬は
底をついた。

ティポに関しては単純に攻撃を貰いすぎて武器として使わざるを得なくなった。特
にでかい一撃を貰ったわけじゃなかったがやはり集中的に狙われ度重なる襲撃でどん

どんと傷が増え、これ以上受けければ俺に戻った時に動けなくなる——と判断して武器に切り替えていた。その際一度体に戻し、傷がフィードバックするがベル達にバれないように精霊の奇跡を行使し治して事なきを得ていた。ごっそり体力削られたけど。荒い四つの息遣いがダンジョン内で響き渡る。今すぐ足を止めたい、そんな願望が胸の中に生えるが全員がそれを押し殺し前進を続ける。

「！！！！」

見つけた。四つ角の右手、十Mも歩けばすぐ行き止まりになる浅い一本道。その一番奥で、壁にめり込むように縦穴が口を広げていた。

それを見つければ辺りを警戒し、吸い寄せられるように穴の元へ急いだ。一瞬眼下を覗き込み、行くぞ、とりりのバックバックを片手に声をかけ一思いに飛び降りる。

「———づっ!?!」

「ぐえっ」

「っ」

「ぐぎゅっ!」

空気を切り裂く音が鼓膜を揺らし、直後衝撃が襲いかかる。

疲弊した体にはきついその衝撃にそれぞれが声を漏らし倒れこむがそれもすぐで全員が体に鞭を打ち立ち上がる。

「いくぞ…」

「おう」

「うん」

俺の声にベルとヴェルフは声を出して反応し、リリは声を出す気力もないのか顔を縦に振ることで反応をする。

そして鉛のように重くなっている手足を自覚しながらも、ゆっくりと一步を踏みしめ進んでいく。

もうどれくらいダンジョンを彷徨っているのだろうか。全員とつくのとうに時間の感覚は壊れていた。これだけ太陽が恋しいと思うのは初めてだ。他の階層よりも暗く感じる十七階層の通路はその思いをさらに助長させる。

何度も何度も体が悲鳴を上げ、感情はもう寝かせてくれ、と膝を折ってくれ、と叫んでいた。しかし何よりも甘い誘惑を全部理性で押さえつけ足を動かす。

ダンジョンの重圧が、モンスターに襲われるという恐怖が、暗く淀んだ空気がその全てが精神を削る。

そして何よりダンジョンが静かだった。

「…なんで」

何の脈絡もなくベルが声を漏らす、言いたいことは分かった。

どう考えても静かすぎる。モンスターが一切現れない。

しかし気配がないわけではなく、それどころは気配だけはそこらかしこにあった。なのに全く襲おうとしない。

背筋が冷たくなって悪寒が走る。嫌な予感が止まらず、頭の中でも微かに警鐘が鳴り響いていた。

ティポも『なんかあるだろうねこれ』と呟きをこぼす。けれど、立ち止まるわけにはいかない。

「—」
とここでベルの歩を進めるスピードが上がる。嫌な予感を振り払うように。

それに伴いパーティーの進行速度が上がっていく。リリは更に息が上がり、ヴェルフもきつそうにしていた。そして。

「「……！」」

迎り着いた。広大で、本当に長大な、整った直方体となっている大広間。

幅は100Mほどで、地面から天井までは20Mほど。

何者かにくりぬかれたのかと目を疑うほど、その表面には凹凸一つない。マンスターの影一つなくその光景は絶望に染まっていた俺達にはいつそ美しい光景として映し出された。

「『嘆きの大壁』……!」

全員の表情に希望が灯り、雰囲気明るくなる。

あともう少しでたどり着ける。この絶望から解放される。今ならまだ間に合う。そんな思いが全員の胸を満たす。

しかしここはダンジョン狡猾で陰湿。そんな一心不乱になり希望を抱いた俺達を嘲笑う。

「――――」

バキリ、と。

ステイタスによって強化された聴覚がその音を拾う。

ぼつと横を振り向いた先、愕然と目を見開く俺達の前で巨大な亀裂が、大壁の上から下にかけて雷のように走る。

「走れえっ!!!」

頭が真っ白になった一瞬後には声を張り上げ、走り出していた。

リリとヴェルフ、ベルは表情が絶望に支配されていたが、俺の声に反応し走り出す。

――――
まずい、まずい、まずい、まずい。

微かに鳴り響いていた警鐘はうるさいくらいに鳴り響く。重い両足を懸命に引き上げ出口を目指す。

しかしまだ空間の半分にすら辿り着かない。遠い、遠すぎる。その間にも壁は罅割れていき、まるでモンスターの生誕を喜ぶかのように大広間全体を震わせた。

増していく嘆きの叫喚。より大きくより深くなる何条もの亀裂。臨界が近付き、一層強い衝撃が壁の内側から爆ぜ——次の瞬間。

巨大な破砕音が、爆発した。息が止まる。

岩の塊が弾け飛んで崩れ落ち、横に横転していく轟音。背後で破られた巨大壁の破片が散乱していく。

そして、ズンツ、と、巨大な何かが

大地に振り立ったような、一際大きな、着地音。

「ふざ、ける……！」

見えない糸に絡めとられたように、俺達の足は止まっていた。

壊れたロボットののように全員が首をゆっくりと後ろに回し、背後を振り返った。

『…』

立ち込める土煙の奥に、それはいた。

大きすぎる輪郭、太い首、太い肩、太い腕、太い脚。全てにおいて太すぎる灰褐色の人型モンスター。

それはこの『嘆きの大壁』の主。総身7Mにも届こうかという、巨人。

思わず足を止め振り返る。そして視界に飛び込んできたのはこっちに迫ってくる巨人と——倒れているリリ。

それを見てすぐに理解する。限界だったんだ。よく考えればわかることだ。十三階層以降の適正Lvは二。リリがここまで持つはずがないのだ。むしろ逆によく持った。百人に聞けば百人がそう答えるだろう。

限界に限界を超えここまで来たのに、最後の最後で全力疾走、しかもゴライアス付き。そんなの倒れるに決まってる。

足をいきなり止め振り返った俺に釣られベルとヴェルフも視線だけ後ろに向け、ベルの足が止まりかけた瞬間俺の足が爆発する。

「フイ！オーガアアアアアアアアア駆け抜ける」ツツツ！！！！」

これまでの人生において最大の速度。走り出してすぐ眼前にリリが現れる。この時点でゴライアスはその太い腕を振り上げ命を潰そうと振り下ろしていた。

——間に合わない。

絶対に間に合わない。リリを抱え今から飛び出したところで逃げられない。

そう判断し、そこからは速かった。

「ベルウツツツ！！！！」

怒声とも取れるほど声を張り上げリリのバックバックを掴み、何故か溢れ出る力に任

せてベルの方へとぶん投げる。

ベルはこちらに駆けだそうとしており、それをヴェルフが押さえていた。そして名前を呼ばれ、目を見開き飛んできたリリを受け止める。しかし俺が全力で投げ、リリと言うよりもバツクパツクが重く、その勢いは止まらずベルは姿勢を崩し、それを支えていたヴェルフも十八階層へと続く道に落ち――。

そこで俺の意識は途切れた。

十八階層に『朝』が訪れる。階層天井に光が戻り、早朝の森を思わせる明るさが野営地に広がり、その野営地のある天幕の中。そこに五十九階層で死闘を繰り広げたベト・ローガを除いた「ロキ・ファミリア」の幹部陣＋ラウル、アナキティ、レフィーヤが集まっていた。

「それじゃあここに集まってもらった理由だけど……」

幹部陣は円形の形をとり、その中央にいる小人族――【ロキ・ファミリア】の団長、フィン・ディムナが話を切り出す。

と言っても集まった理由はアイズのある報告だった。

早朝アイズはいつもより速く起きてすぐその違和感を感じた。そして天幕を出た時その違和感が確信に変わる。

——ダンジョンがざわめいてる。

それに気付いたアイズは直ぐにフィンの元へ向かった。そしてその報告を受けたフィンは万が一を考え軽い武装をするように伝え現在のメンバーを集めた。ここまでするのは大袈裟だ、と言われるかもしれないが、フィンはアイズが報告の時に言っていた言葉が気になっていた。

『多分精霊に反応してる、上層、いや中層に何かいる』

と零しており、こちらに向かつてきているとのこと。これらの情報をフィンは説明をしていき、五十九階層で『穢れた精霊』と死闘を繰り広げた面々は、聞いていく内に表情を強張らせここにこれだけ集められたことに納得する。

「それでアイズ、今はどんな感じだい？」

フィンにしては曖昧な言い回し。しかしアイズは感覚でこれをこなしているのだから聞き方が大正解なのだ。

そしてその質問に対してアイズは無表情のまま答えていく。

「かなり、近くなってる。…あれ、この感じ…？」

何処かで感じた事のあるような感覚に首を傾げる。それに伴い集まってる一同も疑問符を浮かべ首を傾げる。

「アイズ？もうちょっと——」

フィンがアイズに声をかけた直後。

『オオオオオオオオオ』

「「「「「」」」」」」

地鳴りの如き巨人の方向が鳴り渡った。次いで、どおおおおんつ、と言う強い振動が届く。第一級冒険者やそれに近い彼女らは何が起きたのかすぐに察した。

この十八階層の直上、連絡路も繋がつて十七階層の最奥の大広間に入ってきた冒険者を階層主『ゴライアス』が倒すために暴れたのだと。

それを察したフィンは気にすることはないときりすて、再度アイズに事情を聴こうとしたところで固まる。

その理由はアイズの表情にあった。あの人形姫とも言われるほど表情が乏しいアイズがゴライアスの誕生、それだけで顔を歪めていた。

そして当の本人はと言うと

(この感じ、ハチマン? ちょっと違う。でもなんでか、胸がざわめく)

自分が表情を歪めていることに気付いていなかった。

ハチマン————詳しくはハチマンの中にいるティポさんの気配。しかしあ

の時に感じたそれとは少し異なる気配に確信を持てていなかった。考えれば考えるだけ分からなくなり、更に表情を崩した瞬間。

(！)

アイズは今度は目を見開いた。その様子に周りも驚くが、そんなの関係なしに気付けばアイズは眩きをこぼしていた。

「助けなきやつ…」

「アイズさん!?!」

「ちよつと、アイズ!」

「おい、止まれ!」

その眩きをこぼすと同時にアイズは駆けだし、レフィーヤたちの声を振り切り天幕を飛び出していた。

「フィン、どうするっ?」

「追いかけよう、きつと何かある。一応装備を持っていこう」

疼く親指に軽く視線を向けながら、フィンがそう言うとともに全員がアイズを追って天幕を飛び出した。

そしてアイズはと言うと焦っていた。アイズがあの日を見開いた瞬間アイズは精霊が魔法を行使した余波みたいなものを感覚的に受け取っていた。そしてそれをアイズは知っていた。

あの市壁の上で鍛錬をした、その身に精霊を宿す少年の魔法。その魔法が行使された

のは感覚的には十七階層。そしてゴライアスは生まれると同時に侵入者に襲いかかって

そこまで気付いた時アイズは走り出していった。

【ロキ・ファミリア】が作成した野営地は階層の南端部、十七階層に通ずる洞窟に近い。木々の間を疾走し、水晶の塊を飛び越え、薄暗い森の出入り口から飛び出す。そして、

（——え？）

草の絨毯で倒れ伏す、冒険者が目に入る。

洞窟前の開けた青い草地。ヒューマンの男性二人に、小人族の少女。ヒューマンの男性は苦渋に顔を染め、少女は完全に気を失っていた。

「べ、ル……？」

「！！」

思わず零したその眩きに反応しヒューマン二人は声の方へと顔を向ける。

「け、【劍姫】……」

「アイズさん……？……ツ、アイズさん！ハチマンが危ないんです、お願いですハチマンを助けてください……！」

「……仲間が危機にさらされているんです、お願いします」

恥も外聞もかなぐり捨てベルは頭を下げる。いきなりのアイズの登場に固まっていたヴェルフもベルに倣い勢いよく頭を下げた。

自身の瞳に焼き付けられた最後の光景、ハチマンがベル達に笑顔を向けそのすぐ後ろを迫る巨人の拳。あの状態から逃れることは不可能。要するにハチマンが死んだ可能性も彼等は理解していた。しかしさつきから何故か鳴りやまないゴライアスが暴れている音に希望を見出していったのだ。

悔しかった。ただただ悔しかった。自分が無力なことが。自分には何もできない状況が。しかしそんな思いは押し殺し、ハチマンが助かる一筋の希望に賭けた。

それが目の前に現れたアイズ・ヴァレンシユタインだった。勿論アイズもハチマンを助ける為にここに駆け付けた。だから言われなくとも、と答えようとした時。

「これはどういう状況かな？」

木々の間を抜け、「ロキ・ファミア」が姿を現す。

「あーっ！アルゴノウト君だー！」

「あ~~~~~~~~っ！何でベル・クラネルがここにっ!?ふぎゅっ!」

ベルの姿を確認したティオナとレフィーヤがそれぞれ叫び、レフィーヤの方はあまりの音量にリヴェリアからの拳骨がお見舞いされる。

「ベル・クラネル…?ああ、おぬしらが言っておった小僧か」

ガレスはその名に反応し、髭を触り目を細めていた。

そしてまたしても大物が登場したことで二人は放心しかけるがすぐまた頭を下げる。

「お願いします、ハチマンを助けてください……!」

「お願いします」

その様子を再び眺めたアイズは自らの団長であるフィンの瞳を強く見つめ口を開く。

「フィン、ごめん。私は行く」

短く告げられたそのセリフにベルとヴェルフは顔を上げばつとアイズの方を見る。

そしてフィンはそんなアイズに目を軽く細めると溜息を吐いた。

「……行くのか?」

「どつちにしろうちのお姫様が止まらないなら行くしかないさ。ラウル、ベル・クラネルとその一行をテントへ連れて行ってくれ。リヴェリアとレフィーヤは結界魔法の用意を。ハチマン・ヒキガヤの姿が見え次第張ってくれ。それと今回はあくまでハチマン・ヒキガヤの救出が目的だ。ハチマン・ヒキガヤを回収し次第すぐに撤退。例えそれが死体であろうとも、ね。アイズ分かったかい?」

「っ……分かった」

「ベル・クラネル」

「!は、はいっ!」

「一応手は尽くすつもりだ。でも、分かってるね？」

フィンは言外に、死んでいても文句は言わないでくれよと告げる。

それに気づいたベルは顔を盛大にゆがめながらも、お願いします、とお願いする。

「さて、それじゃあ準備は出来たかな？」

フィンは顔を上げリヴェリアとレフィーヤの方を確認する。それに二人のエルフは頷く。

「それじゃあ、行くぞ」

その言葉に「ロキ・ファミア」は嘆きの壁へ向けて連絡路を駆けだす。第一級冒険者ばかりで構成されてるこのパーティーが嘆きの大壁の大広間までつくのにそう時間はかからなかった。

そして坂を上がって目にしたその光景に全員が絶句し立ち尽くした。

「何、あれ……？」

その大広間にいたのはハチマン・ヒキガヤと一匹の巨人。かたや血塗れで立ち尽くし、目をつむり、もう一方、体中に傷を作り目を押さえ暴れていた。どっちがどっちにしたっておかしな状況。

何故ならどっちにしろ、話を聞いている限りだとLv2相手にLv4にカテゴライズされるゴライアスがボロボロにされているのである。

ありえない。おかしい。一体何があった。「ロキ・ファミリア」の頭はその疑問で埋まった。

その中でフィンはそれを目撃した。血まみれのハチマンがゆっくりとその臉を上げ、魔法を呟き炎を纏うところを。そして片手に持つている大剣に全部集まり黒く光っているところを。決意にまみれたその瞳を。その瞬間フィンの親指が強く疼く。あの黒い光は見たことがない、効果も分からない。でもやばい。それだけ察することができれば【勇者】フィン・デームナの判断は速かった。

「リヴェリアっ！レフィーヤっ！今すぐ結界をっ！」

「えっ?」

「急げっ!!!」

フィンの鬼気迫るその声に疑問符を浮かべたレフィーヤも、元より発動準備をしていたりヴェリアがその結界魔法を発動させる。

「【ヴィア・シルヘイム】っ!!」

リヴェリアとレフィーヤの足元に展開されていた魔法円が光輝を放ち、そのままドーム状の緑光領域へと変貌した。物理・魔法攻撃を全てを遮断する結界魔法が完成する。

その一連の動作に【ロキ・ファミリア】の面々は困惑していた。何故助けるべきハチマン・ヒキガヤに結界を張らず自分たちのもで張るのか。それに答えるようにハチマ

#24 一撃

今回は短いですがこれで。忙しくてちまちま書いていたのでおかしいところがあるかもしれませんがどうぞっ！

十七階層に存在する『嘆きの大壁』——それは『迷宮の孤王』とも呼ばれる階層主ゴライアスの住む領域。そこで激闘が繰り広げられていた。

そこに立っているのは主であるゴライアス、そしてそれに対する相手はたったの一人。しかも体中を血で染め、見てわかる程の満身創痍っぷり。

ちよつと風が吹けば倒れそうな侵入者にゴライアスは敵の命を奪おうとその太すぎる剛腕を振るう。しかし侵入者はそれを避けその拳は炸裂することなく、悲しく空を切る。そしてお返しとばかりに侵入者はゴライアスの腕に傷を与えていく。

『オオオオオオオオオオオオッ!!』

ゴライアスが苛立ったように叫びをあげ、嘆きの大壁全体を揺らす。よく見るとゴライアスの体中に傷が残っておりこの攻撃が何回か繰り返されたことを示していた。

ゴライアスは怒った。攻撃は当たらず、逆に攻撃を返されることに。そして更なる攻

撃を侵入者へと向ける。

それに対する侵入者——ハチマンは痛む体を無視してゴライアスに斬りかかる。そしてすぐ横に迫るゴライアスの拳に冷や汗を流しながら戦闘を続行していく。

あの拳を受けた後ハチマンは吹き飛ばされ壁にめり込み気絶した。しかしすぐに意識を取り戻し、ゴライアスの攻撃を避け続けていた。

満身創痍の体、精霊の奇跡を行使するほど残っていないなけなしの体力。唯一有り余っている精神力も精霊の奇跡を行使するのに使っているからどんどんと減っている。そんな絶望的な状況でもハチマンは動いていた。苦痛に顔を歪めながらも、体が悲鳴を上げながらも立ち上がりゴライアスと相対していた。

(情けない)

ゴライアスとの戦闘中の最中ハチマンはナイフを片手に傷を刻みながらも自らを戒める。

(弱い、嗚呼本当に弱い)

それは自身への嘆き。あの場面でリリが限界なことに気づけなかった自身への。逃げることしか選択できなかった自身への。

(悔しい)

度重なる負傷でゴライアスがほんの少し怯む。そんな隙をハチマンは逃さずにゴライアスの腕に着地し、駆け出した。それに対してゴライアスは自分の腕を登ってくる異物を払おうとその腕を大きく上げよう、としたその前に。

『【爆ぜろ】
フイ、オーガ

ハチマンが魔法を唱えハチマンの足元が爆発する。その爆発はハチマンの体を弾き飛ばし、ゴライアスの眼前まで加速させた。

『っ!?!』

いきなり目の前に現れたハチマンにゴライアスは驚き僅かに硬直する。そしてその間にハチマンはゴライアスの目に一閃を放つと距離をとるようにゴライアスを蹴りちよつと離れたところで着地する。

『っ!?!』

ゴライアスは目に攻撃をもらい、その場で声にならない悲鳴を上げ地団太を踏んでいた。そんなゴライアスを目にしたハチマンはそつとその脛を下した。そして覚悟を決めるように降ろされたその脛の奥でハチマンは思考する。

(ゴライアスを倒すほどの火力がある魔法は俺にはない)

それは前から思っていた【サラマンダー】の弱点。決して弱いわけじゃないがベル同様**に必殺の面で劣り、強大な敵に対しては明らかに火力が不足していた。**

(だからと言って逃げられない。それに何よりもうそれを選択することを俺が許さない)

逃げてしまった。あの瞬間挑むことすらせずに諦めてしまった。それが悔しかった。そしてその拳を受け気絶すると言う失態を犯した。しかしそれもものの数秒でそこからすぐに復活し、ゴライアスの攻撃を避け続け、攻撃し返すなど誰が弱いと言おうか。それでもハチマンは自分自身を許さなかつた。

(なら今挑もう。全身全霊を持って)

ハチマンは覚悟を決めた。言ってしまうえばゴライアスが片目の視力を失ってその痛みで暴れまわっている今、全速力で出口を目指せば逃げ切ることは出来た。しかしハチマンはその選択をせずに闘うことを選んだ。

これで死んでもいい。だから全身全霊全力を持ってこの化け物に一矢報いようと。高みを目指すならこの程度超えて見せる、と。きつと高みにいるアイズ・ヴァレンシユタインならそうする、と。

ハチマンはゆつくりと脛を上げおもむろに【^{テイ}精霊の加護^ゴ】の起動式を二つ呟く。【^ダ二重存在^ル】でティポを呼び出し、【^エ顕現せよ^ネ】で武器へ変化させていく。そしてここでこれまでと違う過程をハチマンは築いた。

それはイメージ。これまでは斬ればいいと思い、イメージを適当にしていた。しか

し今この時は武器のイメージを明確にしていく。たいして意味はないかもしれないそれでもハチマンはイメージをやめない。

イメージするのはアルゴノウトが使っていたと言う剣。友から借り受け、格上を撃破した炎の剣。それを頭の中でイメージする。

【エビフアネイア顕現せよ】

ハチマンが咭くと同時にティポはどんどんと変化していき、黒と赤の刀身を持つ剣へと変わり時代を超えクロツゾの炎の剣が顕現する。

【フイ、オーガ猛り狂え】

さらに魔法を唱え、体に炎が纏わりついていく。これまでとは比べ物にもならないほど猛り狂った炎が。

その身を焦がさんほどの炎は驚くことに更に火力を上げていく。その原因はティポにあった。

『ああ、悔しいなあっ』

ティポはハチマン同様悔しがっていた。こういう強敵と相対するとき何もできないことが。だからせめて持てる全てを使ってハチマンに貢献しよう。

『これくらいしかできないけど、きつと役に立つようになるから許してねっ!!』

だからせめて、と自信が持てる力全てをつぎ込み魔法の効果を上げた。ハチマンの考

瞬間黒い大斬撃がその場に開放される。主が願った意志をその精霊が望んだ結末を全うしようとゴライアスの拳へと迫り昇っていく。

その場にいたものは全員が目を塞いだ。その斬撃の眩しさに。荒れ狂う炎の輝きに。放ったハチマンですらその目を閉じ膝をついた。

そして数秒後輝きはどんどん収束を見せていく。全員の目が開かれ視界に収めたその光景に誰もが言葉を失った。

結果だけ言うならゴライアスは立っていた。しかしその姿は無残なものだった。

ハチマンに向けて放っていた右腕は斬撃によりすべて吹き飛び、その勢いはとどまることを知らなかったのか顔、そして右胸を吹き飛ばしていた。明らかに瀕死状態。まだ立っていることが、灰に変わっていないことがおかしいくらいに。

L v 2 が L v 4 のゴライアスを倒した。

その事実を駆けつけていた「ロキ・ファミリア」の面々はそれぞれ反応を示していた。それでも全員がそろって凄いと称賛の言葉を心に浮かべていた。それは誰もが認める偉業だった。

しかし一人だけそれを認めなかった。

(ああ、やっぱりダメか…)

ハチマンは倒れ行く視界の中でゴライアスの姿を目に収めながらそんなことを考え

ていた。

たしかにゴライアスを瀕死状態に追い込むことは出来た。あともう少しすれば灰に変わるであろうことは確実だった。でもハチマンは勝ったなんて思っていなかった。

一度は気絶し再戦して全てを出し切つてなお先に膝をついたのは自分だと。それは勝利ではないと。

(もつと…強く…まも、る…)

そんな思いを胸にハチマンは気を失い地に伏した。そしてそれを見届けたかのようにゴライアスも灰に代わり巨大な魔石がごとつと音を立て地面に落ちる。

黒く紅い光が収縮した後【ロキ・ファミリア】の面々は立ち尽くしていた。全員が驚愕に瞳を染め、ただハチマンの姿を眺めていた。そんな中で二人が驚愕しながらも冷静にハチマンを見ていた。

(ああ、彼は…彼らは本当にいい)

その勇氣に最後に見せた覚悟の瞳に【勇者】フィン・ディムナは称賛を送った。

(彼らが欲しい)

それと同時に彼らが自分と同じファミリアに居たら、なんてことを妄想してしまう。

そしてもう一人【劍姫】アイズ・ヴァレンシユタインもその背中を他とは違う目で見

つめていた。

(すげー、い…)

普段のアイズならば何故そんなに早く強くなれるのか、と疑問に思っただろう。んなら嫉妬すら覚えたかもしれない。しかしアイズの思ったことはそんな事じゃなかった。

二度目の冒険。しかもミノタウロスよりも強大で明らかな格上。そんな相手に勇気を出し思いを燃やし、撃破したハチマンの背中に英雄の姿を幻視していた。昔自分の前に現れず諦めた英雄の姿を。

「…彼を連れ帰る」

ハチマンが倒れた所でフィンが声を出し場を支配していた沈黙を破る。

その当初の目的を告げられた全員がはつとし、すぐに動き出しハチマンの元へ向かった。

「だ、団長ゴライアスの魔石は…」

「あれは一応回収しよう。この手柄は彼、ハチマン・ヒキガヤのものだからね。僕達のテントで保管しておこう」

フィンと団員にゴライアスの魔石を回収し、保管することを命じ力に自信のあるガレス、テイオネ、テイオナが魔石の元へと向かう。その間に倒れたハチマンを回収し「口

キ・ファミアリア〕は無事ハチマンの救出（？）を達成し自分のテントへと帰っていった。
一人ハチマンの姿を近くで見て胸をドクンツ、と高鳴らせたものに気付かぬまま。

(…?)

そして本人もそれに気付かぬままに。

#25 対面

最初に感じたのは、果てしない体のだるさだった。

泥のような倦怠感が体に纏わりつき、深い微睡にとらえられていた。覚醒の境界線を行ったり来たりを繰り返している内に、意識はゆっくりと浮上していった。

暎が上がり、ぼやけた視界が開けていく。

頭が空っぽなのも数秒、瞬きを二三度繰り返す。視界に入るのは布地の天井、恐らくテントか何かの中。その天井を暫く眺めた所で思考がはつきりし余裕が生まれた頃に目を見開いた。

「ベル、っ!?!~~~~~がつ!?!」

中層からの逃亡劇、出現したゴライアス、気力を振り絞った最後の一撃。全てを思い出し、跳ね起きるように体を起こした瞬間、激しい痛みが体を突き抜けた。

「ハチマン（ハチマン様）っ!?!」

起き上がった瞬間体を丸め、喉から声にならない悲鳴があふれ出る。恐らく体の酷使による酷使の限界。その声で俺に気付いた誰かが名を呼び、頭がおかしくなったような動きをしながらもなんとか視線をそちらの方へ向ける。

「ベルっ…?」

視線を向けるとベル、リリ、ヴェルフが俺の事を涙を含ませた瞳で見ている。

「ハチマン…無事で、よかった…!」

「ハチマン様あ!!」

「この、馬鹿野郎っ!」

ベルは今にも泣きそうな顔で、リリは泣き出し二人そろって俺に飛びつき、ヴェルフは涙を光らせながら男前に笑みを浮かべた。

「くっつ!」

「ごめんなさいっ、ごめんなさいっ、ごめんなさいっ!」

「ごめんっ、ごめんハチマン…」

飛びつかれ体に激痛を走らせる中でリリとベルは謝罪の言葉を並べていく。

「おいっ、リリスケっ、ベルっ!ハチマンが苦しんでるっ!離れろ!」

「えっ…?っ!す、すいませんハチマン様っ!」

「ご、ごめんっ」

「…ついや、?大丈夫、だぞっ?」

「そんな脂汗を流しながら胸を押さえてる奴が大丈夫なわけあるかよ…」

ヴェルフに指摘されベルとリリは飛び退き、胸を押さえながら痛みに堪える。

(何でこんな痛みが…)

『精霊の奇跡の使い過ぎだよ』

(うおっ)

心の中であまりの痛み疑問を浮かべているとティポがそれに答える。

(使いすぎっ…?)

『うん。君は精霊になつてるとは言え、身に余る力であることに変わりはないんだよ。使いすぎれば器が傷付く。それで今回は使いすぎた。だから君の体は今ボロボロ』

(なるほど…)

ティポの説明に俺は納得しこの痛みを受け入れる。考えれば簡単な話だ。

体力や魔力を使うとは言え傷を全部治すにしては軽すぎる代償。使いすぎれば何かしらの代償があってもおかしくない。それがこの痛み何だろう。しかも蓄積できるわけでもなくただただ痛いだけ。

しかもゴライアスと戦って気付いたのだが発展アビリティ『理性』はあらゆる耐性があるみたいだ。その中に痛覚耐性もあり、痛みに耐えることができるというもの。だから中層を普段と変わりなく駆け回ることができたのだ。と言っても痛いことに変わりはなく体制を超えた痛みは普通に我慢できないっぽい。つまり今我慢できないくらい超痛い。

『多分一日くらい安静にしてたら多分治ると思うよ』

(了解…)

「ハチマン、大丈夫か？」

「おう」

ティポとの会話を終え一息ついたところで、ヴェルフが声をかけそれに対して答える。その間にもリリとベルは泣き続けており、謝罪の言葉を俺に呟いていた。

ヴェルフに話を聞いていくとベルはなにも出来なかつたこと、リリは気絶したことを気にしているらしい。自分達が弱かつたせいで、自分が気絶したせいで俺を危険な目に合わせてしまったことと自身を責めていた。そう事情を話しているヴェルフも顔を悔しそうに歪めていた。

それに対して俺は気にするな、と声をかける。

「まあ、気にするなつて言われても無理だと思っただけで本当に気にしなくていい。だって俺が気にしてないしな」

「で、でも…」

「なら次俺が危なくなつたら助けてくれ」

「！」

「俺は基本的に動きたくないし働きたくない。だからその時は頼むわ」

「うんっ！」

そう言うのとベルは瞳に光を灯し強く頷いた。

心の中でティポが『絶対頼んないし危ないことには出来るだけ巻き込まないくせに』と悪態をついていたが気にしない。

「リリもだ」

「っ！」

声をかけるとリリはビクツと身を震わせ、恐る恐ると視線を上げる。

「でもリリはハチマン様の足を引つ張ったんですよっ…？しかもあんな場面で気絶して命を危険に晒してっ…」

「だから気にするなっ！」

そう言いリリの頭に手を添える。一瞬やべと声を出しそうになるがなるようになれ、とコマチにやるように頭を撫でる。

「足を引つ張ったなんて思っつてないしベルにも言っただけど気にしてない。それより一番きついはずなのによくあそこまで弱音を吐かずに耐えて、このパーティーを引つ張つたりすげえよ。Lv1の俺なら弱音吐きまくって諦めてたね、確実に」

「…」

「だから気にすんなお前は凄いいことをした。褒められることはあつても責められるよう

なことは何もしてねえよ」

そう言つて頭にのせた手を動かして撫で続ける。

確かに自分を許すことは出来ないだろう。それでもそれを軽減させることは出来る。俺程度にそんな言葉の力があるとは思えないがそれでも無いよりはましだろう。

そんな俺の行動や言動にリリは目を細めその瞳から更に涙をこぼす。

「泣くなよ。それに目こすつたら赤くなるぞ?」

俺はリリに近寄ると袖を掌まで上げ、それを目元まで近付け涙を服の袖に吸わせる。汚いかもしれないがハンカチがないのでこれで許してほしい。

「……ありがとうございます……」

俺にそう言われリリは涙を堪え鼻声になりながらも感謝を述べた。その様子にもう大丈夫だろうと判断し手を放そうとしたところで――

リにその手を掴まれた。

「あの、リリ……さんっ?」

「……………もう少しだけお願い、できませんか……?」

消え入りそうな声しかも上目遣いで頼まれ「お、おう」ときよどりながらもまたその手を戻し動かすとリリは気持ちよさそうに身を振じらせる。

何とも言えない空気が流れヴェルフはにやにやとベルは微笑ましいものを見るかの

ように笑みを浮かべた。取りあえず決めたことは後でヴェルフを絶対しばく。

そしてなんやかんやで引き際を見失っていつやめればいいんだ??と考えているとこのテントに近付いてくる足音が耳に入る。

「大丈夫…むっ」

その足音はこのテントの前で止まり影を落とすと入り口を開く。そしてその人物はテントに入ると同時に言葉を投げかけ、何故か俺の方を見て表情をむっとさせた。

それで俺はというとテントに入ってきた人物の姿に目を見開き驚いていた。金色の瞳にその瞳と同じ色で揺れ動く長髪。今は変わっているが人形のようにきれいな表情。そこにはいつぞやの市壁で何度も見たアイズ・ヴァレンシユタインがいた。

どうしてここに、と問いを口から出す前に、アイズさんが動き出し啞然としている俺の前に、詳しくはリリの隣に座り込む。その行動に俺だけでなくベルやヴェルフ、リリまでもが疑問符を浮かべ驚く。

「?」

そしてその行動に固まっていると何故かアイズさんまで疑問符を浮かべた。

「撫でてくれないの…?」

「??????」

その発言にベル達はぎよつとし、俺自身もぎよつとした。そして必死に理解しようと思考を巡らせその言葉の真意に気付いた。

要約すると恐らくこんな感じ。

俺がリリを撫でている↓俺の前で撫でている↓前に言ったら撫でるシステムなのは?↓「?」（横に來たのに）撫でてくれないの:~?」↑NEW

要するに撫でられに前に座つたらしい。うん、なんで?

「ダメ…?」

全く微動だにしなければ俺に対して不安になったのかそう言葉を漏らした。それに対し理解はしたものの理由も意図もさっぱりわからず困惑しながらもなんとか言葉を捻り出す。

「別にダメってわけじゃないですけど、ね?」

「?」

「いやその…なんで?」

「?私がしてほしかったから?」

「なんで疑問形なんですか…?」

それでもなお動こうとしない俺にアイズさんはあからさまにしゅんつと落ち込む表情を見せる。それに焦った俺はちらつと助けを求めるようにヴェルフたちの方を見る

と…

『頑張れ』

『行け』

ベルは両の拳を胸まで上げぐつと握りしめ応援し、ヴェルフはこれまで以上にいい笑顔でサムズアップしてきた。前者はともかく後者は面白がつてるだろ。本当に殴つていいこの人。

「だめ…なの…」

「ぐっ…」

そこまで言われ覚悟を決めた俺は恐る恐る手を伸ばしアイズさんの頭にのせる。

「！」

頭に乗った感触に驚いたのかアイズさんは顔を上げ目を見開き俺を見ていた。しかしそれもすぐで俺が手を動かし始めると目を細め気持ちよさそうに表情を崩した。

(なんなんだよこれ…後いつまでやればいいんだよ…)

結局顔を真っ赤にして頭を撫で続ける少年と、それを気持ちよさそうに受ける少女達、そしてそれを見守る少年達と言う奇妙な光景が繰り広げられ、それはあまりにも遅い伝達役の少女の帰りを訝しんだりウエリアママ者が来るまで続けられた。

「本当にすいませんでした」

俺は今【ロキ・ファミリア】のテントで土下座を繰り返していた。その相手はとうとうと…

「いやいいよ気にしないでくれ」

苦笑いを浮かべる【勇者】フィン・ディムナ。

「聞けばアイズの方からお願ひしたらしいじゃないかだから気にする必要はない。それに対してお前は全く…」

「他のことに興味を持つてくれることは嬉しいが…」と呟きをこぼし頭を抑える【九魔姫】リヴェリア・リヨス・アールヴ。

「がははっ、中々面白い奴じやなこの若造は！」

豪快に笑い飛ばす【重傑】ガレス・ランドロツク。

「笑い事じゃありませんガレスさん！流石ベル・クラネルと同じファミリアなだけあつてもよもやアイズさんの頭を撫でようなんて…不潔です！」

それに対し、とうか俺に対して怒りを見せる【千の妖精】レフィーヤ・ウイリデイス。てかベルなにしたの？

「まあまあ落ち着きなさいよ」

それを宥める【怒蛇】ヨルムンガンドテイオネ・ヒリユテ。

「そうよレフィーヤ。アイズの方からお願ひ？したみたいだし」

それに同調し一緒に宥める【貴猫^{アルシャ}】アナキティ・オータム。

「でもすごいよね〜！中層進出と同時にもうここまで来ちゃってっ！」

話を交え称賛の言葉を送ってくれる【大切断^{アマ}】ティオナ・ヒリュテ。

「ほんとっす。しかもゴライアスを単独撃破して、それが自分より年下でLv2になりたてなんてしんじられないっす…」

【大切断^{アマ}】の言葉に同意し、いろんな感情のこもった視線を俺に投げかける【超凡夫^{ハイノビス}】ラウル・ノールド。

「ごめんなさい…」

そして俺の横で一緒に謝っている【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタイン。

計九名の【ロキ・ファミリア】の中でも上位に君臨するメンバーの前に俺はいた。

何故俺がここで土下座しているのかというと、どうやらアイズさんは俺が起きたことに気付き呼びに来たらしいのだが、撫でられている内にそれを忘れてしまったらしい。

そしてあまりにも遅いアイズさんを心配したりヴェリアさんが俺たちのいるテントまでやってきて入り口をくぐった瞬間——固まった。

それはそうだ。テントをくぐれば呼びに行ったはずのアイズさんが俺に撫でられているのだから。しかもリリも。

リヴェリアさんは暫く信じられないようなものを見る目でアイズさんのことを眺め、溜息を吐き出した。

それによりアイズさんはリヴェリアさんの存在に気付き、目的を思い出したのか顔を一気に青ざめさせていた。そして俺も顔を青ざめさせた。殺られる、と。それに酒場で喧嘩を売った前科もある。

なのでテントに入った瞬間土下座をかました訳だ。

その後もしばし頭を下げているとティムナさんに頭を上げてくれと言われ頭を上げる。

「いいんですか？自分で言うのもあれですけど喧嘩売った人間ですよ？」

「喧嘩……ああ、酒場での一件のことかい？ならなおさら気にしなくていい。悪いのは全面的にこちら側だからね」

その後逆にミノタウロスの一件などの謝罪され、俺は気にしていない旨をきよどりながらも伝えた。

「それじゃあまず自己紹介でもしようかな？」

そこからはお互い自己紹介が始まり全員の名前と呼び方の交換を行う。その結果全員を上の名前で呼ぶことになり、敬語はなしでいいと言われたがそれは流石にまずいと俺は遠慮した。まあ、喧嘩はうつつちやっつたんですけどねっ！

「君達の概ねの状況はベルや君たちのパーティーにいたヴェルフ・クロッツやリルカ・アーデから聞いている。中層進出のその日に十八階層まで進出、なおかつゴライアスの単独討伐、同じ冒険者として感嘆の息を漏らさずにはられないよ」

一瞬出たクロッツの名前にハイエルフであるリヴェリアさんが反応するがすぐに平静へと戻る。

そして俺はフィンさんのゴライアスの単独討伐と言う言葉に思わず顔を歪めてしま

う。
「?どうしたんだい?」

「いや…」

言い淀んでいるとその様子に全員が疑問符を浮かべる。

「そうだ、君が倒したゴライアスの魔石は僕たちが保管しているから後にでも…」

「いや大丈夫です」

「…いらぬのかい?」

「そういうわけじゃないんですけど…俺はゴライアスに勝ったわけじゃないですから」

「え、?でもハチマンの攻撃で死んだんじゃない?」

「まあとどめを刺したのも俺だし闘っていたのも俺だけです。それでも俺はあいつに勝ってなんかいいですよ。先に膝をつけて倒れたのは俺だし、何よりその前にゴライア

スの攻撃をもろに食らって一回気絶してますし、そんな状況で勝つただなんて思えないし思いたくない。だからいらぬです」

俺のその言葉にガレスさんは「ほお…」と目を細めひげを触りながら感心したように息を零し、それ以外の全員は驚いたようにハチマンを見ていた。

Lv2がLv4のゴライアスを単独で撃破、しかも世界最速でのランクアップまでしている。正直「ロキ・ファミリア」の面々はハチマンが天狗になっていると思っていた。それもしょうがない自分たちなら絶対なっていると。

しかし実際はどうだろうか。天狗になるどころかゴライアスを倒したことで満足せずさらに上を目指していた。その姿勢に全員がハチマン・ヒキガヤと言う人物を見直した。

とそこでいち早く冷静になっていたフィンがおかしなことに気付く。

「…待ってくれ、ゴライアスの攻撃を食らった？」

全員が一瞬フィンの方に視線を移し、その言葉の意味を理解した一同は直ぐにぱつと首を動かしハチマンへと視線を戻した。

「く、食らいましたよ？」

「…どんな風に？」

「こう、思いつきりぶん殴られました」

ハチマンが言ったその言葉に全員は感心を通り越して呆れた。なんでLV2がゴライアスの攻撃をもろに食らって生きているのか、と。

「…ガレス、君に彼と同じことができるかい？」

「今なら可能じゃろうな。しかしLV2でしかもなって二週間など確実に無理じゃ」「だろうね…よく生きていたねハチマン」

「まあ…気合？」

ぽかん、と一瞬の間を置き一人が笑い始める。

「がっはっはっはっ、確かに間違っではおらんわいっ！フィン、リヴェリア、やはりこの若造は面白いっ！気に入った！」

「ガレス、否定はしないがこの場は内輪だけではないんだ。抑えてくれ」

ガレスさんは膝を叩きながら爆笑し、そんなガレスさんに対してリヴェリアさんは片目を閉じ注意を促す。

そんなことは関係ないと言わんばかりに同族に言うようにガレスさんは俺とベルのことを褒めちぎり、それがどうもむず痒くなってしまう。

「あれ？でもゴライアスの攻撃食らった割には怪我が少ない気が…」

「…あ」

「確かにおかしいわね…」

「い、いや？そんなことないでしゅよっ？」

テイオナさんの発言に姉のテイオネさんが訝しみ俺の方をジーツと半目で見つめる。それに対して俺は完璧に誤魔化し、事なきを得ようとした。何故か全員が苦笑いを浮かべてるけど。

「テイオネ、あんまりいじめないであげてくれ」

「はあい、団長っ！」

フィンさんがそういうとは一転、テイオネさんは猫撫で声のようなものをだし追及することをやめた。

「君がいらないうなら僕達がもらうけどいいかな？」

「ええ、大丈夫です。ここでの宿代だとも思つて……」

「そうか……感謝するよ。恥ずかしい話今回の遠征は赤字続きでね正直助かるよ。……それじゃあ色々と気になることはあるけど話を戻そう。僕等の方は見ての通り、ここで休息をとっている。本来なら、『遠征』の帰りとは言え十八階層にはとどまらず、一息に地上へ帰還してしまうんだけど……帰路の途中で、モンスターから厄介な『毒』をもらつてね」

フィンさんの話によると、途中の階層であるモンスターの群れに強襲され、第一級冒険者を除いた、所謂下つ端の団員の多くが『毒』に侵されてしまったらしい。遠征の帰りで物資を多く消費しており、解毒することができず、事実上行動不能に陥っているの

だそうだ。

それで足の速い者に解毒剤の調達を頼み、それを待機しているらしい。

「それでここからが本題だ」

フィンさんは表情を変え一気に空気が変わる。

「どうやらアイズによるとダンジョンに精霊が入り込んだらしい。しかもその精霊は十七階層まで迫っていたらしい。何か知らないかい？」

精霊と言う単語が発せられた瞬間全員の顔に緊張が走り、アイズは小さな声であつと声を漏らした。

そういえばその精霊の正体がハチマンだつて言つてなかつた、と。しかしこの空気で切り出すわけにもいかず、何より自身ですら話せていない秘密をこんな大勢の前で暴露するわけにはいかないとアイズは一人でオロオロしていた。

しかしそんな空気を認識しながらも読まないのがこの男。

「ああ、それ多分お——」

アイズは言つちやうのっ：!?!と驚き、ぱつとその正体を口にしようとした事にその他はぎよつとしながらもその言葉の続きを待ったが——。

「むぐっ!?!」

その言葉が続くことはなく止められる。

睨んでくる。その他の人たちも僅かに怪訝な顔をしていた。そりやそうだ話すと思つたらそれを自分で阻止して話せないなんて言うのだから。なんかこれだけ聞くと頭おかしい奴だな俺。

(話しちやダメか?この人達すごい怖い特にテイオネさんが)

『…よし、しようがない。ヴェルフ君を売ろう』

(お前な…)

「ハチマン」

「!は、はい」

「どうしても話せないことかい?」

「…ヘスティアの意見を聞かないとなんとも」

「…そうか」

実はヘスティアにもテイポがいることをあまり話すなど嚴重注意されており、それとつぎの逃げ道として利用する。まあ人選は任せると言われてるんだけど。

俺のその台詞にスティタスに関わるることか、と全員が納得する。ただ最高幹部の三人は何かに気付いたように目を細め視線を送る。

「…なるほど、大体の事情は把握したよ。アイズがなつくわけだ」

「は、はあ?」

「話せない、と言うなら仕方がない。この話はここで終わろう」

フィンさんがそう言うのとわずかに空気が弛緩し、肩の力を抜く。

「短い間だけ僕達は君達のことを客人としてもてなそう。周りと騒ぎを起さなければあのテントは自由に使つていい。団員達には僕が伝えておくよ」

「…何から何までありますがどうございます」

言葉にありつただけの感謝を乗せ、お礼を告げる。ゴライアスの魔石ももらったしね、と笑いながら言つてくれたフィンさんに、もう一度感謝を述べ、立ち上がろうと膝に手をかけ力を入れる。

「あつ、~~~~~ぐつ!？」

体中がボロボロなことを忘れ普段通り立ち上がろうとして激痛が体中に走り小さい悲鳴をこぼす。

「大丈夫、夫？」

その様子にアイズさんが俺に駆け寄り言葉を投げかけられる。見ると全員が心配そうに俺のことを——いやレフィーヤさんはなんでか睨んでた。本当に何したのベル。怖いんだけど。

「大丈夫ですよっ？超、元氣です…!」

「……………そんだけ脂汗をかいてる人を大丈夫とは言わないよ（言うわけないだろう）（言

うわけないじゃろう) (言わないわよ) …「」「」「」

ヴェルフと同じような突込みをされるがそんなことを気にしてる余裕はない。と言
うかアイズさんが怖い。

実はテントの中で立ち上がろうとしてもろくに身動きが取れず、ここまでアイズさん
におんぶして運んでもらっていた。

俺が提案したわけじゃなくアイズさんが「運ぼう」と言い出し無理矢理俺をおんぶし
ようとした。勿論抵抗はしたがアイズさんが裏切者AとBに声をかけ取り押さえられ
抗うことが出来ずにおんぶされることになってしまった。

そんなのご褒美だろっ!と言われるかもしれないがいや最初俺も思ったこんな美人
にされるならいいんじゃないかと。でもロキファミリアの視線がやばいのだ。特に男
性陣とレフィーヤさんの視線が。ものすごい目立つし、あんだだけ殺気だった視線を送ら
れるのももうこりこりだ、とアイズさんの魔の手から逃れようと無理矢理立ち上がる。

「また運んで…」

「いや、大丈夫ですよっ? ほらっこうやって何の問題もなく立ち上がれましたしっ」

大嘘である。問題だらけである。激痛が常に走り、嫌な汗がぶわっと噴き出して
いる。

「無理は、ダメ…:しっかり、休まない」と

休む、という単語が出た瞬間口キフアミリア陣営の表情が変わり目が見開かれる。リヴェリアアさんに関しては「あのアイズが…休むという単語を…？」とまで呟きを残していた。

「大丈夫ですから、アイズさんの手を煩わせるわけにもいきませんし…」

「むっ」

「えっ？」

どうにか逃れようと言葉を繋げているとアイズさんが何故かまたむつとする。

「その喋り方、いやだ」

「喋り方？」

「うん。呼び捨て、でいい」

「いやそれは…」

「あの時は呼んで、くれたのに」

「あの時、ですか？」

「あの、ミノタウロスの時…」

「…もしかして呼び捨てにしました？」

「してたよ？『そう言うことだアイズ。退いてくれ』って」

そう言われ記憶を探ってみると確かに言った記憶はあった。

「いや、あれは余裕がなかったからで…」

「余裕がなかったら、呼ぶの？」

「えっ？」

「そっか。なら、戦おう？」

「……えっ？」

アイズさんは腰に差しているサーベルに手を添えながらじりじりと近寄り、俺は激痛に耐えながらじりじりと距離をとっていく。ヤバいこの人ガチだ。

「くっ……ふっ……」

「……リヴェリアそんな笑ってないで、彼を助けてあげたらどうだい？」

「ふっふっ……ふう、いやすまないアイズの珍しい姿について、な」

笑っていたリヴェリアは冷静になると「アイズ」と声をかけ手をこまねく。アイズさんもそれに従い、リヴェリアさんのもとに駆け寄り、一発拳骨を食らわせると耳を貸すようリヴェリアさんが指示しこそそそと話を始めた。

「?……!」

アイズさんは最初こそ怪訝な顔を浮かべていたが、だんだんと表情が変わり納得したように、ぼんと手を叩きリヴェリアさんから離れた。そして何故カリヴェリアさんから離れるとまた俺の方へと歩みを進めてくる。

(変なこと教えてませんよね…?)

滅茶苦

一筋の希望をかけ、恐る恐るリヴェリアさんの方を見ると茶にやけ顔のリヴェリアさんがいた。その表情を見てあ、だめだこれと察した瞬間アイズさんは俺の横に並び首と膝裏に手をかけ…

「うっ!?!」

首に回された手で下に引つ張られ、膝に回した手は上へと引つ張られる。その力に首の方から倒れこみ、アイズさんはそのまま支えた俺を持ち上げた。つまりお姫様抱っこである。

「あ、あの…アイズさん…?」

「このまま、テントに戻ろう」

「やめてください」

「いやだ、?」

「いやです」

断固とした意志を持ってそう述べた。

お姫様抱っこでかえるだつて? そんなの行きより注目されて殺意は数倍になるにきまつてる。なにより現段階で恥ずかしいし、レフィーヤさんがやばい。「アイズさんにお姫様抱っこしてもらうなんてっ…!」と本当に殺されるんじゃないかと思うほど殺意

をまき散らしていた。若干回り引いてるし。

「じゃあ、呼び捨てで呼んで？」

「……………アイズ」

背に腹は代えられないと呼び捨てで呼ぶと嬉しそうに表情を焔めかせ降ろしてくれた。

「もう勘弁してください…」

「敬語も、なし」

「いやそれは流石に…」

「もう一回、やる？」

「任せろ敬語なんていらねえもんな」

「うん、ありがとう」

「アイズにはそうするのかい？なら僕の事も呼び捨てと敬語なしで頼むよ。君とは対等な関係を築きたいからね」

「ああ、そうだな。なら私もお願いしよう」

その二人の言葉を皮切りに「じゃあ私もっ！」と続き、全員がそうするようにお願ひしてきた。

「ふざけないでくださいよフィンさん…」

「アイズにはして僕達にはしてくれないのかい？ならしうがない——や
れ、アイズ」

「わかった」

「どうしたフィン、俺達の間で敬語なんて不要だもんなっ！」

「分かってくれて何よりだよ」

「勿論私たちのことも呼び捨てで呼んでくれるのだろう？」

「当たり前だろ？リヴェリアにガレス、ティオネ、ティオナ、ラウル、アキ、レフィーヤ、
これで満足かっ？」

リヴェリアを呼び捨てにした所レフィーヤからの殺気が増した気がするが気のせい
だろう。

ちなみにレフィーヤも呼び捨てした理由は

「私は別にいいですっ」

「レフィーヤも呼び捨てにしてほしいみたいだ」

「リヴェリア様っ!?!」

という流れになり呼び捨てにしていた。

「それじゃあこれからは対等な関係を築いていこう」

にこっつといい笑顔を浮かべるフィンさん。悪魔だなこの人。

「それじゃあ、いこう」

「待て、だから一人で…」

「またする？」

「…おんぶでお願いします」

もう何言ってもダメなんだろう、と悟りまだましなおんぶを選択した。そしてそのままアイズさんにおんぶされ、俺達はテントを出た。

#26 目は腐る

「フィン、どう見る？」

アイズとハチマンがテントを出てそれに続くように人が出ていき、最高幹部の三人だけがその場に残っていた。

そんな中リヴェリアはフィンに問う。

「彼の反応を見るにアイズと同じだろうね」

「アイズと同じ、と言うことは精霊の血が流れてるということか？」

「多分そうなんだろうけど、何か引つかかる」

「また勘か？」

「うん、勘だけどそれだけじゃない気がする」

全員がハチマンに対して思考をめぐらせるが、すぐにそれを打ち切った。

「まあ、いくら考えても仕方ないだろう。確かにお前の勘は無視できないものがあるが今は分からないことが多すぎる」

「そうだね。それに神ヘステイアに許可を取れば知ることは出来るみたいだしね」

フィンはハチマンの言っていた「…ヘステイアの意見を聞かないとなんとも」というセリフを思い出しながらそう呟く。

「地上に帰ったらホームに呼び入れる気か？」

リヴェリアのその質問にフィンは静かに頷き、肯定の意を示した。

あの時若干話をそらされた感じは否めなかったが、その結果ハチマンから言質は取れたので地上に帰ったら彼等をホームに招き入れ話を聞こうと考えていた。

「…いいのか？他の派閥をホームに招き入れる真似などして」

「このテントに招き入れている時点で今更だ。それに僕は彼等を買っているし、君等もそうだろう？」

「がっはっはっ、まあおう。十八階層に行く選択をした判断力、立ち向かう勇氣、それをこなす程の実力に度胸、彼奴等をかなり気に入ってしまったわいっ！」

「…否定はしない。あのアイズが興味を持っているし、私自身興味がある」

リヴェリアがそう言うと言いついんやガレスでさえも驚きを表情を浮かべ、リヴェリアに視線を送っていた。

「…なんだ？」

「いや、まさか君個人で興味を持っている、なんて言うとは思わなかったから」

「アイズがあそこまで懐き、精霊に何かしら関係していて、Lv2でゴライアスの攻撃を耐えうる耐久に倒す程の力もある。種族エルフとしても、冒険者としても興味を持つな、と言うほうが無理な話だろう」

それを聞き、フインは「確かに」と苦笑いを浮かべながら同意をした。

「あの娘が自発的に興味持つて動いているというのなら…何かしらのきっかけになればと私個人としては願っている。「ファミリア」の団長としてはどうなんだ？ 買っているとはいえ、明らかにあの二人のことを特別視しているだろう？」

「シー、僕はアイズが変わるのはいいことだと思っているし、否定できない。どうやら想像以上に彼らのことを気に入ってしまったらしい。彼等がこのファミリアにいれば、なんて考えてしまうほどにね」

「……そこまでか」

今度はガレスとリヴェリアは驚いた。全く冗談とも思えないほど真剣な表情でそう言い放ったフィンに瞠目する。

「…傘下にもはいってもらおうつもりか？」

「それも最初考えたんだけど…彼らの主神とうちの主神の仲が、ね」

「ああ、そういえば彼等の主神は神ヘステイアだったか」

「なるほどのお…」

ヘステイアとロキの仲の悪さは天界だけでもなく下界でも有名な話だった。それは勿論リヴェリアやガレスの耳にも届いており、二人は納得したように呟きをこぼした。

「まあ、と言つてもそこまで深くは考えていないよ。いればいいな、くらいの気持ちさ」

暫くは彼等のことを見ておきたいかな、とフィンはハチマンが出ていった幕屋の出入

り口を見やった。

フィンさん達との面会を終え、俺はアイズに背負われ野営地を歩いていた。

設置された天幕は複数あり、中には毒に侵されたという人が寝込んでいるのか、入り口に団員が一人ずつ立っていた。

「…」

「あ、アイズさんお疲れ様です」

「お疲れ様…」

そんな天幕の位置を把握するように見ていると、周囲に行く団員たちの数人がアイズに挨拶をしていく。

流石【ロキ・ファミリア】の幹部とだけあつて色々と注目され、全員が全員羨望やら

尊敬やらを含む視線を送っている。

そして俺には逆に歓迎とは程遠い視線が向けられていた。男女問わず胡乱げな視線か厳しい目付きで睨まれる。特に男性陣からはすごい。ほぼ殺気である。やだハチマン人気者。

「十八階層…」

「えっ?」

そんな視線の中で肩身の狭い思いをしていると前を向いたままのアイズが口を開く。

「もう、十八階層まで、しかもゴライアスまで倒しちゃって…」

「まあフィンの前でも言ったけど…ほぼ事故みたいなものだし、ゴライアスも確かに倒しはしたけど認めたくはないしなあ…」

「それでも、すごいと思うよ?」

「…」

アイズはこちらに視線を送りながら含みのない声音で言葉を投げかける。

確かに世間一般で見たら凄いだろう。それでも認めたくなかった。できればまた再戦して――

「おーいつ！アイズ――！ハチ君――！」

明るい声が背中をたたく。その大きな歓声にアイズが振り向き俺の視界も反転する。そして視界に入ったのはティオネ、ティオナがこちらに近付いてくるところだった。

「ティオネ、ティオナ…」

「へへっつ、追いかけてきちゃった」

「はあ、ほんとにあんたは勝手なんだから…」

テイオナは追いつくと同時にえへつと表情を緩ませた。そんなテイオナにテイオネは肩をすくませる。

「それにしてもLv2には上がると思ってたけど、もうここまで来たことと言いい、ゴライアスのことと言いい、やるじゃないあんた達」

「ねっ！ほんとにすごかったもんねっ！アルゴノウト君と言いい凄いいファミリアだよっ！」

二人は褒めながら背負われてる俺の方へと近寄る。

「あつ、顔が赤くなってる可愛いー」

「いやそんな顔もして器用ねえ…」

ゴライアス討伐のことで顔を歪めながらも、露出度の高い二人の褐色の肌が視界に飛

び込み頬を染めてしまう。

だってしようがないじゃん！男の子なんだもん！だからティポさん、ゴミを見るような眼はやめてね！

ハチマンは心の中で呆れているティポさんに弁明を述べる。だってしようがなくな
い？

((((——調子に乗るなよ)))

そして心の中で言い訳を述べているとどこからともなく呪詛が聞こえた気がした。と言うか近くにいる妖精は確実に呟いている。竜をも殺さんほどの視線がぐさぐさと突き刺さる。今すぐこの場から逃げ出したかった。

しかし悲しきかな今は身動きが取れず、もし逃げ出したところでアイズに捕まることは目に見えていた。そんな俺にできることはただアイズの背中で大人しくしてることだけだった。

うつすらと森の内部が暗くなりつつあった。

沢山の葉に遮られた頭上の奥で、光り輝く水晶の光が薄れていく。ダンジョン内での『昼』が終わり、『夜』が始まろうとしていた。

(疲れたしいてえ…)

夕焼けも残照もはさまない夜空への移り変わり。そんな幻想的な景色の中で俺はテントまでの帰路についていた。

『それは自業自得でしょほんと…』

その眩きにティポが呆れながら言葉を返した。中層からの逃亡劇、ゴライアスとの戦闘、そして「ロキ^大・ファミリア^派」の幹部との会合。どれにおいても濃すぎる内容。疲れの無理はないし呆れるようなことじゃないがティポは別件に呆れを感じていた。

「あ。ハチマン！おかえり！」

ティポが小言の一つや二つ継ごうとした時テントの入り口で外の様子を窺っていたベルが、帰路についていた俺に気付き声を上げ駆け寄る。

「大丈夫だった？体が治ってないのに…あれ？」

駆け寄ったベルは心配そうに俺をのぞき込んだ。しかしすぐに違和感を覚え固まった。

その反応に俺は怪訝な顔を浮かべた。

「?..どうした?..」

違和感を覚え考え込込むベルに俺は何かついてるのかと顔を触って確認する。しかし触ったところで何か異変があるわけでもなかった。

「いやなんか違和感が...あ!..」

腕を組み考え込んで数秒、その違和感の正体に気付いたベルは声を上げた。

声を上げたベルに俺は次の言葉を待ち――

「いつもより目が腐ってる...?..」

「ひどくない?..」

普通に泣きそうになった。

ていうかいつもより目腐るって何?

「い、いやごめん...なんかいつもより目がどろっとしてるといっか、雰囲気かどろっとしてるといっか...」

ベルは俺の言葉にフォローをしようと言葉を続けていくが、言葉が続けることにとどめを刺していく。

「ただドロドロしてんだ俺。てかどろっとしてるって何?あとティポさん大爆笑するのやめようね。」

「うっ...ごめん...」

どんどんと陰鬱になる俺の雰囲気にはベルはしゃべるのをやめ申し訳なきそうに謝る。まあ陰鬱になってつて理由には俺の中で腹抱えて笑つてこのアホ精霊のせいなんだけど。

本来ならこの程度の悪口(?) 気にもならないのだが、ベルは悪意なく素で言つてるので想像以上の攻撃力で俺の心を攻撃していた。

まあ、目の腐りがひどくなつて理由には心当たりがあるから結局気にしてないけど。うん全然気にしてないし別に泣きそうになつてないし。

「そ、それじゃあテントに戻ろうか!!みんな待つてるし!」

俺がジト目でベルを見続けていると話題を変えるように俺の手を引っ張りテントへと連れていく。俺は特に抵抗することなく連れられベルと一緒にテントの入り口をくぐった。

「あつベル様ハチマン様おかえりな——」

「おうハチマンおかえり——」

テントの入り口をくぐると入ってきた俺たちに気付いたヴェルフとリリが同時に喋り俺の顔を見て固まってる

「いつもより目が腐つてるな(ますね)……」

俺はまたもどめをさされた。そしてティポは腹筋にとどめを刺された。ティポに

腹筋なんてないけど。

「お前らな……」

「いや悪い……でもその酷いぞ？眼の状態とか雰囲気とか……」

「ええ、相当ひどいですよハチマン様大丈夫ですか……？」

心配そうに俺の顔をのぞき込む二人。見るとベルも心配そうに俺の方を見ていた。

恐らく三人は中層での逃亡劇の怪我が治っておらず無理に外に出たから悪化したと思つて心配してくれているんだろう。

この三人は俺がテントに戻りある程度動けるようになった後一人で散歩に行くといった時も猛反対してたしめちやくちや切れられたしなんならついて来ようとしてたし。めちやくちや断つたけど。

そのせいかほら言わんことないと視線に含まれてる気がしないこともないけど。

だからこそ言えない。今、目が腐つて疲れ体を痛めている原因は中層の件とは別件のことだということを。すべて自業自得だということを。そして【その事】がバレれば絶対にぶちぎられる自信がある。多分恐らく知らんけど。

となれば俺がこの二人に取れる返答は……

「い、いや何もなし大丈夫でしゅよ？」

「[[…]]」

バレないように完璧に誤魔化し隠し通すこと。そんな俺の完璧な返答に何故か三人は呆れたように半目で俺を睨むと三人で集まりごによごによと話を始めた。

「あれで誤魔化せると本当に思ってるんですかね」ゴニヨゴニヨ

「わかんない…でもすごい自信満々だよ？」ゴニヨゴニヨ

「まあ確かに…でも問い詰めた方がいんじゃないか？」ゴニヨゴニヨ

「流石にあんな無茶苦茶した後で無理はしないとと思うけど…」ゴニヨゴニヨ

「わかりませんあの「^{ハチ}バ^{マン}カ」のことです。もしかしたら」ゴニヨゴニヨ

「確かに…」ゴニヨゴニヨ

リリの言葉に心底納得という風に二人は呟く。

というか全部聞こえてるんですけど。なんかそのハチマン様悪意ない？リリさん？

「なのでやつぱりここは問い詰めた方が…」チラツ

リリが問い詰める姿勢を見せ、ちらつとこちらに視線をよこしそれに釣られ二人もこちらに視線を向ける。

俺はその視線に冷や汗を流しながら視線を逸らす。そんな俺に残り二人もとうとう

問い詰める姿勢を見せた所で

「…食事の用意ができたけど、大丈夫？」

外から声がかかり、幕を除けてアイズが入ってくる。

「大丈夫ですウルトラベリー大丈夫ですいやあ、お腹減ったなあ」

「うる……？」

俺はそのアイズの乱入を好機とばかりに乘っかかり素早く立ち上がるとアイズのそばに近寄った。そんな俺の行動に三人は再度半目で俺の方を睨む。そして俺も再度冷や汗を流しながら目を逸らしアイズと目が合う。

「ハチマン……目、腐った？」

「もういいよ……それは……」

アイズがじつと俺を見た後呟いた言葉にげんなりしながら返事をし、テントを後にした。

「げっ、あいつ等……」

四人でアイズの後ろに並んで従っていくとすぐに野营地の中心に到着した。

開けた中心地には、たくさんの人が真ん中に数個設置された携帯用の魔石灯を囲うように大きな輪になって座り込んでいた。いわゆるキャンプファイアというやつだろう。

そしてどうやらこの大きな輪には「ロキ・ファミリア」だけでなく「ヘファイストス・ファミリア」の「上級鍛冶師」も紛れているらしく、アイズに事情を説明されながら、身内の顔を見つけたヴェルフが呻き声をあげた。

「し、失礼します」

ベルは他の人達の注目に俺は男性陣（一レフィーヤ女）からの殺気にびくびくしていると、人気のない場所に勧められた。よかった出る前におんぶを断つておいて本当に良かった。アイズは不満そうだったけど。

そんなこんなでゆっくり腰を下ろすと俺の右隣にアイズが、左隣にはベルがそのさらに奥にリリ、ヴェルフという順番で座る。

「皆、聞いてくれ。もう話は回っていると思うけれど、今夜は客人を迎えている。彼らは仲間のために身命をなげうち、この十八階層までたどり着いた勇気ある冒険者たちだ。仲良くしろとまで言うつもりはない。けれど同じ冒険者として、欠片でもいい、敬意をもって接してくれ。……それじゃあ、仕切りなおそう」

森が暗闇に包まれる中、立ち上がったフィンの声が場に通る。それに呼応し魔石灯を大きな輪となつて囲む団員達は、一斉に配られた杯を挙げた。

「はあ、上手いもんですねえ……」

ささやかな宴が開始されあたりが喧騒に包まれる中、採め事を防ぐため、騒ぎにならないよう配慮しつつ、冒険者の自尊心をに訴えるような彼の向上に、リリが感心したように呟きを零した。

やがて食料が配られる。一人につき二つ、三つの果物だ。

瓢箪の形をした赤い漿果、琥珀色で甘そうな蜜をたっぷり滴らせる綿花に似た果実：地上でお目にかかったことのないこの二つの果物は、この十八階層でとれたものらしい。

俺は後者の、綿を蜂蜜につけたような見た目の雲菓子と呼ばれる果物を、試しに一口食べてみた。

途端、見た目通りの溢れんばかりの濃厚な甘みが口の中に押し寄せ口一杯に広がった。

(美味しいな…)

大の甘党好きのハチマンは雲菓子を「ロキ・ファミリア」の女性陣と同じように目を輝かせながら食べた。

しかしハチマンが気に入った雲菓子はベルの口には合わなかったらしく吐きそうな顔を浮かべていた。

「ベル様、ベル様？もしお口に合わないのでしたら、リリがそれを食べましょうか？」

それを目ざとく見つけたリリはわざわざベルの正面まで移動して小鳥のように口を開けた。

それに対してベルはうんと返事を返し、リリのその小さな口に雲菓子を伸ばし――

ヴェルフがリリの口に到達する前に横からとって、自分の口へと運ん

だ。

「ああ、ベル任せろ。俺が全部食ってやる……ん、こりや確かに甘すぎるな」

そんなヴェルフを顔を真つ赤にして涙目になりながらゲシゲシと蹴るリリ。そんなリリにヴェルフはヴェルフで胸焼けに苦しむように喉を抑えながら、どこ吹く風だった。そんなやりとりを俺の隣に座るアイズはきよとんとしながら聞いていた。

「それにしても、うわさには聞いていたが……不思議な階層だなこころは」

胸焼けから回復したヴェルフが辺りを見回しながらそうつぶやく。

それに釣られて全員が目を周りに向ける。

階層の天井には白水晶が光を失い、青水晶だけがほのかに輝き、闇を照らしていた。

木々の隙間からは地上の空を模倣した夜空だけが存在していた。

「珍奇な実があつて、空もあつて……確か街だつてあるんだろ？」

「えっ……ま、街!？」

思いもやらなかつた単語の出現にベルが驚愕の声を上げ、アイズと俺の方に視線を向ける。その視線を受けた俺とアイズは無言で頷いた。

「……明日、行ってみる」

「ぜ、ぜひっ!」

ベルはアイズのその誘いに興奮しながら何度も首を縦に振った。

「アルゴノウトくん！ハチくん！」

輝きに輝いたベルの顔を見て全員が和んでいるところに俺とアルゴノウト（笑）の呼ぶ声が響く。そちらに視点を向けると元気よくこちらに向かってくるティオナとその後ろを追従するティオネが目に入る。

そして俺とベルの目の前に立ち止まるや否や、どかつ、と俺とベルの左右に腰を下ろす。

「「え」」

「話、色々聞かせなさいよ。かまわないでしょ？」

「うん、聞きたい聞きたい！」

強引に割り込んできたティオネにリリはぎよつとし、アイズは割って入ったティオナにむっ、と頬を膨らました。

真隣を占領された俺とベルはというと近過ぎる彼女らの体に顔を真っ赤にしていた。

だつてしようがない？俺も男の子だよ？だから何回も言うけどジト目やめてティオさん。あとなんで俺をにらむアイズ。てかこのひとたちの距離感がおかしいんだよ！

再度ごみを見るような目を向けるティポに言い訳を並べているとそんなのお構いなしに距離を詰めるアマゾネス姉妹。まあ話するのは一人でいいしベルを売って俺は空

気にも…

「どうやったら能力値オールSにできるの？」

「ぶっ」

と、考えていたところでそんなことは許さない思いもよらない質問に思わず反応し俺とベルは吹き出し顔をひきつらせた。

痙攣する笑みを浮かべながら左右に視線を向けると怖い笑みをにっこりと浮かべる褐色の少女たちがいた。

要するにこう言ってるのだ吐くまで逃がさないぞ、と。

その笑みを視界に入れた俺達は冷や汗だーだーで、心臓が同様にひた走って止まらな
い。

よしどうにか対策を…

走って逃げる↑すぐ捕まる

嘘をつく↑多分バレル

ストレートに努力ですと伝える↑多分信じてもらえない

ここまで考えて俺は気付いた。あれ詰んでね？と。どうにか助けを、と周りに視線を飛ばすと隣にいるアイズは膝を抱え何でもない風に装いながら、耳を俺たちの方に傾けていた。

遠くの方ではフィンとリヴェリアがため息をつきながらもガレスと一緒に俺達のことを面白そうに眺めていた。

ヴェルフは「なんじやヴェル吉、我々の後を追ってきたのか。フフ、愛々しいやつめ」とどこからともなくやってきた【キョク単眼の巨師ロブス】椿・コルブランドに絡まれていた。さつき俺とベルも「お主等がクラ・ベルネルとヒキマン・ハチガヤだな!!」と絡まれたが「人違いです」と切つて捨ててヴェルフに丸投げしておいた。

だつて俺ヒキマン・ハチガヤじゃないし…そのせいでヴェルフがかなり本気の悲鳴上げてるけど。

『ぐぬぬあつ?!』

そこに、いきなりだった。

「!?!」

ここでは聞こえるはずのない聞きなれた声が届いたのは。

反応した俺とベルとリリはぼつと顔を見合わせた。全員が全員共通の思考を肯定するように頷き合った。唯一ヴェルフだけはわかっていないが。

「すいません、行かせてください!」

「すいません俺も行きます」

テイオナたちの返事を待たずに俺とベルは立ち上がり駆け出した。それをリリが追

いかけて、遅れてヴェルフが立ち上がり追いかける。

声が届かなくなった方向へと走り抜けると野営地を抜け、森が切れ切れになった。その視界の先には高くそびえる岩の壁と、大口を開けた洞窟があった。恐らくあれが『嘆きの大壁』へと通ずる連絡路なのだろう。

そして木々の群れが途切れた洞窟の前には声に反応した「ロキ・ファミリア」の見張り番達が集まっていた。その彼等の肩から俺達は顔を覗かせると――

「いって…」

「あつははははっ!?ヘスティア派手にこけたな!!」

「笑うなヘルメス!!」

腰を抑えながら近くにいる帽子をかぶった男神にキレるヘスティアの姿があった。

そしてそんなヘスティアの周りには、座り込んで大笑いしている男神様があり、それ以外にも疲労の色が浮かんでいる冒険者たちがいた。

「…あ」

続々と集まってくる人立ちに気付き、顔を上げたヘスティアの瞳が、驚きで染まった俺達を捉えた。

すると次の瞬間青みがかった双眸がまん丸に変わると、転がるように駆け出した。

「――ハチマン君!!ベル君!!」

「おふう（ぐえ）!?!」

人垣が割れ、道が開かれ、一直線に飛びついてきたヘスティアの腕が俺たちの首に直撃する。

驚きで棒立ちになっていた俺達は、ラリアットを喰らい尻もちを搦く。

「ベル君、ハチマン君っ!本物かい!?!生きてるかい!?!」

「か、かみひやま……!?!」

「ただいま死にかけてるんですけど…」

半ば押し倒された格好で、体中を触り、最後は忙しなく交互に両の頬をぐにぐにと引っ張る。

それに対し好き勝手顔を変形させられていた俺達は、どうにかヘスティアの手を止める。そして上体を起こし「なんでここに」と、言葉を発そうとすると言葉を遮るように、首に片腕を回され、ベルもろとも抱きしめられる。

「!?!」

顔が赤くなるのを自覚する。密着した体からダイレクトに小さくて柔らかい感触が伝わってくる。

縫りつくように、嘴締めるようにヘスティアは顔を俺達の間顔顔をうずめる。熱い吐息が肌にかかり、体に熱が走る。思春期男子には強すぎる刺激に硬直していると。

「…よかったあ」

そのいまにも掻き消えそうな声が、鼓膜を揺らした。ふっと体の力が抜ける。

冷静になり改めて見ると、ヘスティアの小さな体はずっと震えていた。その細い腕で俺達を逃さないように失くさないように引き寄せ、かき抱いてくる。ぐすり、と何かをすすする音さえ聞こえた。

聞くまでもなかった。

この天界を代表するほどの善神は、ただ愚直に俺達を心配して、体裁なんて放り投げここまで探しに来てくれたのだ。

そつと、顔のすぐ横にある漆黒の髪を見つめる。そしてその奥にいるベルと目が合う。その瞳に映ったのは困惑と迷い。恐らくどうするべきなのか迷っているんだろう。かくいう俺も困惑し悩んでいた。

そして暫く悩み考えた結果俺とベルはヘスティアを抱きしめようと手を上げ…周囲の視線に気づいた。

随分と前から、という最初から多くの人たちに今の格好を見守られてしまっている。

その事実にも再度硬直し、消えかけていた羞恥が復活した。

「いい加減にしてください、ヘスティア様！」

「あ、コラっ、感動の再開に水を差すんじゃない!? は、はなせーっ!」

リリがヘスティアの襟首をつかむ。じたばたとヘスティアは必死に足掻くが『恩恵』スティタスがあるリリの方がどう足掻いても強い。ずるずると、幼女が幼女に引き摺られていく。ヘスティアの抱擁と周囲の視線から解放された俺達は、その光景をリリのその行動に感謝をしつつ見送った。

「クラネルさん、ヒキガヤさん、無事でしたか」

「え…リユ、リユ…さん!?!」

座り込んだままの俺達に、近付いてきた覆面の冒険者が耳元で呟く。

最初はだれかわからなかったが声を聴き、だれなのか即時理解する。

間違いなくいつも早朝に訓練をつけてもらっている彼女だった。

「どうして、リユ…さんまでここに…?」

「とある神に、『冒険者依頼』クエストを申し込まれました。貴方達の捜索隊に加わってほしい、と」

フードの奥の空色の瞳が揺れ、視線をずらす。心なしか僅かに覗いたその瞳には安堵の色が見えた気がした。

「オーケー、状況は分かった」

と、そこで帽子をかぶった男神が周囲を見渡し、ぽんぽんと土を払い立ち上がり集まっていたアイズ達の顔を見て、得心の笑みを浮かべる。そうして男神は俺達の視線に

も気付いて笑みを纏ったままこちらに歩み寄ってくる。

「君達が、ベル・クラネルとハチマン・ヒキガヤかい？」

「いえ人違いです」

「え？」

「え？」

「え？」

俺が即否定すると男神、ベル、俺の順で声を漏らした。

それもそうだ。神に嘘を言ったところですぐにばれるのだから、こんなに真正面から嘘をつかれるとは思わなかったんだろう。

「いや、嘘……だよな？」

「はい、嘘です」

「ええ……」

切れ長の橙黄色の目が困ったように細められ、帽子の後ろに手をやる。

恐らく出会ったこともない俺の対応に困ってるんだろう。実際自分自身でもかなり冷たい対応をしている自覚はあった。

それというのも初めて会ったはずなのになんとなくこの男神のことが苦手なのだ。別に陽キャっぽい雰囲気があるとかモテそうだとかそんな理由じゃない。断じてそん

な理由じゃない。多分恐らく知らんけど。

ただ何となく俺を、詳しくは俺とベルを見る視線が気持ち悪いのだ。見定めるような確かめるような。悪意ではないただ、純粋な善意でもないそんな感じ。

「まあ…いいか。とにかく会いたかったよベル君。ハチマン君。俺の名はヘルメス。どうかお見知りおきを」

「ヘルメス…」

「ああ、ヘルメスだ。よろしく二人共」

ヘルメス様は困ったように細められた瞳は弓なりに形を戻し、手を差し出した。対して俺達はおずおずとそれに応えた。にこやかに握手してくるヘルメス様は一見柔和で好意的な神様に見えるがどうしても不快感がぬぐい切れなかった。

「へ、ヘルメス様？それで、あの…」

「ああ、見ず知らずのオレが、君達を助けに来た理由かい？」

「は、はい」

「なあに、俺はヘステシアの心友だから協力したまでさ。君達を助けたいといっていた、彼女の望みにね」

リリと言いつ争っているヘステシアの方に視線を向けながらヘルメス様は笑いかける。その笑みと言葉にベルは目を見張りながら「あ、ありがとうございます」と感謝とともに

に頭を下げた。

そんなベルとヘルメス様を見ながら俺はやはりおかしい、と感じていた。

言ってることは何もおかしくない。溢れ出る胡散臭さを除けば特におかしい点はなかった。ただダンジョンに危険を冒してまでついてくる理由にまではならないのだ。それも出会ったこともない『俺とベル』の為に。

つまりこれらからわかることはそんな危険を冒してまで潜る理由がここにあるという事。そしてそれは恐らく俺とベルだろうということ。ただ何を考えて、何をもつて、俺達に興味を示しているのかは今ある情報ではわからなかった。それでもいえることはこの神を100%信用するのは危険だろうということだった。

そんなことを考えながらヘルメス様を見ていると俺の視線に気づき、人懐っこそうな笑みを浮かべる。

「そんなにみられると照れちゃうな…。それとベル君、感謝なら俺以外の子達にしてあげてくれ。その覆面の冒険者や、彼らのおかげで、ここまでこれたようなものだからね」

ヘルメス様は俺とベルから視線を外し一緒に来ていた冒険者達の方へと視線を向けた。俺とベルはそれに追従するように視線を移し洞窟前にいる冒険者たちと目が合った。

水色の髪と眼鏡をかけた女性冒険者に、配色と様式をそろえた防具と『戦闘衣』^{バトルクロス}を纏う、恐らく同じフアミリアの三人組…。

「…おい、あいつら」

後ろからヴェルフが声を上げるがその前に俺達も気づいた。

その揃えられた防具と『戦闘衣』^{バトルクロス}は見覚えがあり、それを最後に見たのは十三階層。

つまり『怪物進呈』^{バスタード}を行い俺達が死にかけた原因である三人組が顔を強張らせそこに立っていた。

「——申し訳ありませんでした」

「ロキ・フアミリア」から貸し与えられているテントの中。

あの気まずい空気が流れた後、俺達（ヘステイア・フアミリア）とヴェルフ、リリそして件の三人組は、一度この天幕の中に戻っていた。ちなみにリユーさんとヘルメス様その眷属である『万能者』^{パルセウス}アスフィ・アル・アンドロメダはついてきていなかった。

そんな俺達の眼前では和の衣装に身を包んだ少女が正座し、手のひらと額を地面につけ謝罪を行っていた。その光景に土下座を得意とするヘステイアとベルは二人並んで「おおっ…!？」と戦慄する。

君達状況わかってますん??俺?俺はもちろん感動してるよ。

「……いくら謝られても、簡単には許せません。リリたちは死にかけたのですから」
「まあ、確かに簡単に割り切れるものじゃないな」

喉を鳴らす馬鹿二人十一を他所に、リリとヴェルフは土下座をしてる少女——ヤマトさんの土下座を前にしても、険のある声音を崩さなかった。少しの動揺は見て取れるけど。

いきなりの土下座をかましたヤマトさんに困り果てていたカシマさんとヒタチさんは顔を上げ、リリたちの視線を真つ向から受け止める。ヤマトさんはそれに反応してか正座状態のまま、土下座を解除した。

「あの、その、本当に……ごめん……なさい……」

「リリ殿達の怒りももつともです。いくらでも糾弾してください」

瞳を前髪で隠しながらおどおどヒタチさんと、その反対に瞳をまつすぐと俺達に向けて潔くきっぱりとヤマトさんが謝意を見せた。

モンスターの押しつけは迷宮内ではかなりというか日常茶飯事で起こっていると聞く。それどころか『怪物進呈』をどれだけうまく活用できるかというのもダンジョンで生き残れる一つの技術だともいわれている。

だからだろうか俺はこの三人組にそれほどいうか怒ってはいなかった。勿論なかな……パーティーメンb……知り合いが危険に晒されたという点に関しては怒りはあった。

しかし結果的に俺的にはいい経験にもなったし何よりこの三人組は『怪物進呈^れ』をいい行動だとは思わず俺達に深く謝罪し反省までしていた。普通の冒険者ならば

それにもし同じ岐路に立たされた時、俺は恐らく同じ選択を取っていただろうから。

しかしこの場でそうと割り切れているのは俺とベルとヘステイアだけで、ずっと険悪な空気が流れていた。

「あれは俺が出した指示だ。そして俺は、今でもあの指示が間違っていたとは思っていない」

と、ひどく険悪な空気の中でヤマトさん達より前に出て、カシマさんはそう言い切った。

思わず瞠目する一方で空気がさらに沈む。それもそうだ喧嘩を売っているとしか思えない文言なのだから割り切れていないリリとヴェルフは憤慨するにきまつてる。

そんな二人を他所に俺とベルは感心をしていた。こんだけ恨みつらみを向けられても受け止める覚悟と信念、仲間を思う心と非情になれる冷静さに。

そして今も仲間へヘイトがいかないようにやるなら俺をやれ、と言わんばかりに言うてのけたことに。

「…それをよく俺等の前で口にできるな、大男？」

口を吊り上げたヴェルフがカシマさんと対峙する。一見笑ったように聞こえるが目

が全然笑つてない。何なら睨んでる。怖い。

「やあ、帰つたよ。【ロキ・ファミア】には話をつけてきたよ」

そんな極悪空気の中フィン達に滞在を許可を取りに行つていたヘルメス様とアンドロメダさんが帰つてきた。

「おつと…これはどういう状況だい、ヘステイア？」

「んーここそれぞれ、というわけさ」

ヘステイアが簡潔に説明すると、ヘルメス様は大きさに明るく一笑した。

「そんな堅苦しく考えないでいいじゃないか！ベル君達はこれで命ちやん達に大きな借りができたと思えばいい。命ちやん達も、罪滅ぼしをするつもりがあるんだらう？」

「それは、勿論…」

「こう言つてるんだ、リリちゃん。いざという時は馬車馬のように働いてもらおうぜ？」

「…」

その言い回しに俺はうまいと感じると同時にさすがは神だと思つた。リリは損得勘定ががめついほどしつかりしており、今回のこの提案は明らかに損よりも得が先行していた。つまりそんな提案をリリが無碍にするわけもなく、そこにヘルメス様は一瞬でリリの性格を見抜き問いかけたのだ。

これなら丸く収まるだろう、と成り行きを見守っていると――

「ハチマン様が許すというのであれば許します」

予想外の言葉に俺はまたしても瞠目する。みればヘルメス様も少し驚いているように見えた。

「ああ、そうだな。ハチマンがいいっていうなら俺も割り切ろう。納得はしないがな」
「うん、ぼくもそうする」

いきなりのリリの提案に固まっていた俺を他所にヴェルフとベルが同意する。

え、何この流れ俺は静観するつもりだったんですけど。というかベルお前はもう割り切ってるだろ。

「理由を聞かせてもらってもいいかな？」

ヘルメス様は心底不思議そうに尋ねた。それもそうだ。許す許さないは本人の裁量だ。ましてや他人が決めることじゃない。それなのにその判断は俺に任せると一人だけでなく三人ともが言っているのだ。不思議に思うのも仕方がないだろう。

「今回リリたちは死にかけましたが今生きてるのは、半分以上とかほとんどがベル様とハチマン様のおかげです。しかも一番負担を受けていたのはハチマン様です。だからリリはハチマン様に委ねます」

「リリ助の言うとおりだ。俺達があの中層から逃げ出せたのもゴライアスから逃げ切れただのも全部八幡のおかげだからなっ」

「『ゴライアス…?』」

リリが説明し、ヴェルフが継いで声を上げた時救出部隊の面々が疑問の声を上げた。それもそうだろうこの救出隊が通った時はゴライアスなんていなかったのだから。

しかし焦ることなかれ。ここには「ロキ・ファミリア」がいるのだからつつうは彼等が討伐したと考えるだろう。その証拠に疑問にゆがめられていた顔はすぐに納得の色で染められていた。

よしこのまま流して話を丸く――

「でも凄いやね。ハチマン一人でゴライアスを討伐しちゃうなんて」

「『え?』」

「は?」

「あ」

『大馬鹿』がばらした後の反応は三者三様で、アンドロメダさんお揃い三人組は意味が分からないという風にえ?と聞き返し、意味を把握したが結局意味が分からない神様二人はは?と声を漏らし、目立ちたくないという俺の性格を知っているヴェルフとリリはあ、と短くこぼすと目を手で覆い顔を上げた。仲いいね君達。

肝心のベルはというと周りの反応を見てやらかしたと顔を強張らせ、恐る恐る顔の向きを変え睨んでいる俺と目が合い固まった。

「はい、めん…」

消え入りそうなこえで謝るベルとそれを睨む俺。構図的にはペットの兎をいじめているように見えるがそんなことは気にしない。

「ちよ、ちよつと待っててください。『ブラック・ルーキー』が一人でゴライアスを討伐したっ?」

そんな構図が続いて数秒いち早く硬直から復活したアンドロメダさんがそこに割つて入る。その声に全員が硬直を解除させ俺もしくはパーティーを組んでいる面々へと視線をむけた。あらやだそんなに見ないでほんと。

「まあ、ほんとですね」

俺が答えあぐねていると代わりにリリが諦めろと言わんばかりに俺の方に視線を向け答えた。そしてそれを聞いたアンドロメダさんはぼつ、と神様達の方を見た。神は人の嘘が分かる。だからもし今の発言が嘘ならばわかるのだが――

「今の発言に何の嘘もなかったよアスフィ」

思っていた答えを違ったアンドロメダさんは信じられないと俺を見た。ほかの面々も似たような視線を俺に向ける。

そりやそうだろう。ゴライアスの推定Lvは4。そして俺のLvは2。この世界でのLv差は圧倒的なものを意味し、それこそ勝てばとんでもない偉業として認識され

「ランクアップ」することができ。俺とベルがミノタウロスを倒したように。

しかも今回のLv差は二つ。それは絶望的な差を意味し、普通なら覆すことはできない。しかしそれを「ランクアップ」したての冒険者なりたての俺がしたというのだから疑いの視線を向けるのも納得だろう。それどころか尊敬すら視線に含まれているように思う。

だから嫌だったのだ。目立つこともそうだがこうなることが。何回も言うが別に俺はゴライアスに勝ったわけではない。いろんな要素と運が重なって討伐できたに過ぎない。そんな視線で見られる資格は俺にはないのだから。

「確かに討伐は、した。でもたまたまだ。あと俺は気にしてないから許すも何もないぞ」言葉と反応に困った俺は取り合えず簡潔に要点だけ伝え、口を閉じた。そのたまたまという言葉に全員再度神様達に目を向けるが、二人は肩を竦め、嘘はないことを伝えた。ハチマン自身本当にたまたまだと思っているから嘘がないのは当たり前だろう。まあ、それでもたまたまだろうと何だろうとゴライアスに勝つこと自体はおかしいだろうと全員が思っていたが。

「はい、それじゃあ、衝撃の事実があったけど、丸く収まったことだし今後の予定について話し合おう！」

なんともむず痒い空気の中ヘルメス様は、これ以上喋る気はないという俺の空気を感じ

じ取ったのかパンツと手を鳴らし話題を変えた。そんなヘルメス様に遺憾ながらも感謝をしながらも、ベルが暴露した瞬間本当に嬉しそうに笑っていたのを俺は見逃さなかった。